

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 VII

浪岡町教育委員会

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書正誤表

頁行	誤	正
目次	付図	付図 (北館遺構配置図1／100)
4 11	専問家	専門家
5 8	b～g2、b～h5	⇒ b2～8、b2～7
6 8	a～h	⇒ 2～8
6 9	i～k	⇒ 9～11
44 1	(森本岩太郎)	⇒ (森本岩太郎)」
48	F i g. 41 の下段の3を6に訂正	
50	F i g. 42 の上段右212を12に訂正	
73	V表-2、No.4-ST12内出土遺物欄の『小』、『』は『小柄』に訂正	
74	V表-2、No.52-ST104 内出土遺物欄の空欄は、『』、『』に訂正	
75	V表-2、No.63-ST121 内出土遺物欄の空欄は、『』、『』に訂正	
87 3	教育委員	⇒ 教育委員会
140	計測値	⇒ 計測値 (CM)

昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書

浪岡城跡 VII

浪岡町教育委員会

発刊にあたって

史跡浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年から始まりましたが、本年度で九年目を終了しましたので、昭和58年度において調査した結果の報告書を発刊することにしました。

当初から浪岡城跡の主館と考えられていた北館は、昭和58年度の調査でほぼ全容を現わし、今回の報告書は北館発掘調査の総集編とでも言うべき内容で編集することにしました。ここに至るまでの発掘成果は、県内はもとより東日本の中世城館研究において、数々の問題点と新事実を提起することになりました。その意味で、浪岡町・浪岡町教育委員会は、本調査を文化財保護行政と考古学的学術成果の両面をもって進めてきた事に、少なからず自負の念を有しています。

今回、報告書の執筆にあたって、聖マリアンナ医科大学・森本岩太郎氏、金沢大学・佐々木達夫氏、八戸工業大学・高島成侑氏、浪岡高等学校・三浦貞栄治氏、常盤小学校・葛西善一氏、藤崎園芸高等学校・奈良岡洋一氏、さらに弘前大学・村越潔氏の各位には御多忙にもかかわらず貴重な研究成果を載せていただき、深く感謝いたします。

浪岡城跡は、「浪岡町の顔」として「史跡公園」化を計画しておりますが、文化財保護に關係する各位には、今後とも御指導、御助言をお願いする次第であります。

昭和60年3月30日

浪岡町教育委員会

教育長 蝦名俊吉

例 言

1. 本書は昭和58年度および昭和59年度で一部調査した浪岡城跡北館の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国(50%)・県(8%)の補助を受け、浪岡町(町長・工藤善弘)・浪岡町教育委員会(教育長・鷺名俊吉)が総額1,200万円で実施した。
3. 発掘調査は、昭和58年6月1日から同11月23日、昭和59年5月15日から6月15日が野外調査、昭和58年11月24日から昭和59年3月31日、昭和59年12月1日から昭和60年3月15日までが屋内整理作業として実施した。
4. 本書の編集は工藤清泰がおこない、年度別報告とともに昭和53年度から始まった浪岡城跡北館の総集編的性格も付加するように努めた。執筆者は以下の通りである。

I 調査に至る経緯	工藤 清泰
II 調査の経過	"
III 検出遺構	"
IV 出土遺物	"
V 浪岡城跡北館の概略	"
VI 浪岡城出土の人骨について	森本岩太郎
VII 浪岡城跡出土の陶磁器	佐々木達夫
VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	高島 成佑
IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について	三浦貞栄治
X 浪岡城跡北館出土の鉄銅関係遺物について	工藤 清泰
XI 浪岡城跡出土の木製具について	葛西 善一
XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について	奈良岡洋一
XIII まとめ	村越 澄・工藤 清泰

5. 本書は、本文13項目、写真図版(PL.)23枚、挿図(Fig.)82枚、表(Ch.)84枚、付図4枚で構成し、主として昭和58年度調査資料を掲載したが、一部は昭和53~57年度・昭和59年度分も載せている。
6. 遺構の略称は以下の通りである。

S B	掘立柱建物跡	S T	竪穴遺構	S E	井戸跡	S K	土塙墓
S F	焼土遺構	S D	溝跡	S A	土壙・土居跡	S X	性格不明遺構
7. 遺物の略称は以下の通りである。

P	陶磁器・土器類	F	鉄・銅製品	C	錢貨	M	木製品	S	石製品
NR	自然遺物	B	骨類						
8. 遺構の土層注記にあたっては、「新版標準土色帖」小山正忠・竹原秀雄編著(1976.9)を参考にした。
9. 本報告書を作製するにあたり、実測・トレース・浮遊等は下記の方々の手になる所が多かった。記して感謝申し上げる次第である。

武田嘉彦、佐々木忠義、斎藤とも子、伊藤圭子、坂本里見、成田和佳子、有馬千枝子、工藤善弘、能登谷宣東

目 次

発刊にあたって

例言

I 調査に至る経緯	1
II 調査の経過(調査日誌より)	3
III 検出遺構	6
IV 出土遺物	45
V 浪岡城跡北館の概略	71
VI 浪岡城跡出土の人骨について	87
VII 浪岡城跡出土の陶磁器	92
VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について	98
IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について	124
X 浪岡城跡北館出土の銅鏡関係遺物について	132
XI 浪岡城跡出土の木製具について	141
XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について	147
XIII まとめ	159
付表	163
写真図版	213

付図

I 調査に至る経緯

本年度の調査は、浪岡城跡の主郭（館）と推定された北館（平場面積15,450m²）の最終調査であり、昭和53年度から開始した北館平場の残存部を中心にして実施した。昭和53年度からの調査区とその面積は挿図(Fig.2)に示したので参考されたい。以下、調査要項を述べる。

昭和58年度史跡浪岡城跡発掘調査要項

1. 調査の目的

浪岡城跡は、北畠氏居館として浪岡町民の精神的柱石となっている中世城館である。浪岡町では、将来「史跡公園」として環境整備する計画があり、昭和53年から発掘調査を継続、環境整備における基礎資料を得るために調査である。

2. 調査期間

事前調査 昭和58年4月1日～同5月31日

発掘作業 昭和58年6月1日～同11月23日

整理作業 昭和58年11月24日～昭和59年3月31日

3. 調査対象区域と面積

青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字五所地内（浪岡城跡北館）

対象面積 2,900 m²

4. 調査員等

調査顧問 村越 駿 弘前大学教育学部教授

〃 佐々木達夫 金沢大学文学部助教授

〃 高島 成侑 八戸工業大学助教授

調査員 宇野 栄二 浪岡町文化財審議委員長

〃 葛西 善一 常磐小学校教諭

〃 佐藤 仁 弘前高等学校教諭

〃 三浦貞栄治 浪岡高等学校教諭

〃 奈良岡洋一 藤崎園芸高等学校実習講師

5. 調査協力員等

調査協力員 仙北和美、矢島敬之、平野陽児、辻佳伸、三浦孝仁、津糸享、増尾知彦、木村浩一、浜中鶴美、宮城恵美、田中裕征、下山信昭、阿部禎子、間山祐司、大川仁志、小笠原一之、島田誠、佐藤英明（以上弘前大学学生）

調査補助員 唐牛芳光、坂本里見、有馬千枝子、齊藤とも子、成田和佳子、常田紀子、伊藤圭子、対馬圭子

調査作業員 工藤初江、木村栄子、工藤ツヨ、奈良岡きぬ、村岡せい子、奈良岡昭江、三浦秋子、常田節子、奈良岡英子、田川テツ、鎌田アサ、佐藤ヒサ、石沢ムツ、山内ヤエ、津川百合子、古村光子、長谷川ちよ、小笠原阳子

6. 調査主体者

浪岡町（町長 工藤善弘） 青森県南津軽郡浪岡町大字浪岡字船付 101 の 1

7. 調査担当者（事務局）

浪岡町教育委員会

教育長 付上良民（現在、蝦名俊吉）

社会教育課長 中畠康一（現在、鎌田静治）

社会教育係長 木村鐵雄

主 事 工藤清泰（主任）

〃 成田和子

〃 樋口顯芳

8. 調査方法

平場はグリッド方式による平面調査とし、造構の検出・遺物の把握に努める。

9. 報告書の刊行

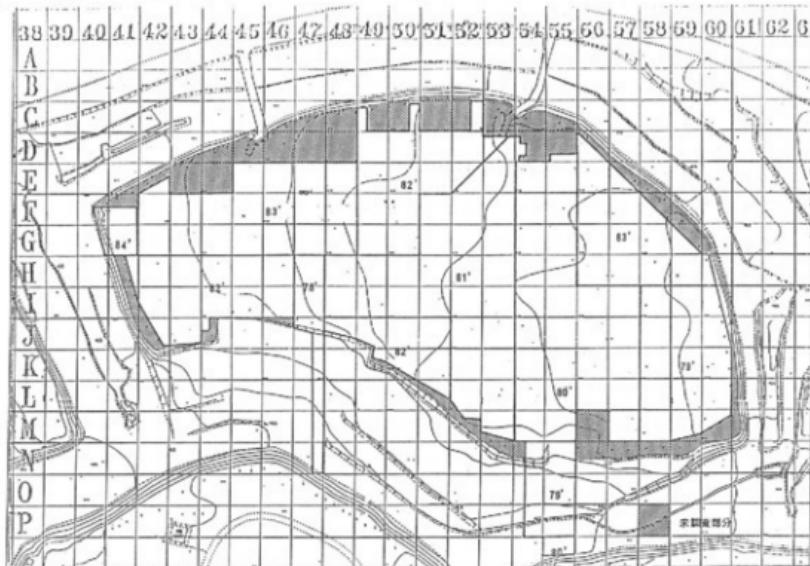
浪岡町教育委員会が作製し、昭和60年3月末日までに刊行する。

Fig.1 浪岡城跡全体図



史跡指定地面積	215,800 m ²	1. 新館	15,480 m ²	5. 内館	7,890 m ²
		2. 東館	5,400 m ²	6. 西館	13,830 m ²
公有地面積	188,300 m ²	3. 猿楽館	3,750 m ²	7. 検校館	8,550 m ²
		4. 北館	15,450 m ²	8. 蝦名の館	22,250 m ²

Fig. 2 北館グリッド配置図と調査年



II 調査の経過（調査日誌より）

昭和58年

- 5月25日 調査員等の打ち合せ会を開催。

6月1日 発掘作業を開始。A区の試掘グリッドから掘り下げを始める。B区のグリッドを設定する。

6月3日 A区試掘グリッドにて昭和54・55年度の調査区と合致するようグリッド設定のズレを調整し、遺構確認面までの掘り下げを進める。

6月4日 津軽新報収材

6月6日 G58区Ⅰ層より分離状鉢製品が出土。

6月7日 岩手古文書研究会々長・佐島直三郎氏見学。

6月8日 F58区を北側に1m幅で堀の落ち込み部分まで試掘した結果、土壌状の遺構を確認する。

6月9日 E57区Ⅱ層上面から直径3cm前後の銅皿が出土。内部に金の糸らしいものが付着していた。

6月11日 F57区を中心とする大型の竪穴遺構が検出される。(S T 201)

6月16日 G57区から掘立柱建物跡の柱穴と推定される並びを検出。その範囲内から青磁・瀬戸の皿および銅製香炉か盤の脚が出土する。

6月17日 G・H56、H57、G58区を遺構確認面まで掘り下げる。

6月20日 G58区Ⅱ層下から鉄型と坩埚が多数出土する。後でST210の型土と確認する。

- 6月27日** A区遺構確認面までの掘り下げをほぼ終了し、遺構の掘り下げを開始する。S T 200・201
・ 202・203・207、 S F 28等。
- 6月29日** 弘前大学の歴史研究室と地学研究室学生約50名見学。S T 200 では擂鉢状の灰の分布がみ
られる。その中から馬骨と思われる骨が出土している。S T 201 は大形の竪穴遺構となる
であろう。S T 202 は覆土東側に粘土が貼られた痕跡をしめす。S X 152 は井戸跡になる
という予想から S E 71に名称を変更する。
- 7月1日** S E 71を 125 cmまで掘り下げるとき川原石が集中して廃棄されていた。
- 7月2日** G56区 S T 207 床面より麻紐で連なった銅鏡が出土。159枚と推定される。
- 7月3日** 銅鏡を取り上げる。
- 7月5日** D56区 S K01より人骨が出土する。午後、警察に連絡し対応を検討する。城館期の土塙墓
らしいと推定されるところから、専門家に鑑定を依頼することにした。
- 7月6日** 出土人骨の供養をし、報道機関に連絡、取材を受ける。
- 7月8日** 人骨を実測するも、乾燥が激しいため現状保存が困難と考え露出面にパラフィンを塗り固
定化をはかる。人骨の鑑定を森本岩太郎先生に依頼することとし連絡をとる。S T 203 か
ら太刀金具、S T 205 から土鉢が出土した。
- 7月11日** A区の遺構掘り下げ作業と併行してB区の表土除去作業を開始する。
- 7月15日** 森本岩太郎先生來訪。人骨の鑑定と取り上げをおこなう。人骨は中世のもので冠葬状態に
埋葬された若い女性のものであるという結果を得た。
- 7月18日** A区では遺構の精査が佳境に入り、B区では遺構確認面までの掘り下げを終了し竪穴遺
構12基、井戸跡3基の検出がみられた。
- 7月20日** 弘前大学学生が調査に参加。
- 7月23日** G56区 S E 71の集石部分を除去すると湧水が激しくなり、曲物等の遺物が出土し始める。
S E 73の掘り下げも順調に進み木枠検出の期待が高まる。
- 7月27日～29日** 児童の発掘調査教室を実施する。対象となる児童は町内各小学校の5・6年生であ
り、3日間でのべ112人の参加を得られた。特別参加として平内町歴史民俗資料館で募集
した平内町の児童も27日だけ参加し発掘作業に汗を流した。
- 8月1日** G58区 S T 210 から坩堝、鋳型等の出土が多く、覆土下層に多量の炭化物が分布していた。
製銅に関連する遺構であろうか?
- 8月8日** 猛暑が続く中での調査となる。A区ではS T 210の焼土・炭の分布が明らかになり、S E
73では木枠の存在が濃厚になった。
- 8月10日** S E 73より4本の隅柱と東・西・北側の横棟が検出される。
- 8月13日～16日** お盆休みのため作業中止。
- 8月17日** S E 73の木枠を写真撮影し、実測作業に入る。

- 8月20日** G・H56・57区から検出した柱穴の配列からS B30が明確になる。規模は当初5×7間ほどと考えられたが、東側に下屋の部分が伸びそうである。
- 8月24日** A区は堀り下げ終了の遺構から実測作業に入る。明の星高校学生130人見学。
- 9月1日** B区の調査に主力を移動する。
- 9月2日** 東北大学助教授・須藤隆氏来訪。
- 9月7日** G44区Ⅱ層上面から古銭13枚出土。黒石市教育委員会で発掘現場を見学。
- 9月8日～10日** 工藤が名古屋で開催された「新安神出土文物」の国際シンポジウム参加。
- 9月14日** B区検出の竪穴遺構の掘り下げ順調に進む。G43区Ⅱ層から墓縄に連なった古銭が52枚出土する。
- 9月19日** 金木町文化財審議委員が発掘現場見学。
- 9月22日** S T 225は井戸跡であることが判明、壁面の崩壊が激しいため早急な掘り下げが必要である。
- 9月27日** S T 225井戸跡から多量の木材を検出。深さ約300cmであった。
- 9月28日** S E77から木枠が検出されたが、隅柱・側板の倒壊が激しいため、実測は不可能と判断し、写真撮影のち取り上げ作業をおこなう。
- 10月6日** E47区S X 181から底に「吉」らしい文字を朱筆で書いた青磁皿が出土する。
- 10月13日** G45区S X 182の西側ピットから、紐に連なったと思われる古銭が出土し、その枚数は900枚前後と推定された。同15日までに実測を済ませ取り上げる。
- 10月18日** B区西端のF42区(昭和57年一部調査)やS T 234(昭和57年度一部調査)を再度確認しながら調査を進める。
- 10月22日** 現場説明会開催。
- 10月27日** A区の平面実測もほぼ終了し、B区についてもほとんどの遺構が掘り上がる。
- 10月31日** B区の実測作業を進める。
- 11月8日** 掘り残しのS T 240床面より完形の石臼が出土する。
- 11月9日** F・G40・41区からSH10を検出。館と館を結ぶ連絡路のような遺構のため明年度本格的に調査することとし、トレンチのみの調査で終了。
- 11月23日** B区の実測作業を終了し、整理作業に入る。

※発掘調査において作製した図面類および出土遺物は、浪岡町教育委員会で保管している。

Ⅲ 検出遺構

昭和58年度の調査で検出した遺構数は、掘立柱建物跡7棟、竪穴遺構40基、井戸跡10基、性格不明遺構40基、土塙墓1基、錢貨坪設遺構1基、溝跡6基、焼土遺構7基、楔形遺構1基、土居状遺構1基である。なお、発掘調査区が2～3ヶ年に渡った部分もあるため、S T 192、S T 234、S H10などは、昭和58年度分に一括して報告する。

1. 掘立柱建物跡

S B 30 (PL.2、Fig.3、Ch.1) —— F・G・H57・58区検出。長軸9間、短軸5間の母屋の東側に2間×1間の張り出しを有し、北・西・南側に庇が存在する。短軸方向はN-10°-Wである。柱穴は、母屋中央部にあたるb～g 2、b～h 5が一辺60cm前後の方形で深さ70cmと大形であり、a～hまでは比較的しっかりした掘り方をしている。しかし i～k は柱穴が径40cmの円形で深さも50cm以下のもののが多く、母屋中央部と比較すると貧弱な規模であるため、下屋的な機能も考慮しなければならないであろう。出土遺物には、柱穴覆土から、青磁皿、青磁皿、白磁皿、褐釉陶器（呂宋壺）、瓦器手培り、擂鉢、坩堝、鉄釘6、判読不能銭2などがある。重複する遺構としては、S B 54・56、S E 71・72、S T 204、S D 70・72、S X 164・165・166・167・168・169があるけれども、新旧関係は明確でない。

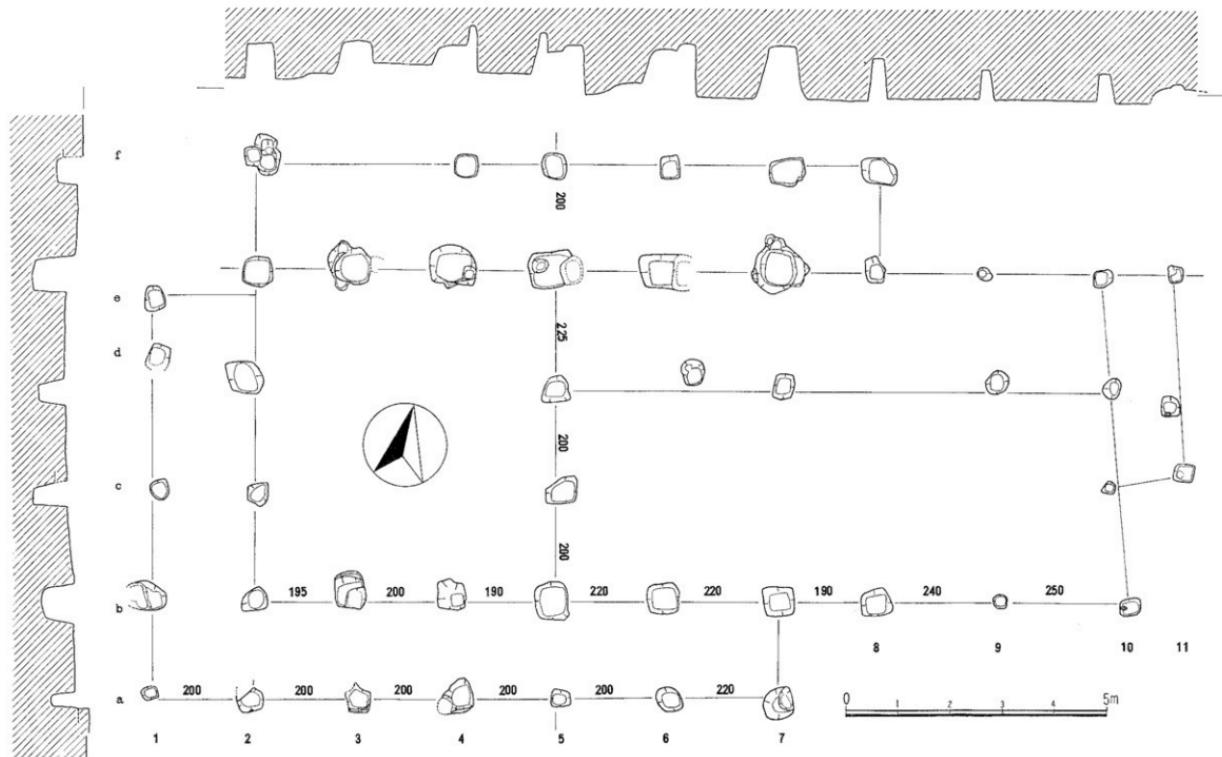
S B 32 (PL.2、Fig.4、Ch.2) —— D・E 46・47区検出。調査時間の関係で南側の一部だけしか調査していない。長軸6間、短軸2間+αの規模で、短軸方向はN-17°-Wである。現出している南側には庇があり東側へも伸びようである。柱穴は一辺60cm以上の方形、深さ70～80cm前後でしっかりした掘り方をしている。重複する遺構にはS B 58とS X 189があるけれども新旧関係は不明である。出土遺物としてはa 4柱穴覆土から永楽通宝を下限とする錢貨8枚があり他の覆土から瓦器手培り、染付皿、不明鉄製品、鉄釘、砥石がそれぞれ1片ずつ出土している。

S B 54 (Fig.5、Ch.4) —— G・H 56・57区検出。長軸7間、短軸2間の規模で、短軸方向はN-16°-18°-Wである。柱穴は方形基調で一辺40cm前後の掘り方をしたものが多い。重複する遺構としてはS B 30・S B 56・S X 169・S D 70があり、S D 70(旧)以外は新旧不明である。柱穴覆土からの出土遺物としては、青磁、擂鉢、瓦器、鉄釘、銅鋳などがある。

S B 55 (Fig.6、Ch.6) —— H 57区検出。長軸2間、短軸2間の規模で、短軸方向はN-16°-Wであるが、やや変形した柱穴配置を呈する。柱穴の掘り方も不整で規格性はない。柱穴覆土からの出土遺物には石臼片と鉄釘がある。S D 70(旧)と重複している。

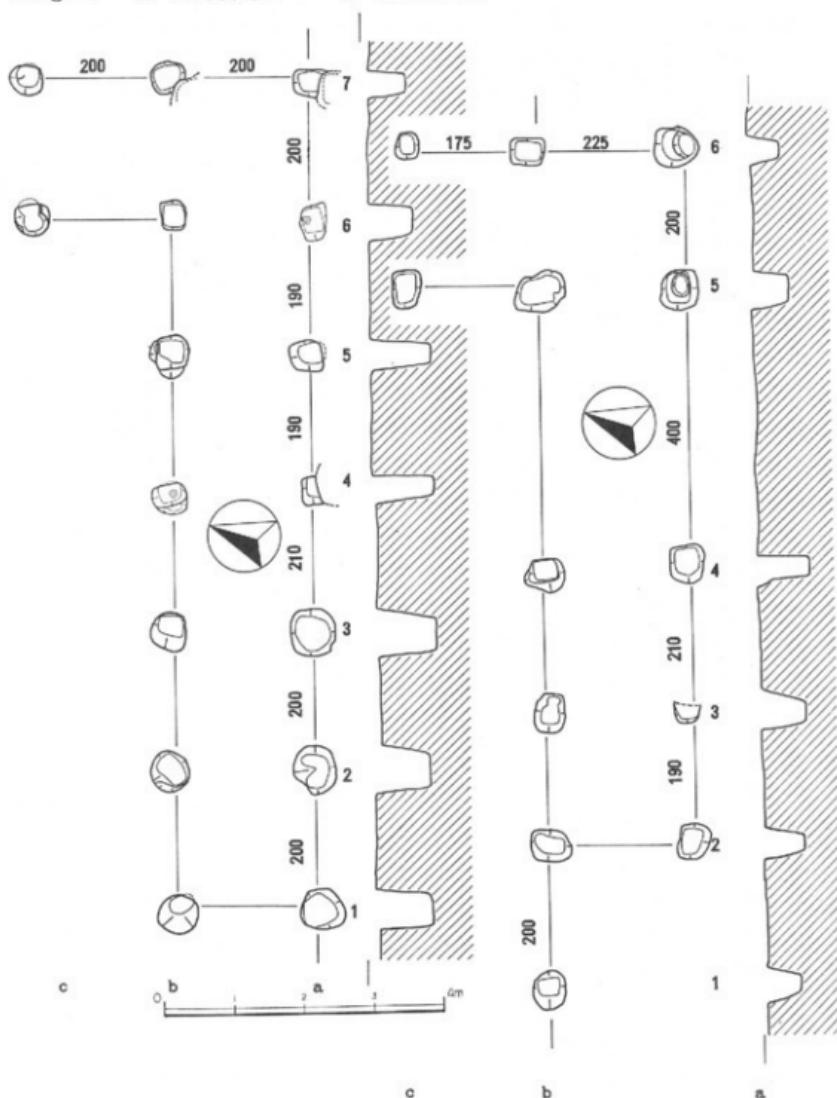
S B 56 (Fig.5、Ch.5) —— G・H 56・57区検出。長軸6間、短軸1間の規模で、短軸方向はN-21°-Wである。柱穴は方形基調で一辺35cmぐらいの掘り方が多く、S B 54とやや軸を違えて構築している。重複する遺構としては、S B 30・S B 54・S X 169・S D 70がありS D 70(旧)以外は新旧不明である。柱穴覆土から洪武通宝(背文・銭)が一枚出土している。

Fig. 3 SB30实测图



F i g. 4 (1) S B 32実測図

(2) S B 58実測図



S B57 (PL.14、Fig.37、Ch.52) —— F・G41区検出。同地区から検出された樹形遺構に伴う二脚門の跡と推定される。Fig.37のP1とP2がこれであり、径約100cm深さ160～180cmの柱穴が9尺(272cm)から10尺(303cm)の幅で配置され、樹形のスロープ中間に位置している。柱穴からの出土遺物はなかったが、樹形遺構自体が城館期全時期の遺物を出土することから、本遺構も城館期全般にわたって使用されたと考えられる。

S B58 (PL.2、Fig.4、Ch.3) —— E46・47区検出。長軸6間、短軸2間十αで北側部分が未調査のため全体規模はわからない。短軸方向はN-17°～18°-Wであり、重複するS B32と主軸方向を同じくして構築されている。柱穴は、1辺40cm前後の方形基調のものが多く柱間も6.6尺を基準に比較的安定した配置を呈する。南側と東側は底がめぐると考えられる。柱穴からの出土遺物はなかった。

以上が昭和58年度の調査で検出された掘立柱建物跡である。

[追加資料]

浪岡城跡北館の調査は昭和53年度から継続されており、単年度の整理では掘立柱建物跡の精査が充分になされなかつた面がある。今回、新たに掘立柱建物跡として追加する資料は、昭和60年1月までにおいて、調査顧問・高島と社会教育課主事・工藤が検討した結果の資料であり、調査現場が2ヶ年にまたがる地域や、重複が激しいため図面上で整理したもののが大部分である。

S B11 (Fig.7、Ch.9) —— L・M57区検出。長軸6間、短軸2間、長軸方向はN-17°-Wである。柱穴は、方形基調で一辺40cm以下のものが多い。柱穴の配置、柱間もやや規格性にかける部分はあるが、北側に掘状の張り出しを有するなど、小さな部屋割りをする建物跡である。

S B16 (Fig.8、Ch.11) —— J57区検出。3×3間の母屋で北側に1間×2間の張り出しを有する。張り出しの向く方向がN-30°-Wであり、これが平行方向にあたると思われる。柱穴は方形基調で一辺60cm～35cmの掘り方を呈し、配置・柱間も規格性にかける。出土遺物としては染付と鉄釘が各1点あった。

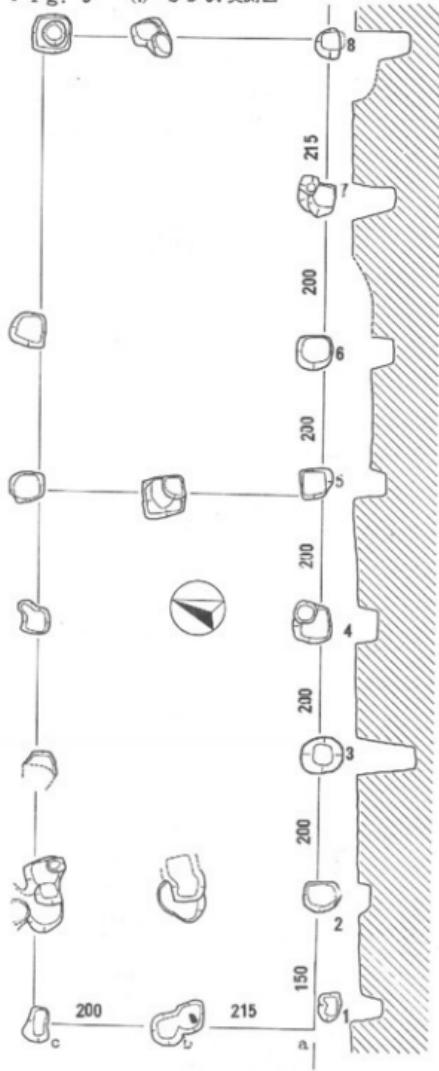
S B22 (Fig.8、Ch.10) —— I・J55区検出。長軸4.5間、短軸2間、長軸方向はN-18.5°-Wである。柱穴の掘り方は方形・丸形各種あって一定せず、最大径50cmから最小径25cmと不揃いな点もある。出土遺物には青磁、美濃灰釉、坩堝があり、重複するS B02よりは古い時期の構築と考えられる。

S B28 (Fig.8、Ch.12) —— I・J55区検出。長軸3間、短軸2間、長軸方向はN-22°-Wである。柱穴の掘り方・配置・柱間も一定しない小規模な建物跡である。柱穴から青磁と坩堝が出土している。

S B29 (Fig.6、Ch.7) —— I・J53区検出。長軸4間、短軸2間、長軸方向はN-12°-Wである。柱穴の掘り方、配置、柱間は不揃いで、梁行は北側が広く南側が狭い状態となっている。柱穴からの出土遺物としては、白磁、朝鮮皿、鉄釘があった。

S B31 (Fig.9、Ch.13) —— F・G53・54区検出。長軸7間、短軸5間の規模で、長軸方向はN-12.5°-Wである。柱穴の掘り方、配置は不揃いな部分が多いけれど、平行方向西側の柱間だけは比較的規則的に並んでいる。東側部分は柱穴配置の不整合が著しく、部屋割りも明確でない。柱穴からは、

Fig. 5 (1) S B 54 実測図



② S B 56 実測図

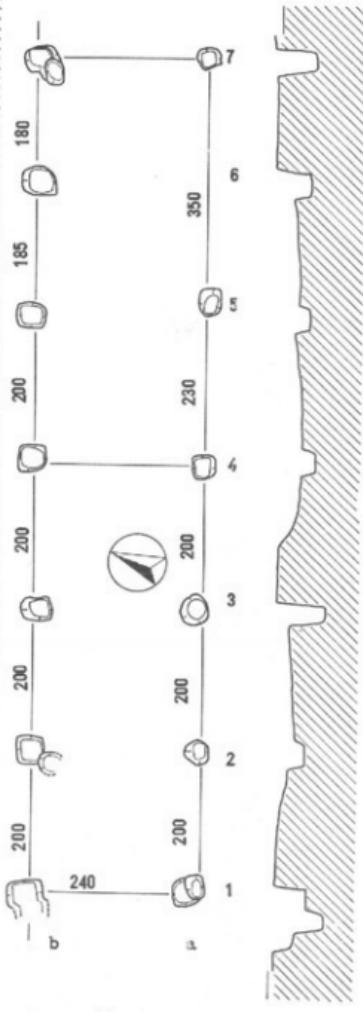
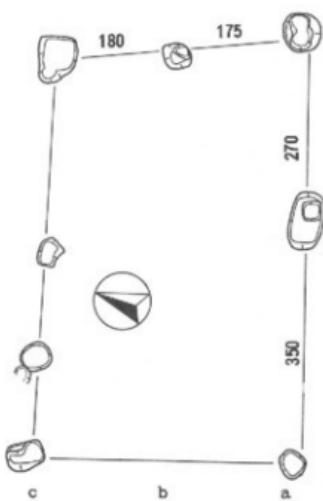
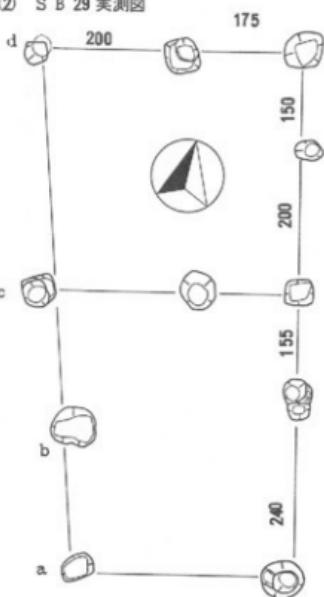


Fig. 6

(1) S B 55 実測図



(2) S B 29 実測図



(3) S B 50 実測図

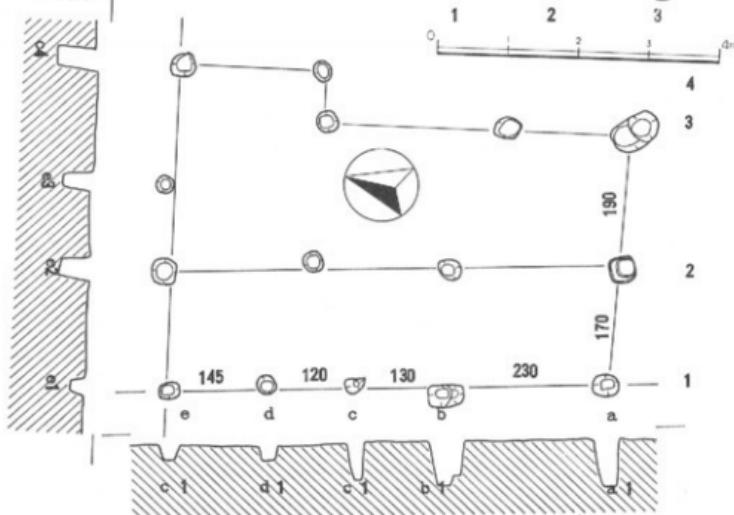


Fig. 7 SB11実測図

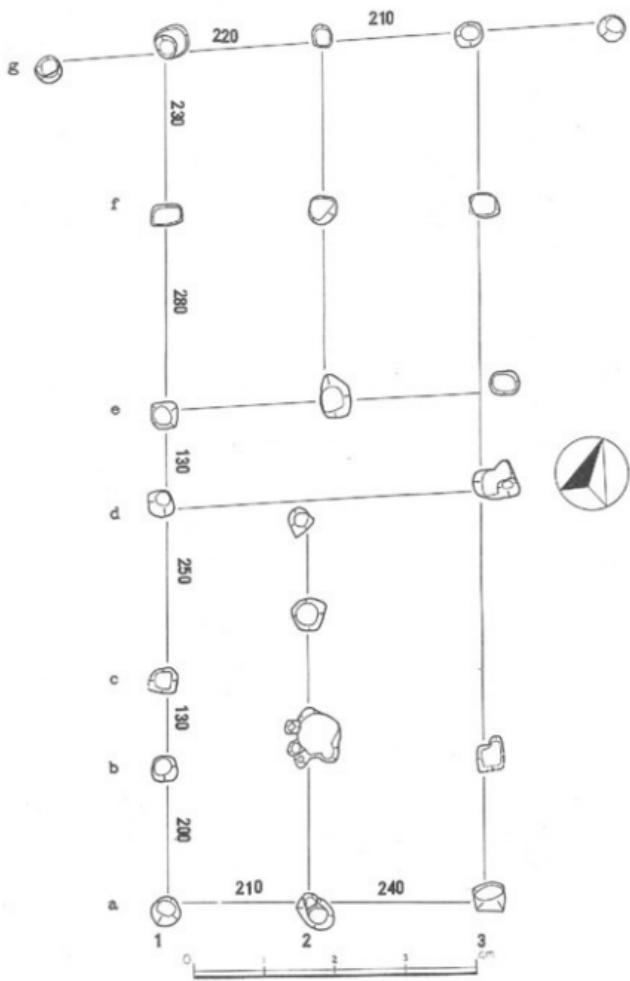
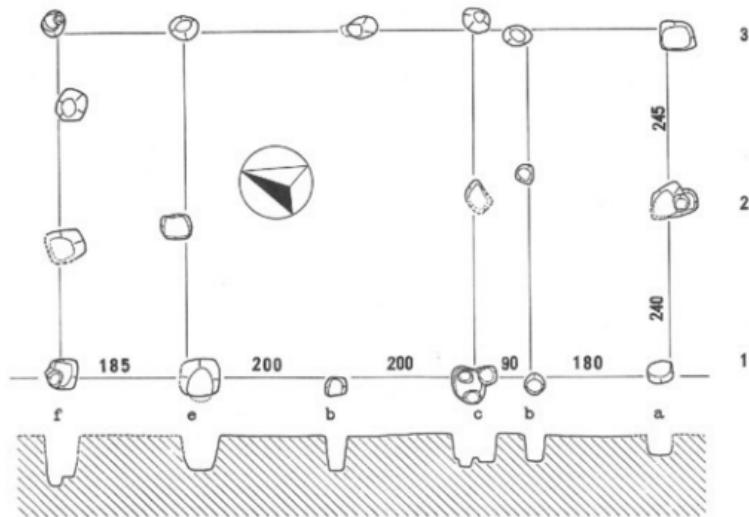
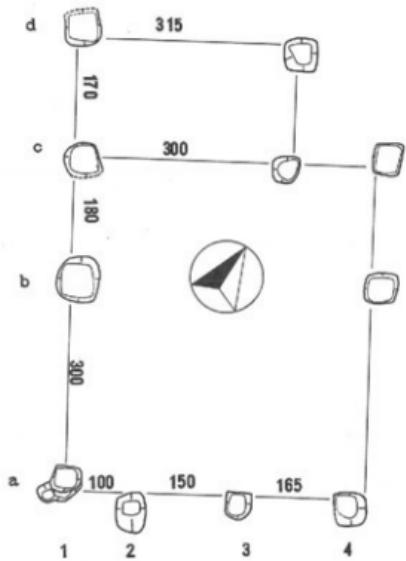


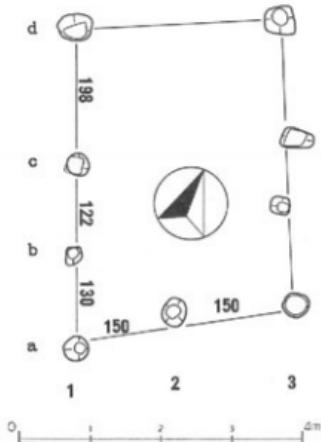
Fig. 8 (1) SB22実測図



(2) SB16実測図



(3) SB28実測図



青磁、白磁、擂鉢片が出土している。

S B 50 (Fig.6、Ch.8) —— E 52区検出。長軸4間、短軸2間、北東部分に張り出し状の部分が存在する。長軸方向はN-14°-Wであり、重複するS B 12の梁行方向と一致している。柱穴の配置は西側と東側で相違がみられ、柱間も規則的ではない。柱穴からの出土遺物はなかった。

S B 51 (Fig.10、Ch.14) —— E・F 49・50区検出。3間×3間の母屋の南西に1間×1間の張り出しを有する。張り出しが出る方向(桁行)はN-19°-Wであり、西側1間が庇の部分らしい。柱穴の掘り方、配置、柱間は東側ほど不揃いになり、出土遺物としては染付が1点ある。

S B 52 (Fig.11、Ch.15) —— H・I 44・45区検出。母屋5間×5間で東側に1間×1間の張り出しを有する。南北方向の主軸はN-24.5°-Wでありこれが梁行方向と考えられる。柱穴は方形基調の掘り方で一辺40cm前後のものが多く、配置は歪んだ部分が多く部屋割りの線も複雑な様相を呈している。柱間も桁と梁では相違があるようで、桁より梁の柱間が全体に短かい。出土遺物としては、染付、銭貨、炭化米がある。

S B 53 (Fig.12、Ch.16) —— H 43・44区検出。長軸4間、短軸3間、短軸方向はN-28°-Wであり柱穴配置は各方向で相違がみられる。柱穴の掘り方も一定せず、柱間は配置と同様に任意的である。出土遺物としては青磁15片、越前甕・擂鉢などがある。

(注1)上記の掘立柱建物跡に関する記述の中で、柱間や部屋の配置については、本報告書『福浪岡城北館の掘立柱建物跡について』で詳細に説明しているため、省略した部分が多い。

Fig. 9 SB-31 実測図

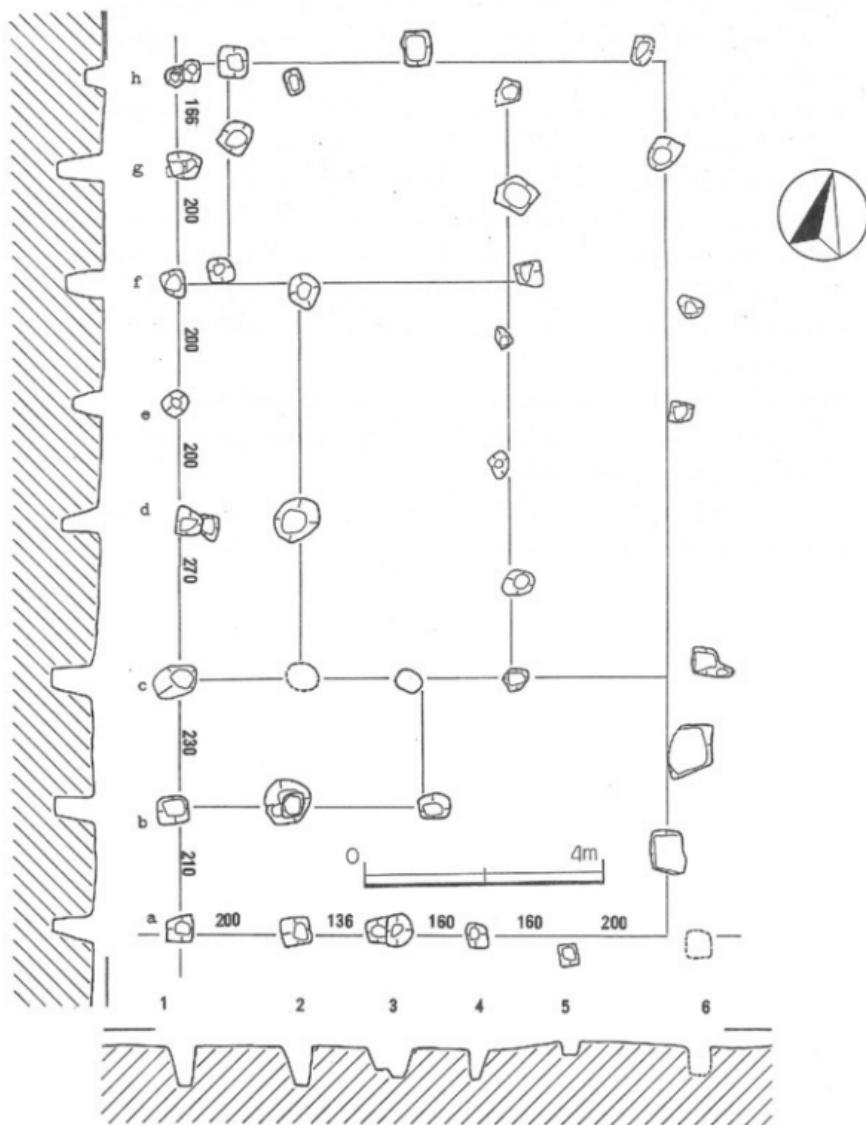
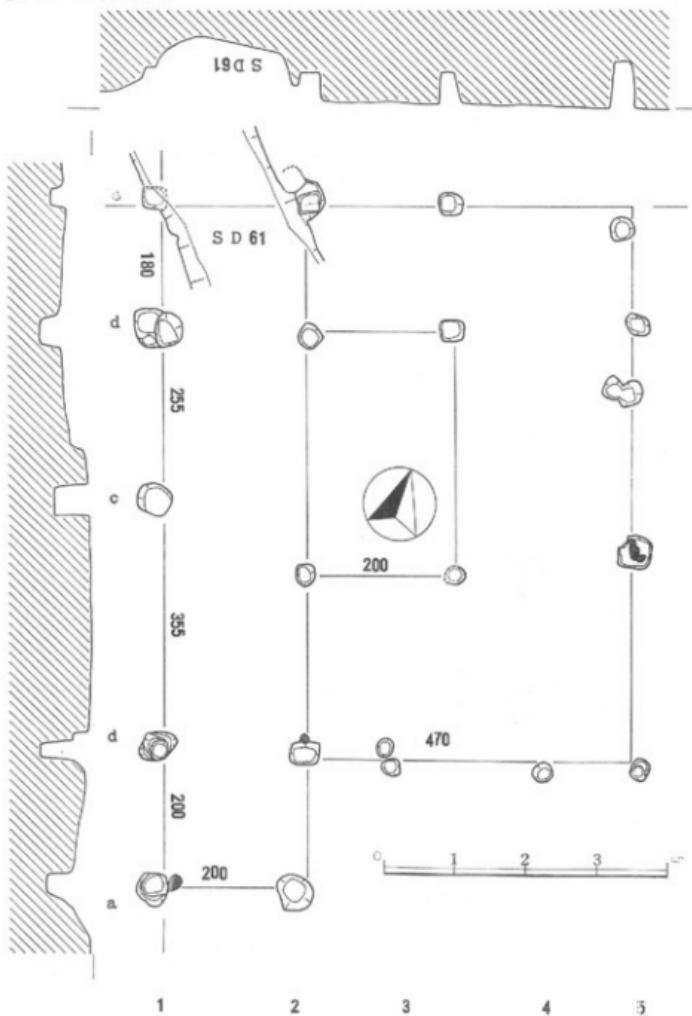


Fig. 10 S B51実測図



F i g . 11 S B 52実測図

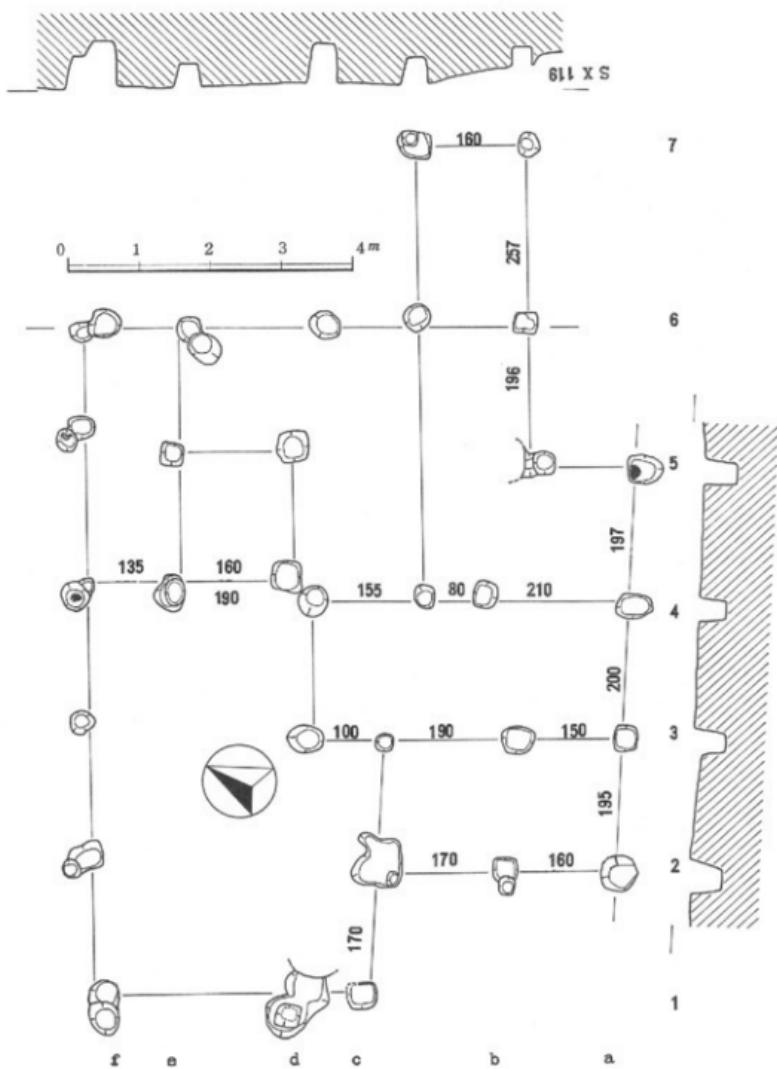
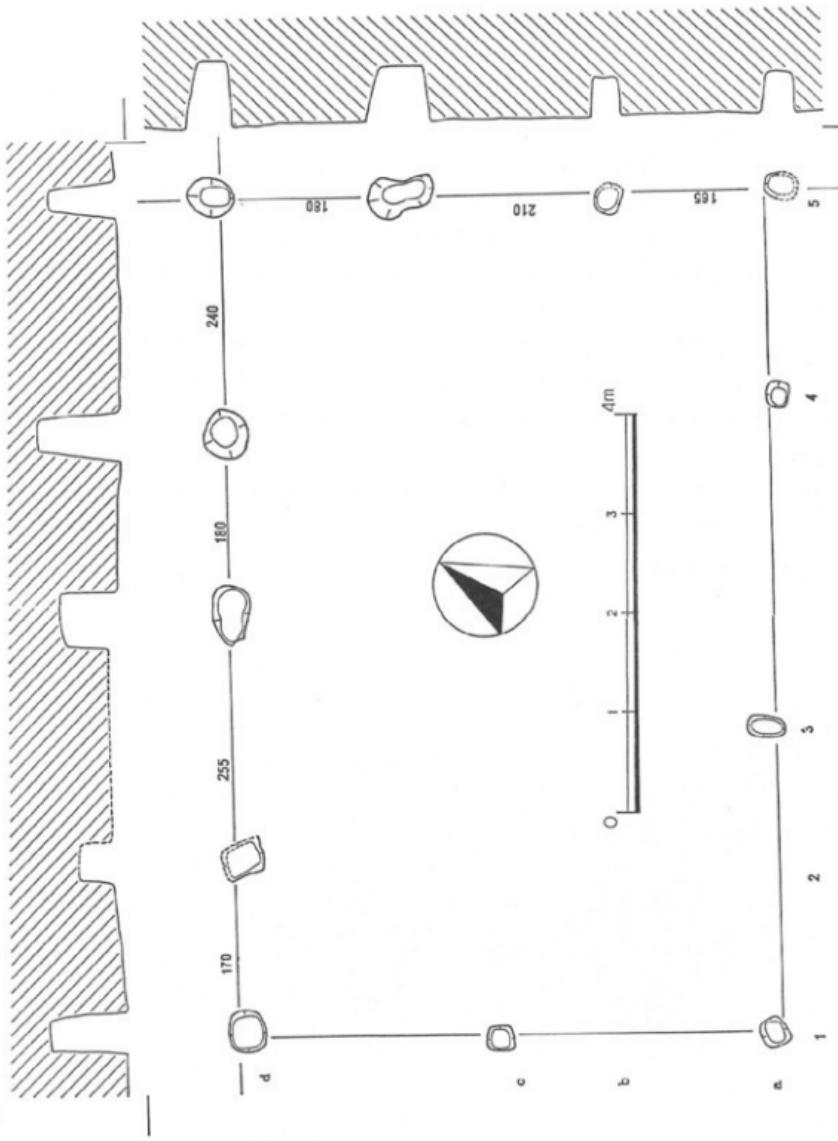


Fig. 12 SB53実測図



2. 穴道構

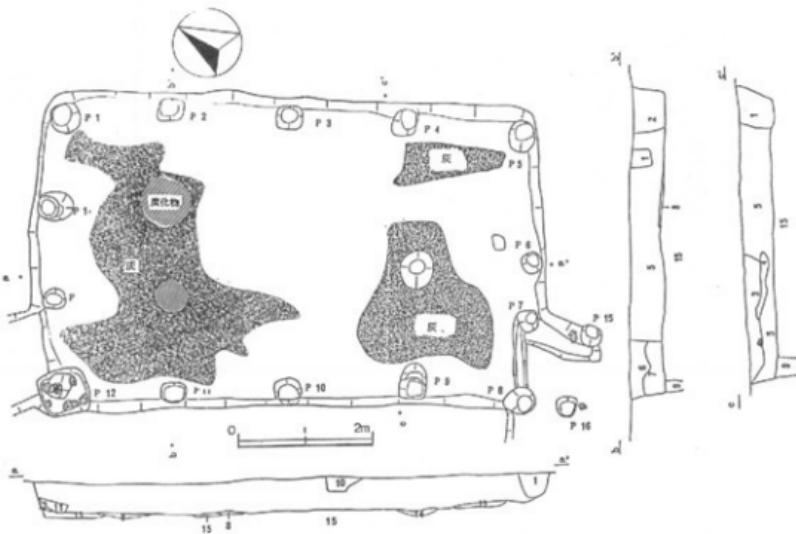
穴道構としたものの中には、床面に柱穴の配置があって明確に上部構造が推定できるものと柱穴等がみられず上部構造が存在したかどうかは疑問なものの二種類が存在する。前者は穴道構と言うべきよりも穴道(式)建物跡と言った方が遺構の性格を充分説明できると考えている。以下、それぞれの特徴を述べる。

2-a 穴道建物跡

S T 192 (PL.3, Fig.13, Ch.17) —— (昭和57・59年度調査) H・G41区検出。長軸 750 cm、短軸 460 cm、深さ48cm。出入口は南壁西側にあり方向は S-18°-E である。柱穴は長軸4間、短軸3間で壁面に接する状態で配置され、長軸方向の1間は約180 cm (6尺) 間隔で並んでいる。床面には中央部を除いて灰と炭化物の分布がみられ、それらの直上から出土する遺物が特徴的である。床面直上出土の遺物としては、火箸 (Fig.46-2)、銅状鉄製品 (Fig.46-6・7)、銅製香炉 (Fig.48-1)、銅製盤あるいは香炉の脚 (Fig.48-5)、釘 (角釘で2.5寸くらいの長さが多い) が72本ほど鐵塊のようになったものなどがある。他に覆土からの出土遺物としては、青磁、染付、越前、瓦器等の陶器類、元豐通宝、嘉祐元宝、洪武通宝、祥符通宝等の銭貨、上記以外の釘73本、埠塙、炭化米などがある。

S T 200 (PL.3, Fig.14, Ch.18) —— E56区検出。長軸442 cm、短軸355 cm、深さ90cm。出入口

Fig. 13 S T 192 実測図



は東壁南側にあり、方向はE-10°N、細長い舌状スロープの形状を呈している。覆土堆積は、中央部深さ40cmぐらいまで暗褐色土が鉢鉢状の落ち込みを呈し、その下に薄い灰層と粘土層が互層となっていた。その互層になっている部分から馬骨が出土している。柱穴は、Pit 1～Pit 8までが本造構に付属すると考えられ、長軸・短軸とともに壁面に接して2間×2間の配置である。特に北・西・南壁直下には幅20cm弱の周溝（壁溝）が存在し、側板があった可能性を強くしている。出土遺物はすべて覆土からのものであり、青磁、白磁、中国製褐釉壺（呂宋壺）、朝鮮、美濃灰釉、鉄釉、瓦器、埴輪等の陶磁器類、鉄釘、小札等の鉄製品、用途不明銅製品、洪武通宝等の銭貨、石鉢、馬骨があった。重複する造構としてはS X 155（旧）がある。

S T 201 (PL.3, Fig.15, Ch.19)——E・F 57区検出。長軸630cm、短軸500cm、深さ104cm。出入口は東壁北側にあったと思われS T 206と重複しているため明瞭に検出できなかった。柱穴位置から推定するとその方向はE-3°Nである。柱穴は長軸3間、短軸2間で壁面近くに配置されている。Pit 1～Pit 10までがそれであり、Pit 11, Pit 12は出入口に付属する柱穴と考えられる。床面直上には広く灰の分布がみられたが、灰とともに出土した遺物は朝鮮碗（Fig.42-2）や瓦器、埴輪の破片だけであり、ほとんどの遺物は覆土からの出土である。主な出土遺物としては、青磁、白磁、朝鮮、美濃灰釉、瓦器、擂鉢、埴輪等の陶磁器類、鉄釘、火箸、苧引金、鍋等の鉄製品、銅鐘（Fig.48-3）鋸状の銅釘（Fig.48-12）等の銅製品、祥符通宝、天禧通宝等の銭貨、茶臼の上臼（Fig.49

Fig. 14 S T 200 実測図

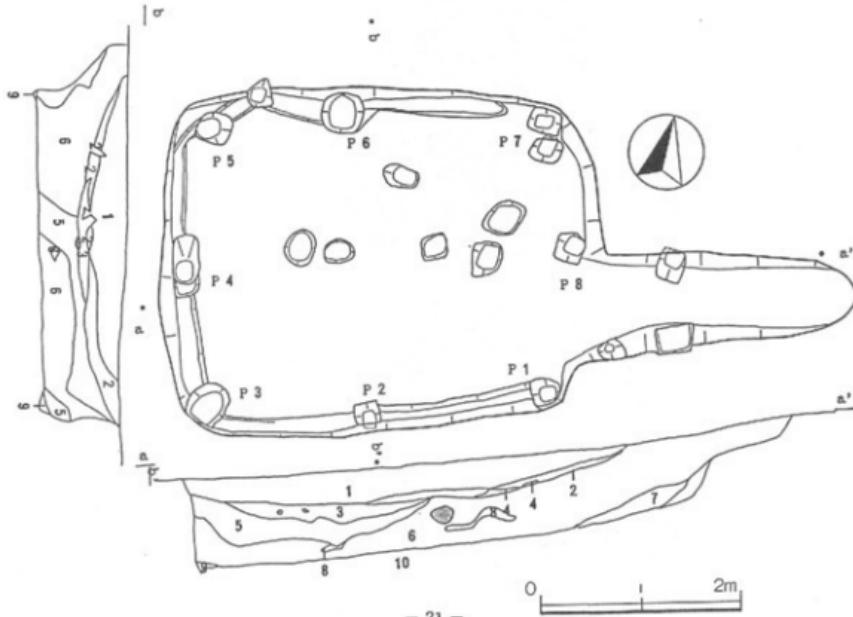
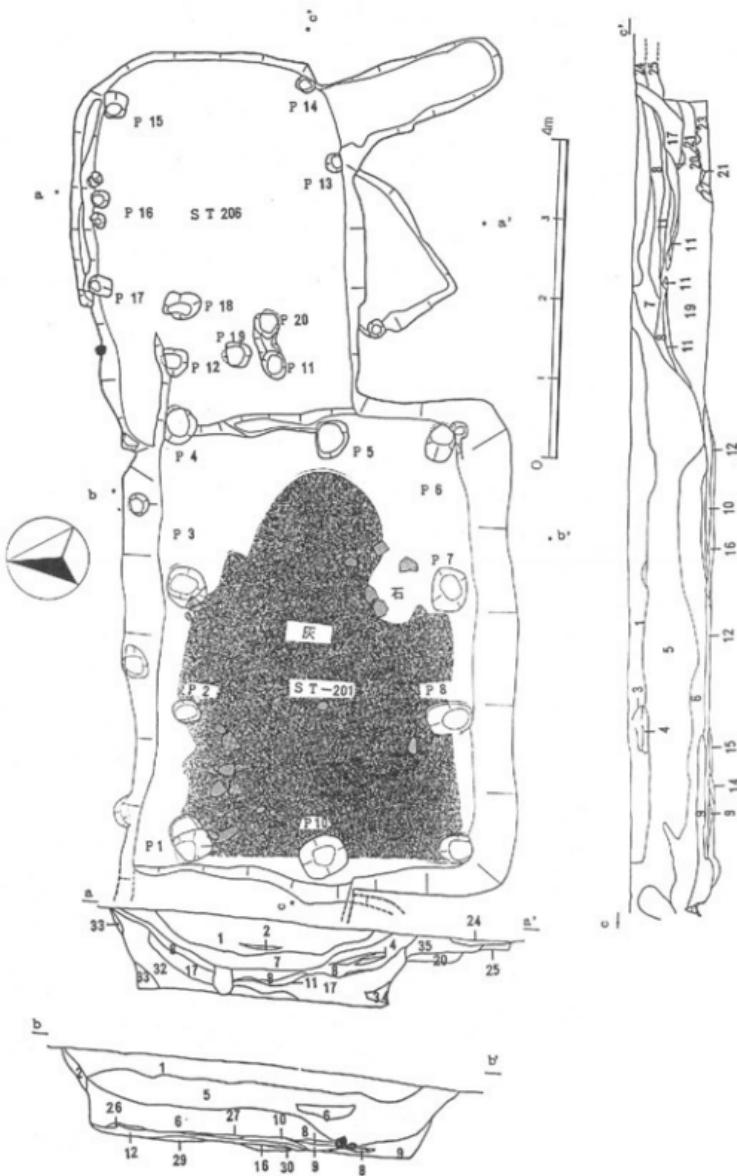


Fig. 15 ST 201・206実測図



-4)、硯、磁石等の石製品、くるみなどがある。ST 206と重複しているが層序図(Fig.15-C)よりST 201が新しいと考えられた。

ST 202 (PL.4、Fig.16、Ch.20)——E・F 56区検出。長軸580cm、短軸455cm、深さ78cm。出入口部分はみられない。付属する柱穴はPit1からPit11までと考えられ、北側で長軸方向3間、短軸方向1間に南側へ2間×1間の張り出しがある形態と思われる。出土遺物には、床面上から白磁皿の破片がある他、覆土から青磁、白磁、染付、美濃灰釉・同鉄釉・瓦器、擂鉢、壇場等の陶磁器類、鉄釘、鉄錠等の鉄製品、洪武通宝、皇宋通宝等の銭貨、磁石、白、硯等の石製品、馬骨および漆器被膜がある。重複する造構としては、ST 212(新)、SX 160・SX 161・SX 155(旧)がある。

ST 203 (PL.4、Fig.17、Ch.21)——F・G 56区検出。長軸670cm、短軸450cm、深さ50cm。東北コーナーの部分にST 211とした造構が重複していたため、出入口と考えられた部分は明確に検出できなかった。柱穴の配置は長軸4間、短軸3間でPit1からPit14までそれである。またPit15、Pit16も関係する可能性がある。出土遺物としては、床面上から鉈刀とでも言うべき鉄製品(PL.4-3、Fig.45-18)が出土している他、覆土から太刀の足金具(PL.19-1、Fig.48-2)と青磁、白磁、染付、中国褐釉壺、瓦器、擂鉢、美濃灰釉等の陶磁器類、火箸、釘等の鉄製品、政和通宝、永楽通宝、淳化元宝、開元通宝等の銭貨が出土している。

Fig. 16 ST 202・ST 212・SX 160 実測図

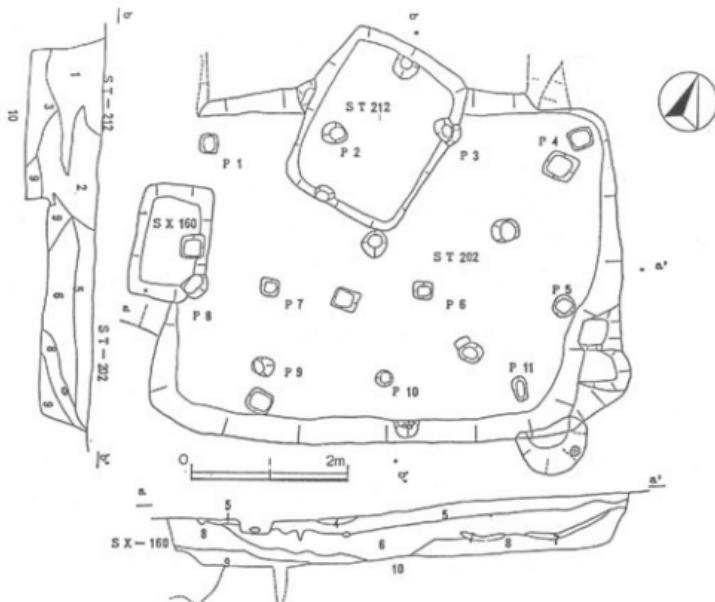
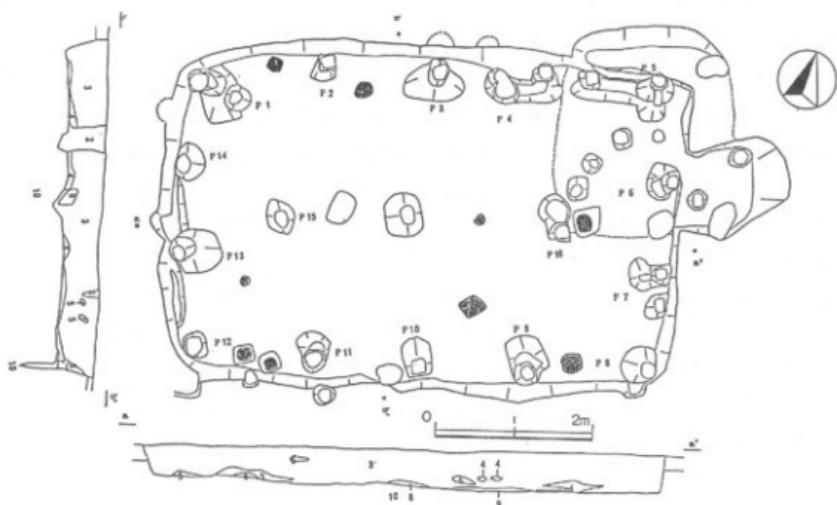


Fig. 17 S.T. 203 実測図

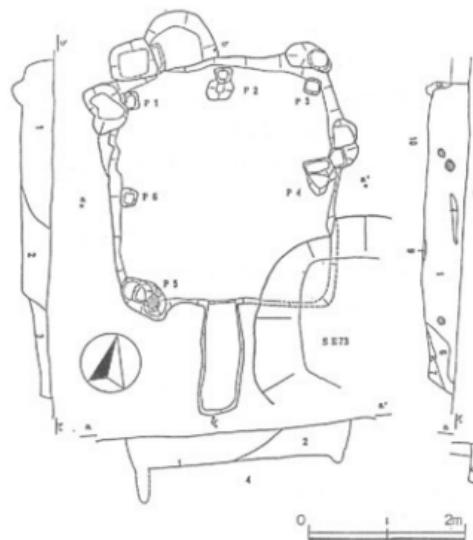


S.T. 204 (PL.4, Fig.18, Ch.22) —— H57・58区検出。長軸 310 cm、短軸 300 cm、深さ 44 cm。出入口部は未確認。柱穴は長・短軸ともに 2 間の配置と考えられるが、南東隅と南壁中央部は不明瞭であった。出土遺物としては、覆土から、青磁、中国褐釉壺、瓦器、染付、羽口、擂鉢、坩堝、鉄釘、鉄錠、銅鏡、砥石等があった。南東部で S.E. 73(旧)と重複している。

S.T. 205 (PL.5, Fig.18, Ch.23) —— 長軸 324 cm、短軸 300 cm、深さ 50 cm。南壁西側に舌状スロープの出入口があり、S-21° E の方向を向く。柱穴配置は、長・短軸ともに 2 間と思われるが長軸(南北)東壁側中央の柱穴は検出されなかった。Pit1 ~ Pit7 までが付属する柱穴である。出土遺物としては、床面直上から土鈴 (Fig.44-4) が出土している他、覆土から青磁、美濃灰釉、天目、白磁、染付、瓦器、坩堝、鉄釘、輪状鉄製品 (Fig.47-5)、鏡鏡、石臼等がある。北側で S.D. 72(旧)と重複している。

S.T. 206 (PL.5, Fig.15, Ch.19) —— 長軸 480 cm、短軸 312 cm、深さ 103 cm。出入口は南壁西側隅に位置し、細長いスロープ状を呈し S-14° E の方向を向く。柱穴配置は明確でないが、出入口部の Pit13、Pit14 の他、Pit15 から Pit20 が関連すると思われる。出土遺物には、青磁、染付、朝鮮、瓦器、坩堝、鉄釘、熙寧元宝、砥石、くるみがある。西側で S.T. 201(新)と重複しているため長軸方向の規模は推定で記載している。

Fig. 18 (1) ST 204 実測図



(2) ST 205 実測図

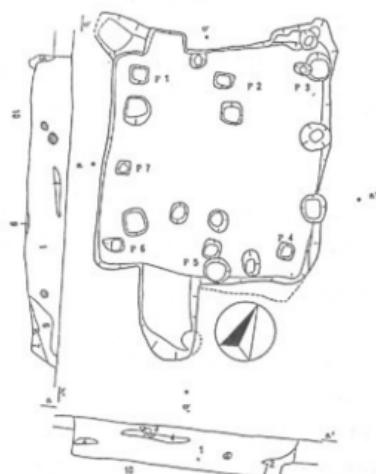
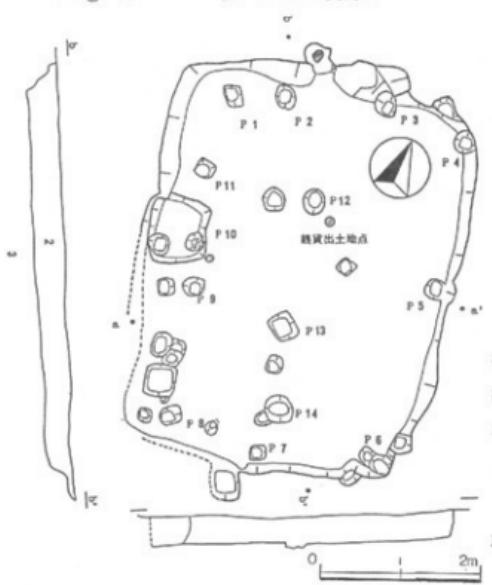
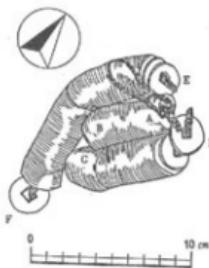


Fig. 19

(1) ST 207 実測図



(2) ST 207 出土銭貨実測図



ST 207 (PL.5、Fig.19、Ch.24)—G

53・56区検出。長軸496cm、短軸398cm、深さ40cm。出入口部は検出されなかった。

柱穴配置は明確でなく、長軸2間(東壁側)と3間(西壁側)、短軸3間(北壁側)と

2間(南壁側)と考えられ、Pit1からPit 11までがそれにあたる。またPit12・13も

棟通りを支える柱穴の可能性がある。出土遺物には、床面直上から麻紐に連なった錢貨が159枚出土しており、出土時は糸に全体を覆われ一部に覗が付着していた。(PL.5-4、Fig.19-2) 麻紐は三つ編みで、最初の結び目(A)から一枚の錢貨を止め状に使っている最後の部分(F)までA-B-C-D-E-Fと一連の状態で出土した。(残存状態が良好なため、この錢貨は出土時の状態で保存してあり、どのような錢貨があったかは未調査である。) 覆土からの出土遺物としては、青磁、染付、白磁、唐津、美濃灰釉、越前、瓦器、埴輪、鉄釘、銅鋤、馬骨、くるみ、縄文時代の石斧(Fig. 49-12)がある。

S T 208 (PL.6、Fig.20、Ch.25)——F・G58区検出。長軸500cm、短軸432cm、深さ58cm。出入口は北壁東側に位置し、N-30°Eの方向で階段状を呈する。柱穴配置は長・短軸とも2間×2間で、さらに遺構中央にも1個存在し(Pit9)、出入口部にも一対のもの(Pit10・11)がある。出土遺物は、床面直上から青磁綾花皿片がある他、覆土から、青磁、瓦器、搖鉢、天目、染付、埴輪、鉄釘、斧、皇宋通宝、漆器破片、くるみ等が出土している。Fig.20-1は出土した瓦器壺、Fig.20-2は銅製笄である。

S T 210 (PL.6、Fig.21、Ch.26)——G58・59区検出。長軸620cm、短軸400cm、深さ55cm、出入口部は明確に検出されなかったが、他の遺構と重複していた東壁南側に存在した可能性が高い。柱穴配置は壁に接して長軸3間、短軸2間で位置し、壁溝が四周をめぐる。西壁北側部に180×65cmの

Fig. 20 (1) S T 208 実測図

(2) S T 208 出土遺物実測図

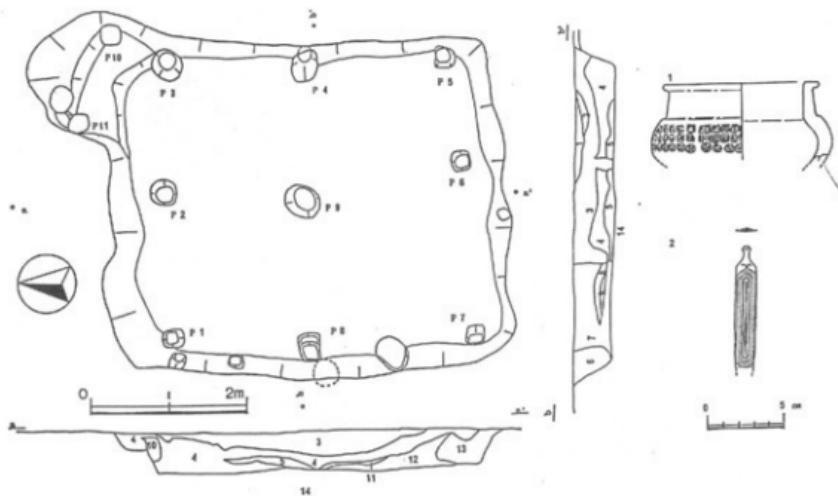
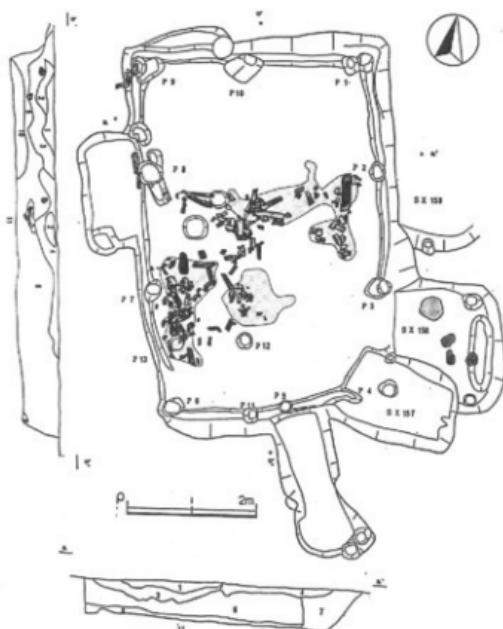


Fig. 21 ST 210 実測図



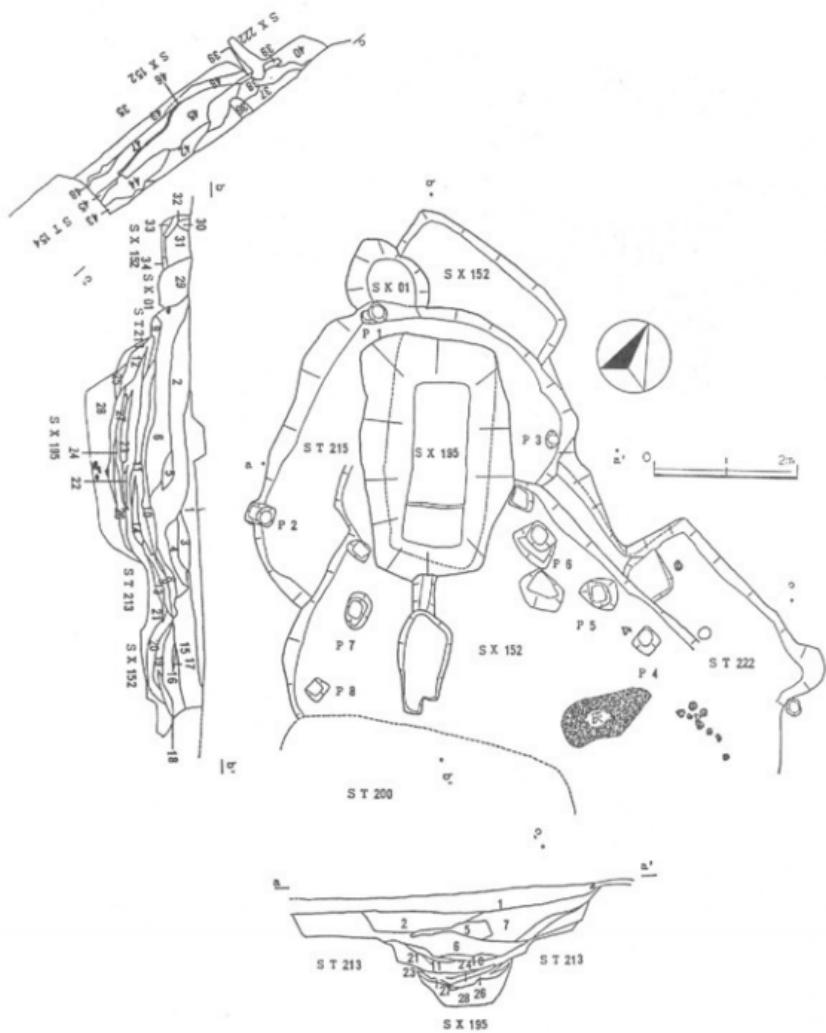
る等多種・多量の出土遺物がある。これらの遺物の出土状態をみると、床面出土の遺物と覆土出土の遺物に大異はないため遺構廃絶と同時に廃棄されたものと考えることができる。重複する遺構としては、S X 157(新)、S X 158(旧)、S X 159(旧)、S D72(旧)がある。

S T 213 (PL.7、Fig.22、Ch.27)——D-E56区検出。長軸430cm、短軸370cm、深さ68cm。S X 195とS X 154と重複しているため中央・南東部は残存していないかった。柱穴配置は、長・短軸ともに1間で各コーナーに位置するらしいが南東コーナーに明確でない。出土遺物には瓦器、擂鉢、不明鉄製品等がある。

S T 215 (PL.7、Fig.23、Ch.28)——F47区検出。長軸308cm、短軸260cm、深さ48cm。出入口部は東壁南側に位置し、E-20°-Nの方向に舌状スロープを呈していた。柱穴配置は長・短軸とも2間で壁面からやや離れた位置にある。Pit1からPit8までがそれである。出土遺物には白磁、青磁、信楽、染付、美濃、鉄釘、漆器被膜等がある。本遺構の南側にはS X 178(旧)が重複していた。

方形の張り出しを有し、南壁中央部には幅87cm、長さ224cm、深さ44cmの煙道状の掘り込みが存在している。覆土から床面全般にかけて炭化物と焼土の分布がみられ、特に中央部から南側にかけて濃厚にみられた。出土遺物としては、銅製鋤を鋳造するために使用したと思われる土製鋳型が60片以上、坩埚片が200片以上があり、床面出土のものもみられることから本遺構の性格を決める重要な点と考えられる。それ以外の遺物には瓦器、擂鉢、青磁、美濃灰釉、白磁、羽口(Fig.44-11)、染付、鉄釘、小札(Fig.45-14)、鉄(Fig.46-12)、小刀、火箸、鍋の鉢(Fig.46-1)(床面出土)、苧引金、切羽、硯(Fig.49-5)、茶臼(Fig.49-4)、砾石、永樂通宝、洪武通宝、開元通宝、周通元宝、朝鮮通宝等の錢貨、漆器被膜、く

Fig. 22 ST 213 · ST 222 · SX 152 · SX 195 · SK 01 実測図



S T 216 (PL.8、Fig.24、Ch.29)—F
47区検出。長軸 320 cm、短軸 310 cm、深さ 36
cm。出入口部は検出されなかった。柱穴配置
は、Pit1 から Pit6 までの長軸 2 間、短軸 1
間であるが短軸東壁側が 2 間となる可能性も
ある。出土遺物としては、染付、白磁、青磁、
鉄釘、鉄砲玉 (PL.19-16、Fig.48-22)、
砥石等がある。

S T 217 (PL.8、Fig.25、Ch.30)—F
47区検出。長軸 340 cm、短軸 310 cm、深さ 28
cm。東壁南側に出入口状の張り出しがあった
ようであるが、SF34(新)と重複している
ため明瞭に検出されていない。柱穴配置は、
Pit1・Pit2・Pit3・Pit13・Pit19・Pit
20・Pit14・Pit10 のものと、Pit5・Pit9・
Pit13・Pit18・Pit15・Pit11 のものが考
えられ、建て替えがあったらしい。前者は長

Fig.24 S T 216・S T 230 実測図

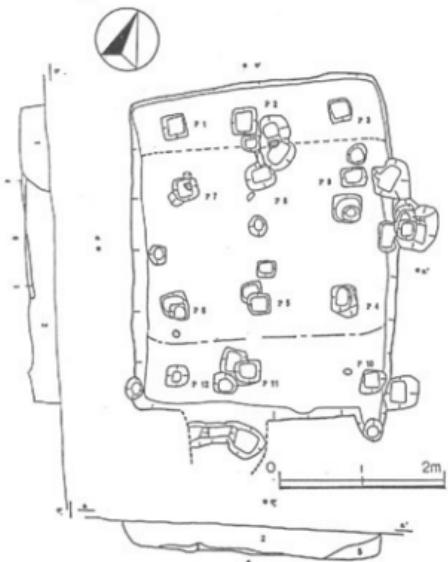


Fig. 23 S T 215・S X 178 実測図

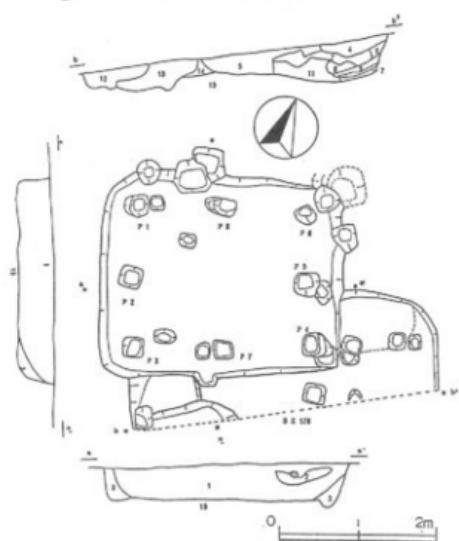
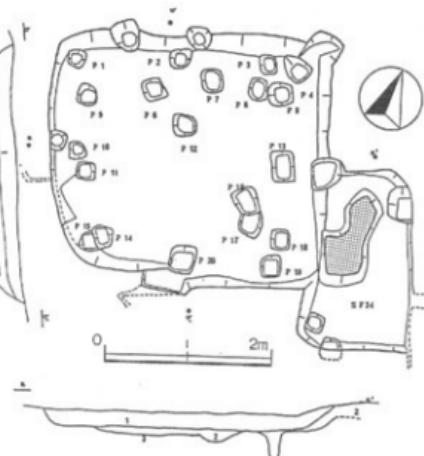


Fig. 25 S T 217 実測図



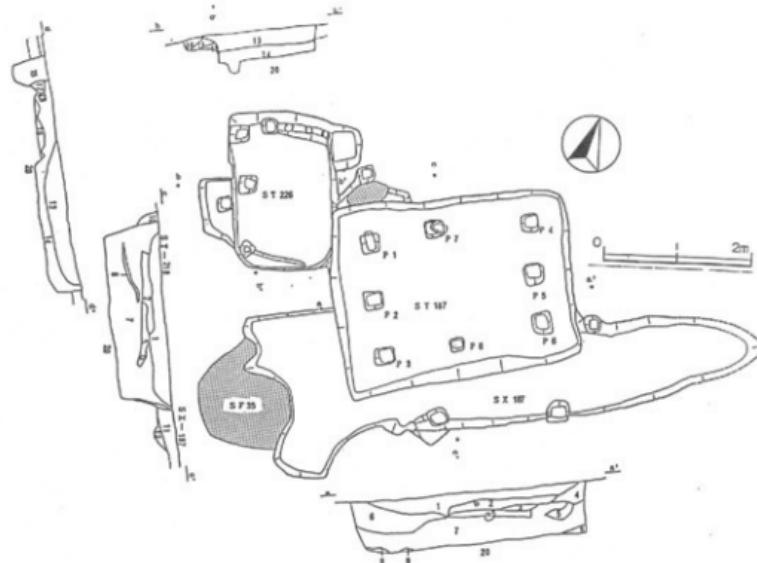
・短軸2間、後者は長軸1間、短軸2間である。出土遺物には美濃灰釉、擂鉢、鉄釘、小柄（Fig. 48-25）等がある。

S T 218 (PL.8、Fig.26、Ch.31)——F・G47区検出。長軸340cm、短軸248cm、深さ73cm。出入口部は検出されていない。柱穴配置は、長・短軸2間で壁面から離れた位置におかれている。Pit1からPit8がそれである。出土遺物としては、染付甚苟底皿（Fig.41-13）、青磁、白磁、美濃灰釉、同鉄釉、唐津、瓦器、鉄釘、輪状鉄製品、石臼、鐵錢などがある。重複している構造には、S T 226（新）、S X 187（旧）があり、西側には焼土の分布がみられる。（S F 35など）

S X 155 (PL.9、Fig.27、Ch.32)——E・F 56・57区検出。長軸550cm、短軸510cm、深さ70cm。出入口部は検出されていない。東側にS T 201（新旧不明）、S T 221（新）、西側にS T 202（新）が重複しているため壁面は不鮮明な所が多い。柱穴配置は、長軸・短軸とともに3間×3間の配置を呈し（Pit1～Pit12）、深さもすべて45cm以上と安定している。出土遺物には、青磁、中国褐釉壺、瓦器、擂鉢、羽口、鉄鍋、鉄釘、判読不能錢などがある。

S T 224 (PL.10、Fig.28、Ch.33)——E 48区検出。北側半分を調査していないが、現状で長軸200+ α cm、短軸260cm、深さ55cm。出入口部はS-20° Eの方向で舌状スロープを呈する。柱穴配置もおそらく2間×2間であったと思われるが、Pit1からPit5までの南側半分しか検出されておらず、出入口部のPit6・Pit7も付属する柱穴と考えられる。出土遺物としては、青磁、染付、美濃灰釉、

Fig. 26 S T 218・S T 226・S X 187 実測図



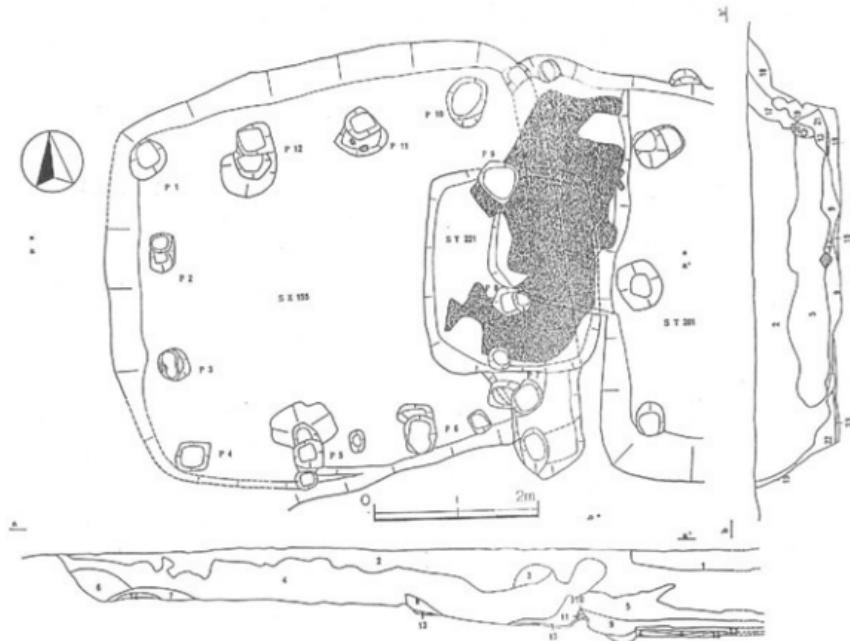
鉄釘、坩堝、鉄滓、熙寧元宝などがある。

S T 228 (PL.9、Fig.28、Ch.34) —— F 46区検出。長軸 252cm、短軸 240cm、深さ 63cm。東壁南側に急峻なスロープを呈する出入口があり、S-22°E の方向を向く。柱穴配置は、壁面に接した状態で 2間×2間であり、東南隅の Pit8・Pit9 のうち Pit8 は出入口部に関連したものであろうか。床面中央には径 60cm、深さ 76cm のピットが存在するが本遺構に付属するものではないらしい。出土遺物には、染付、越前、砥石、炭化米、熙寧元宝などがある。

S T 234 (PL.9、Fig.29、Ch.36) —— G 42・43 区検出。長軸 500cm、短軸 490cm、深さ 92cm。東壁北側に舌状スロープの出入口があり、N-64°E の方向を向く。柱穴配置は、長軸方向 3間、短軸方向 2間であり (Pit1~Pit10)、抜き取り痕のみられる柱穴 (Pit3、Pit7、Pit8、Pit9) や出入口に関連する柱穴 (Pit11、Pit12) もある。出土遺物には、染付碁笥底皿 (Fig.29) が床面直上から出土している他、青磁、越前、美濃灰釉、天目、火箸、鉄釘、判読不能錢、キセル (Fig.48-29)、炭化米などがある。なお、昭和57年度に一部調査しているため、セクション図の中に埋土がみられる。

以上が豊穴建物跡である。

Fig. 27 SX 155・S T 221 実測図



2-b 堅穴遺構

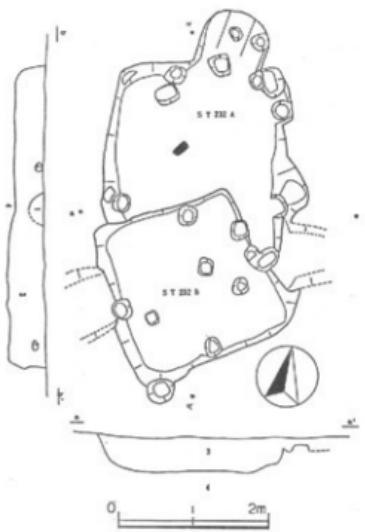
S T 209 (Fig.30、Ch.37) —— G 58区検出。長軸 230 cm、短軸 160 cm、深さ 38 cm。遺構に付属する柱穴ではなく、床面検出の柱穴は新しいものである。出土遺物は、坩堝、鋳型、擂鉢、染付、瓦器、美濃、鉄釘、銅淳、獸骨などがある。

S T 212 (PL.4、Fig.16、Ch.20) —— E・F 56区検出。長軸 230 cm、短軸 190 cm、深さ 98 cm。S T 202 (旧)と重複しており南側半分の壁面は明瞭でない。付属するかどうか明確でないが短軸壁間に中央に 1 個ずつ柱穴を有している。出土遺物には、装飾を施した銀メッキ状の銅製品 (Fig.48-20)、染付、白磁、天目、坩堝、鋳型、鉄釘、小札、鐵鍋、水晶などがある。

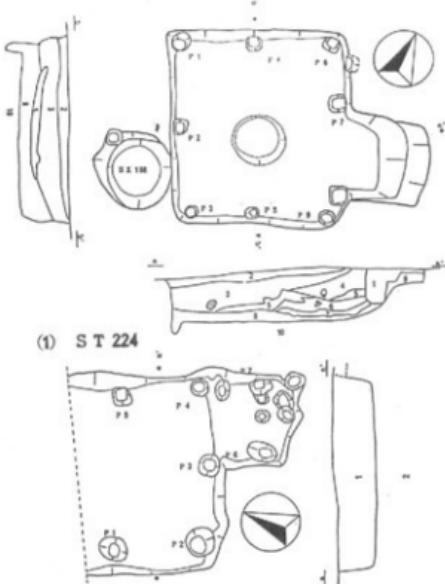
S T 214 (PL.7、Fig.30、Ch.38) —— F 48区検出。長軸 280 cm、短軸 253 cm、深さ 54 cm。南壁西側に舌状スロープの張り出しを有するが、床面からは柱穴が検出されず、短軸壁の中央に上端から掘り込む状態で柱穴がみられる。出土遺物には、美濃、瓦器、擂鉢、青磁、鐵鎌 (Fig.45-6)、鉄釘、元祐通宝などが出土している。

S T 221 (PL.9、Fig.27、Ch.32) —— E・F 57区検出。長軸 240 cm、短軸 210 cm、深さ 60 cm。南壁東側に舌状スロープの張り出しを有し、床面直上には灰の分布もみられるが重複する S T 201・SX 155 (新旧不明)と交錯しているため本遺構に伴うかは判然としない。床面の柱穴も SX 155 Pit 9 に切られないと推測すれば、短軸壁中央に 1 個ずつ存在することになる。出土遺物としては瓦器、

Fig. 28 (3) S T 232



(2) S T 228



青磁、擂鉢、元祐通宝、永楽通宝、炭化米などがある。

S T 222 (Fig.22、Ch.27) — E 56・57 区検出。長軸 300 cm、短軸 245 cm、深さ 45 cm。南側半分は S X 154 (旧)と重複しているため明確に壁面を検出できなかった。床面から付属する柱穴は発見できなかった。出土遺物には青磁と判読不能鏡がある。

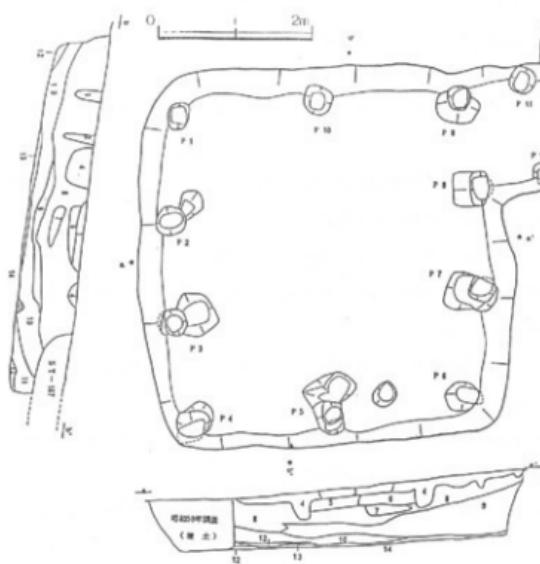
S T 223 (PL.10、Fig.30、Ch.39) — E 48区検出。長軸 245 cm、短軸 225 cm、深さ 65 cm。重複する構造や付属する柱穴はみられず、青磁、染付、釘、不明鉄製品、漆器被膜の出土遺物がある。

S T 226 (Fig.26、Ch.31) — F 47区検出。長軸 220 cm、短軸 143 cm、深さ 40 cm。S T 218の西北部に接する状態で位置し、西壁部に 3 個の柱穴がみられるけれども対応する柱穴はない。出土遺物には青磁、天目、小札、鉄鍋、不明鉄製品、くるみ等がある。

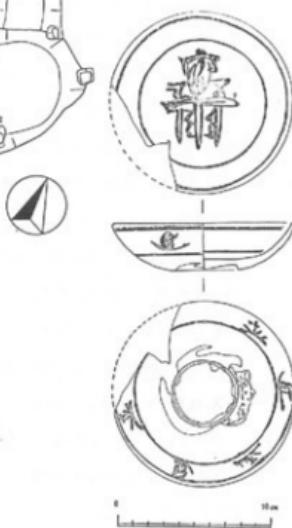
S T 227 (PL.10、Fig.30、Ch.41) — E 46・47 区検出。長軸 270 cm、短軸 233 cm、深さ 51 cm。南壁東側に舌状スロープの張り出しを有する。床面から遺構に付属する柱穴は検出されていないが、四方の壁に接する状態で中央部に 1 個ずつ柱穴が存在する。しかし、それらの柱穴から上部構造を推定することは若干無理があると思われ、豊穴建物跡としては扱わなかった。出土遺物には、青磁、白磁、染付、擂鉢、鉄釘、坩堝、小柄、判読不能鏡などがある。

S T 231 (PL.10、Fig.30、Ch.40) — G 46区検出。長軸 292 cm、短軸 248 cm、深さ 42 cm。付属する柱穴等は認められず、青磁、美濃灰釉、坩堝、白磁、鉄釘等の遺物が出土している。

Fig. 29 (1) S T 234 実測図



(2) S T 234 出土染付皿実測図



S T 232 (PL.10, Fig.28, Ch.35) —— G 45区検出。二つの遺構が重複していたため任意にAとBに分けた。S T 232 Aは、長軸 270 cm、短軸 230 cm、深さ 45cm で北壁東側に舌状スロープの張り出しを有する。S T 232 Bは、長軸 220 cm、短軸 203 cm、深さ 53cm で張り出しあはない。A・Bともに明確な柱穴配置は認められず、相方の新旧関係も明確でない。出土遺物としては染付、白磁、天目、唐津、瓦器、苧引金、鉄釘、磁石がある。

S T 235 —— G・H48区検出。南側が未調査のため全形は測れないが東西 310 cm、深さ 63cm であった。S T 236 (新) と重複しており、青磁、白磁、擂鉢、瓦器、漆器被膜等が出土している。

S T 236 —— G47区検出。S T 235 と同様に南側は未調査であり、東西 190 cm、深さ 110 cm であった。出土遺物としては、擂鉢、鉄釘がある。

S T 238 —— G 44・45 区検出。南側が未調査であり全形を知ることはできない。

S T 239 (Fig.31) —— G46区検出。長軸 220 cm、短軸 194 cm、深さ 71cm。出土遺物には縁 (Fig.47-4)、染付、判読不能錢がある。

S T 240 (PL.10, Fig.30) —— G 45・46 区検出。長軸 288 cm、短軸 276 cm、深さ 45cm。西壁北側に舌状の張り出しを有するが、明確な柱穴配置はみられない。出土遺物には床面から出土した石臼 (Fig.49-2) と染付、開元通宝、無文錢がある。

S X 152 (PL.7, Fig.22, Ch.27) —— D56区検出。S K01、S T 213、S X 195 と重複しているため北壁以外は明確に検出されていない。北壁長は 270 cm、深さ 40cm、付属する柱穴等は認められず、出土遺物も擂鉢が 1 点あつただけである。

S X 153 (Fig.15, Ch.19) —— F57区検出。S T 206 と重複しているため規模は不明確であるが、覆土から、青磁、美濃灰釉、瓦器、鉄釘、茶臼等の遺物が出土している。

S X 156 —— F56区検出。S X 155 (旧) と大幅に重複していたため規模は明確でない。出土遺物に染付、坩埚、鉄釘等がある。

S X 157 —— G 58・59 区検出。長軸 176 cm、短軸 128 cm、深さ 64cm。S T 210 (旧) の南東部と重複しており、擂鉢、瓦器、景德元宝、判読不能錢、漆器被膜の出土があった。

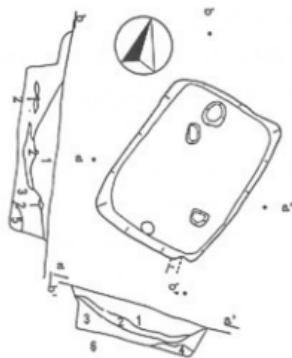
S X 158 —— G 58・59 区検出。S T 210 (新) の東壁と重複しており規模は明確でないが、長軸 208 cm、短軸 134 cm + α、深さ 31cm を測る。出土遺物には、青磁、瓦器、擂鉢、鉄釘、淳熙元宝、朝鮮通宝、元豐通宝、開元通宝などが出土している。

S X 160 (Fig.31, Ch.44) —— E・F56区検出。長軸 135 cm、短軸 95cm、深さ 110cm。S T 202 (新) の西壁と重複しており、出土遺物はない。

S X 161 (Fig.31, Ch.44) —— E56区検出。長軸 167 cm、深さ 126 cm。S T 202 (新)、S X 160・S X 162 (旧) と重複し、西側の一部は未調査で出土遺物はない。

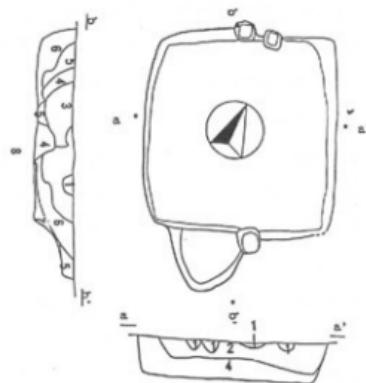
S X 162 (Fig.31, Ch.44) —— E56区検出。長軸 180 cm、深さ 100 cm で擂鉢状を呈する。羽口と鉄釘が出土している。

Fig. 30 (1) ST 209 実測図

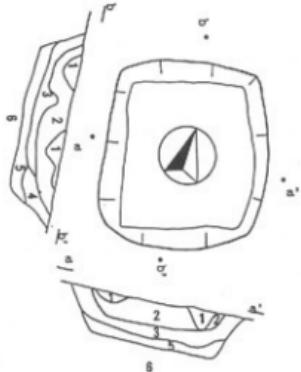


(2) ST 214 実測図

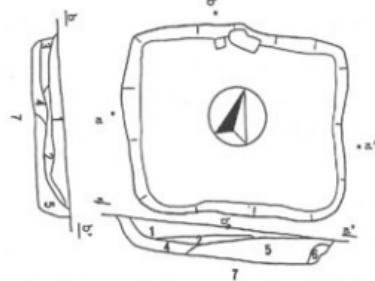
(2) ST 214 実測図



(3) ST 223 実測図



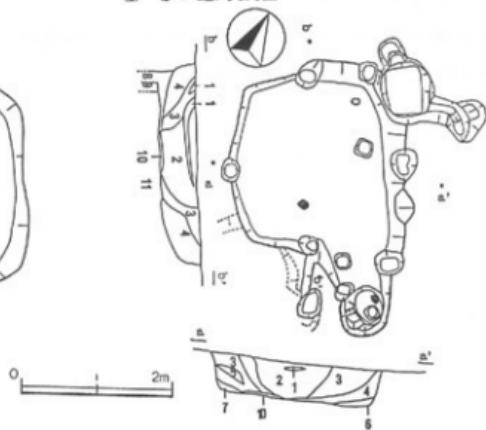
(4) ST 231 実測図



(5) ST 240 実測図



(6) ST 227 実測図



S X 164・S X 166・S X 167・S X 169 —— F・G 56・57区検出。これらの遺構は相互に重複しているため規模・範囲等は不明確であるが、S B30の範囲と重複していることから掘立柱建物跡構築時の地業と関連があるかもしれない。出土遺物としては、青磁、白磁、染付、美濃灰釉、同鉄釉、瓦器、坩埚、鋳型、銅鋳、羽口、鉄釘、呼び金、鉄鋳、不明鉄製品、不明銅製品、判読不能鏡、皇宋通宝、無文鏡などがある。

S X 168 —— G 57区検出。長軸 260 cm、短軸 110 cm、深さ 50cm。四隅に小柱穴を有し西・南壁側に壇溝状の溝が存在する。出土遺物には天目、瓦器、青磁、鉄釘、判読不能鏡、無文鏡、漆器被膜がある。

S X 170 (Fig.31、Ch.43) —— G 45区検出。長軸 245 cm、短軸 220 cm、深さ 12cm。北壁に若干の張り出し部分があり、四隅近くに柱穴が存在する。出土遺物は延石が 1 点だけである。

S X 171 (Fig.31) —— G 45区検出。長軸 355 cm、短軸 150 cm、深さ 24cm。不整方形を呈し、染付、永楽通宝、不明骨の出土遺物があった。

S X 178 (Fig.23、Ch.28) —— F 47区検出。南側が未調査のため明確な規模は不明で、ST 215(新)と重複している。出土遺物は美濃灰釉 1 点だけである。

S X 181 —— E 46・47 区検出。長軸 86 cm、短軸 73 cm、深さ 58cm。底に「吉」らしい朱筆の文字の書かれた青磁皿 (Fig.40-8) が出土している。

S X 184 (Fig.31) —— F 42区検出。長軸 197 cm、短軸 190 cm、深さ 55cm。南西隅に張り出しを有し、北壁・南壁中央に 1 個づつ柱穴が存在する。出土遺物としては、染付、青磁、鉄釘、不明銅製品がある。

S X 187 (Fig.26、Ch.31) —— F・G 47・48 区検出。溝状の遺構であるが明確な規模・範囲は不明で、出土遺物は土師器だけであることから、平安時代の遺構らしい。

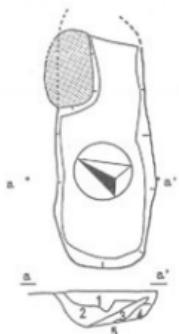
S X 190 (Fig.31) —— 長軸 244 cm、短軸 228 cm、深さ 30cm。東・西壁の中央に一個ずつの柱穴を検出したが、遺物の出土はなかった。

S X 191 (Fig.31) —— F 42区検出。長軸 245 cm、短軸 220 cm、深さ 27cm。北・南壁の中央に一個ずつの柱穴を検出したが出土遺物はなかった。

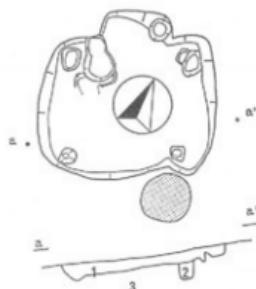
F i g . 31 (1) S T 239 実測図



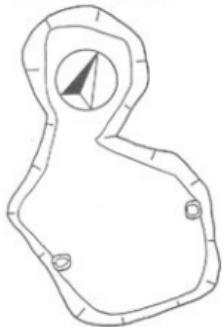
(2) S T 233 実測図



(3) S X 170 実測図



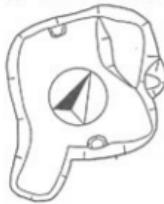
(4) S X 190 実測図



(5) S X 191 実測図

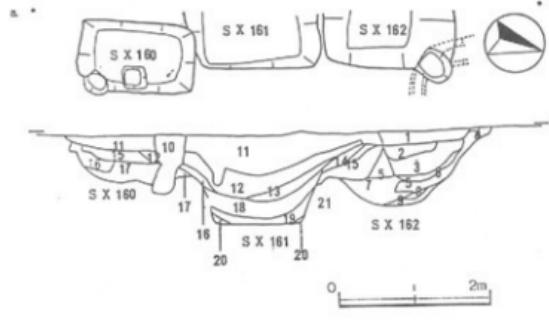


(6) S X 184 実測図



(8) S P 10 · S X 171 · 182 実測図

(7) S X 160 · 161 · 162 実測図



3. 井戸跡

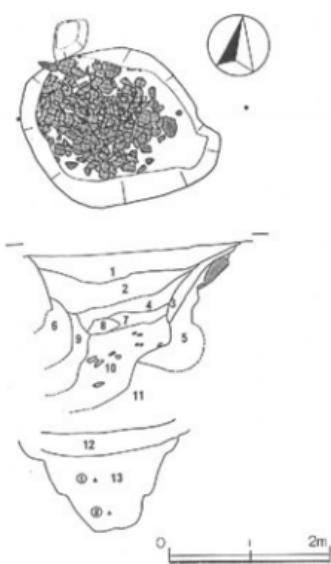
井戸跡は10基検出され、木枠を有したものが2基、他は素掘りのものであった。

S E71 (PL.11、Fig.32、Ch.45) —— G56区検出。上端径 236 cm × 190 cm の不整円プランで深さは 350 cm であった。覆土中段から下段にかけて多量の川原石が廃棄されており、遺物も川原石と共に伴する状態で出土している。主な出土遺物には、唐津皿 (Fig.32(2)-1) や曲物 (Fig.32(2)-2) の他、中国褐釉壺 (Fig.42-1)、唐津鉢 (Fig.43-1)、青磁、染付、白磁、美濃灰釉、同鉄釉天目、瓦器、擂鉢、羽口、鉄釘、鉄鍋、鉄砲玉、鉄滓、銅滓、銅線、刀子、無文鏡、判読不能鏡、洪武通宝、延祐石、石臼、箸、漆器、不明木製品、くるみがあった。Fig.32(1) の層序図の中で①は唐津皿、②は曲物の出土地点である。

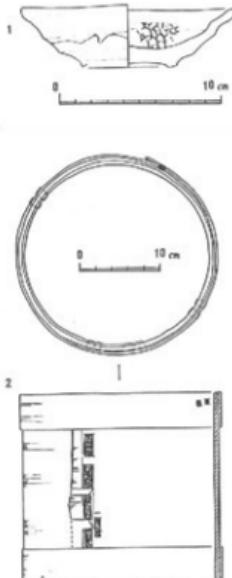
S E72 (PL.11、Fig.34、Ch.47) —— G 57・58区検出。上端径 230 cm × 224 cm の円形プランで深さは 260 cm までしか掘り下げていない。出土遺物には、青磁、美濃灰釉、白磁、天目、瓦器、埴輪、染付、擂鉢、羽口、鉄釘、銅製香炉、無文鏡、洪武通宝、元豐通宝などがある。

S E73 (PL.12、Fig.33、Ch.46) —— H 57・58区検出。上端径 293 cm × 287 cm の不整方形プランを呈し深さ 445 cm である。覆土中間には40個前後の川原石が廃棄され、深さ 200 cm ～ 250 cm の所で木枠が検出された。木枠は構柱横棟型 (PL.12(1)) であり、横棟は上下二段にわたって残っていた。構柱はそれぞれ四角に整形されており上端は腐蝕のため先細になっている。下端は直接井戸底に置く

Fig. 32 (1) S E71実測図

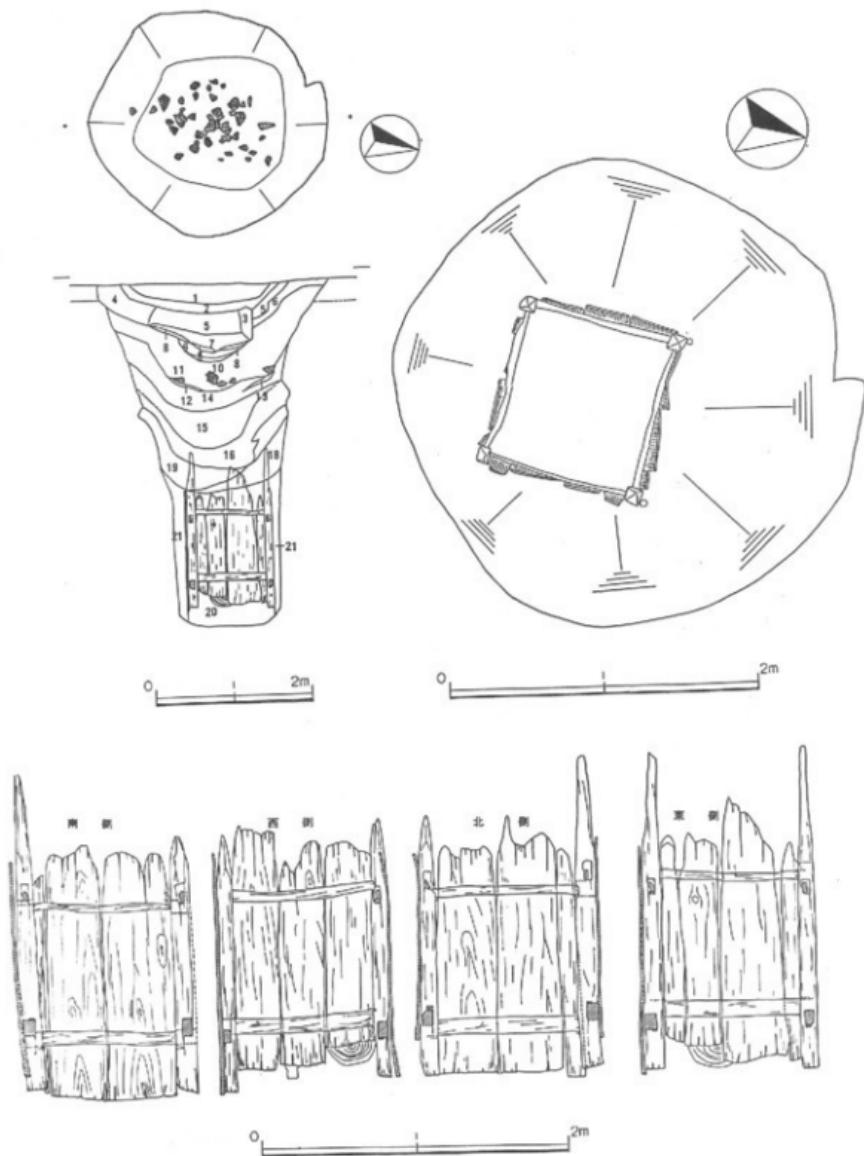


(2) S E71出土遺物実測図



状態で設置され、枘穴は交錯する高さに合わせて穿たれている。側板は、南・西・北・東壁とともに 2 ～ 3 枚の厚さ 3.5 cm 前後の板によって囲まれ、表面にはチヨウナの痕跡が明瞭に残っている。側板は外から土圧によって固定されていたと考えられ、両柱と横棟を組み合わせた後に入れられたのであろう。木枠の一辺（両柱間の長さ）はほぼ

Fig. 33 S E73実測図



100 cmであり、横桟と隅柱の納・納穴には楔でもってしっかり固定しているもの多かった。(PL.12 (2)(3)(4))出土遺物としては、瓦器火鉢(Fig.43-8)、かすがい(Fig.46-13)、笄(Fig.48-21)、石臼(Fig.49-1)、輪状石製品(Fig.49-9)の他、塙堀、染付、青磁、擂鉢、白磁、美濃灰釉、鉄釘、洪武通宝、開元通宝、判読不能錢、砥石、曲物底、不明木製品などがある。

S E 74 (PL.11 , Fig.34 , Ch.48) —— E 48区検出。上端径 245 cm × 260 cm の円形プランで深さ 245 cmまで掘り下げた。出土遺物としては、青磁碗(Fig.40-3)、白磁、染付、鉄釘、不明鐵製品、洪武通宝、塙堀、漆器、砥石などがある。

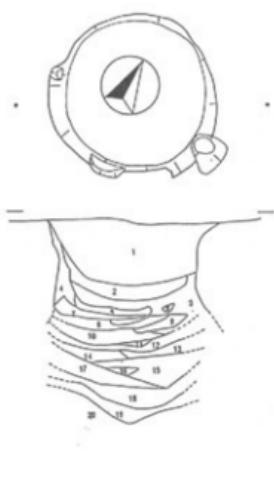
S E 75 (Fig.34 , Ch.49) —— E 47 + 48 区検出。上端径 173 cm × 160 cm の円形プラン、深さ 70 cm まで掘り下げた。出土遺物には、擂鉢、小柄(Fig.48-24)、漆器被膜があった。

S E 76 —— H 58区検出。上端径 157 cm × 141 cm の円形プラン、深さ 77 cm まで掘り下げた。出土遺物には、青磁、美濃灰釉、鑄型、環状鐵製品(Fig.47-7)、洪武通宝などがある。

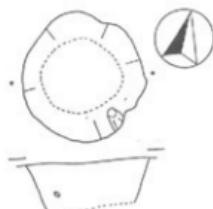
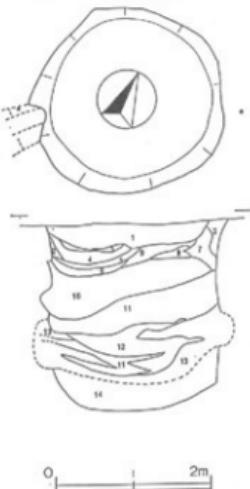
S E 77 (PL.11 , Fig.35 , Ch.50) —— G 48区検出。上端径 340 cm × 320 cm 、深さ 370 cm である。深さ 250 cm 前後の所から隅柱横桟型の木枠が検出されたが、西側からの壁面の崩壊による破損が激しく明確な状態では把握できなかった。隅柱も、北西隅と北東隅だけに残り、横桟が側板の内外面にみられることから、S E 73 の木枠と相違し変則的な構築形態だったと考えられる。それは、30 cm から 10 cm 前後の幅が狭い側板を四周に囲み、横桟を内・外の両側から挟み込む形で構築されていたのではない

Fig. 34

(1) S E 72 実測図



(2) S E 74 実測図



S E 78

0 1 2m

かという推測である。西側・北側の部分は上記の推測に類似した側板・横桟の関係が認められたが、東側と南側についてはあまりに残存状況が悪く判断の材料とはならなかった。出土遺物には、染付皿（Fig.41-11）、赤絵皿（PL.20-13）、美濃瀬戸鉄釉燭台？（Fig.42-12）、堀鍋（Fig.44-9）、耳かき（Fig.48-18）、鉢（Fig.46-11）の他、青磁、美濃灰釉、擂鉢、瓦器、唐津、鉄釘、宣德通宝、皇宋通宝、判読不能錢、漆器などがある。

S E78 (Fig.34) —— E43区検出。上端径 223 cm × 220 cm、深さ 67 cm まで掘り下げたが、覆土堆積から近年に構築された井戸跡と確認された。出土遺物はなかった。

S E79 (PL.11, Fig.36, Ch.51) —— F58区検出。上端径 340 cm × 357 cm の円形プランで深さ 400 cm まで掘り下げた。掘り方は、フラスコ状の形態を有し 250 cm 前後の深さで湧水が多くなり、木製品の出土が顕著であった。（PL.11(7)(8)) Fig.36 層序図のスクリーントーン部分は木製品が集中していた部分である。出土遺物には、美濃瀬戸灰釉皿（Fig.42-8）、唐津、白磁、染付、青磁、美濃鉄釉天目、堀鍋、擂鉢、小札、鉄釘、鉄鍋、鐵鎌、越前、石臼などがある。

S X 165 —— G57区検出。上端径 174 cm × 140 cm で深さ 105 cm まで掘り下げた。天目、染付、鉄釘、鉄滓、不明鉄製品などの出土遺物がある。

S X 189 —— E 46・47 区検出。上端径 140 cm × 137 cm、深さ 107 cm まで掘り下げ 100 cm 前後の所に灰の分布がみられた。出土遺物はない。

Fig.35 S E77 実測図

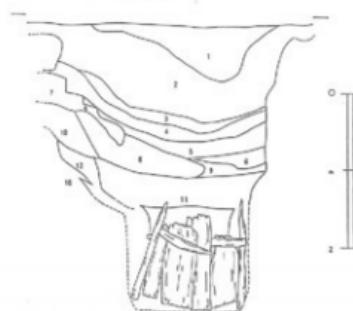
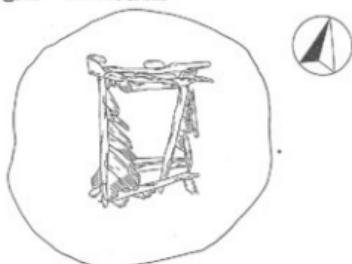


Fig.36 S E79 実測図

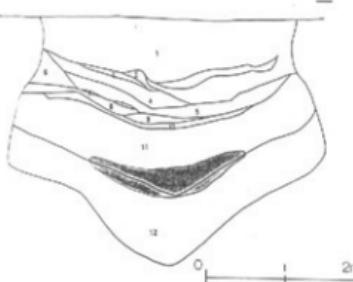
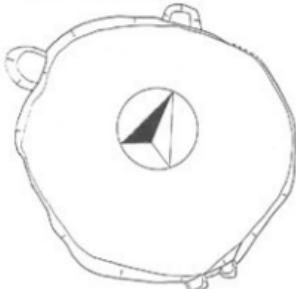
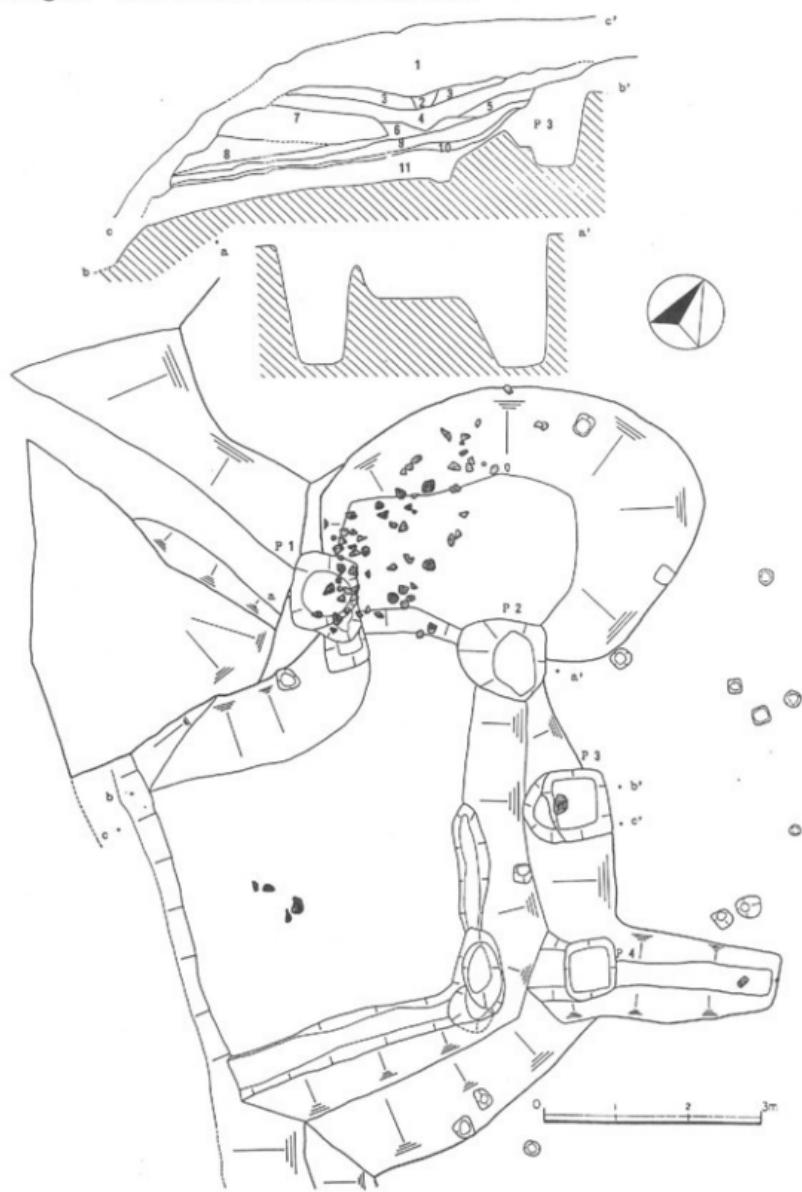


Fig. 37 SB57(門跡)・SH10(拵形遺構)実測図



4. その他の遺構

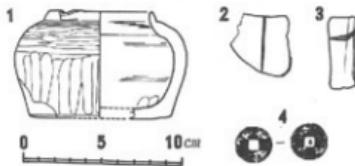
4-a 橋形遺構 (PL.14、Fig.37、Ch.52) (S H10・S B57)

昭和57年度・同58年度の2ヶ年にわたって調査した。F・G 40・41区の検出で北館の北西端に位置する。北館と西館に存在する二重堀に向けて構築されており、北館側から見た場合緩いスロープを下りて左手に折れ、その部分に門跡 (S B57)と考えられる柱穴が2個並列している。(PL.14(2)、Fig.37 Pit1・Pit2) 門跡の幅は9尺から10尺で、その部分がやや階段状を呈して下段のテラス部分に降りてゆく。テラス部分は、400cm×400cmで約16m²の面積を有し西館方向の掘跡に開いている。テラス部分の東・南側には溝が存在しており板壁状の施設があった可能性もある。また、東側壁面の上端には一辺70cm以上の柱穴が2個並列しており (Fig.37 Pit3・Pit4)、橋梁等の施設等に利用したのであろうか。門跡の部分から上方にかけては川原石が敷きつめられた状態で検出され、常時通路として使用されたことを思わせる。出土遺物としては、青磁、白磁、染付 (Fig.41-18)、美濃瀬戸水注 (Fig.42-3)、同皿 (Fig.42-11)、鎌 (Fig.47-3)、砥石 (Fig.49-8)、唐津、瓦器、越前、硯、鉄釘、小札、無文鏡などがあり、時期的には15世紀後半から16世紀末のものまであり、本遺構は全時期にわたって使用されたと思われる。さらに、まだ鑑定を受けていないが伊万里と思われる破片も出土しており、17世紀以後も何らかの形で本遺構が残っていた可能性もある。

Fig. 38 (1) SKO I - 人骨実測図



② SKO I 出土遺物



4-b 土塙墓 (PL.13、Fig.22、Fig.38、Ch.

27、Ch.53)

D56区検出。南側をS X 195に重複していたため規模は明確でないが、径110cm、深さ55cmの擂鉢状を呈する土塙と推定される。人骨は北頭位仰臥屈位の状態で検出され、頭蓋骨以外は残存状況が悪く、骨粉状になった部分が多い。土塙内から出土遺物には、瓦器片口壺 (1)、不明鉄製品 (2・3)、無文鏡があり、埋葬時期は16世紀と

考へてよいと思われる。なお、詳細は、「II 渡岡城跡出土の人骨について（森本岩太郎）を参照願いたい。

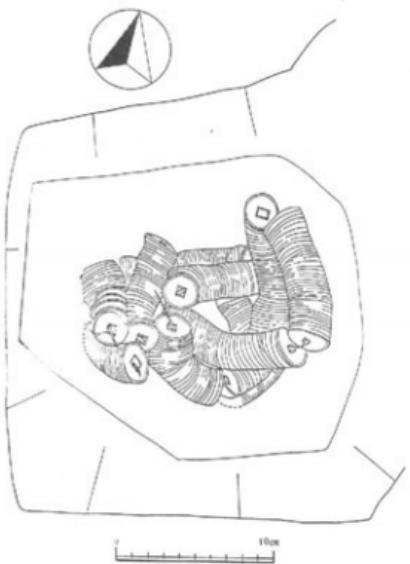
4-c 舟底型遺構

S X 195 (PL.7、Fig.22、Ch.27) —— D・E56区検出。長軸 350 cm、短軸 220 cm の長方形プランを呈し、深さ 110 cm 以上の舟底型形態を示す遺構である。覆土は自然堆積の状況を呈するが、灰を含む層が厚く堆積し、その中から多量の遺物が出土している。主なものをあげると、白磁八角小碗 (Fig. 41-3)、中国褐釉壺 (Fig.42-1)、朝鮮碗 (PL.20-8)、瓦器火鉢 (Fig.43-7、Fig.44-3)、同壺 (Fig.44-1)、漆付着の不明鉄製品 (Fig.45-19)、火箸 (Fig.46-4)、摩引金 (Fig.46-10) の他、青磁、擂鉢、羽口、鉄釘、小札、小刀、鐵滓、砥石、硯、石鉢、判読不能鏡、洪武通宝、景德元宝、永樂通宝、元符通宝、開元通宝、元豐通宝、朝鮮通宝、大平通宝、祥符通宝、元祐通宝、皇宋通宝、聖宋通宝、淳化元宝、炭化米、くるみなどである。本遺構の性格としては、遺物の出土状況から骨鶲は検出されていないが土塙墓も考える必要があろう。

4-d 備蓄錢遺構

S P 10 (PL.22、Fig.31、Fig.39) —— G45区検出。一辺 23 cm 前後の方形のピットで深さは 40 cm であった。その覆土全般に、綱紐 (?) で連なった錢貨が埋設されており、総数 903 枚を数えた。周辺の遺構には、性格不明の竪穴遺構と若干の柱穴がみられるだけで、本遺構が建物跡などに伴うものではなく単独で存在した可能性が高い。S T 207 で検出された錢貨 (Fig.19) が、竪穴建物跡に伴う点と

F i g. 39 S P 10 錢貨出土状態実測図



は異なる。なお、名称・出土数については、II-5 錢貨の項目を参照されたい。

4-e 溝跡

昭和58年度調査で検出した溝跡には、S D70 (G・H56・57区)、S D72 (G・H58区)、S D73 (E47・48区)などがあり、いずれも城館期以前の構築であり、覆土からは土師器・須恵器しか出土していない。

4-f 燃土遺構

燃上遺構は、遺構確認面から上部に浮いた状態で検出され、かまど、いろり、落成時の焼失に伴うものか判然としない。特に顕著な出土例としては、H56区 S B30南側、F47区 S T 218周辺、F・G48区 S E77北側などにみられるが、遺構に伴うかどうかは不明である。

IV 出土遺物

昭和58年度の調査によって出土した遺物の数は、陶磁器類約2,700、鉄・銅製品約1,050、石製品約240、木製品約55、錢貨約1,570、自然遺物30、骨類約40、土師器・須恵器片平箱10であり、すべてを報告することは紙数の都合で無理があるため、主要なものに限り報告する。

1. 陶磁器類

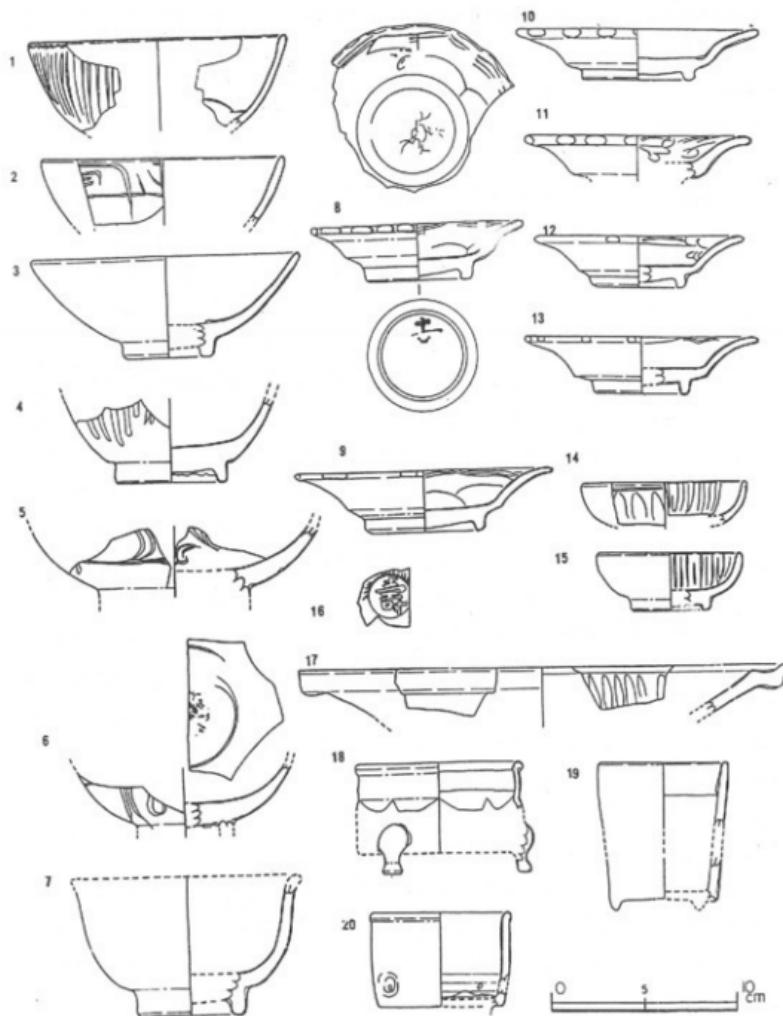
A 青磁(PL.15、Fig.40、Ch.54)

青磁の器形としては、碗、皿、小皿、盤、香炉がある。碗の中では外面胴部に蓮弁文を省略した線描のもの(Fig.40-1)が多く、外面口縁部にくずれた鹿描躍文帯を有するもの(Fig.40-2)、内外外面に片刃彫りの劃線文を有するもの(Fig.40-5・6)、無文で口縁が直線的に聞くもの(Fig.40-3)と口縁が外反気味に聞くもの(Fig.40-7)がある。見込の部分では、蛇の目状あるいはそれに近い状態で施釉がなされないもの(Fig.40-3)、印花状の文様がみられるもの(Fig.40-6)、「寿」という文字を刻したもの(Fig.40-16)などがあり、高台部の施釉は盤付の部分までのものが多い。皿は、いわゆる稜花皿といわれる口径10~14cmぐらいのものが9割以上を占める。内面口縁部に流水状の横目文と劃線文がみられるもの(Fig.40-8・9・11・12・13)と文様のみられないもの(Fig.40-10)がある。見込には印花文を施す例(Fig.40-8・9・10)と全面施釉がなされるものが多いのに対し、重ね焼きのために見込中央部の釉を丸く剥ぎ取った例も2~3みられた。Fig.40-8は底の一部に朱筆で「吉」と推定される文字を書き入れている。また、8~9cmの口縁が内湾気味に立ち上がる小皿がある。外面に小さな錐状の蓮弁文を有し、内面に縦位の劃線を入れているもの(Fig.40-14)と内面の劃線だけのもの(Fig.40-14)とがある。盤としては、口縁が折れ線状に立ち上がり内面胴部に菊花状のケズリを回しているもの(Fig.40-17)があり、他の青磁と違って透明感の強い釉色を呈している。香炉には、図上復原できるものとして3例あり、口縁がやや玉縁状になり胴部下半がふらんて脚に連なるもの(Fig.40-18)、直線的に短筒状の形をとり内面口縁直下で釉止りが認められるもの(Fig.40-19)と同様の形で内面底部近くまで施釉されるもの(Fig.40-20)などがある。

B 白磁(PL.16、Fig.41、Ch.55)

白磁の器形としては、皿、碗あるいは小碗がある。皿には薄手に成形され口縁が外反するタイプとやや肉厚に形成され口縁が内湾ぎみに立ち上がるタイプがある。前者は、色調・胎土とともに白色のもの(Fig.41-1)と黄白色で高台盤付部の外面を斜めに削るもの(Fig.41-2)がある。後者には高台部を重ね焼きのために四ヶ所ケズリを入れ、四足状に成形したもの(Fig.41-4)が多く、本例は高台部および底まで全面施釉している。碗あるいは小碗と考えられるものは、高台部を四ヶ所ケズリ、胴部を八面に面取りした例(Fig.41-3)がある。

Fig. 40 青磁実測図



C 染付 (PL.16、Fig.41、Ch.56)

染付の器形としては、碗、皿がある。碗の中には、底部が漫頭型で見込に人物画文、底に「大明年造」銘が書かれたもの (Fig.41-5) 、口縁が外反し内面口縁部に雷文帯、外面に牡丹唐草文を描いたもの (Fig.41-6) 、口縁部内・外面に一条の罇線だけをめぐらす器高の低いもの (Fig.41-7) 、口縁部内面に二条の罇線、外面に一条の罇線と唐草文 (?) を施すもの (Fig.41-8) などがある。皿は三つのタイプに分類できる。ひとつは、高台を有し口縁が外反する例で、胴部外面に牡丹唐草文を描き、見込に玉取獅子文 (Fig.41-9・10) や瑞磨文 (Fig.41-11) を描くものが多い。ふたつめは、口縁が内湾して立ち上がり底が替筒底を呈する例で、口縁部外面に列点状に省略した波渦文帯を有し (Fig.41-12・13) 、下半に芭蕉葉文、見込に花卉状文を有するもの (Fig.41-12) 、下半は罇線だけが釉止りがみられ、見込は無釉となっているもの (Fig.41-13) がある。また、外面胴部に芭蕉葉文、見込に捨花文を有するもの (Fig.41-14) 、外面胴部に簡略化した字のような文様、見込に吉祥文を描くもの (Fig.41-15) があり、焼成状態が軟質な類 (Fig.41-12・13) と硬質な類 (Fig.41-14・15) に分けることができる。最後は、高台を有し口縁が内湾ぎみに立ち上がる例であり、内面口縁部に四方尋文 (Fig.41-16) 、内面胴部に花鳥文 (Fig.41-17・18) 、見込に花卉文 (Fig.41-19) を描くものなどがあり、釉調・呉須の発色が前記二タイプより彩かな濃紺色を呈するものが多い。

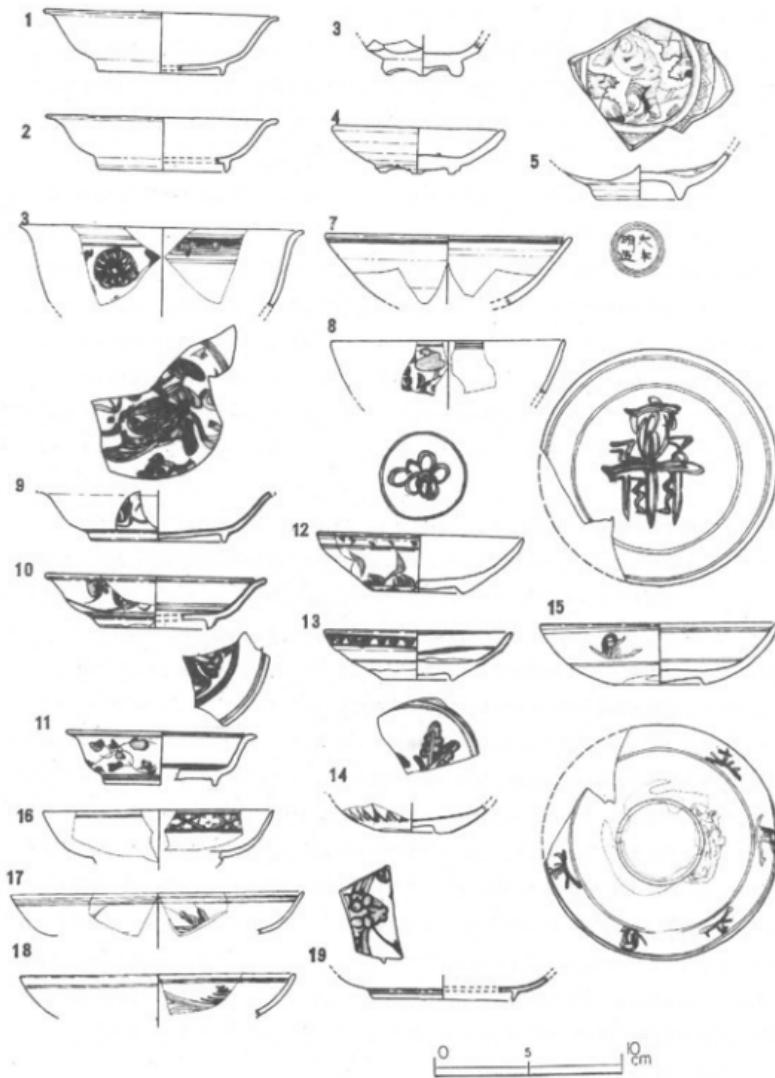
D 中国褐釉壺 (呂宋壺) (PL.19、Fig.42-1、Ch.57)

いわゆる呂宋壺と称される一群の陶器であり、破片数約60片から復原推定図を作製した。(Fig.42-1) 出土区は後述するように (III.まとめの項参照) 最大 130 m 離れた地点からも出土しているが E56区を中心とする区域、遺構覆土から出土している。器高35cm前後、胴幅30cm、頸部径12.5cm、底径15cmぐらいの計測値があり、釉調は黄褐色で光沢が強く、外面は底から4～5cmぐらいの所で釉止りが認められ、内面は頸部に若干と胴部に斑点状および底部にかなりの釉の流れ込みが認められる。成形は、全体にロクロ成形と考えられるが、内面底部上半に刷毛目状の痕跡が残り、胴部下半は指ナデのためかロクロ痕の消滅が認められ、胴部上半は明確なロクロ痕が認められることから、上半と下半では成形上の相違があったかもしれない。胎土の一般的色調は黄白色であるが部分的に(特に内面)暗灰色を呈する所もあり、多數の気泡も認められることから緻密とは言いがたく、また微細な石英も混入している。口縁部は残存片がないけれども、頸部立ち上がりの観察では上部にむかって緩く外反するようで、頸部のくびれ部分には段状の高まりが認められる。胴の張り出しが、底から20cmぐらいの所で最大になり、その部分から上半は器厚が増す。耳部は頸部立ち上がり部分から約1cm下方に横位に付着しており接合は粗雑な状態である。残存状況から四耳と考えられる。また、胴部上半・頸部下に重ね焼きの痕跡と思われる粘土付着物が輪状に廻っている。底は両手で平底と思われる。

E 赤繪 (PL.20、Ch.58)

北館の発掘調査では9片の出土があり、昭和58年度は皿あるいは碗の口縁部片が1点出土している。

Fig. 41 白磁・染付実測図



(PL.20-13) 口縁の外反度はきつく、内面に赤色の纏線一条と不明文様、外面に纏線一条と牡丹文状の文様があり、口唇部に緑色の釉が点状に落ちている。

F 朝鮮 (PL.20 、 Fig.42 、 Ch.59)

北館の発掘調査では29片の出土があり、昭和58年度は11片の出土である。E 56・F 56・F 58区だけで9片の出土をみた。器形としては碗と皿があり、推定口径15cm、器高8cmを測る碗 (Fig.42-2) を復元実測した。朝鮮で製作されたと考えた陶器の胎土は、暗灰色の色調で白色砂が多量に含まれる特徴があり、表面も光沢のある透明釉のもの (PL.20-4・5・6・7) からくすんだ灰白色 (PL.20-1 、 Fig.42-2) 、くすんだ暗灰色のもの (PL.20-2・3・8・9) 、黄灰色の透明釉 (PL.20-10) など各種存在する。

G 美濃・瀬戸 (PL.17 、 Fig.42 、 Ch.60)

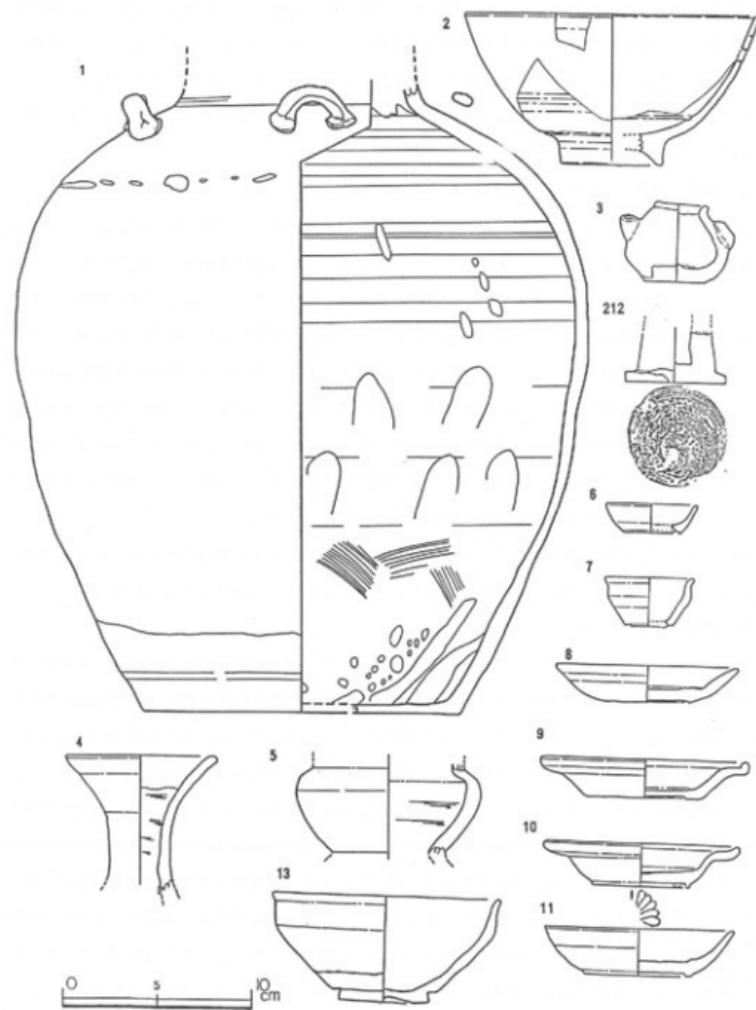
美濃・瀬戸の製品には灰釉系と鉄釉系のものがある。前者の器形としては、碗、皿、壺、水注、浅鉢、後者には碗 (天目茶碗) 、皿、燭台 (?) などがある。灰釉の碗には胴部の内湾度が著しい口縁部片 (PL.17-7) 、壺にはいずれも表面が二次加熱のため釉面が凹凸している口縁・頸部片 (Fig.42-4) と胴部片 (Fig.42-5) がある。皿には、口径4.8cmの小型紅皿状のもの (Fig.42-6) から、口径10cm前後の見込の釉を丸くふきとるもの (Fig.42-8) 、見込に菊の印花文を施すもの (Fig.42-11) 、口縁が折り縁状を呈し見込と底に輪ドチ痕が残るもの (Fig.42-9・10) などがある。浅鉢としては口径30cm前後、施釉が内外面とともに胴部で止まるもの (PL.17-1) と、口径4.5cm前後、天目茶碗を小型化したような器形を呈するもの (Fig.42-7) がある。水注は1点の出土があり、底は糸切痕が残り胴部下半で釉止りがみられる例 (Fig.42-3) である。

鉄釉のものには、口縁が緩やかに外反する天目茶碗 (Fig.42-13) 、燭台と推定される糸切痕を残す円筒状底部片 (Fig.42-12) 、他に Fig.42-8 の灰釉皿に類似した器形の皿などがある。

H 唐津 (PL.18 、 Fig.43 、 Ch.61)

唐津の出土状態は、出土区によってかなりの相違がみられ (Ⅲ.まとめ、図2参照) 波岡城跡への搬入時期も16世紀後半以降と考えられるところから、遺構等の構築時期等を推定する時は有力な資料となる。器形としては、皿、鉢、壺と考られる袋物などがある。皿には、胴部上半で一度すばまり口縁が内湾気味に立ち上がるもの (PL.18-1 、 Fig.32-1) 、器厚が薄く口縁が内湾して立ち上がるもの (Fig.43-2) 、高台盤付部が広く整形されているもの (Fig.43-3) があり、いずれも施釉は胴部下半で止めている。重ね焼きの痕跡としては、胎土目積み (Fig.32-1 、 Fig.43-3) と砂目積み (Fig.43-2) が認められ、現在までの所、層位的、出土遺構等による相違は顕著でない。鉢には、口径35cm前の大皿タイプの口縁部片 (Fig.43-1) 、見込および底部全体にタール状の付着物が認められる底径8cmの底部片 (Fig.43-5) がある。袋物としては、底にやや高台状の凸を整形し、外面底部上半に砂の付着物および窓印状の書き痕が認められる器片 (Fig.43-4) がある。内面に施釉がなされていないため壺状のものと考えられるが器厚が薄く底径も比較的大きいことから深鉢状

Fig. 42 中国褐釉壺・朝鮮・美濃酒戸実測図



の器形になるのであろうか。

I 越前

器形としては壺、浅鉢、擂鉢が認められるが、すべて小破片のため図示できなかった。壺には口径50cm以上と推定される大壺の類と20cm前後の中型の壺がある。胎土は硬緻な明灰色を呈し、外面は光沢のある緑褐色の釉調、内面は赤い赤褐色の色調を呈するものが多い。胎土の中に大粒の白色石英砂が含まれた一群の壺片があり、越前か信楽か筆者には区別しがたい。浅鉢は口径20cm、器高6cm前後のもので明確な施釉は認められない。擂鉢は後述。

J 瓦器 (Fig.43・44、Ch.62)

瓦器という名称については、「中世土師質土器」・「瓦質土器」と呼称されている一群の土器の中で器形が火鉢・火舎・壺・行火等に限定されるものを言っている。昭和58年度に出土したものから主な製品を述べると、火鉢としては平面形が方形を呈し、口縁が逆L字状になり口縁外面の2条の隆帯間に四菱形のスタンプ文を廻らす例 (Fig.43-6) がある。口径は約40cmの大型の製品で、脚が付くかどうかは不明である。また、平面形が円形を呈するものとしては、Fig.43-6と同じ断面形を有し、口縁部および胴部中央に波状形の隆帯文を貼り付け、口縁部下半に五弁花状の貼り付け文をみせるもの (Fig.44-3) がある。本製品は、須恵器質の焼き上がりを呈し、薄手に成形されているものの製作技法的には瓦器の中に含めてさしつかえないと考えられる。口径32cm前後である。以上が比較的大型の火鉢であるのに対し、口径15cm前後の小型の火鉢も存在する。胴部くびれに算木状の文様と共に十字を四方に分割したようなスタンプ文を有するもの (Fig.43-7) 、三脚を有し底部上面にU字で指文状のスタンプ文を有するもの (Fig.43-8) 、胴部くびれに八菱形のスタンプ文を有するもの (Fig.44-2) などである。いずれも平面形は円形である。壺形の器形としては、広口壺で胴部上半に2例の雷文スタンプ文と一列の三つ巴文スタンプ文を廻らすもの (Fig.43-9) と無文で胴部上半は横位のナデ、下半は縦位のナデ痕が認められる片口を有するもの (Fig.44-1) がある。どちらも部分的に黒色研磨処理をした部分がある。他の器形としては、破片だけのためよくわからないが、燭台などの台付底と考えられる雷文スタンプと劃線文を有するもの (Fig.43-10) 、行火等に付属する取手と考えられる破片 (Fig.43-11) などがある。

K 擂鉢 (表1)

浪岡城跡から出土する城館期の擂鉢を大別すると、I 備前系、II 唐津系、III 珠洲系、IV 越前系、V 産地不詳系、と五分類でき、近世から現代にいたる施釉系擂鉢を加えると、出土擂鉢の概略が把握できる。昭和58年度出土のものには、全形を理解できる良好な資料がなかったため、実測図・写真等は省略し、昭和53年から同58年まで出土したものを別表のように分類してみた。

L 土器・土製品 (Fig.44、Ch.63・Ch.64・Ch.65)

土器質のものとしては、鉢型、埴堀、羽口等のいわゆる鋳造関係品がある。鉢型は、ST 210より大量に出土し (PL.6-(3))、「I. 浪岡城跡北館出土の鋳銅関係遺物について」の項目で詳細な報

Fig. 43 唐津・瓦器実測図

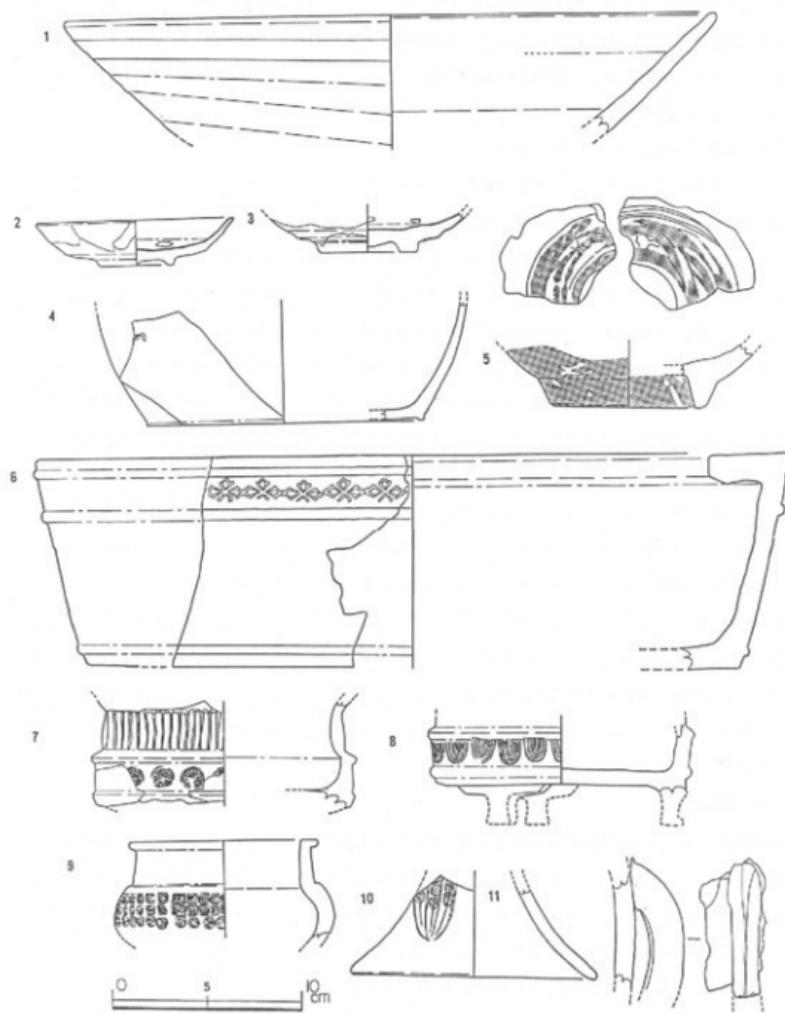
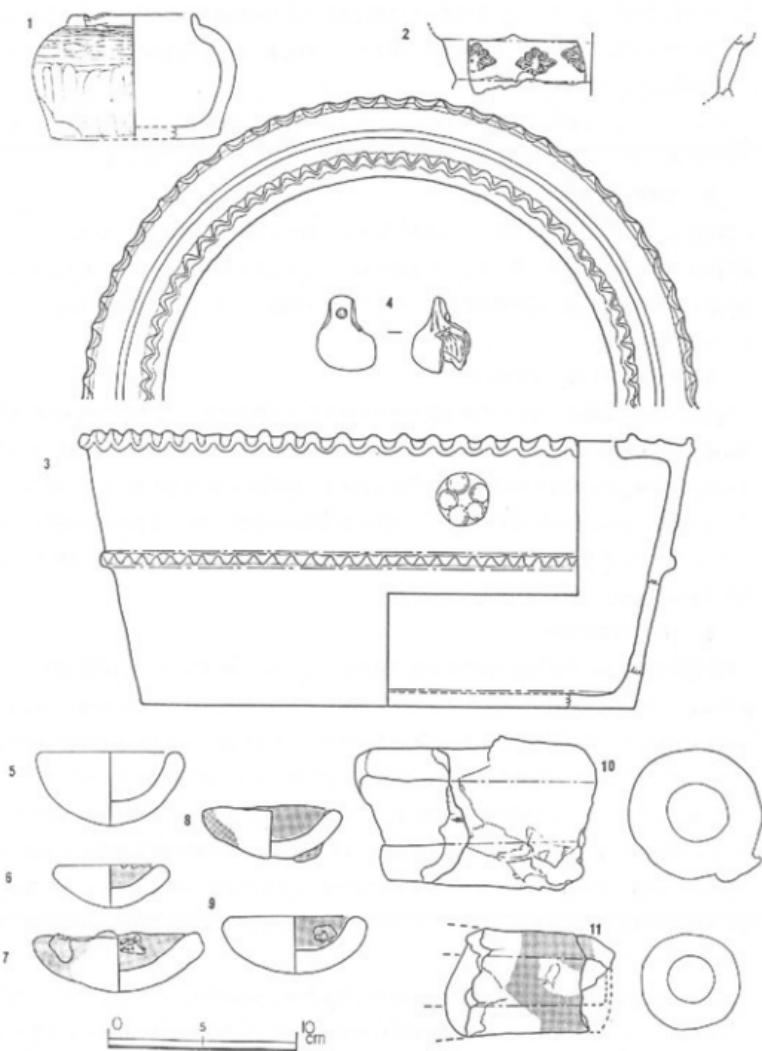


表1 横鉢分類表

系 組 分 類	器 形 の 特 徴					部 目 の 特 徴		工 具 の 特 徴	成 形 上 の 特 徴	備 考
	口 線	肩 部	武 部	色 製	施 土	本 数	施文の方向			
I 橫前系	I a	直行して逆の字状に立ち上らるがる	ろくろ指なで	-	赤褐色	赤褐色で石英質の白砂が多量混入	7 (本)	左回転施文	ろくろ使用	軟質化状態
	I b	内面に3段、内面に大き見えたり有る	-	内面の額目文を本脱脂時に施文	くすんだ褐色	小さな白砂を瓦状に含む	不 明	不 明	先丸の標目	粘液質
	I c	外面の立ち上がりは3.5cmほどの高い立ち上がり	外面は暗緑色	-	口縁外側から内面にかけではまき色、剥落外側は墨緑色	石英と白砂を多量に含む	9本以上	"	幅3mm前後のV字状の標目	口縁部外側直下に重ね焼きの痕跡
	I d	外径の幅4.3cmで外径に4段、内径に1段を有する	-	-	赤褐色	白砂を多量に含む	不 明	"	先丸の標目	-
	I e	外面は側の深い3段、内面は外反している	-	-	輪状色で口縁の一部に灰褐色がみられる	2mm前後に白砂と石英を多量に含む	5	左回転施文	幅4~5mm前後のV字状の標目	-
I 橫律系	I a	外面に折り曲げ、玉筋状に形成、外面は無釉	外面にあずき色の釉を施し内面に青磁青の印目があり、その上に繪目を入れている	底に胎土目ト子有、一部灰釉がみられる	底にはあずき色、内面は黄緑色	細かい石英と白砂、黒砂を含む	5	左回転施文の後無作為に施文	先丸で幅7mm前後の標目	口縁部外面は下から施釉 青磁青の印目及び胎土目とのオーバラップから唐作系と考えられる
II 珠撰系	II a	内面に波状横目文	ろくろ未使用、輪積み	静止糸切り模のものもある	暗灰色	石英と白砂及び小石を多量に含む	7	左回転施文が多い	幅3~5mmのV字状の標目	-
	II b	"	"	"	"	"	"	"	先丸の標目	-
II c	II c	直行ぎみに見える	内面の横目で直行するものと横状を呈するものがある	-	"	"	不 明	幅2~3mm前後のV字状の標目	輪積みの後、ろくろびき	-
	II d	"	"	"	"	"	"	"	"	-
III 越前系	III a	内面に段、あるいは内腹にまみた跡があるの立ち上がりが見られる	内外面にハケ目痕がみられる	比較的底部の立ち上がりは未調整なものが多い時は切り放しではなく段階状態のままである	基本は黄白色だが赤褐色へ黒色部分で変色箇所によって窓が見られる	0.5mm前後の白砂を多量に含むが白砂が比較的精選された粘土を用いている	8 ~ 10	左回転施文	幅4~5mm前後のV字状~凹状の標目	部分的に赤褐色の化粧土をぬっている可能性がある
	III b	内面2cm下に一条のくぼみを有する	"	"	暗灰色	白砂が多量に含まれている	10 ~ 13	"	幅2.5mmV字状~西狀の標目	-
	III c	やや内腹にまみた段階を呈する	"	"	暗褐色	"	9	"	幅3.3mm前後でV字状~凹状の標目	内外面ともハケ目で整えられている
	III d	幅2cm下に二条のくぼみを有する	"	"	赤褐色	"	不 明	"	"	よりもさらに硬質である
	III e	幅2cm下に一条のくぼみを有する	"	"	黄赤色	白砂および石英が多く含まれる	5 ~ 7	"	"	よりも軟質である
IV 痕地 不詳系	IV a	直行して立ち上がり、内面に波状横目文を施し少し異なる外側は横位の調整	外側は無作為調整及び窓り有	-	黒色~赤褐色	細かい石英と白砂を多量に含む	6	左回転施文	幅3~4mmのV字状の標目	横目は対向の後、口縁の横位方向で施釉している
	IV b	外側の横位の立上がりに窓り有る	横位調整及び内面に波状横目文を施している	横位調整横積有	表面黒色、胎土赤褐色	"	9	"	幅3~4mmのV字状の標目	-
	IV c	直行して立ち上がり、外側は横位の調整	"	外側は無作為調整	黒色~赤褐色	"	5 ~ 7	"	幅4~5mmのV字状の標目	左からゆるい弧を描く横位調整を施している
	IV d	外側の内面に3.3cm幅の凹円形の沈線を有する	"	"	黒色~赤褐色	"	7	"	幅4~5mmのV字状の標目	横位調整横積有りに一部カーブを入れている
	IV e	直行して立ち上がり外側は横位調整	"	横方向にハケ目痕、蓮苞り有	黒色、灰色、赤褐色、黄灰色	"	6 ~ 7	"	先丸で幅広(4.6mm)の標目	横位部分によっては須恵器に近い、窓り上がりだから全体的には軟質化状態となり横位調整が施されている
	IV f	直行しやや窓りを持つ、外側は横位の調整	外側は横位調整もみられるが部分的なものである	-	黒色、灰色、赤褐色	若干の石英と細かい白砂を含む	9	??	幅3mm前後のV字状の標目	口縁において横位と横目との間が4~6cmほど幅広く施釉されている
	IV g	やや外反で外側は横位調整	外側は無作為調整	胎蓋	黒色、灰色、黄緑色	細かい白砂と白砂を含む	5 ~ 6	不 明	幅4~5mm前後のV字状の標目	-
	IV h	-	"	-	黒色、暗灰色、赤褐色	石英、白砂を多量に含む	6	"	幅6mmの先丸の標目	-
V 横縫跡	V i	内腹にまみた段階を呈する	外側は横位調整	横位輪積度有	赤褐色~灰色	若干の石英と多量の白砂を含む	8	左回転施文	幅4~5mmのV字状の標目	横位の横目を間隔をとらず全体的に施している
	V j	直行し内、外側とも横位調整	-	外側は無作為調整	黄灰色	不規則で少ない段階の白色粘土を用いている	6	"	幅4.6mmのV字状の標目	横位の入れ方方に對ししくめに施していっている
	V k	若干、横位調整	外側に置き取り窓が明瞭にみられる(横位)	-	暗灰色	若干の白砂を含む白砂の粘土を使用している	{ 5	不 明	幅6mmの先丸の標目	横6mmの横位の標目
	V l	(省略)	(省略)	-	-	-	{ 8	無作為	幅3~4mmのV字状の標目	-

Fig. 44 瓦器・土鉢・堀・羽口実測図



告があるため参照願いたい。卅堀は、すべて浅いU字状の器形を呈するもの（Fig.44-5）から、口径6cmの小型のもの（Fig.44-6）や口径7～9cmの中型のもの（Fig.44-7・8・9）で内面に銅を主成分と考えられる溶解物が付着している例が存在する。〔図-2〕でみられる通り、発掘区全域に分布している。羽口も前述した2例の遺物とともに銅等に使用したと考えられるもので、外径7cmのもの（Fig.44-10）や外径5cmのもの（Fig.44-11）が出土しており、一端に高温による溶解物の付着が認められる。

土製品としては、土鈴が1点出土している。高さ4cm、幅3cmを測り、上端に一孔があり下部に切り込みがあるけれども一部欠損しているため丸（がん）はなかった。（Fig.44-4）

M 土師器・須恵器

城館期以前の遺物として、土師器・須恵器があり、平箱にして10箱程度出土している。しかし、城館期およびそれ以降の地業・擾乱によって小破片にて出土するものが大部分である。なお、昭和53～58年度の一括資料を「III. 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について」にて詳述しているため、そちらを参照されたい。

N 伊万里（PL.21、Ch.66）

城館期以後の陶磁器として、いわゆる伊万里が存在する。当初の発掘では、製作年代・产地等が不明であったため未報告資料として収蔵庫に埋もれていたものであるが、1984年春に佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏の鑑定を受け17世紀前半から幕末まで各時期の肥前陶磁が出土しているという指摘がなされた。特に17世紀の出土品については浪岡城落城という歴史事実とそれ以後の城館跡の使用・活用という点から重要な問題点をはらんでいる。今回、主要な遺物を写真で紹介し、諸氏の参考に供するものである。

N-(1) 17世紀前半

肥前陶磁の中では、唐津陶器と伊万里染付の搬入があるとされ、唐津については麻詰め技法の中で砂目のものが本時期とされている。（Fig.43-2）伊万里染付の器形には皿・壺があり、皿には高台部に砂が付着し見込文様の呉須がくすんだ発色を呈するもの（PL.21-1）、高台の成形が肉厚で見込文様にじんだのような草花葉が描かれているもの（PL.21-2）、高台僅付が鉄分の付着によって赤褐色を呈し見込にぼかしの強い文様が描かれているもの（PL.21-4）、内外面の貫入が著しく見込に暗い緋線の発色を呈する文様がみられるもの（PL.21-5）、口縁が内湾気味に立ち上がり内面に暗青灰色の発色を呈する文様があるもの（PL.21-6）、口縁が内湾気味に立ち上がり内面に蛇行したX状の網目文を有するもの（PL.21-7）、内面に施釉のためくすんだ青灰色の文様を描くもの（PL.21-8）がある。

壺としては、底が碁笥底状を呈し壺付には施釉がなされず、外面に青白色の色調を呈する文様を有するもの（PL.21-3）がある。本時期の製品は釉下に多量の気泡を有するものが多く、全般にくすんだ呉須の発色を呈する。

N - (2) 17世紀後半

器形としては碗があり、外面に濃紺色の竹あるいは松の文様を施すもの（PL.21-9）と外面に一重の網目文を有するもの（PL.21-10・11・12）で、呉須の発色も灰緑色（PL.21-10）、淡青色（PL.21-11）、青灰色（PL.21-12）がある。

N - (3) 18世紀

器形としては、碗、皿、小鉢状のものがある。碗としては、外面に二重の網目文を有するもの（PL.21-14）、内面に一重の網目文外面に二重の網目文を有するもの（PL.21-19）、外面に杉枝状の意象を描いたもの（PL.21-21）、内面口縁帶に四方擣文、外面に繊細な線書きとぼかしを施した文様を有するもの（PL.21-18）がある。

皿には、見込が蛇の目を呈し内面に二重のX字状文様を施したもの（PL.21-16）、見込に梅花状の文様を施したもの（PL.21-17）があり、前者の呉須は青灰色、後者は濃紺色の発色を呈している。

鉢状の器形には、口縁が内湾氣味に立ち上がる深皿とでもいべきものと円筒状の器形を有するものがある。前者は内面に笛竹や松葉状の意象、外面に連鎖状の筆描文を施すもの（PL.21-13・20）、外面に梅花状の文様が施される例（PL.21-23）があり、後者には外面に交錯する網目文（PL.21-22）、雲堂文を簡略化したような文様（PL.21-24）を施すものがあり、墨付に砂が付着しているもので底に銘らしい文字がみられる例（PL.21-15）もある。

以上が浪岡城跡から出土している伊万里染付の一部であるが、これらの遺物は遺構に伴って出土することが稀で表土に近いⅠ層・Ⅱ層から出土しているものが多い。

〔陶磁器類小結〕

昭和58年度に出土した陶磁器類の中で、城館期に伴うものは2178点の出土があり、舶載品が43.7%、国産品が56.6%と例年の出土率とは若干の相違が認められる。これは瓦器の出土率が高かったための結果と思われ、調査地域によって器種の増減が認められる結果となった。以下、通年の統計と昭和58年度出土陶磁器類の破片数を表に示しておく。

表 2 陶磁器類出土表

昭和58年(1983)抜粹

2. 鉄製品

鉄製品は約 870 点ほどの出土があり、機能的にみると武具・農工具・建築具・生活用具等がみられる。しかし、鉄製品の中で 60% 近くは釘であり、建物跡を構築する際は充分に鉄釘を使用していたことが感知できる。以下項目別に述べる。

2-a 武具

武具には、小柄小刀・小札・鉄鎌・打根がある。

小柄小刀は、古代における刀子を幅狭にしたような小刀で、15点の出土をみているがすべて破損品であり、刃部 10.5cm、茎 7.5~8.0 cm を測る例 (Fig.45-1)だけを図示した。

鉄鎌は、根が鑿状を呈するもの (Fig.45-4)、鋸尾状を呈するもの (Fig.45-3)、剣先状を呈し籠被が円形の断面を呈するもの (Fig.45-6) と籠被が扁平形を呈するもの (Fig.45-7) および籠被が四角形の断面を呈するもの (Fig.45-4) などがある。

打根は、内錐形の根に木製の柄などを装着して使用するものと考えられ、長さ 6.9 cm のもの (Fig.45-2) と長さ 12.5 cm 前後の二例が確認されている。

また、断面形が四角を呈し先が二股を呈する製品 (Fig.45-9) があり、武具の中でも鎌や錐状の先に装着して使用したものであろうか。

小札は 23 点の出土があり、頭部が斜めに切られた形態と長方形の形態に分けることができ、欠損しているものの漆が付着する三目札 (Fig.45-17) も 1 点存在する。頭部が斜めに切られた形態には短辺 6 個、長辺 7 個の穿孔が 2 列に並び、幅が 2.0 cm (Fig.45-10・14)、2.1 cm (Fig.45-11-13)、2.6 cm (Fig.45-12) のものがある。また長方形の形態は 7 個の穿孔が 2 列に並び、幅は 2.7 cm (Fig.45-15・16) のものである。

2-b 農工具

農工具の中には、鎌、苧引金、環状鉄製品、くさびなどがあり、武具か農具かわからない鉈状の刀も存在する。

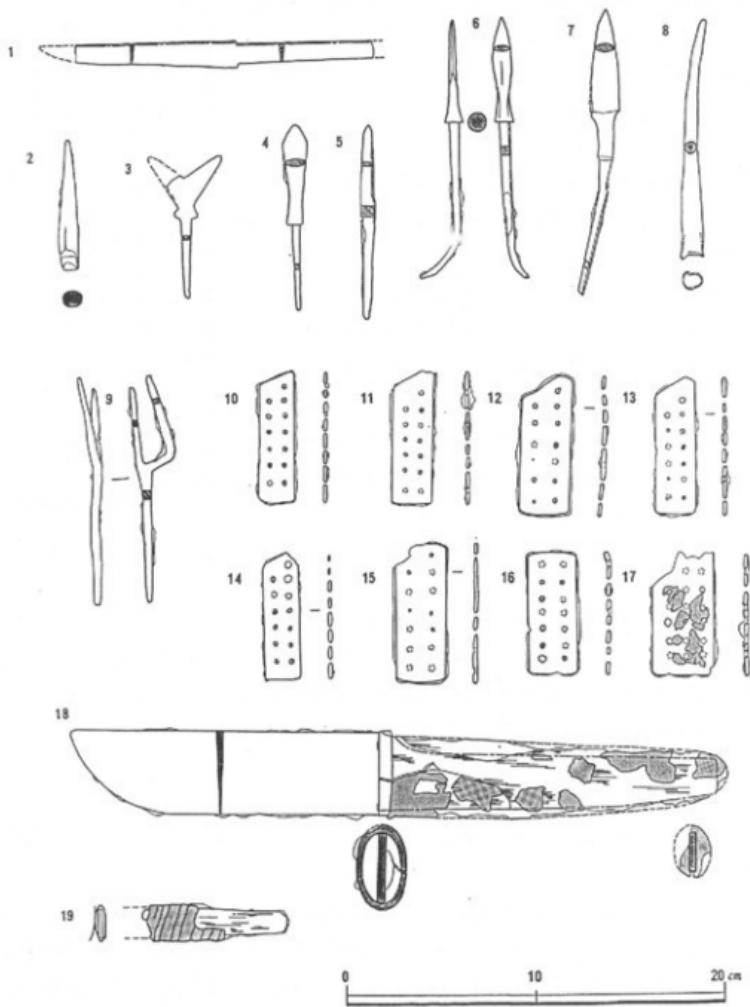
鉈刀 (Fig.45-18) としたものは S T 203 の床面直上から出土したもので竪穴遺構に伴うものであることは確実である。長さ 35.8 cm、刃部長 cm、柄長 cm を測り柄には木部と漆状の被膜が存在している。茎柄の部分に鉄輪状の止めを付けており、振り降ろす時の衝撃に耐えうるように造作し、刃部の幅も cm と幅広であるため、鉈のような機能を有して木器加工等にあたっていたと考えられる。

苧引金は、苧を引く面の幅が 9.3 cm、厚さ 0.3 cm 前後を測り、木部に装着部分の突起は左右の形状が違う状態である。(Fig.46-10)

表 3 鉄製品出土数一覧表

	小柄 小刀	15
武具	小札	23
	鉄鎌	12
	打根	2
	鎌	4
農工具	苧引金	4
	環状鉄製品	9
	くさび	6
	鉈刀	1
建築具	釘	521
	かすがい	9
生活用具	鉄皿	2
	灯明皿	1
	鉄鍋	25
	鉈	1
	火箸	8
	鉄	4
	火打金	2
他	鉄滓	28
	不明鉄製品	194

Fig. 45 鉄製品実測図(1)



鎌は、4点の出土があり刀部はいずれも両刃である。柄が装着していたと思われる部分に、木目痕が残存しているもの（Fig.47-3）があり、刀部幅6.7cm、刀部長16.8cm、刀部と柄の角度が106°を測る。また、刀部がやや滴曲し、刀部幅5.0cm、刀部長15.3cm、刀部と柄の角度が155°と前者より広がったもの（Fig.47-4）もあり、歎り取るものによって使い分けていたものであろう。

環状鉄製品は、鎌や鉈などの柄を強化するために使用したものと考えられ、径3.5cm（Fig.47-5）、径4.1cm（Fig.47-6）、径3.9cm（Fig.47-7）のものがある。

2-C 建築具

釘は断面形四角を呈する和釘であり、長さ15cm（約5寸）（Fig.47-1）のものから長さ10cm（3寸5分）（Fig.47-2）や1寸・2寸のものまで各種みられ、521点と多く出土している。頭部の觀察では一度叩いた。使用後のものが大部分である。

かすがいは、木部に打ち込む部分の長さが3.3cm、幅5.1cmを測るもの（Fig.46-14）とやや変形しているもの（Fig.46-13）があり、表面に見える部分の断面形が幅広の長方形を呈するものが多い。

2-d 生活用具

生活用具には、鍋・火箸等の炊事用具が多く出土し、灯明皿や火打金、鉄などもある。

鍋には吊手の鍋と内耳の鍋の二種類が存在し、小破片だけのため図示はしていない。

鍋の鉢と思われるものは、幅31cm、高さ25.5cmを測り接合部が幅広にU字形を呈するものがある。（Fig.46-1）

火箸には、二本一対でS T 192床面から出土した長さ38.5cmのもの（Fig.46-2）、一方に輪を造りねじりを加えた長さ19.7cmのもの（Fig.46-3）、中央部から一方にだけねじりを加えた長さ21.8cmのもの（Fig.46-4）があり、いずれも断面形は角状を呈する。

鉄皿の中で、内側に突起を付けたもの（Fig.46-5）があり、その突起に芯を付着したとすれば灯明皿のような機能が推定できる。仙台市の今泉城跡より類似した鉄皿が出土している。

鉄は、いわゆる握り鉄であり、長さ14.5cm、刃長6.2cmのもの（Fig.46-11）と長さ13.1cm、刃長推定6.8cmのもの（Fig.46-12）がある。

火打金は、山形の形状で1個の孔が穿たれた携帯用のものだけが出土しており、頭部が丸味を有するもの（Fig.46-8）と三角形を呈するもの（Fig.46-9）があり厚さ0.3～0.4cmである。

2-e その他

不明鉄製品の中では、S T 192の覆土から出土した網状鉄製品が2点ある。（Fig.46-6・7）当初は刀の茎か折れたものかと考えたが、2点の形状がほぼ同形であり欠損痕も顕著に認められないことから、本資料だけで完結した製品と考えられ、機能としては丸木を割ったり、石材を割ったりするための網などが推定される。

鉄製品の上に漆を塗った皮革を巻いた製品がある。（Fig.45-19）皮革の下には若干の木質部も残存しております、小刀の柄の部分かとも推定されるが明確でない。

Fig. 46 鉄製品実測図(I)

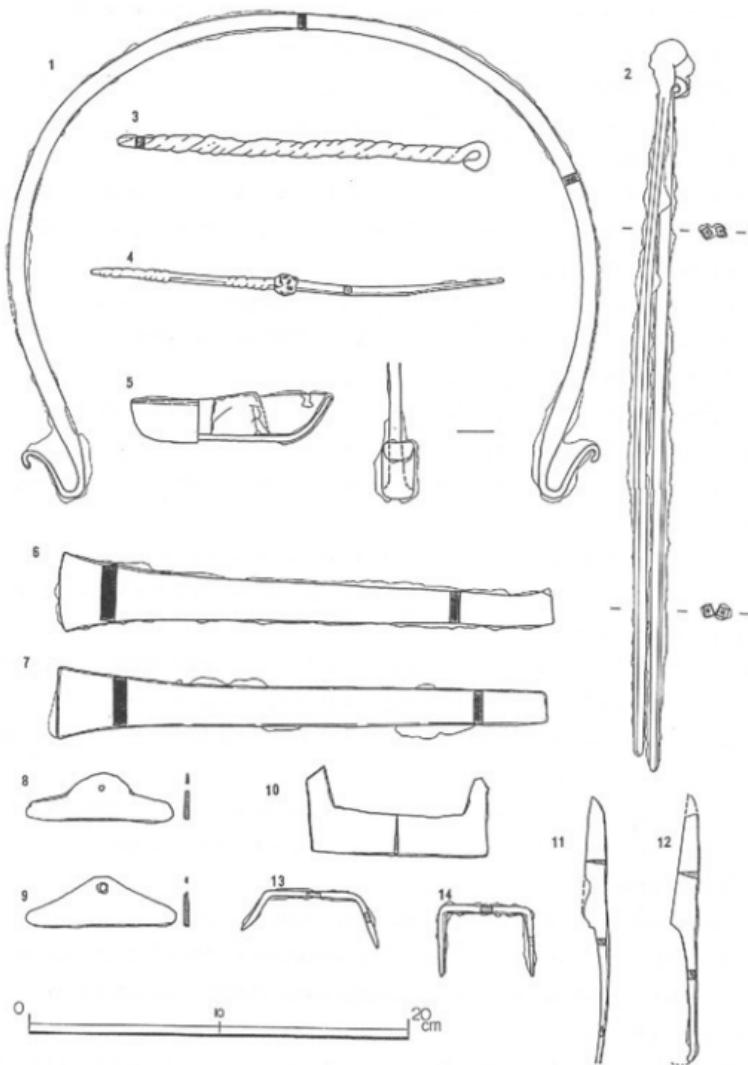
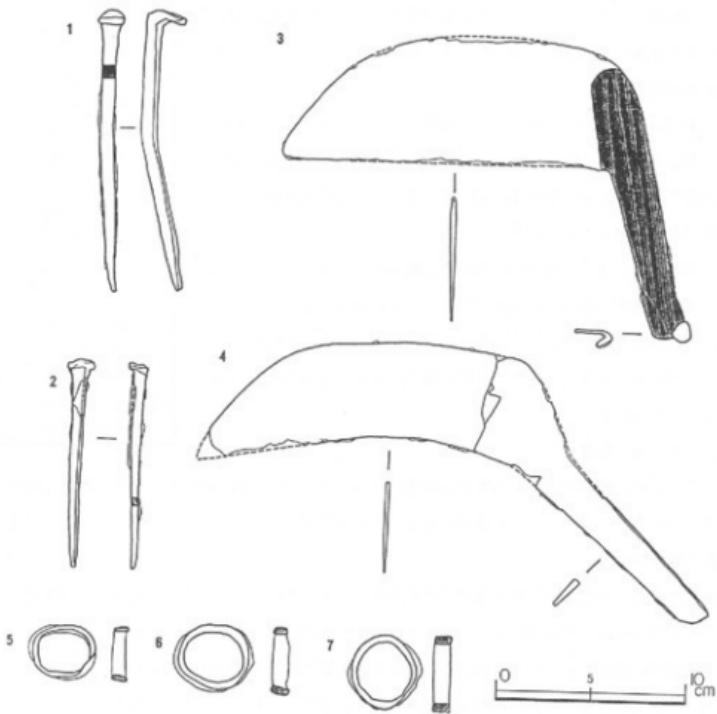


Fig. 47 鉄製品実測図⑩



鉄製品は紙数の都合で少例しか図示できなかったが、ほぼ例年と同程度の製品が出土しており、生活用具については「Ⅲ. 渡岡城跡北館出土の生活用具について——特に鉄製品・銅製品について」(三浦貞栄治)を参照ねがいたい。

3. 銅製品 (PL.19、Fig.48、Ch.68)

銅製品には、武具、仏具、生活用具等がある。

3-a 武具

小柄は3点が出土しているが、装飾を施したものはなく、長さ8.9cm (Fig.48-24)、9.5cm (Fig.48-25)、8.5cm (Fig.48-26)のものがある。

笄は、蘇手が付き地板に七七五をまいて紋が中央に凹を有する例 (Fig.20-2)と肉厚であるが腐蝕が激しいため蘇手・地板装飾を確認できないもの (Fig.48-21)がある。どちらも木瓜形を有する部分から折れ、下部が欠損している。

足金具は、太刀の鞘を吊す部品で、頂部にめがね状の小孔が穿たれており表面の鍛造りも明確である。 (Fig.48-2)

鉄砲玉には、径1.2cmの不整球形をしたものがある。 (Fig.48-22) 武具かどうかは不明確であるが、鎌の先端部らしい製品 (Fig.48-10) もみられる。

3-b 仏具

六器の高台部と考えられる製品があり、高さ1.2cm、径6.88cmを測り、薄手に良好な成形である。また、かなり破損していたが底径6.4cmを測る高台付の皿 (Fig.48-8) があり、仏具に関連したものと推定される。

香炉あるいは金剛盤の脚と推定されるものが2例出土している。どちらも人面状の装飾が施されており高さ4.6cm (Fig.48-5) と高さ3.9cm (Fig.48-6) を測る。

花瓶状の器形で、一輪挿しの破片と推定される製品 (Fig.48-17) があり鋳造時の接合痕が明瞭に残っている。表面は光沢があり、かなり良好な鋳造がなされているようである。

3-c 生活用具

新状の製品としては、長さ5.6cm、頭部が傘形を呈するもの (Fig.48-12) がある。釘あるいは調度品のかんぬき等に使用したと思われる頭部をL字形に折った断面形丸の棒状製品も2例出土し、どちらも径0.4前後である (Fig.48-13・14)

小型皿としては、径4.2cm、高さ0.8cmのもの (Fig.48-15) があり、内部に金糸による織物らしい付着物が認められた。昭和56年度出土品の中に径4.0cmで三ヶ所に孔のみられる同型の皿があったが、今回出土のものに孔は確認できなかった。

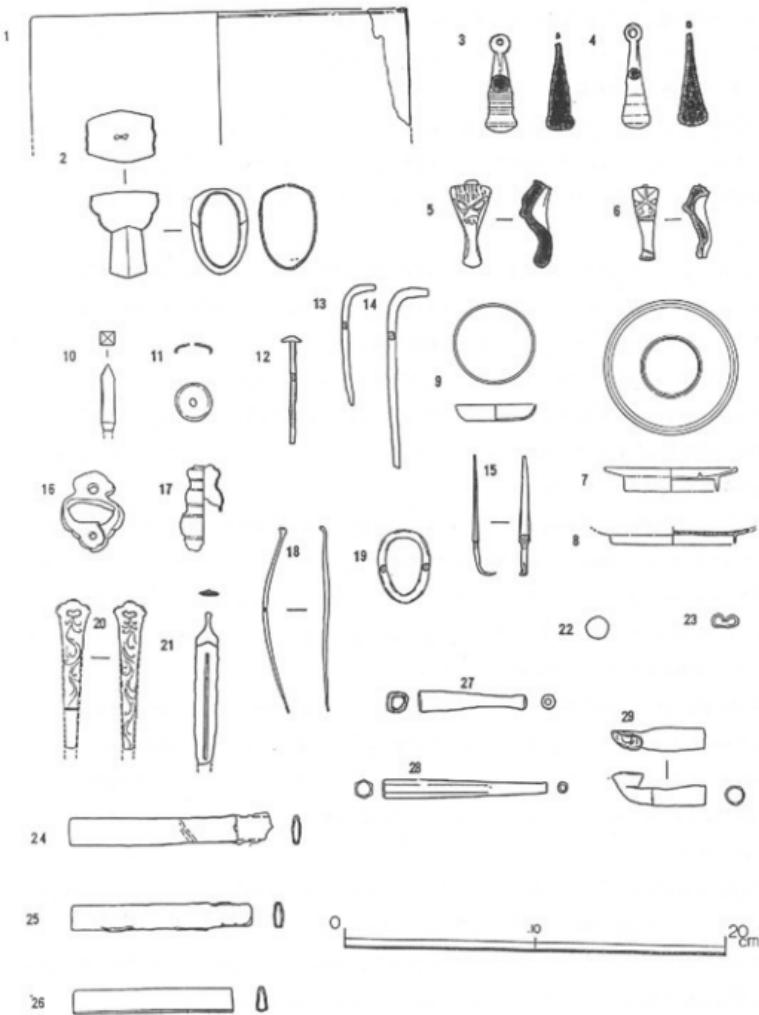
耳かきは、長さ10cmで片方に耳かきの部分を付け、反対は先細に成形したもの (Fig.48-18) がある。表面は腐蝕が激しく凹凸している。

銅鍤は、円錐形を呈し頭部に紐等を通す一孔のみられるものが2例出土している。高さ5.1cm、底

表4 銅製品出土数一覧

武 具	小 柄	3
	足 金 具	1
	笄	2
	切 羽	1
	三 双 金 具	1
	鉄 砲 玉	2
	六 器	2
	香 爐	3
	脚	1(+1)
生 活 用 具	花 瓶	1
	鍤	1
	銅 盆	1
	耳 か き	1
	銅 鍤	2
他	キ セ ル	3
	環状銅製品	1
	銅 淚	46
不明	不明銅製品	94

Fig. 48 銅製品実測図



径 1.6 cm、重量 33 g のもの (Fig.48-3) と高さ 5.4 cm、底径 1.5 cm、重量 26 g のもの (Fig.48-4) である。尺貫法に換算すると前者は 8.8 勅、後者は 6.9 勅となる。

キセルは、長さ 4.9 cm の雁首 (Fig.48-29) と煙管部分が残存している長さ 5.6 cm の吸い口 (Fig.48-27) および六角に面取りされた長さ 8.6 cm の吸い口がある。

3-d その他の製品

Fig.48-11 は、径 1.9 cm で中央に 3 mm の孔が穿たれている。釘懸し等に使用したものであろうか。

Fig.48-16 は、つまみの部分と着装部分が認められ、つまみの部分に径 0.5 cm の一孔がある。昭和 56 年度出土品 (Fig.74-344) の中にも同型のものがあり、調度品の取手などに使用されたものであろうか。

Fig.48-15 は、下部が耳かき状を呈し上部は扁平な六角断面を呈する円錐状の製品である。

Fig.48-19 は、卵形を呈する環状製品で長径 3.9 cm、短径 2.7 cm、厚さ径 0.4 cm の成形良好なものである。武具・仏具等の部品と考えられるが具体的例を知らない。

Fig.48-23 は、径 0.2 cm の細かい鋼線をめがね状に折り曲げた製品である。

Fig.48-20 は、一見かんざしのようにも見えるが、頭部に猪目状の一孔を有し、表面に草枝あるいは蕨状の文様を刻したものであり、表面は白銀状の光沢を有している。使用目的は不明である。

4 石製品 (Fig.49、Ch.69)

石製品の出土遺物には、粉挽き臼 15、茶臼 35、砥石 62、石鉢 8、硯 49、火打石 3、環状石製品 1、绳文時代の石斧 6、石鎌 1 などの点数（破片数）があり、主要なものを述べてみたい。

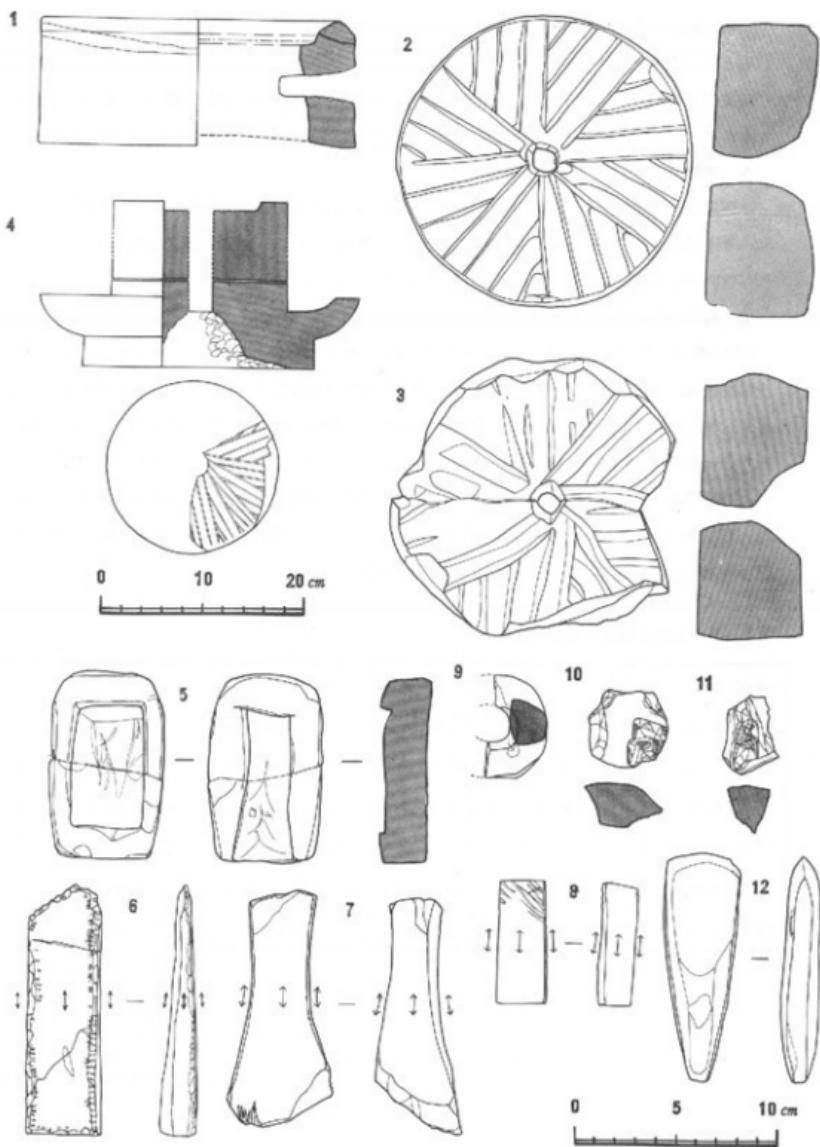
粉挽き臼では、横位に（ひきぎ）孔がある上臼 (Fig.49-1) と、逆目の主溝 8 分画、副溝 3 本の下臼 (Fig.49-2)、正常目の主溝 8 分画、副溝 4 本と考えられるかなり変形した目を有し、Fig.49-1・3 は暗灰色で気泡の多い砂岩系で腐蝕が激しい。

茶臼 (Fig.49-4) は各部位の破片を集めて推定復原したものである。上臼は径 17.1 cm、くぼみの深さ 0.8 cm を測り表面は光沢を有するくらいに研磨されている。下臼の受け皿径は 31.4 cm、高さ 8.5 cm を測り、底は荒けすりの痕跡が明瞭に残っている。受皿部および外面は光沢のある研磨がなされ、目は 16 区画、副溝 3 本のパターンと考えられるが残存部が少ない上、主溝の角度が一律でないことが明らかでない。

硯は Fig.49-5 を除いて、小破片か剥片の状態で出土したものが多いた。Fig.49-5 は、鋳型等が大量に出土した ST 210 の覆土から出土したもので、硯らしからぬ砂岩系の石質で製作されている。長径 9.0 cm、短径 5.5 cm、厚さ 2.1 cm の小型の硯であり、成形にあたっても削りの痕跡が各所に認められ粗雑な造りである。底に「人吠入」とでも読めそうな刻文字があり注意される。

砥石は、農具等の刃や武具等の刃あるいは他の金属器を砥ぐために各種の形態を有するようであるが、一般的には底面が 4 面で中央部が凹む状態の砂岩質のもの (Fig.49-7) が多い。しかし、底面が水平に近く長方形に成形されたものもあり、長さ 12.2 cm (Fig.49-6)、長さ 6.0 cm (Fig.49-8)

Fig. 49 石製品実測図



などは刀の刃などを砥ぐために使用したのであろうか。

用途は不明であるが、径 5.3 cm ほどに一孔を穿った環状製品 (Fig.49-9) があり砂岩系である。

火打石は、石英質の石材を使用するが、Fig.49-10・11は部分的に打撃痕が認められることから火打石として使用された可能性が高い。

縄文期の石製品として石斧 (Fig.49-12) や石鎌があり、城館期の遺構の覆土などから出土することもあり、地殻による擾乱や遺構廃棄の埋土の無作為性などが認められる。

5. 木製品

木製品はすべて井戸跡からの出土であり、図示したのは S E71 出土の曲物 1 点だけである。 (Fig. 32-2) 他には箸、桶あるいは曲物の底、折敷、漆器碗 (PL.11-8) 、板材などが出土しているが、残存状態の良好な資料がないため記述を割愛させていただく。

6. 銭貨 (PL.22)

昭和 58 年度に出土した銭貨のうち、S T 207 床面、S P 10 等から出土した一括資料は從来の銭貨出土状況と違い、紐に連なった状況で出土し備蓄銭的な機能を推定できる。 S T 207 床面出土のものは (PL.22-(1)) は三つ編みの麻紐 (PL.22-(4)) を蝶結びの状態 (PL.22-(2)) で一方を結び、他方を一個の銭貨に結び付け (PL.22-(3)) で止めの作用をしている。出土枚数は 159 枚と推定され、麻紐等の状態が良く理解できるため全形を出土時のまま保存している。 S P 10 出土のものは (PL.22-(5)) は小ピットに一連の銭貨を埋設した状態で出土し、繩紐状の部分は腐蝕が激しく若干の残存しかみられなかった。出土銭貨は以下の通り 903 枚である。

表 5 S P 10 出土銭貨名称別一覧表

開元通宝	28	景德元宝	2	嘉祐通宝	2	聖宋元宝	5	淳祐元宝	5
乾元重宝	1	祥符元宝	35	治平元宝	6	大觀通宝	4	皇宋元宝	1
宋通元宝	1	祥符通宝	29	熙寧元宝	10	政和通宝	8	景定通宝	1
太平通宝	4	天禧通宝	16	元豐通宝	19	宣和通宝	3	咸淳元宝	1
淳化元宝	1	天聖元宝	7	元祐通宝	15	正隆元宝	2	洪武通宝	275
至道元宝	1	明道元宝	1	紹聖元宝	13	慶元通宝	1	朝鮮通宝	3
咸平元宝	5	皇宋通宝	16	元符通宝	2	嘉定通宝	1	永樂通宝	2
								判読不能	120
								無文銭	257
								計	903 枚

出土銭の中では、洪武通宝が275枚(30%)と最も多く、寛永通宝等の17世紀以後の貨銭が入っていないため城館期の埋設と考えられる。

また、G43区のⅢ層からは明確に埋設状態とは言えないが、網紐に連なった銭貨(PL.22-(7))やそれと同じ状態の銭貨(PL.22-(8))が約56枚出土している。

以下、昭和53年度から昭和59年度まで北館の調査で出土した銭貨を一覧表で示しておく。

表6 浪岡城跡北館出土銭貨一覧表

銭貨名	初鑄造年	年度別個体数							計(枚)	出土率(%)
		昭和59年度	昭和58年度	昭和57年度	昭和56年度	昭和55年度	昭和54年度	昭和53年度		
1 開元通宝	621	58	9	14	21	9	2	113	3.95	
2 永元重宝	759	2	1		1			4	0.14	
3 周通元宝	955	2						2	0.07	
4 唐国通宝	958				1			1	0.03	
5 宋通元宝	960	1						1	0.03	
6 太平通宝	976	8	1	1		3		13	0.45	
7 淳化元宝	990	4	1	1	1			7	0.24	
8 至道元宝	995	12	1	3	2	2		20	0.70	
9 咸平元宝	998	5	2	7	1	2		17	0.59	
10 景祐元宝	1004	5	4	6	6	1	1	23	0.80	
11 祥符元宝	1008	1	49	4	3	2	2	61	2.13	
12 祥符通宝	1009	1	36	2	1	3		43	1.50	
13 天禧通宝	1017	26	4	6	8	1	3	48	1.68	
14 天聖元宝	1023	25	3	4		3		35	1.22	
15 天聖通宝	1023			1	12			13	0.45	
16 明道元宝	1023	1			1			2	0.07	
17 景祐元宝	1034	3	1	1	1			6	0.21	
18 皇宋通宝	1039	63	6	12	10	7		98	3.43	
19 至和元宝	1054	2	3	3	2			10	0.35	
20 至和通宝	1054	1						1	0.03	
21 嘉祐元宝	1056	1	3	1	1	3		9	0.31	
22 嘉祐通宝	1056		8		1	1	2	12	0.42	
23 治平元宝	1064		11	4	2		2	19	0.66	
24 治平通宝	1064					1		1	0.03	
25 熙寧元宝	1068		36	4	11	19	3	2	75	2.62
26 熙寧通宝	1068				1			1	0.03	
27 元豐通宝	1078	1	39	11	8	17	4	1	81	2.83
28 元祐通宝	1086		49	9	7	11	2		78	2.73
29 紹聖元宝	1094		24	1	7	5	5		42	1.47
30 元符通宝	1098		6	1	2	4	2	2	17	0.59
31 聖宋元宝	1101		11	4	5	9			29	1.01
32 大觀通宝	1107		4		1	1	2		8	0.28

錢貨名	初鑄 造年	年 度 别 個 体 数							計(枚)	出土率(%)
		昭和59 年 度	昭和58 年 度	昭和57 年 度	昭和56 年 度	昭和55 年 度	昭和54 年 度	昭和53 年 度		
33 政和通宝	1111		12	2	7	8	6	1	36	1.26
34 宣和通宝	1119		4						4	0.14
35 正隆元宝	1158		3						3	0.10
36 大定通宝	1178		1	1					2	0.07
37 淳熙元宝	1174		4			1			5	0.17
38 褑熙元宝	1190		1			1			2	0.07
39 慶元通宝	1195		2						2	0.07
40 嘉定通宝	1208				1				1	0.03
41 紹定通宝	1228		1						1	0.03
42 淳祐元宝	1241		5	1					6	0.21
43 皇宋元宝	1253		2		2				4	0.14
44 景定元宝	1260		3						3	0.10
45 咸淳元宝	1266		1						1	0.03
46 至大通宝	1310		1	2	3	1			7	0.24
47 大中通宝	1361				1			1	2	0.07
48 洪武通宝	1362	1	310	27	37	49	8	9	441	15.44
49 永樂通宝	1408	1	40	6	14	24	4	3	92	3.22
50 朝鮮通寶	1423		15	1	2	2			20	0.70
51 宣德通宝	1433		1			1			2	0.07
52 紹平通宝	1434		1						1	0.03
53 洪德通宝	1470					1			1	0.03
54 寛永通宝	1626		2	3	7	7	6		25	0.87
55 五 厘						1			1	0.03
56 半 錢			1		1				2	0.07
57 一 錢			1	3	2				6	0.21
58 二 錢					1				1	0.03
59 五 錢			1		1				2	0.07
60 十 錢				1	1		2		4	0.14
61 五 十 錢			1	1					2	0.07
62 鐵 錢			1	1	1	1			4	0.14
63 無文 錢		2	318	118	71	131	35	9	684	23.95
64 判読不能		2	184	99	124	165	15	9	598	20.94
總 計		10	1,410	343	385	536	126	45	2,855 枚	≈100.00%

(総計の中には昭和58年度 S T 207 で出土した159枚は含まれていない。)

V 浪岡城跡北館の概略

浪岡城跡は、東側から新館・東館・猿楽館・北館・内館・西館・検校館・無名の館の基本となる八館から構成され、それぞれ水堀とみられる幅10m以上の堀によって区分されている。その中にあって北館は城跡の中央に平場面積だけで15,450m²の面積を有して位置し、北・西側の堀跡は中間に土塁を配する二重堀、東・南側は二ないし三重堀の形態であり、浪岡城跡全体からみた場合最も堅固な館であるといえよう。当時、築城にあたって本丸・二の丸・三の丸というような概念があったかどうかが疑問であるが、浪岡城の場合内館を扇の要の位置にみたれば本丸的と言え、北館は二の丸的に日常生活の中心的活動の場であったと考えることができる。

北館の発掘調査は、昭和53年度から始まり昭和59年度の6月まで約7年の年月を費して実施し、未調査部分も少なからず残っているもののはば平場内における全体像を把握することが可能となった。この間、検出遺構・出土遺物は膨大な数にのぼり、充分に整理できないまま今日に至っている。しかし、今後調査が内館・猿楽館・西館等の各館に及ぶことを考えれば、今まで明らかになった点をある程度まとめておくことが必要であると痛感するに至り、本稿を草したものである。

1. 検出遺構

北館平場内で検出した遺構としては、掘立柱建物跡・竪穴遺構・井戸跡・溝跡・土居跡・焼土遺構・樹形遺構・蓄銭遺構・土塙基・石敷き遺構・性格不明竪穴遺構等がある。以下、個別に紹介する。

a. 掘立柱建物跡

城館内における基本的住居跡であり、現在までに38棟を確認している。

V表-1 北館の掘立柱建物跡一覧表

No.	遺構名	検出区	廻模(母屋)	張り出し・庇	行 方 向	1間の平均廣(cm)	柱穴からの主な出土遺物
1	SB02	IJ54+55+56	6間×5間		E-18°-N	181.9	青磁、美濃、角釘、釘
2	SB03	FG54+55	6間×5間		N-13°-W	192.1	青磁、瓦器、不明陶器、埴輪、釘、釘、銅貨、石臼他
3	SB04	FG55	4間×2間	南に1間の庇	N-22.5°-W	桁 142.5 築 160.0	なし
4	SB05	KLM53+54	8間×5間	四面庇	E-12°-N	205.5	なし
5	SB06	J56+57	2間×3間		E-20°-N	200.0	青磁、小札、網
6	SB07	IJ56+57	2間×4間		N-19°-W	桁 190.6 築 200.0	青磁
7	SB08	KL53+54	7間×5間	北2間×2間の張り出し	N-10°-W	桁 142.9 築 160.0	なし
8	SB09	FG54	2間×3間		N-14°-W	200.0	なし
9	SB10	KLM52+53	10間×4間	東5間×4間 北1間×1間の張り出し	N-2.5°-W	201.7	なし
10	SB11	LM57	6間×2間	北壁	N-17°-W	桁 206.7 築 230.0	白磁

No	遺構名	検出区	規 模(母屋)	張り出し・庇	桁 行 方 向	1間の平均高(cm)	柱穴からの主な出土遺物
11	SB12	EF51・52	7間×6間	南3間×1間の張り出し	N-14°-W	198.9	染付、美濃瓢箪、角釘、鉄錐
12	SB13	J53	3間×2間	西1間×1間の張り出し	E-4°-N	203.2	なし
13	SB14	HI51・52・53	5間×4間	東2間×1間 西3間×1間の張り出し	E-16°-N	200.6	角釘
14	SB15	FG52・53	5間×2間		N-21°-W	202.3	鐵貨
15	SB16	J57	3間×3間	北1間×2間の張り出し	N-30°-W	桁 160.0 枠 143.3	染付、角釘
16	SB17	HI49	6間×1間	東1間×4間の庇	N-8°-W	140.0	鐵錐、墨器(瓶子)他
17	SB18	HI48・49	6間×5間	東2間×2間の張り出し	N-14°-W	203.9	青磁、染付、壇場、鋳型、茶臼他
18	SB19	HIJ48 HI49	6間×5間	西・北・東に庇 西2間×4間の張り出し	N-14°-W	197.2	鐵貨
19	SB20	EF49・50・51	7間×6間		E-17°-N	201.8	壇場、鋳型、不明網、鐵貨他
20	SB21	JK51	2間×4間		N-5°-W	210.8	角釘
21	SB22	IJ55	4間×3間		N-18.5°-W	桁 230.0 枠 166.7	青磁、美濃、溶解物付着土器
22	SB23	HIJ42・43	7間×5間	西・南・東に庇	N-20°-W	195.0	青磁、染付、角釘、鐵製品、鐵錐、鐵貨
23	SB24	IJ43・44	4間×5間	北2間×1間 西2間×1間の張り出し	E-28°-N	196.8	なし
24	SB25	I44	5間×4間	東2間×1間と1間×1間 西1間×1間の張り出し 西一形付属	E-35°-N	197.5	鐵錐玉、鐵貨
25	SB26	HI43・44	7間×5間		N-30°-W	197.8	青磁、美濃、懸桿、角釘、石臼他
26	SB27	HI45	2間×4間		N-24°-W	198.1	青磁
27	SB28	IJ55	2間×3間		N-22°-W	150.0	青磁、溶解物付着土器、溶解物
28	SB29	IJ53	4間×2間		N-12°-W	桁 187.5 枠 175.0	白磁、朝鮮、釘
29	SB30	F56・57 GH56・57・58	9間×5間	東2間×1間の張り出し 北西・南	E-10°-N	桁 206.3 枠 213.3	青磁、瓦器、壇場、角釘他
30	SB31	FG53・54	7間×5間		N-12.5°-W	205.0	鐵錐、青田、白磁
31	SB32	(D)E46・47	6間×2間+α		E-17°-N	195.0	鐵貨、瓦器、染付、鐵製品、角釘、磁石
32	SB50	E52	3間×4間		N-14°-W	桁 157.5 枠 155.0	なし
33	SB51	EF49・50	3間×4間	南1間×1間の張り出し	N-19°-W	桁 266.7 枠 170.0	染付
34	SB52	HI44・45	5間×5間	東1間×1間の張り出し	E-24.5°-N	桁 188.0 枠 156.0	染付、炭化米、鐵質
35	SB53	H43・44	3間×4間		E-27~28°-N	桁 210.0 枠 131.7	青磁、鐵錐、鐵製品他
36	SB54	GH56・57	7間×2間		E-16~19°-N	203.0	角釘、鐵錐、不明陶器、青磁、瓦器他
37	SB55	H57	2間×2間		E-16°-N	桁 200.0 枠 175.0	石臼、角釘
38	SB56	GH56・57	1間×6間		E-21°-N	桁 196.7 枠 240.0	鐵貨
39	SB57	FG41	1間		-	200.0	なし
40	SB58	(D)E46・47	6間×2間+α		E-17.5°-18°-N	200.0	なし

なお、掘立柱建物跡については図の項目で高島成裕先生の詳細な説明があるため参照されたい。

b 穫穴遺構

ここで言う竪穴遺構の概念を以下の如く規定し、性格不明竪穴遺構とは一線を画しておきたい。さらに、名称については「中世竪穴遺構」「中世竪穴建物跡」とでも言うべきで、绳文時代から平安時代まで連続と営まれた竪穴住居跡の系譜に続く中世の竪穴形態の構造物であることを明確にすべきと考えている。

1. 構築方法は方形基調である。
2. 床面に上部構造を推定せしめる柱穴（あるいはそれに相当するもの）等が存在する。
3. 覆土および床面からの出土遺物が中世までのものであり、近世以降のものが存在しない。つまり、構築から廃棄までの時間が中世という時間内に包括される。
4. 構造上の特徴として、基本的に遺構内には炉・かまどを造らず、出入口部分は張り出しを用いることが多い。

以上の4点を竪穴遺構の基礎概念とした場合、これまでに北館から検出された竪穴遺構は以下の通り128基にも及ぶ。

Ⅴ表-2 北館の中世竪穴建物跡一覧表

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
1	ST08	H47	468 × 450 × 60	—	I類	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、鐵貨	
2	ST09	L-M58	330 × 320 × 51	W - 36° - S	I	染付、美濃灰釉、鐵釘、鐵錠、錢貨	
3	ST10	L-M59	270 × 260 × 54	W - 26° - S	I	青磁、鐵釘、小札	
4	ST12	K-L59	440 × 435 × 39	N - 20° - W	II	染付、鐵錠、小札、鐵釘、鐵錠、錢貨	
5	ST13A	L-M59-60	540 × 360 × 64	W - 26° - S	III		
6	ST13B	"	430 × 270 × 70	W - 27° - S	III		
7	ST13C	"	430 × 270 × 68	W - 30° - S	III	青磁、染付、美濃灰釉、鐵錠、漆器 火箸、小札、錢貨	
8	ST13D	"	520 × 330 × 70	N - 30° - W	III		
9	ST14A	K60	340 × 340 × 30	—	I		
10	ST14B	"	470 × 350 × 20	—	I	青磁、鐵釘、小札、錢貨	
11	ST15	K-L60	533 × 455 × 67	N - 35° - W	IV	青磁、美濃灰釉、瓦器、鐵釘、錢貨	
12	ST16	K-L58	360 × 325 × 25	W - 15° - S	IV	青磁、染付、不明鐵製品	
13	ST17	M60	590 × (450) × 22	N - 26° - W	I?	鐵錠	未完標
14	ST18	J59	430 × 265 × 25	—	V	錢貨	
15	ST19	I59	270 + a × 255 × 50	—	VI	鐵錠、鐵釘、小札	
16	ST20	I+J58	310 × 275 × 74	W - 20° - S N - 15° - W	VI	青磁、鐵釘、鐵錠、火箸	
17	ST21	J58	340 × 320 × 32	W - 10° - S	I	染付、美濃灰釉、瓦器、鐵釘	

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
18	ST23	J60	450 × 378 × 18	W - 10° - S	Y類	青釉陶器	
19	ST24	I・J59	295 × 280 × 37	-	I	美濃灰釉、火箸	
20	ST25	J58	305 × 295 × 65	-	I	青磁、染付、美濃灰釉、銅製角鉗棒	
21	ST26	J59	395 × 280 × 40	W - 20° - S	I	青磁、擂鉢、瓦器、鉄釘、	
22	ST28	K58	305 × 240 × 53	-	I	鉄釘、鐵錐、錢貨	
23	ST30A	K58	355 × 350 × 45	N - 110° - W	I	青磁、染付、美濃灰釉、擂鉢、瓦器、	
24	ST30B	K58	355 × 350 × 45	N - 110° - W	I	小柄、錢貨	
25	ST32	L・M58	445 × 320 × 60	-	Y	青磁、染付、天目、擂鉢、鉄釘、砥石	
26	ST34	M58	235 × 205 × 90	-	I	染付、美濃灰釉、毛抜、鐵錐、小札、錢貨	
27	ST35	"	(350) × (350) × 40	W - 26° - S	I	青磁、染付、瀬戸天目、砥石、鉄釘	
28	ST36	"	240 × 170 × 88	--	I	美濃灰釉、瓦器、鉄釘、小札、錢貨	
29	ST38	I・J59	420 × 360 × 40	-	I	不明鉄製品	
30	ST51	L51	552 × 324 × 62	-	I	青磁、染付、天目、擂鉢、錢貨、石臼	
31	ST54	M57	190 × 174 × 56	-	II	天目、美濃灰釉、錢貨、不明鉄製品	
32	ST55	"	216 × 180 × 38	-	II	染付、天目、錄、錢貨	
33	ST58	L56・57	(290) × 260 × 30	S - 18° - E	I	鉄釘、火打石、硯、錢貨	
34	ST60	J・K56	370 × 320 × 76	-	II	青磁、擂鉢、越前、錢貨、鉄釘	
35	ST62	J57	352 × 334 × 60	-	I	赤繪、染付、青磁、白磁、銅製品	
36	ST66	I55	320 × 300 × 64	-	II	銅製裝飾品、小柄、打銀、石斧、青磁	
37	ST67	"	380 × 360 × 58	-	II	白磁、美濃灰釉、青磁、擂鉢、錢貨	
38	ST68	I54・55	400 × 380 × 40	-	Y	天目、羽口、染付、美濃灰釉、錢貨	
39	ST71	G55	266 × 232 × 59	W - 10° - S	I	瓦器、白磁、擂鉢、鉄釘、鐵錐	
40	ST72	F55	276 × 250 × 50	N - 118° - W	I	青磁、瓦器、天目、美濃灰釉、白磁	
41	ST75	D・E55	310 × 270 × 116	S - 5° - W	I	美濃灰釉、不明鉄製品、青磁、白磁	
42	ST77	F54	320 × 320 × 32	-	I	青磁、染付、銅鏡、不明鉄製品、白磁	
43	ST78	L・M56	400 + a × 388 × 25	-	II	美濃灰釉、天目、擂鉢、鉄釘、硯	未完態
44	ST81A	I・J56・57	350 × 350 × 60	-	II	銅鏡、瓦器、美濃灰釉、唐津	
45	ST81B	"	450 × 370 × 32	N - 67° - E	I'	青磁、擂鉢、染付、天目、美濃灰釉	
46	ST82	I56・57	310 × 218 × 86	-	II	青磁、瓦器、鉄釘、小刀	
47	ST84	I56	(390) × 340 × 46	-	II	鉄頭、鉄釘、錢貨	
48	ST100	M53	285 × 275 × 54	N - 85° - E	I	青磁、白磁、唐津、美濃灰釉	
49	ST101	L53・54	450 × 420 × 66	N - 87° - E	Y	青磁、白磁、美濃灰釉、美濃鉄釉天目	
50	ST102	I52・53	740 × 450 × 88	N - 69° - E	II	刀、青磁、染付、唐津、美濃灰釉、金剛盤	
51	ST103	EF53	(625) × 387 × 64	N - 81° - E	Y'	簪、青磁、白磁、染付、鉄釘、鐵貨	
52	ST104	D52・53	310 × 289 × 91	N - 69° - E	I	笄、染付、天目、埴輪	
53	ST105	D53・54	360 × 304 × 66	S - 13° - E	I	美濃灰釉、青磁、鉄錐、唐津	
54	ST106	D・E53	450 × - × 30	N - 75° - E	Y	染付、鐵錐、砥石、土師器	
55	ST107	D52・53	335 × 310 × 45	S - 1° - E	I	白磁、染付、唐津、鉄釘、埴輪物	

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
56	ST108	D53	190 × 158 × 59	S - 18° - E	雁列	染付、美濃灰釉、鉄貨	
57	ST111	E53	568 × 388 × 88	E - 17° - S	W	瀬戸系瓶子、青磁、白磁、擂鉢、鈎型	
58	ST117A	F53	270 × 225 × 125	-	I	青磁、坦堀、鈎型、羽口、鉄釘	
59	ST117B	F53	(200+a) × 240 × 45	N - 10° - W	I	青磁、坦堀、羽口、鉄釘、美濃	
60	ST118	F+G53	265 × 260 × 50	S - 16° - E	I	青磁、染付、瓦器、擂鉢、鈎型	
61	ST119	F+G52	337 × 302 × 64	W - 8° - S	I	青磁、染付、美濃灰釉、羽口、鉄釘	
62	ST120	G53	317 × 277 × 50	S - 15° - E	I	青磁、美濃灰釉、坦堀、鉄釘	
63	ST121	H+I52	318 × 302 × 60	S - 16° - E	I	、笄、鉄釘、小札、錢貨、美濃灰釉	
64	ST124	J51+52	(285) × 280 × 53	N - 5° - W	I	刀、青磁、美濃灰釉、羽口、錢貨	
65	ST125	I52	303 × 281 × 44	S - 25° - E	I	青磁、染付、美濃灰釉、坦堀、鉄釘	
66	ST132	L+M52	658 × 435 × 47	N - 11° - W	W	青磁、白磁、染付、瓦器、内耳鉄鍋	
67	ST133	H+I51	355 × 304 × 44	S - 22° - E	W	青磁、坦堀、鉄釘、錢貨、象眼	
68	ST135	I50	316 × 279 × 65	N - 15° - W	I	青磁、坦堀、擂鉢、火打石、銀器	
69	ST138	L51+52	580 + a × 445 × 53	N - 7° - W	W	青磁、染付、美濃灰釉、唐津、天目	
70	ST139	H50	326 × 285 × 44	S - 22° - E	I	青磁、擂鉢、坦堀、焼米、鉄釘	
71	ST140	H51	364 × 232 × 53	N - 20° - W	I	青磁、美濃灰釉、瓦器、小柄、手引金	
72	ST141	H51	290 × 200 × 50	E - 14° - N	W	青磁、赤絵、坦堀、鉄釘、錢貨	
73	ST144	G51	276 × 240 × 48	E - 26° - N	W	白磁、染付、唐津、打根、鉄釘	
74	ST145	I48	326 × 323 × 61	E - 11° - N	I	白磁、染付、志野、唐津、鉄釘、錢貨	
75	ST146	H+I50	380 × 310 × -	-	I	青磁、染付、石臼、砥石、錢貨	
76	ST148	I48	270 × (253) × 35	S - 5° - E	I	白磁、坦堀、鉄釘	
77	ST151	I48	385 × 365 × 15	E - 3° - N	I	青磁、天目、唐津、坦堀、擂鉢	
78	ST153	J51	307 × 282 × 51	-	I	青磁、染付、白磁、唐津、鉄錐	
79	ST155	K51	333 × 322 × 66	-	I	染付、美濃灰釉・褐釉、唐津、舞、銅	
80	ST156	J+K50	246 × 240 × 55	-	W	青磁、染付、美濃灰釉、鉄釘、鉄錐	
81	ST157	J48+49	552 × 465 × 77	S - 6° - E	W	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、唐津	
82	ST158	J49	195 × 185 × 54	-	I	石臼、鉄釘、白磁	
83	ST160	D51	380 × 360 × -	-	I	青磁、染付美濃灰釉、擂鉢、鉄錐	
84	ST161A	E50	335 × 273 × 54	E - 8° - N	W	青磁、染付、美濃灰釉、擂鉢、越前	
85	ST161B	E50	292 × (262) × 40	-	I	瓦器、坦堀、鉄釘、鉄錐	
86	ST164	D50	234 × 214 × 74	S - 37° - E	W	青磁、唐津、美濃灰釉、擂鉢、鉄釘	
87	ST166	E49	344 × 296 × 49	S - 20° - E	I	青磁、唐津、美濃灰釉、擂鉢、染付	
88	ST170A	I43	265 × 265 × 45	N - 56° - E	I	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、鉄釘	
89	ST170B	I43	318 × 265 × 45	N - 56° - E	I	小札、硯、錢貨	
90	ST171	H43	270 × 270 × 41	N - 62° - E	I	青磁、染付、瓦器、越前、鉄釘、火箸	
91	ST173	H43	(275) × (272) × 42	-	W	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、褐釉	
92	ST176	H45	293 × 265 × 62	S - 30° - E	I	青磁、染付、美濃灰釉、瓦器、鉄釘	
93	ST177	E50	282 × 246 × 62	S - 40° - E	W	青磁、擂鉢、瓦器、坦堀、鉄釘	

No	遺構名	検出区	規模(長軸×短軸×深さ)cm	張り出し方向	柱穴配置	主な出土遺物	備考
94	ST179	H43	292×290+a×33	-	I類	越前	
95	ST180	I45+46	574×434+a×60	-	II	青磁、白磁、美濃灰釉、唐津、銭貨	未完掘
96	ST181	I46	263×254×41	E-12°-N	I	白磁、染付、瓦器、鐵釘、砥石、銭貨	
97	ST182	I+J46	353×165+a×50	-	I	瓦器、搖鉢、銅製品、銭貨	未完掘
98	ST183	H42	710×512×34	S-25°-E	II	青磁、越前、染付、鐵釘、銭貨	
99	ST184A	H+I41+42	480×440×42	N-50°-E	II'	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、越前	
100	ST184B	H+I41+42	449×430×42	E-20°-N	II'	瓦器、鐵釘、小刀、銭貨、火打石	
101	ST185	I45+46	323×298×34	-	I	青磁、美濃灰釉、染付、越前、硯	
102	ST186	H+I46	395×366×24	-	I	染付、青磁、搖鉢、鍔、銭貨	
103	ST190	I46+47	303×(200)×74	S-0°	II	搖鉢、美濃灰釉、鐵釘、不明鉄	
104	ST192	G+H41+42	750×460×45	-	II	不明鉄(刀の茎?)、火箸、銅製品、鐵釘	
105	ST200	E56	442×355×90	-	I	青磁、唐津、不明鉄、鍔、美濃壺戸瓶子	
106	ST201	EF57	630×500×104	-	II	瓦器、埴輪、青磁、美濃灰釉、搖鉢	
107	ST202	EF56	580×455×78	-	II'	瓦器、青磁、搖鉢、白磁、鐵釘、銭貨	
108	ST203	FG56	670×450×50	-	II'	瓦器、青磁、搖鉢、鐵釘、銭貨	
109	ST204	H37+58	310×300×44	-	I	羽口、搖鉢、青磁、瓦器、鐵釘、砥石	
110	ST205	H58	324×300×50	-	II	青磁、埴輪、美濃灰釉、天目、土鈴	
111	ST206	F57+58	510×375×103	-	II'	瓦器、青磁、染付、鐵釘、埴輪	
112	ST207	G55+56	995×398×40	-	V	瓦器、埴輪、唐津、美濃灰釉、鐵釘	
113	ST208	FG58	500×432×58	-	II	瓦器、青磁、搖鉢、埴輪、鐵釘	
114	ST210	G58+59	620×400×55	-	II	鈎型、瓦器、搖鉢、青磁、白磁	
115	ST215	F47	308×260×48	-	I	青磁、白磁、染付、美濃灰釉、鐵釘	
116	ST216	E47	320×(320)×36	-	I	青磁、白磁、染付、鐵釘、鐵陣	
117	ST217	F47	340×310×28	-	I	搖鉢、美濃灰釉、鐵釘、小柄、銭貨	
118	ST218	FG47	340×248×73	-	I	染付、美濃灰釉、唐津、天目、石臼	
119	ST224	D+E48	200+(60)×260×55	-	I	染付、美濃灰釉、青磁、埴輪、鐵陣	未完掘
120	ST227	E46+47	270×233×51	-	V	青磁、白磁、染付、搖鉢、埴輪、小柄	
121	ST228	F46	240×252×63	-	I	埴輪、染付、砥石、炭化米、銭貨	
122	ST230	EF47	320×320×34	-	II	-	
123	ST234	G42+43	490×500×92	-	II'	染付、青磁、赤絵、天目、越前	
124	SX155	EF56+57	550×510×70	-	II'	瓦器、搖鉢、青磁、羽口、火箸	
125	SX100	JK49+50	240×231×34	-	I	染付、不明銅製品	
126	SX67	I51	260×260×49	N-16°-W	I	美濃灰釉、埴輪	
127	SX120	H+I43	335×238×76	-	II	小柄小刀、亨引金、唐津、染付、銭貨	
128	SX121	H42+43	237×195×130	-	II'	瓦器、鉄、漆器、銅製品、染付	

以上の中世竪穴建物跡を柱穴の配置パターンからみると、I類44基、II類32基、III類14基、IV類5基、V類9基、VI類7基、VII類3基、VIII類14基となる。以前（昭和57年度報告書P 133・134）にも検討した通り、I類とII類が同一の構築意識に包含されるとすれば、その総数76基は全体の60%近くに達し、浪岡城跡北館における中世竪穴建物跡の基本的な形態であると言える。

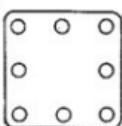
しかしながら、I・II類に関しては中世竪穴建物跡の性格等を吟味する明瞭な遺物を出土することはまれで、III類・IV類等の比較的大型の遺構から出土することが多いようだ。

たとえば、III類の中でS T13の漆器、S T51灰層からの陶磁器・銭貨、S T78の角釘、S T81の銅鏡、S T183の炭化物・焼米・越前巻、S T201の陶磁器や鉄・銅製品・石製品・土製品・銭貨など各種各様の遺物、S T210の鋳型・坩埚、S X120の銅製品など、またIV類の中ではS T102床面の刀、S T157の銅鋤・中国鉄釉壺など、さらにV類の中でもS T103床面から出土した轡などは注目してよい資料である。

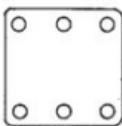
一覧表で示した遺構間の重複関係をみると三期以内のものしかなく、構築・使用時期を大きく区分して三期とみることができる。これは、V類述べる掘立柱建物跡の時期区分とも良好に対応し、北館における大規模な地業が三回はおこなわれたと推定できる根拠となるものである。ただし、現状の整理過程では本遺構に関する時代区分のポイントとなる部分が明確でない。床面出土の遺物が少なく、覆土とともに廃棄された遺物も城館使用期間とみられる100～150年の幅では伝世の可能性が充分にあるため、一概に時期決定はできない。今後さらに検討を要するところである。

よって、遺構配置の状態も早断すべき状況ではないが、I・II類の中で出入口部を有するものは、館内東側に位置するものは西方向、北側および中央に位置するものは南方向、西側に位置するものは東方向と、ある程度の規則性を有して配置されているような印象を受ける。おそらく、掘立柱建物跡との相互配置の他、館内における防禦機能等を考えた結果

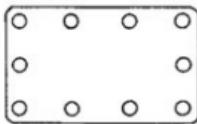
V・図-1 中世竪穴建物跡
柱穴配置形態分類図



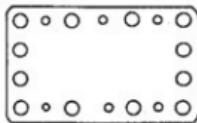
I類



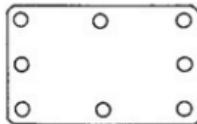
II類



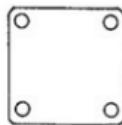
III類



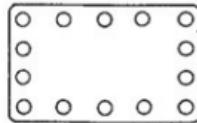
IV類



V類



VI類



VII類

その他

と思われる。

C 井戸跡

井戸跡あるいは井戸跡であったと推定される遺構は69基あり、その中で木枠が発見されたものは10基である。7基のうち1基が木枠を有することになるが、逆に言えば素掘りの井戸が大多数を占めていたということになり、壁面崩壊等によって使用不可能となる場合が多かったためこのような数で構築をくり返さなければならなかったと考えることができる。

井戸跡の検出分布をみると、中央部から南側にかけて多く、西側および北縁部は比較的少ない。しかし、木枠を有する井戸跡となると南北中央線から南側に多く、平均的間隔を有して配置されている。この事は、 5×6 間以上の大形掘立柱建物跡との位置関係を考慮したとも考えられ、木枠を有する井戸がある程度長期間にわたって使用された結果と思われる。

井戸跡の周囲に焼土遺構が分布する傾向がある。S E22の東側、S E50の東側、S E43の東側、SE 77の北側、S E79の東側などにみられるもので、井戸に近接した地点で炊事がおこなわれたことを推測させる。

また、井戸跡はしばしば遺物の廃棄場所として使われることがある。おそらく、井戸の機能が終結した時点で埋め戻した覆土と一緒に当時の使用用具を捨てたものと考えられる。その代表例としては、S E20、S E33、S E43、S E50、S E61、S E71、S E79などがある。S E20は覆土に炭化物・灰を含む層が互層となり、青磁細線文碗・同稜花皿（酸化青磁）・染付唐草文皿、白磁端反り皿、瀬戸瓶子、馬骨、漆器碗、坩堝、火箸などが出土している。S E33は、木枠が廃棄された状態であり、底面から桶底・木材片とともに唐津皿（胎土目）、覆土から青磁碗、白磁皿、染付皿、美濃灰釉皿、擂鉢、砥石などが出土している。S E50は、径400cm以上の大きな掘り方をした井戸で、美濃の天目碗、灰釉折縁皿、褐釉皿、黄瀬戸手大皿と唐津の灰釉碗、灰釉皿（胎土目）、絵付皿、擂鉢、備前系擂鉢、および染付皿・青白磁小杯が出土し、一括して廃棄された様相を示した。S E61は、模状木製品・木製柄の他、口径19.3cmの染付皿が木枠に接する状態で8片の破片で出土、壊れたため井戸に廃棄したと考えられた。S E71は覆土全体に集石が認められ、その中から中国褐釉盞、染付、青磁、唐津などの陶磁器の他底面近くから曲物が出土した。S E79はS E33と同じように、木枠が破壊された状態で検出され、青磁、白磁、染付、美濃灰釉、美濃鐵釉、唐津、越前等の各種陶磁器が出土している。

このように井戸の廃棄は、ある意味で短時間におこなわれることから、出土遺物が遺構の時期を決定できる可能性を有している。

以下、検出された井戸跡の一覧表を載せておく。

V・表-3 北館の井戸跡一観表

No.	遺構名	検出区	規模(長径×短径 ×深さ)cm	木枠の有無	主な出土遺物	備考
1	S E 06	I 47	180×150×210+α	-	青磁、美濃灰釉、鉄釘	
2	S E 07	H 47	238×230×100+α	-	白磁、美濃灰釉、志野、不明陶器	
3	S E 08	K 60	190×185×100+α	-	染付	
4	S E 09	K 58	165×155×120+α	-	青磁、鉄釘	
5	S E 10	I 58	230×250×340	-	青磁、染付、美濃灰釉、擂鉢、鐵鑄	
6	S E 11	O 54+55	175×170×120+α	隅柱横棟型	白磁、青磁、染付、天目、不明陶器、漆器	
7	S E 12	L 59	130×128×100+α	-	鉄鋸、錢貨	
8	S E 13	K 58	140×135×50+α	-	染付、鉄釘	
9	S E 14	O 54	× × 140+α	-	下鉢、箸、柄底、漆器	
10	S E 15	J K 58	180×160×100+α	-	青磁、染付、美濃灰釉、擂鉢、鉄釘	
11	S E 16	M 58	220×210×50+α	-	青磁、染付、鉄釘、鐵鑄、小札、かえし	
12	S E 17	M 58	170×110×90+α	-		後付No
13	S E 20	K 54+55	235×230×300+α	-	青磁、染付、馬頭、鉄錐	
14	S E 21	I 54	150×144×222	-	火箸、かえし、唐津、美濃灰釉、鉄釘、錢貨	
15	S E 22	K 56+57	230×215×350	隅柱横棟型	曲物、美濃灰釉、擂鉢、鐵錐、錢貨	
16	S E 23	L 56	180×160×225	-	美濃灰釉、珠州系割削、瓦舟、鉄釘	
17	S E 24	I 57	(290)×190×290	-	青磁、美濃灰釉、瓦舟、瓦船、窓	
18	S E 25	E 54	160×160×178+α	-	瓦器、擂鉢、培塿、錢貨、硯	
19	S E 26	K 54	162×154×195+α	-	青磁、擂鉢、天目、鉄釘	
20	S E 27	I 53	130×130×-	-	美濃灰釉、染付、青磁、越前、志野	
21	S E 28	J 54	130×120×278	-	白磁、染付、天目、擂鉢、手引金、火等、小刀	
22	S E 29	J 54	160×160×262	-	漆器	
23	S E 30	E + F 54	182×172×211+α	-	染付、瓦器、美濃灰釉、培塿、鉄釘	
24	S E 31	H 54	192×164×435	隅柱横棟型	青磁、染付、培塿、柄底、曲物、窓	
25	S E 32	J + K 54	180×170×357	隅柱横棟型	青磁、唐津、瓦器、鏡状副製品、曲物	
26	S E 33	F + G 54	164×164×300	-	青磁、白磁、唐津、美濃灰釉、底石	
27	S E 34	G 54	140×130×230	-	青磁、漆器	
28	S E 40	F 52	160×150×120+α	-	青磁、擂鉢、鉄釘、錢貨	
29	S E 41	G + H 53	305×283×200+α	-	青磁、美濃灰釉、擂鉢、培塿、鉄釘、錢貨	
30	S E 42	I 50	177×170×350	隅柱横棟型	美濃灰釉、染付、培塿、鉄釘	
31	S E 43	I 52	365×356×200+α	-	美濃灰釉、擂鉢、培塿、白磁、染付	
32	S E 44	J 53	210×195×110+α	-	青磁、瓦器、美濃灰釉、褐釉、錢貨	
33	S E 45	H 52	140×130×60+α	-	美濃灰釉、擂鉢、培塿、羽口	
34	S E 46	J + K 53	170×125×80+α	-	擂鉢、溶解物、錢貨	
35	S E 47	H + I 50	-	-	擂鉢	現代

No	遺構名	検出区	規模(長径×短径×深さ)cm	木枠の有無	主な出土遺物	備考
36	S E 48	G 51	240 × 235 × 180 + α	-	青磁、美濃灰釉、染付、白磁、鉄釘、錢貨	
37	S E 49	J 48	240 × 210 × -	-	青磁、染付、鉄釘、鐵鋸、鐵石、溶解物	
38	S E 50	F + G 51	410 × 400 × 350 + α	-	擂鉢、唐津、青磁、美濃灰釉、獨角、天目	
39	S E 51	I 48	175 × 150 × 275	側板組合せ型	青磁、唐津、白磁、志野、越前、下駄	
40	S E 52	I 51+52	200 × 180 × 80 + α	-	青磁、染付、美濃灰釉	
41	S E 53	J 52	175 × 170 × -	-	-	
42	S E 54	K 52	140 × 130 × 130 + α	-	-	
43	S E 55	F 52	200 × 180 × 248	-	燈籠	
44	S E 56	F 56	240 × 225 × 40 + α	-	青磁	
45	S E 57	G 53	200 × 195 × 60 + α	-	青磁、天目、染付、火箸、不明鉄、錢貨	
46	S E 58	K 52	185 × 180 × 150	-	-	
47	S E 59	K 52+53	150 × 130 × 120	-	-	
48	S E 60	K 50+51	250 × 228 × 252	-	青磁、唐津、染付、美濃灰釉、鉄釘	
49	S E 61	K 51	220 × 205 × 360 ~ 370	隅柱横棟型	染付、青磁、白磁、瀬戸褐釉、擂鉢	
50	S E 63	K 51	150 × 140 × -	-	-	
51	S E 65	D + E 50	370 × 300 × 230 + α	-	青磁、染付、天目、瓦器、志野、錢貨	
52	S E 66	H 44	200 × 200 × 200 + α	-	青磁、唐津、白磁、染付、天目、石臼	
53	S E 67	I 44	260 × 245 × 332	隅柱横棟型	擂鉢、青磁、染付、天目、朝鮮、石臼	
54	S E 68	F + G 58	455 × 410 × 260 + α	-	唐津、青磁、美濃灰釉、鉄船、赤絵	
55	S E 69	I + J 45	320 × 300 × -	-	-	
56	S E 71	G 56	236 × 190 × 436	-	唐津、青磁、染付、美濃灰釉、瓦器	
57	S E 72	G 57+58	230 × 224 × -	-	青磁、美濃灰釉、白磁、天目、瓦器	
58	S E 73	H 57+58	293 × 287 × 300 + α	隅柱横棟型	青磁、瓦器、堀場、擂鉢、白磁、鉄釘	
59	S E 74	E 48	245 × 260 × -	-	青磁、白磁、染付、堀場、漆器、鐵石	
60	S E 75	E 47+48	173 × 160 × 70 + α	-	擂鉢、小柄、漆器	
61	S E 76	H 58	157 × 141 × 77 + α	-	青磁、美濃灰釉、鉄釘、鉄錠、鉄型	
62	S E 77	G 48	340 × 320 × -	隅柱横棟型	青磁、唐津、美濃灰釉、瀬戸、擂鉢	
63	S E 79	F 48	340 × 357 × 320	-	青磁、唐津、白磁、美濃灰釉、擂鉢	
64	S X 165	G 57	174 × 140 × 105 + α	-	染付、天目、鉄釘、鉄錠、不明鉄製品	
65	S X 28	I 55	100 × 100 × -	-	美濃灰釉、堀場、鐵石、石鉢、不明鉄	
66	S X 124	E 49	126 × 120 × 140 + α	-	染付、美濃灰釉、唐津、不明陶器、錢貨	
67	S X 189	E 46+47	140 × 137 × 107 + α	-	-	
68	S X 140	H 45	152 × 150 × 100 + α	-	美濃灰釉、染付、擂鉢、不明鉄製品、錢貨	
69	S X 122	I + J 43	200 × 200 × 180 + α	-	青磁、唐津、白磁、瓦器、擂鉢、鐵石	

d 溝跡

溝跡は、城館期のものと土師器・須恵器だけを出土する平安時代のものに分けることができる。前者は、比較的幅も狭く深さも浅いもので井戸跡から伸びる場合が多い。S D 60、S D 59、S D 36などであるが、これらの溝は同一方向に平行してもう一本の溝が伸びることがあり、屋敷を区画する時の通路等に用いられた可能性もある。後者は、南にひらく馬蹄形を呈する S D 16、S D 40 (S X 81)、S D 10 (S X 21)、S D 63、S D 70 と、無作為方向に走る S D 07、S D 09、S D 32 (S D 61)などがみられる。

しかし、溝跡の検出は他の遺構との重複が激しかったり、城館期の遺構を優先的に精査したためか充分に規模を把握するまでには至らなかった。北館調査の反省すべき点である。

e 土居跡

平場内における土居跡は、東縁および北縁の一部で確認されている。東縁部は最大幅 5 m、最小幅 2 m で遺構確認面から 60 cm ほどの比高を有していた。下層に粘土質の層を敷きその上に黒色土や砂質土を突き固めて構築していた。北縁部でも同様の構築であったが、削平されている部分が多くたため部分的にしか検出されていない。C 52 区で検出された S A 05 では三和土状の部分に柱穴も残っており、土居に伴う柵列があった可能性も高い。西縁・南縁は後世の搅乱が激しいためか土居らしい遺構を検出することは困難であった。

f 焼土遺構

焼土遺構というのは、かまどや炉などのいわゆる炊事遺構と言えるようなものではなく、焼土がある範囲をもって分布している箇所を任意に言い表わした名称である。これら焼土遺構の中には地面を掘り下げ、炉として使用しようと思えば使用可能なものも存在するが、大部分は遺構確認面から若干高いレベルで検出され、遺構下層から柱穴や竪穴遺構・溝等の他の遺構が検出されることが多い。

当初は、落城に伴う火災痕とも考えたが、その分布はかならずしも建物跡と重複しているとは限らず、炊事等に関連した遺構発見の痕跡と考えるに至っている。特に、井戸跡の項目でも述べたように、井戸跡の周辺で焼土遺構が多数検出されていることは、前記の推測を肯定できる一因と思われる。

g 桧形遺構

館と館間の連絡がどのような形でおこなわれていたかと言う疑問は調査開始の段階からの大きな問題点であった。北館西北端から検出された樹形遺構は、城館の構造を考える上で非常に良好な遺構である。F・G 40・41 区における樹形遺構は「L」型で、北館内に入る場合は左に折れる樹形を呈し、いわゆる弓矢の使用を想定した構造である。S B 57 とした二脚門跡はスロープの上の部分にやや斜行した状態で位置し、柱穴の大きさからかなりしっかりした門跡であったことが推測される。この北館における樹形遺構と対峙する西館には、対応する箇所が掘跡から一段高いテラス状を呈し、同様の遺構が存在する可能性が強い。

浪岡城跡の掘跡が当時は水堀的であったことを考へると、館間の連絡は木橋状のものでおこなわれ

ていたと推定され、各館に2～3ヶ所の出入口施設（拵形遺構）を有し木橋で結ばれていたのではないか。どうか。

h 薙銭遺構

どのくらいの銭貨をもって薙銭とするか不明確ではあるが、S T 207 出土銭貨、S P 10 出土銭貨は薙銭と考えて大差ないであろう。S T 207 は竪穴遺構でありその床面から麻紐に連なって 159 枚、S P 10 は小穴に連なった状態で 903 枚の銭貨が出土した。いずれも紐に連なった状態で出土していることに注目でき、ときおり柱穴等に 2～3枚から 10～15枚の銭貨を入れておく場合とは相違がみられる。出土銭貨の詳細は、別項（IV-5）を参照されたい。

i 土塙墓

人骨が出土した土塙墓は D56 区検出の S K01 だけであるが、骨片または副葬的色彩の濃い遺物が出土している遺構に J57 区検出の S X31、H43 区検出の S X 121 がある。S X01 は円形の土 塙に年齢 15～17才の女性が北頭位仰臥屈葬で埋葬されていたもので、副葬品等はみられなかった。（見「浪岡城跡出土の人骨について」を参照の事）S X31 は、ややマウンド状になった方形の土塙で、覆土から大型の青磁皿を意図的に打ち壊した破片と銭貨 27 枚が、床面から槍、刀の茎、小札、鉄鎌などの鉄製品が出土し、人骨はみられないものの土塙墓的性格が強い。S X 121 は方形の土 塙で四隅に柱穴もみられたが、覆土中間にあった灰層の直下から粉末になった骨片が出土し、それに伴って「大上」「叶」という文字が描かれた漆器碗、染付・青磁・白磁などの各種陶磁器、鉄、鍋、火打金、火箸などの鉄製品および 16 枚の銭貨等が出土している。

現在までの調査では、墓域と思われる箇所は検出されておらず、居住区に接する状態で土塙墓が形成されていたようである。

j 石敷き遺構

北館においては、礎石建物跡や石組み井戸など石をもって構築した遺構はほとんどない。K L 52 区から検出した S X80 は、石を基壇状に敷いた遺構で、一例だけの検出である。石はすべて川原石で 10cm 内外の小石が 292 個出土している。機能等は不明である。

k 性格不明竪穴遺構

文字通り、使用目的が明確でない遺構の一群であり、柱穴状の竪穴から中世竪穴建物跡とした遺構ぐらいの大きな竪穴まで存在するが、出土遺物がまったくなかったり、建物跡とは認めがたいものなどがあり、今後さらに検討の必要性がある。

2. 出土遺物

北館から出土した遺物の中で城館期に伴うものは以下の通りである。なお便宜上材質別に分類したため、使用目的が同一のものも併記している。

Ⅰ 陶器類

I - 1 船載品

- I - 1 - a 青磁・碗・皿・鉢・香炉・壺の蓋
- I - 1 - b 白磁・皿・碗・壺・小杯
- I - 1 - c 染付・皿・碗・水滴
- I - 1 - d 赤絵・皿・碗
- I - 1 - e 福釉・壺
- I - 1 - f 鉄釉・碗・壺
- I - 1 - g 朝鮮・皿・碗

I - 2 国産品

- I - 2 - a - i 美濃・瀬戸(灰釉)・皿・碗・瓶子・花瓶・香炉・水注
- I - 2 - a - ii 美濃・瀬戸(鉄釉)・天目碗・皿・壺
- I - 2 - b 唐津・皿・碗・鉢・壺・擂鉢
- I - 2 - c 越前・甕・壺・擂鉢
- I - 2 - d 珠洲・擂鉢・甕
- I - 2 - e 信楽?・甕
- I - 2 - f 備前?・擂鉢
- I - 2 - g 伊万里・碗・皿・壺

I - 3 国産產地不詳品

- I - 3 - a 瓦質土器・火舍・行火・香炉・壺
- I - 3 - b 無釉陶器・擂鉢・甕
- I - 3 - c 施釉陶器

I - 4 地元產品(土器)

- I - 4 - a かわらけ・灯明皿
- I - 4 - b 灰堀
- I - 4 - c 鋳型

Ⅱ 鉄製品

II - 1 武具

- II - 1 - a 刀・刀装具・大刀・小刀・小柄小刀・鉢
- II - 1 - b 槍・槍・打根

Ⅰ-1-c 鏡-胸板・小札
Ⅰ-1-d 鏡-鑿型・雁股型・鯉尾型

Ⅰ-2 農具・工具・生活用具・他

Ⅰ-2-a 鐵-鍊・鍊錠
Ⅰ-2-b 引金
Ⅰ-2-c 釘
Ⅰ-2-d 鍋-吊耳鍋・內耳鍋
Ⅰ-2-e 火打金
Ⅰ-2-f かすがい
Ⅰ-2-g 火箸
Ⅰ-2-h 鍊
Ⅰ-2-i 毛抜き鍊
Ⅰ-2-j 錄
Ⅰ-2-k 繩
Ⅰ-2-l 盆
Ⅰ-2-m 鉄滓
Ⅰ-2-n 増壙

Ⅱ 銅製品

Ⅱ-1 武具

Ⅱ-1-a 刀装具-鍔・切羽・小柄・笄・鐔・足金物・返角・目貫
Ⅱ-1-b 鏡・兜-鞚・綠金具・八幡座
Ⅱ-1-c 鐵砲用具-火繩鉄・鐵砲玉

Ⅱ-2 仏具

Ⅱ-2-a 仏像
Ⅱ-2-b 金剛鑿
Ⅱ-2-c 六器-碗・高台
Ⅱ-2-d 香炉
Ⅱ-2-e 花瓶
Ⅱ-2-f 鏡

Ⅱ-3 化粧具・調度具・生活用具・他

Ⅱ-3-a 鏡
Ⅱ-3-b 毛抜き鍊
Ⅱ-3-c 耳搔き

- III - 3 - d 分銅
- III - 3 - e 銀
- III - 3 - f 取手
- III - 3 - g 皿 - 種皿
- III - 3 - h 糜
- III - 3 - i キセル
- III - 3 - j 錢貨
- III - 3 - k 銅滓
- III - 3 - l 針

IV 石製品

IV - 1 農具・工具・他

- IV - 1 - a 粉挽き臼
- IV - 1 - b 茶臼
- IV - 1 - c 磁石
- IV - 1 - d 火打石
- IV - 1 - e 鉢
- IV - 1 - f おもり

IV - 2 文具

- IV - 2 観

V 木製品

V - 1 瓢漿具

- V - 1 - a 漆器 - 框・蓋・杓
- V - 1 - b 折敷
- V - 1 - c 箸
- V - 1 - d 篠
- V - 1 - e 曲物

V - 2 貯蔵具・計量具

- V - 2 - a 桶
- V - 2 - b 曲物
- V - 2 - c 取手

V - 3 建築具

- V - 3 - a 柱 - 井戸脚柱
- V - 3 - b 板 - 井戸側板

Ⅴ-3-c 屋根瓦

Ⅴ-3-d 梁-井戸横棟樑

Ⅴ-3-e

Ⅴ-4 祭祀・信仰具

Ⅴ-4-a 形代-刀形木製品、扇形木製品

Ⅴ-4-b 塔婆

Ⅴ-4-c 木簡

Ⅴ-5 その他の生活用具

Ⅴ-5-a 下駄-連歎下駄・露仰下駄

Ⅴ-5-b 棒

Ⅴ-5-c つまみ

Ⅴ-5-d 椅-馬櫛

Ⅵ 自然遺物・他

Ⅵ-1 植物

Ⅵ-1-a 穀物-炭化米・炭化穀

Ⅵ-1-b 喜果-くるみ・桃

Ⅵ-2 編物

Ⅵ-2-a 麻-布・紐

Ⅵ-2-b 繩-紐

Ⅵ-2-b

Ⅵ-3 骨

Ⅵ-3-a 人骨

Ⅵ-3-b 馬骨

Ⅵ-3-c 犬骨

Ⅵ-3-d 牛骨-牛角

Ⅵ-3-e その他(未鑑定)

Ⅵ-4 石

Ⅵ-4-a 墓書石

Ⅵ-5 皮革

Ⅵ-5-a 草札

以上の出土遺物については、各年度別の報告とともに、陶磁器は「Ⅳ浪岡城跡出土の陶磁器について」鉄・銅製品のうち生活用具は「Ⅳ浪岡城跡北館出土の生活用具について」、武具関係は「浪岡城跡北館出土の鎧甲関係品について」、木製品の一部については「Ⅳ浪岡城跡出土の木製品」をそれぞれ参照されたい。出土遺物の中でも特に自然遺物は詳細な鑑定を得ていないものが多く、今後別の機会に報告したいと考えている。

Ⅶ 浪岡城跡出土の人骨について

森 本 岩太郎

1. はじめに

昭和58年7月、浪岡城跡のD-56グリッドから16世紀に属すると思われる人骨1個体分が出土した。浪岡町教育委員からの委嘱により筆者が現場に赴き、この人骨を取り上げて鑑定した。人骨調査に際しあ世話をいただいた諸賢に深く感謝の意を表する。

2. 人骨の出土状況

この人骨はD-56グリッドにある直径約110cm、深さ約55cmの円形土塁内において、北頭位仰臥屈位で発見された。頭蓋が左へ傾き、左右の肘・股・膝の各関節を強く屈曲し、両肘は各側の側腹部付近にあり、左手はオトガイ部、右手は右肩の近くに位置している。無紋様の古鏡1枚のほか、土師器片や陶器片が若干伴出した。

3. 人骨所見

この人骨の保存状態は極めて不良で、わずかに頭蓋のはば左半分が取り上げられる程度にその強度を保っているが、頭蓋以外の部分の骨はほとんど粉末状に近く、現場で埋葬姿勢を判断するのに役立つ程度で、骨片として取り上げることが出来たものはわずかに10個余りにすぎない。この人骨は土葬されたものであり、人骨に焼けた部分は見られない。

この人骨は頭蓋の形態などから女性と判断される。手の指骨を見ると、骨端がまだ骨幹と結合を終っていないので18歳以下と思われ、また第2大臼歯が萌出を終って咬耗を受けているので13歳以上と思われる。これに頭蓋や上・下肢骨の大きさなどを加味して考えると、この女性の年齢は15～17歳ぐらいであると推定される。

まず頭蓋(写真1および2)であるが、ほぼ右半分を腐蝕により失っている。発見当時、頭蓋は土塁内で左に倒れ、左側頭部を下にしていたので、地表に近い方の右半が腐蝕されたことになる。また、土圧により頭蓋の幅径がかなり減少して見掛け上は長頭を思わせるように変形しているので、現在の頭蓋の形をそのまま在生時の形態と見なす訳にはいかない。例えば、現在の左眼窩を見ると、眼窓幅が38mm、眼窓高が36mmで、眼窓示数が94.7を示し、著しい高眼窓型に属しているようみえる。しかし、これは頭蓋に対する横方向からの土圧による変形の結果であり、決して生前の面影を映していないのである。したがって、この頭蓋の場合、計測値にたいした意味はないと思われる所以、計測はこれを行わないこととする。

頭蓋を見ると、頭蓋冠は比較的薄く、前額は垂直に近く、眉間の突出度や鼻根部の陥凹度は小さい。頭頂隆起の発達は良いが、乳様突起および外後頭隆起は小さい。左右の内側口蓋管骨橋および鼓室骨裂孔は存在せず、左の翼軸孔骨橋・舌下神経管二分・副眼窓下孔・顎舌骨筋神経溝骨橋・頭頂切痕骨も認められない。前頭縫合・インカ骨も見られないが、左副オトガイ孔は小さなものが1個ある。歯

および歯槽の状況を次に示す。

7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7
7	6	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	6	7

ただし、アラビア数字は残存する永久歯を示す。智歯は上・下顎とも未萌出である。歯の咬合様式は鉄状咬合型で、咬耗度はおおむね Broca の第 1 度である。齲歯は見られない。

椎骨（写真 3）で比較的良好く残っているのは環椎・軸椎・第 3 および第 4 頸椎である。頸椎はいずれも小さい

四肢骨（写真 3）についてみると、上肢骨で残っているのは左肩甲棘の一部と左鎖骨外側半の一部のほか、左上腕骨体下半の一部、右中手骨体 1 個および手の掌骨片 3 個分である。上記のように、このうち手の指の基節骨底と中節骨底の骨端部はまだ骨幹と骨結合化せず、骨端が骨幹から遊離している。下肢骨で残っているのは左大腿骨体、左脛骨体および右腓骨体が主要なものである。いずれも保存状態が悪く、詳細につき記すことは出来ない。

この人骨に格別の病的所見は認められない。

4. 要約

浪岡城跡の D-56 グリッド内の円形土塹から出土の 16 世紀に属する北頭位仰臥屈葬人骨は年齢 15 ~ 17 歳の女性人骨 1 個体分であると思われる。

写真1. 頭蓋前面観



写真2. 頭蓋左侧面観

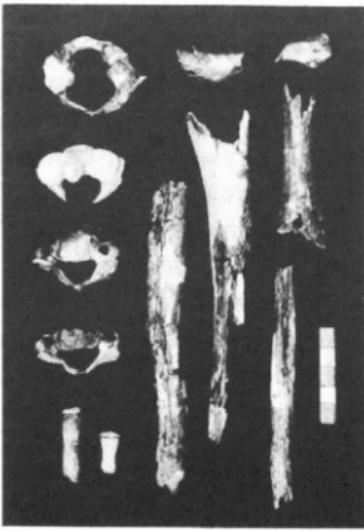


写真3. 頸椎および上・下肢骨片

VII 浪岡城跡出土の陶磁器

佐々木 達夫

1. はじめに

東北地方において、遺跡から出土する中世の陶磁器が考古学の研究対象として脚光を浴び始めたのは、この十数年間のことである。それは、中世の城館跡の発掘が大規模化し、さらに調査が継続されていることによるのである。青森県内では、日本海側の代表的な港町である十三ヶ所から、多くの中国の青磁が採集されることが、以前から知られていた。しかし、港に陸揚げされ運ばれた陶磁器を、誰が、どのような場所で、どのように使用していたかということになると、それは不明なことが多い。しかも、いつから、どのような陶磁器がどのくらい使用されていたのかということになると、さらに分からぬことばかりであった。

それが、最近の中世城館跡の発掘調査の進展によって、少しずつ明らかになってきたのである。中国陶磁器が日本海の海上交通路を運ばれてきたのは12世紀頃であることは、1976年に発掘された高館遺跡や、1981年に発掘された蓬田大館遺跡の出土品から知ることができる。また、多くの中国や日本各地の陶磁器が、盛んに使用され始めるのが14・15世紀であることは、1977～79年に発掘された尻八幡遺跡から知ることができた。さらに、15・16世紀には大量の中国・日本の陶磁器が城館で使用されていることは、1977年から継続発掘されている浪岡城遺跡、1978年から継続発掘されている根城遺跡の出土品から充分にうかがえるのである。この他にも、1976・77年に発掘された堀越城遺跡や、1974年から発掘が行われている弘前城遺跡の出土品も、この地方の陶磁器のありかたを知る資料として重要である。

青森県は歴史的に東西の二地域に分けることができるが、15・16世紀の二百年間ほどは、西の浪岡城と東の根城が、この地方を支配する代表的な領主の居城であった。ともに、70年代の後半から継続的な発掘調査が行われ、そこから出土する陶磁器は、北日本地域の生活と流通を知るうえで、欠くことのできない重要な資料となっている。浪岡城遺跡の場合は、7つある館のうちの一つである北館の発掘が、昭和53年から59年にかけての7年間に行われ、一つの館の全面的な発掘がほぼ終了した段階である。そこで、これまでの『浪岡城跡発掘調査報告書』で紹介されている、出土陶磁器の全体的な状況を次に見ることにし、さらに、浪岡城跡出土の陶磁器の地域的、時代的な特徴を考えることにしよう。

2. 陶磁器の出土状況

北館の発掘によって出土した陶磁器は、破片数でおよそ9,000点ほどである。堀で囲まれた北館の平坦部の面積は、15,450m²ほどであるから、2m²ほどで1点の陶磁器が出土していることになる。この数量は、決して多いとは言えないものである。中世の遺構が発見される面までは、表面から50～60cmほどの2から3層に分けられる土層が堆積している。出土した陶磁器の多くは、この土層の中から

発見されており、明確に遺構に伴なうものは極めて少ない。したがって、出土状態から廃棄された理由、さらには使用されていた状況を知ることは難しい。多くの陶磁器は、北館全体の発掘品として捉えればよいことが多い。

だが、中には、遺構の中から一括品として、纏まって出土する場合もある。例えば、1981年に発掘された井戸である、S E50遺構の埋土からの出土品は次のような状況であった。中国の青磁、白磁、染付は小さな破片で出土し、日本の美濃の灰釉・褐釉・黒釉の陶器、唐津の陶器、それに擂鉢は、壊れているが、大きな破片で出土しているのである。これは、美濃の灰釉折縁の皿、天目皿・碗、唐津の碗と皿・鐵絵皿が、同時期に使用されていたことを示しているのである。これらは、16世紀末の組合せである。しかし、こうした一括品が、どこで、どのように使用されていたかという詳細については、出土状況からでは、まだ不明な点が多い。

3. 出土陶磁器の概要

出土した陶磁器の生産された時代と産地はどこであり、どのような種類と器種があるのであろうか。まず、生産された時代である。12世紀の製品も少しあるが、多くは15・16世紀の陶磁器である。また、生産地は中国と日本が主であり、それにわずかな量の朝鮮の陶磁器が混じっている状況である。種類は、時代と産地が変わるためにつれて違いがみられるけれども、中国の青磁と白磁、染付、それに日本の施釉陶器と無釉の炻器が主である。器種は皿と碗が中心となり、擂鉢や鉢、壺、壺などがみられる。

こうした陶磁器のうち、1978年から1982年までの5年間に北館から出土した、全体的な数量は次の表のようである。ただし、1978年の数量には東館出土品も含まれている。

Ⅳ・表-1 浪岡城跡北館出土陶磁器の数量概略(1978-1982年)

年	中 国									朝 鮮	日 本									計														
	青 磁			白 磁			染 付				赤 磁			黒 褐 釉			美濃・瀬戸 (灰釉)			美濃・瀬戸 (褐釉)			志野			唐 津			擂 鉢					
	碗	皿	他	皿	小皿	他	皿	碗	他		皿	他	皿	他	皿	他	皿	他	皿	皿	他	皿	他	皿	他	皿	他	皿	他					
1978	44	23	5	15	1	1	61	17	1								53	6	8		6	3	1		52	1	5	1	304					
1979	102	74	14	9		2	144	6	2								2	104	7	35		3	29		60	58	-	-	651					
1980	173	109	13	123	3	1	149	39	4	2							161	15	32	24	1	27		111	163		3	1153						
1981	209	145	32	167	10	39	274	25	26	6							1	276	23	39	32	4	4	71	4	149	57	37	3	1634				
1982	218	193	35	104	4	13	265	72	6	2	8	4	285	19	59	13	5	12	140	13	125	52	186	3	1836									
計	746	544	99	418	18	56	893	160	39	10	8	7	879	70	173	69	15	23	268	17	497	331	228	10	5578									
%	13.3	9.7	1.8	7.5	0.3	1.0	16.0	2.9	0.7								15.8	1.3	3.1	1.2	0.3	0.4	4.8	0.3										
	24.8										19.6										22.0									0.2				
	53.6										0.1	46.3																						

(『浪岡城跡』1984年、135頁の表を改変)

中国の陶磁器が53.6%で過半数を占め、日本の陶磁器は46.3%で、中国陶磁器の8割ほどである。他には、朝鮮の陶器が0.1%あるにすぎない。中国陶磁器の中では、最も多いのは青磁であり、24.8%をしめて、碗と皿が主となる。ついで、染付が19.6%で皿が主である。白磁は8.8%で少ないが、皿が主となる。中国陶磁器は皿が多く、種類は染付、青磁、白磁であり、碗は青磁が主となっているのである。日本の陶磁器は美濃・瀬戸の施釉陶器が22.1%で最も多い。中でも、灰釉の皿が多く、他は天目碗などが少しの割合でみられる程度である。この他は、唐津の施釉陶器が5.1%で皿が主となり、越前や珠洲、その他の地域の擂鉢が8.9%、瓦器が5.9%、越前を主とする甕や壺が4.1%となる。そして、土器は僅かに0.2%が出土しているにすぎない。

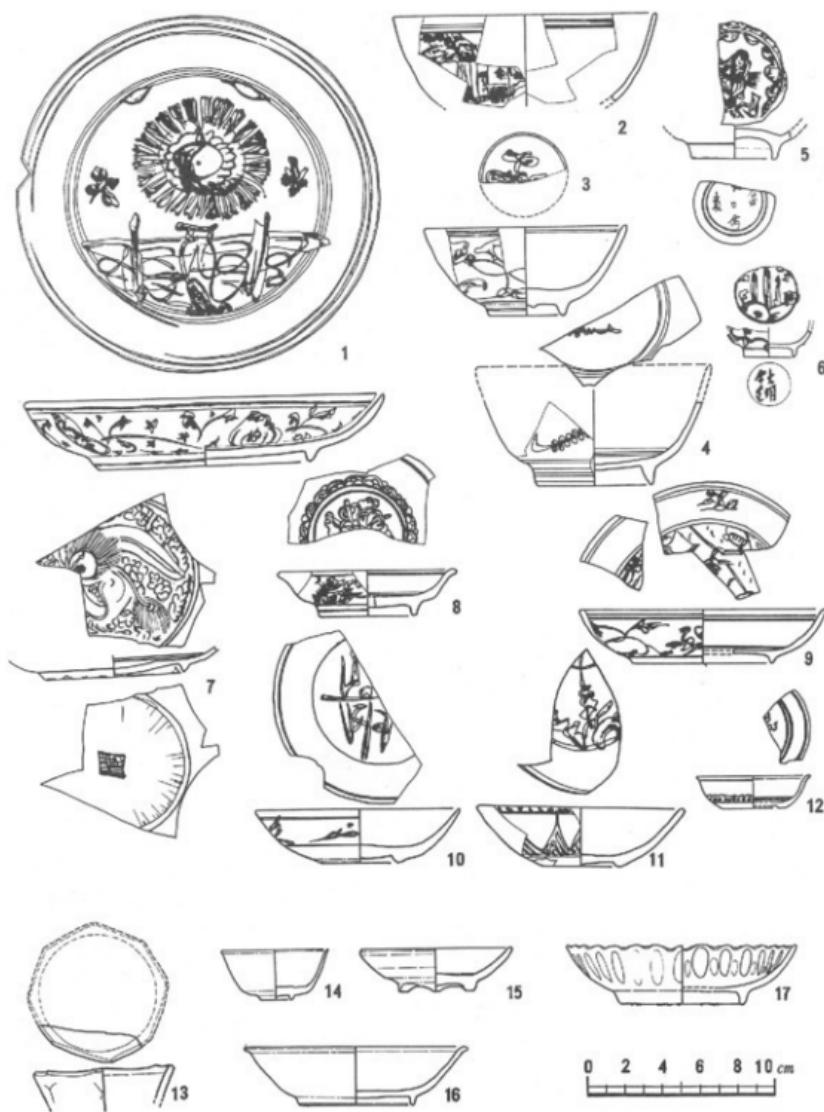
こうした出土陶磁器の比率は、浪岡城跡で使用されていた生活品としての陶磁器を知るうえで、さらに、当時の商品流通の状態を知るうえで、重要な資料となるものである。ただし、そのためには、個々の陶磁器が使用されていた時代、あるいは、生産された時代が正確に分からなければならない。その上、生産地も正しく推定することが必要である。表1に掲載した資料は、その内容をより詳細に分析されて、歴史資料としての価値を高めることが待たれている。

これまでに出土した陶磁器の種類と器種を挙げると、次のようになる。中国の製品では、青磁の碗、皿、壺、香炉、鉢、盤、壺、白磁の皿、壺、碗、壺、染付の皿、碗、壺、鉢、赤絵の皿、碗、黒褐色釉の碗、壺である。朝鮮の製品では、皿、碗がある。日本の製品では、美濃・瀬戸窯は、灰釉の皿、卸皿、碗、大皿・鉢、鉢、壺、黒褐色釉の碗、小壺、皿、壺、茶入、擂鉢、天目台、志野の皿がある。

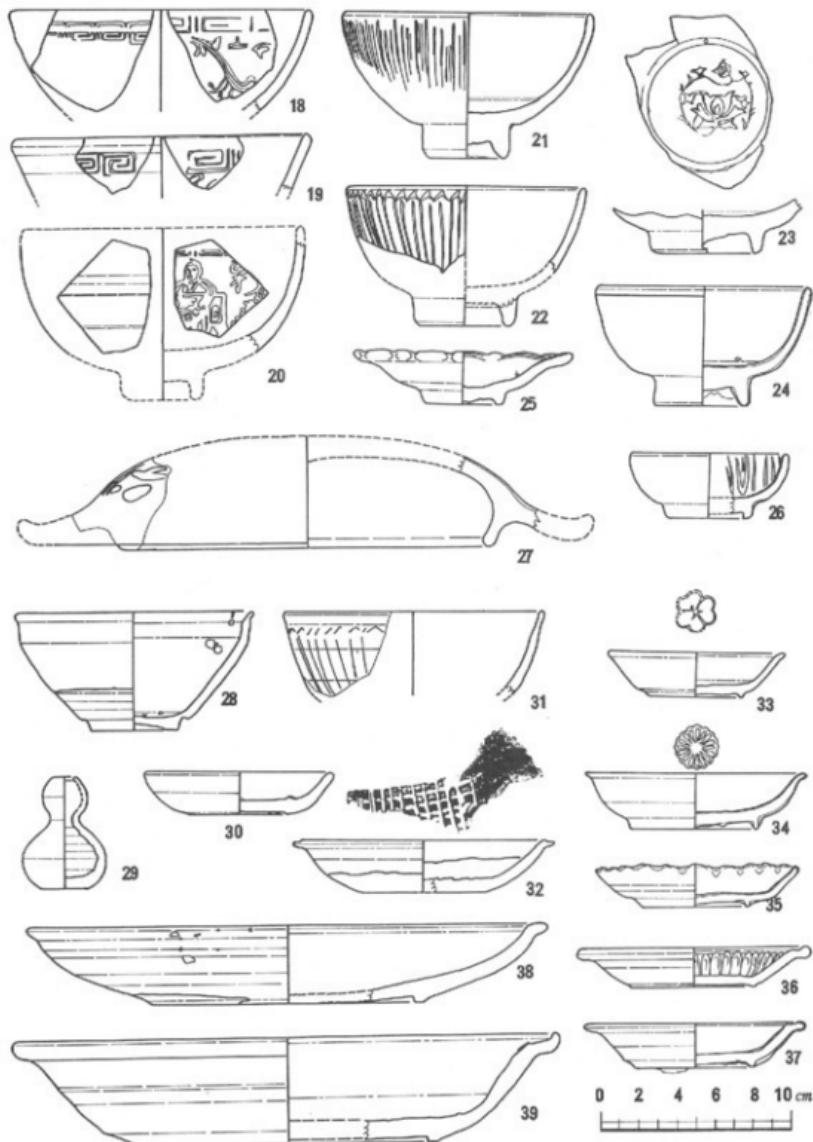
越前窯は、壺、擂鉢、甕がある。珠洲窯は、擂鉢と壺がある。信楽窯は壺がある。この他に、土器の類である瓦器の火鉢、手あぶり、行火、それに、土器の皿がある。こうした陶磁器には、様々な形態と文様がみられるが、詳細は出土した年次の報告書に掲載してある。

また、こうした陶磁器の中で、比較的多く出土した、あるいは、珍しい種類・器種のいくつかを図示すると、図の1から3のようなものである。図1は、中国の染付と白磁である。染付は、皿が1、7-12、碗が2-5、壺が6である。白磁は、壺が13-14、皿が15-17である。図2は、中国の青磁と、日本の美濃窯の製品である。青磁は、碗が18-24、皿が25、壺が26、酒海壺の蓋が27である。美濃は、天目碗が28、褐色釉の小壺が29、天目皿が30である。灰釉のかけられた製品は、碗が31、卸皿が32、小皿が33-37、大皿、あるいは鉢が38-39である。図3は、朝鮮と中国の陶器、日本の唐津、越前、その他の地域の陶器である。朝鮮の陶器は40の小皿である。唐津は、碗が41、皿が42-43である。中国の陶器は44-45の壺である。越前は、壺が46、擂鉢が49である。47-48は火鉢の類の瓦器であるが、畿内からの輸入品の可能性が高いものである。

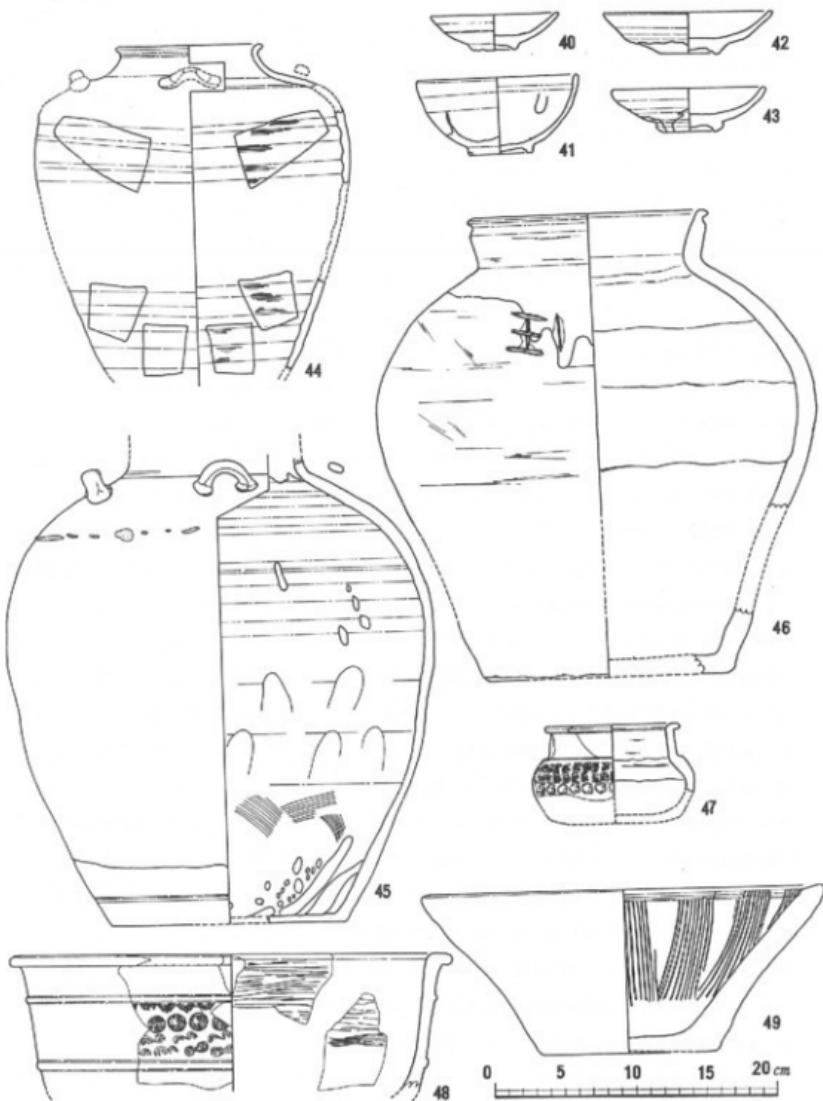
VII・図一1 染付・自磁実測図



図一2 青磁・美濃実測図



図一三 朝鮮・中国壺・唐津・越前・瓦器実測図



4. 浪岡城跡出土陶磁器の特徴

浪岡城跡から出土した陶磁器の特徴は、次のような点にあると思われる。第一に、中世の東北地方北部の有力な城館から出土したものであること。第二に、かなり広い面積が発掘されており、出土品の全体的な組合せが探れること。第三に、中国製品と日本製品の比率を比較すると、中国陶磁器が多いこと。第四に、城館の近在で生産された陶磁器はほとんどなく、ほぼすべてが交易によって運ばれたものであること。第五に、出土陶磁器の器種をみると、皿が最も多く、次いで碗であり、さらに擂鉢となること。第六に、同じような種類と器種が多く、大量に生産された貿易品が主であること。第七に、15世紀後半から16世紀末にかけての製品が主体を占めていること。以上のことである。

このような、浪岡城跡出土の陶磁器の特徴を、北日本の城館などの遺跡出土陶磁器との比較の中で考えてみると、どのようになるのであろうか。「遺跡出土陶磁器の研究」（『金沢大学文学部論集史学篇』2号、1982年）に述べた資料に基づいて、概観してみよう。

中国陶磁器が、北日本の地域に、日本海の海上交通路を貿易品として運ばれるのは、12世紀からである。朝鮮の陶磁器は、14世紀から発見されているが、その数量は極めて僅かなものである。日本の陶磁器も、中国陶磁器と共にかなりの数量が運ばれている。これは、北日本では窯業生産が衰退しているためである。14～15世紀になると、中国の青磁と白磁が主要な製品になり、これに日本の美濃・瀬戸や越前、珠洲などの窯の製品が加わっている。16世紀に入ると、中国の染付の皿と碗が大量に発見されるようになる。青磁の碗と皿、白磁の皿もみられる。日本の陶磁器は、東海地方の施釉陶器と、北陸地方の無釉焼締め陶器が多い。そして、17世紀に入ると、肥前の陶磁器が主となって、中国や他の日本の陶磁器を駆逐することになるのである。

中国陶磁器の出土量は、13世紀までは比較的少ない。14世紀後半から15世紀には急激に増加するようになり、日本陶磁器の1.7倍もの量が出土する遺跡も現れている。16世紀の遺跡では、2.6倍、1.9倍、1.7倍という量を出土する遺跡がある。しかし、16世紀末から17世紀にかけての遺跡では、0.8倍と減少し、16世紀後半に中国陶磁器と日本陶磁器の量的な転換が起こっていることを知ることができる。浪岡城跡出土の陶磁器は、量的に優位を占めている中国陶磁器に、日本の陶磁器が逼迫していく時期のものであった。したがって、出土品は少なくとも2時期に分類されることが必要となる。

14世紀後半から16世紀中葉に至る期間に、国内の陶磁器の2倍を超える量の中国陶磁器が使用されていたのである。こうした例は、他の地域をみても極めて珍しいことである。しかも、こうした中国陶磁器を主に使用している遺跡は城館であり、農民層の住居からは中国陶磁器が出土する量は極めて少ない。浪岡城跡出土の陶磁器は、この地域の、この時代の支配者層が、日常生活で用いていたものが、いかに特殊であったかを教えてくれるのである。

また、浪岡城跡などの北日本から出土する中国陶磁器の生産地は、中国の南方地域の製品であった。北方地域の製品は、まったく見られないである。しかも、その地域で生産されたすべての種類が運ばれているのではなく、青磁、白磁、染付に限られているのである。これは、生活で用いられた陶磁

器は、日本の陶磁器との組合せによって、輸入される種類と器種が選択されていたからである。

北日本で出土する陶磁器全体の中で、14世紀後半から16世紀末にかけて、最も多く用いられた器種は皿である。15世紀には3割を占め、16世紀には7割に達している。14・15世紀には、皿の8割を白磁が占め、1割程度が青磁となる。最も基本的な飲食器は、中国の陶磁器が用いられているのである。16世紀前半には染付が4割ほどを占めるようになり、白磁と青磁を合せて6割となる。そして、16世紀中葉以降は、日本の皿が多くなっていくのである。

皿について多いのは、碗である。14世紀から16世紀末まで、出土する陶磁器全体の2割ほどを占めている。そのうち14・15世紀には、青磁が6割5分で、白磁と天目、染付を合せると、中国陶磁器が9割に達している。16世紀前半には、青磁が6割前後であるが、染付が少しづつ増加し、16世紀後半には青磁と染付が3割ほどで同じ量となり、次いで白磁となる。こうした中国陶磁器が、やはり碗の8割を占めているのである。

また、擂鉢や壺、甕などは、日本の陶磁器が大部分を占めている。台所用品は日本の製品で、中国から輸入される陶磁器は、小型の飲食器が主であったのである。

こうして、浪岡城跡から出土する中国陶磁器も、青磁・白磁から染付へと移り、皿と碗が主要な器種であり、日本の陶器と組合せられて用いられていたのである。こうした特徴を引き起した最大の原因は、当時の東アジアの陶磁貿易のありかたによるのであろう。そして、浪岡城跡出土の陶磁器の特徴をさらに際立たせるのは、北日本の窯業生産が衰退していたことと、日本海の海上交通路の発達によるところが大きいと思われる。

今後、さらに様々な視点から出土陶磁器の詳細な分析が必要になるであろうが、その際に、浪岡城跡出土の陶磁器が果たす役割は、極めて大きなものとなるであろう。

VIII 浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について

高島成備

1. はじめに

浪岡城跡北館の発掘調査は昭和53年度より始められ、昭和58年度を以て一応の終了とされ、平場のほぼ全面の調査を終えて、その内容をとらえることができるようになった。そこで、北館に於いて検出された掘立柱建物跡を再検討し、建築史・住宅史の立場から、これ迄に判明したものと纏めてみるとことにしたのである。

北館に於いて、これ迄に検出された掘立柱建物は大小合せて40棟を数える。この中には、調査区域の外に延びていると見られ、建物跡として完結していないもの2棟（S B32、58建物跡）が含まれているため、ここでの考察の対象となるものは38棟である。その殆どのものは既に報告されてはいるが、今回の再検討によって、特にその平面形に於いて、先の報告を訂正しなければならなくなつたものも相当数にのぼる。それらについては、後述の際に載せる平面図によって見ていただきたい。ここでは、この38棟の掘立柱建物跡の規模や平面形式について、現段階での考察を述べるものである。

青森県内に於いては、ここ浪岡城跡と同様に、八戸市の根城跡でも環境整備を前提とした発掘調査が昭和53年度より継続して行われており、多数の掘立柱建物跡が検出されている。ほぼ同時期の中世城郭跡であり、双方より検出された掘立柱建物跡の平面形式の比較は、青森県の西部と東部に於る中世文化の在り方の一端を知るものとなろう。

これ迄に見られる中世城郭に関する論功の多くは、その立地論や各郭の配列に見られる形式について論じるのみであった。中世に遡さかのぼる住宅の遺構は非常に限られたものであり、更に、中世城郭内の建物の姿について知りうる資料も、若干の絵巻物などに描かれたものに過ぎなかった。しかし、このように調査された城跡に於いては、その中に建つ建物の規模や種類について、或は、一つの郭の中のそれらの配置の在り方について迄も論じうる可能性をも有しているのである。

昭和56年度より調査顧問として発掘調査に参加させていただき、今回このようにして、浪岡城跡北館の掘立柱建物跡について纏める機会を与えて下さった、浪岡町教育委員会に深く感謝するものである。この小稿は、発掘調査の現場に於いて、或は、整理室に於いて、調査担当の工藤清泰氏との度重なる検討の上で纏まつたものである。また、調査顧問として参加された、弘前大学教授・村越潔氏や金沢大学助教授・佐々木達夫氏からは多くのご教示を頂いた。有益な資料のご提示を受けたことと共に、ここに記して謝意を表するものである。

2. その配置について

2-a 北館の概要

浪岡城跡北館は、城跡全体の位置関係から、主郭に準ずる館であるとの認識で調査されて来ている。北館全体を見ると、周辺部には、竪穴式建物跡が配置されており、掘立柱建物跡は中央部に或る櫓まり

以て配されているようである。

東北地方北部の中世城郭跡に於いては、掘立柱建物跡と竪穴式建物跡とが共伴して検出されることが一つの特徴として挙げられる。一つの郭の中での竪穴式建物跡の配置の在り方や掘立柱建物跡との位置関係は、中世城郭跡の様相を知る上で興味ある事柄である。この竪穴式建物跡は、北館に於いて最も多く検出されたものであり、その殆どが中世に構築されたものと見られており、その規模や形態も多様である。今のところ、住居・作業場・倉庫などの機能が推定されているが、明確ではない。

掘立柱建物跡について見ると、その規模については、後に詳述するように、4間×5間以上の規模を有するものと、2間×3間程度のものとに大別することができ、同じような規模の建物跡については、2～3期の建替えがなされていたことが確認されている。このことは、掘立柱建物跡の建替えが同一の場所で行われた結果と推定され、各建物跡が、或る纏まりを以て、機能別に地区割されていたことも推定されるのである。また、規模の大きなものは、20～30m程の距離をおいて配置され、棟の方向も似通ったものになっていることが注目される。これに対して小規模なものは、配置にもこれといった規則性も見られず、棟の方向も一定ではない。しかしながら、掘立柱建物跡や竪穴式建物跡・井戸跡・溝跡などの検出状況から、建物跡の相互機能をも含めて、夫々に一定の領域を以て区画されていたらしいことも推察されるようになってきている。

北館の外の郭との連絡通路については、唯一ヶ所その西端で、西館を向いた形で橋らしいものが架けられ、楔形状に鍵の手に折れて、門を潜って北館に入るようなところが発見されている。北館の内部の通路については、明確な痕跡が残されていないながらも、掘立柱建物跡の配置は、明らかに、北側に並ぶ一群と南側に並ぶものとに分けることができ、その間のところが主要通路ではなかったかと推定されるのであるが、そこに、井戸跡や溝跡や竪穴式建物跡などが検出されており、時期によって、かなり移動していたものであることがうかがわれる。

2-b 建物跡の重複関係

図-1に示す掘立柱建物跡の配置を見ると、北館の西端には、門と見られるSB57建物跡があり、その南にSB23、SB24、SB25、SB26建物跡と4棟の大規模な建物跡が重複して検出されている。ここは北館の中でも重要な場所だったらしく、15世紀後葉から17世紀前葉迄といふ渡岡城跡の存続した全ての時期に亘って、1棟づつ建物が建替えられて來たものようである。このすぐ北東側に、SB27、SB52、SB53建物跡と3棟の中規模のものが、僅かづつ間隔をおきながら、重なり合って検出されている。出土遺物からSB27建物跡は16世紀中葉のものと見られており、これに伴う柱穴をSB52建物跡が切っており、更にその西側のSB53建物跡の柱穴をも切っている。SB53建物跡は、出土遺物から夫々16世紀中葉、17世紀前葉とされるSB24、SB26建物跡とは同時に存在することができないものであり、その年代は16世紀後葉と推定されるのである。

先のところから約50m東側に大規模なSB18建物跡とSB19建物跡とが重なって検出されているが、出土遺物からも柱穴の切り合い関係からも、SB19建物跡が古くて16世紀前葉と見られ、SB18建物

図-1 滝岡城跡北館建物跡配置図



跡は16世紀後葉と見られている。そのすぐ東側に小さなS B17建物跡が一つだけある。この場所から北東へ約40mのところで、大きなS B20・S B12建物跡と小さなS B50・S B51建物跡との4棟が重複して在る。S B51建物跡の柱穴が、16世紀中葉のS B20建物跡に切られているところから、16世紀前葉と知られる。S B12建物跡については、隣接する建物跡の柱穴との切り合い関係はないものの、その出土遺物より16世紀後葉と推定されている。S B50建物跡については、現段階でその年代は不明である。

このすぐ東側に、16世紀後葉と見られているS B15建物跡が単独で建ち、更にその東に続いて、小規模なS B04・S B09建物跡と、大規模なS B03建物跡とS B31建物跡とが重なって検出されている。ここでは、S B04・S B09建物跡がその出土遺物より16世紀前葉と見られており、このS B04建物跡の柱穴をS B03建物跡のものが切っていることもあるが、更に、これがS B31建物跡の柱穴に切られている。即ち、S B03建物跡はその出土遺物からも16世紀中葉と認められ、S B31建物跡は16世紀後葉以降のものと推定されるのである。

この場所から南西に大きなS B14建物跡と小さなS B29・S B13建物跡とが夫々独立してある。S B14及びS B13建物跡は、その出土遺物より夫々16世紀中葉と16世紀前葉と知られるが、S B29建物跡は不明である。これらから東へ約20mのところに、S B02・S B22・S B28建物跡が重なり合って検出されている。ここで切り合い関係は、S B02建物跡がS B22建物跡を切っていながら、

S B28建物跡に切られているのを見ることができ、S B02建物跡がその出土遺物より16世紀中葉とされていることから、S B22建物跡が16世紀前葉、S B28建物跡が16世紀後葉以降と見ることができよう。

更にその南西約30mのところに、S B05・S B08・S B10建物跡という大規模な3棟の建物跡が重なり合って検出されている。ここでは、S B05建物跡の柱穴がS B10建物跡によって切られ、S B10建物跡の柱穴がS B08建物跡のものによって切られているのを見る。出土遺物より、S B05建物跡が16世紀前葉、S B10建物跡が16世紀中葉とされていることから、S B08建物跡は16世紀後葉以降のものと見られるのである。この西側約25mのところに、S B21建物跡が1棟だけあり、16世紀中葉のものと見られている。

先のS B02建物跡のところから約15m程東で、北館の東端ともいえるところに、S B06・S B07・S B16建物跡と小規模な建物跡3棟が重複して検出されている。S B06建物跡とS B07建物跡については、柱穴の切り合い関係からも出土遺物の面からも、S B06建物跡が古く16世紀前葉とされ、S B07建物跡が16世紀中葉とされているが、S B16建物跡については、何れの関係からも検討できず、その年代は不明である。また、この南側約25mのところに、S B11建物跡が一つだけ検出されているが、これも年代は不明である。

北館の北東端ともいえるところには、S B30・S B54・S B55・S B56建物跡と大小の建物跡が重なって検出されている。これらの中で、S B55建物跡とS B56建物跡とは夫々に単独で建つものであるが、遺物より16世紀中葉と見られているS B30建物跡の柱穴がS B54建物跡のものを切っているのを見るのである。

2-C 北館の時期区分について

このように見て來ると、浪岡城跡北館の掘立柱建物跡は、凡そ3期に区分して考えられるようである。

第1期 15世紀後半～16世紀前葉

第2期 16世紀中葉

第3期 16世紀後葉～17世紀前葉

となろう。そして第2期とした16世紀中葉頃が北館の最盛期であったと推定され、大規模な掘立柱建物跡も最も多く検出されているようである。

図-2、-3、-4は、その年代の推定できた掘立柱建物跡を、夫々の時期毎に描いて見たものである。第1期に於いては、S B57、S B23、S B19、S B51、S B04、S B09、S B13、S B22、S B05、S B07、S B17、S B15建物跡といった約12棟の掘立柱建物跡が知られるのである。続く第2期については、S B57、S B24、S B27、S B20、S B03、S B21、S B14、S B02、S B10、S B06、S B30建物跡などの約11棟が存在したものと推定される。更に第3期については、S B57、S B25、S B26、S B53、S B52、S B18、S B12、S B08、S B31、S B

28建物跡などの約10棟が知られるのである。

第1期は小規模な建物跡が多く、大きなものは3棟を数えるに過ぎないのに対して、第2期とされた10棟の内、7棟迄が大規模なものである。そして第3期に於いては、規模の大きなもの6棟を見るのである。しかしこれらは、その時期について一応の推定が成立つもののみであり、現段階で時期の不明なものが大小9棟もあり、今後の検討結果によっては、その様相が異ったものともなりうるのである。

2-d 小結

北館の配置については、掘立柱建物跡と竪穴式建物跡との関係が今一つ明らかではなく、今後の大規模な検討課題である。また、堀跡や井戸跡・溝跡などの時期が確定され、一つの掘立柱建物跡と組み合わされるものが推定されるようになると、新たな興味ある考察がなされうるであろう。

更に、一部で検出された土壘の形状も、全体については明らかにされていない。また、外の郭との連絡通路についても、それを推定させるものが一箇所検出されただけである。北館周辺部の更なる調査が期待されるのである。

3 その規模について

ここで検出された掘立柱建物跡の中には、大規模な殿舎としての建物跡から、小規模で物置や倉庫を想わせるもの、また、門と見られるものなども含まれている。ここでは、それらを梁行の柱間数によって区別して述べてみたい。この梁行柱間数は、主屋の部分について見たものであり、下屋部分や張出し部分については考えていない。これら掘立柱建物跡を梁行柱間数で分類することは、大々の建物跡の平面形式の考察や上屋構造の推察に、桁行柱間数で見るよりも、より利便があると考えたためである。

梁行柱間数で分類すると、梁行のないものが1例あり、1間と見られるものが2例、2間のものが15例で最も多く、3間のものは3例、4間のものが5例、5間のものは10例、そして6間のものが2例となり、それ以上のものは見られないのである。

3-a 梁行のないもの

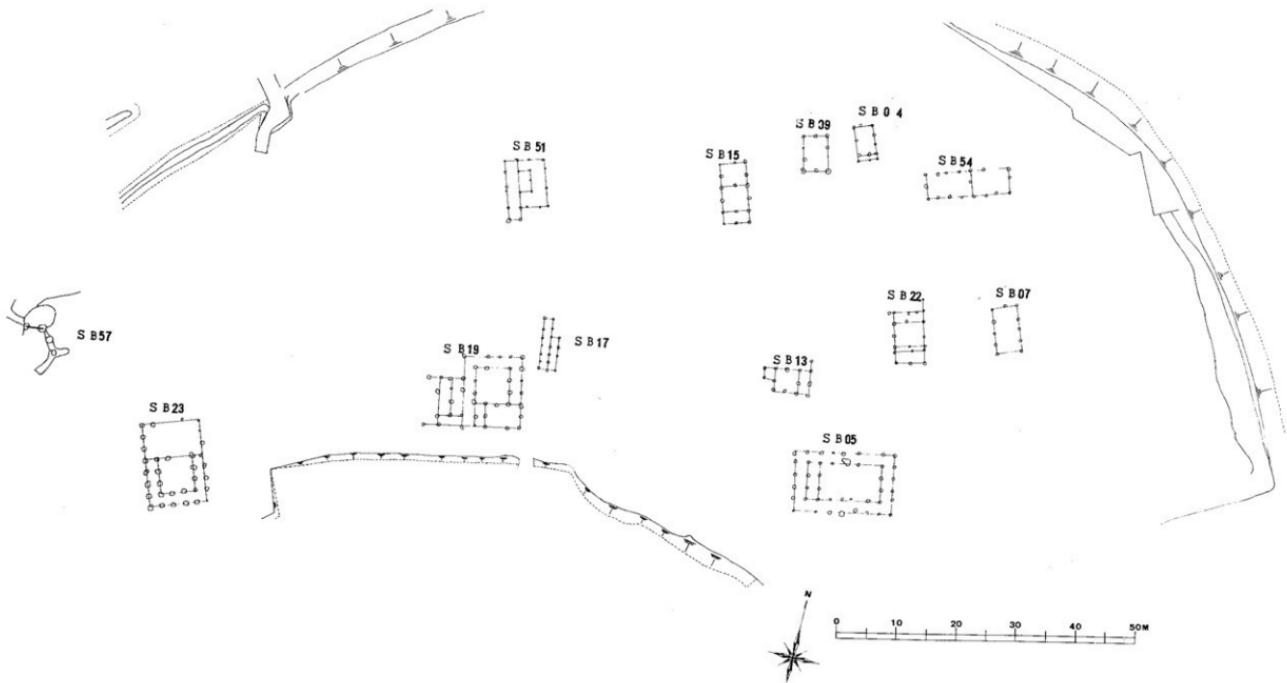
北館の西端で検出されたS B 57建物跡(図-5)がある。西館との連絡路の一部と見られ、これを潜って横形状に鍵の手に折れて、西側の堀に向っているところであり、大きな柱穴が2個よりなる門跡と見られ、その柱間は凡そ10.0尺である。

柱が2本立つ門の形式としては、棟門或は冠木門が考えられるが、今のところ、どちらとも比定しがたい。建替えられた跡はなく、北館の早創当時からその終り迄、ここに在ったものと見られる。

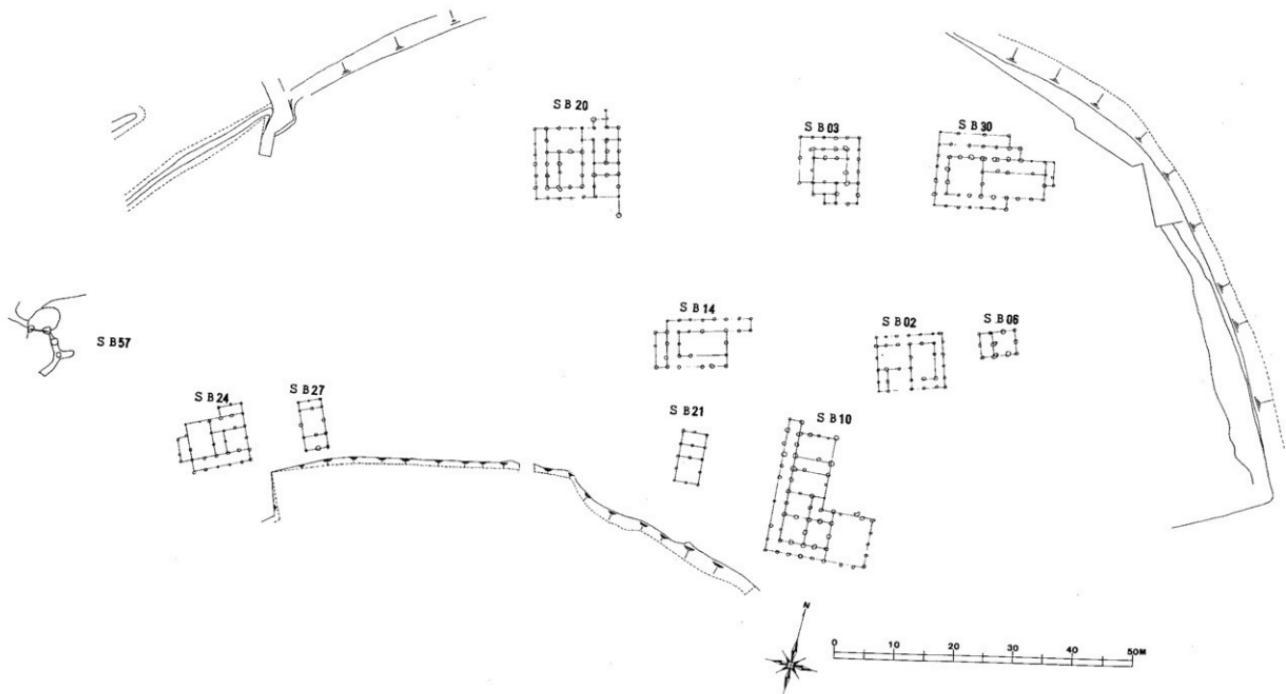
3-b 梁行1間のもの

(1) S B 17建物跡(図-6) これは中央西寄りの張り粘土を掘った形で検出された。桁行6間梁行1間のものに桁行4間分の庇の付いたものと見られる。梁行方向では4.8尺の2間9.6尺を数えるが、桁行方向はまちまちで、北から6.0・5.0・4.0・5.0・5.5・4.5尺の30.0尺となるよう

図・図一2 第1期振立柱建物跡配置図



図・図-3 第2期振立柱建物跡配置図



圖一四 第3期擬立柱建物跡配置圖

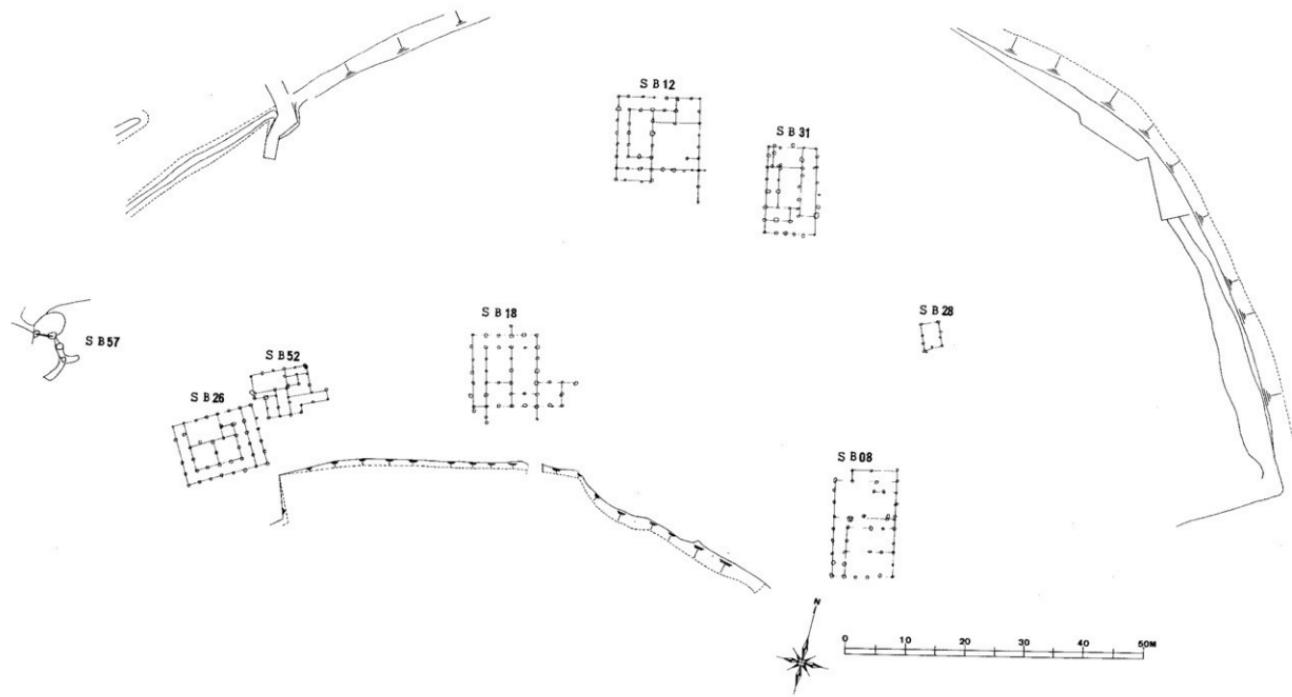


図-6 SB17

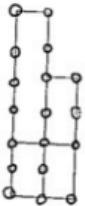


図-5 SB57



図-7 SB56

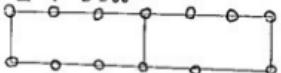


図-8 SB04

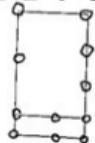


図-9 SB09

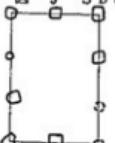


図-10 SB13

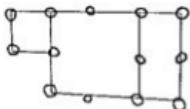


図-11 SB15

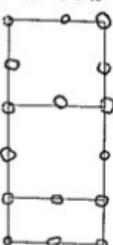


図-12 SB21

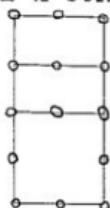
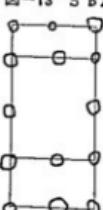


図-13 SB27



0 2 4 6 8 10 15m

である。出土遺物から15世紀後葉から16世紀前葉と見られている。

(2) SB56建物跡(図-7) 北東隅のSB30建物跡と重複する形で検出された。桁行6間、梁行1間のものである。梁間は約8.0尺、桁行柱間は6.6尺が4間と6.0尺が2間の38.4尺である。柱穴の切り合い関係もなく、出土遺物も不明である。

3-c 梁行2間のもの

15例をも数えるということは小規模な建物跡として最も基本的なものであったと考えられるものであり、一般の建物としても、梁行2間といふのは一つの基本形であったのであろう。

この15例の中では、16世紀前葉以前と見られるものが4例、中葉のものが2例、後葉から17世紀前葉が2例、そして現段階で時期不明のものが7例となっている。

(1) SB04建物跡(図-8) 桁行3間の身舎の南側に1間の庇の付いたものである。西側及び北側では、柱穴に不明なところもあるが、桁行が約5.3尺の3間と約3.0尺の18.9尺となり、梁行が約6.0尺と4.0尺との10.0尺の2間の規模である。

(2) SB09建物跡(図-9) 桁行3間で、柱穴は全て明瞭に並んでいる。桁行では6.6尺2間と6.0尺の19.2尺になり、梁行では6.6尺2間の13.2尺である。

(3) SB13建物跡(図-10) 全体では、桁行3間の西側に1間×1間の張出しを持っており、中央に2間×2間の室がある。桁行で6.0・7.5・6.0尺の19.5尺を測り、梁行では、6.6尺2間の13.2尺であり、西側の張出しへは6.0尺四方である。

図-14 SB 22

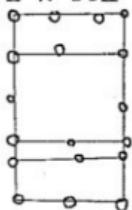


図-16 SB 28

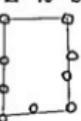


図-15 SB 54

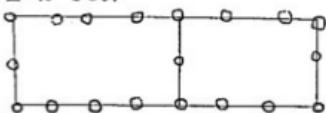


図-17 SB 55

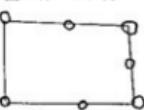


図-18 SB 06

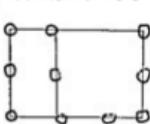


図-19 SB 07

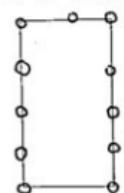


図-20 SB 29

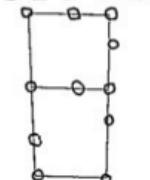


図-22 SB 11

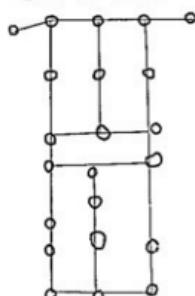
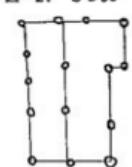


図-21 SB 50



0 2 4 6 8 10 12 14 15m

(4) SB 15建物跡(図-11) 桁行6間

という、この規模としては長大なものであり、内部に2間×2間の室を2室連ねている。桁行では、ほぼ等間で6.6尺の6間で39.6尺となり、梁行では約7.2尺が2間で14.4尺である。

以上の4例が16世紀前葉以前のものとみなされているものである。

(5) SB 21建物跡(図-12) 桁行4間

のもので、南端に2間×2間の1室を有している。柱間寸法は、桁行で約7.0尺等間の28.0尺であり、梁行では約6.6尺の等間で13.2尺と見られる。

(6) SB 27建物跡(図-13) 桁行4間

であり、先のSB 21建物跡とはほぼ同規模であるが、ここでは中央に2間×2間の室が取られており。桁行で4.5・7.5・7.5・7.5尺の27.0尺、梁行が6.0尺の2間で12.0尺である。

この2例が16世紀中葉のものとされている。

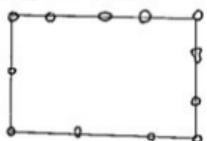
(7) SB 22建物跡(図-14) 柱穴の並び

びは不規則ではあるが、桁行4.5間梁行2間の1棟の建物跡を見たい。内部に2間×2間の室を持つが、これ迄のものとはその間取りが違い、複雑なものとなっている。規模も多少大きくなり、桁行で6.0・6.6・6.6・3.0・6.0尺の28.2尺となり、梁行は8.0尺2間の16.0尺である。この建物跡の柱穴は16世紀中葉とされるSB 02建物跡によって切られてしまい、16世紀前葉頃のものと見ることができよう。

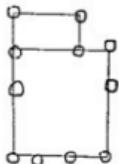
(8) SB 54建物跡(図-15) 先例と同様に、この建物跡の柱穴は、16世紀中葉とされ

ているSB 30建物跡によって切られていることから、16世紀前葉のものと見ることができる。桁行7間の長大なものであるが、4間と3間と

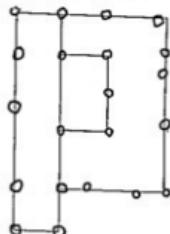
図・図-24 S B53



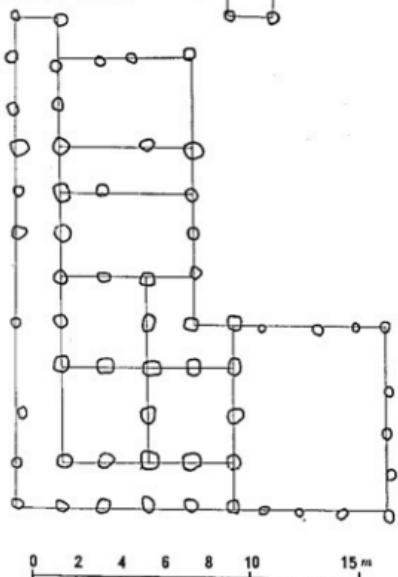
図・図-23 S B16



図・図-25 S B51



図・図-26 S B10



に仕切られている。柱間寸法は、桁行で $5.0 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 7.0$ 尺の 45.0 尺となり、梁行では $6.0 \cdot 7.0$ 尺の 13.6 尺と計測されるようである。

(9) S B 28建物跡(図-16) 桁行3間といつても柱間寸法が小さく、小規模な建物跡である。梁行では $5.0 \cdot 5.0$ 尺の 10.0 尺であり、桁行でも $6.6 \cdot 4.0 \cdot 4.0$ 尺の 14.6 尺位である。

(10) S B 55建物跡(図-17) 桁行2間であるが、先の3間のS B28建物跡よりも大きい建物跡である。桁行で $10.0 \cdot 9.0$ 尺の 19.0 尺であり、梁行が $6.0 \cdot 6.0$ 尺の 12.0 尺である。

(11) S B 06建物跡(図-18) 桁行3間で東側に2間×2間の室を有している。柱間寸法は、桁行で $7.0 \cdot 7.0 \cdot 6.0$ 尺の 20.0 尺となり、梁行は $6.0 \cdot 6.0$ 尺の 13.2 尺である。

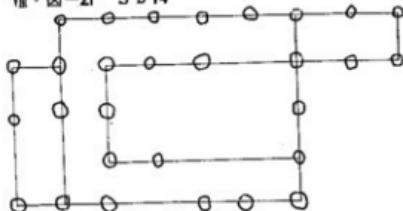
(12) S B 07建物跡(図-19) 桁行4間であるが、内部は一室である。桁行で $6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 5.0$ 尺の 24.8 尺と測ることができ、梁行は $8.0 \cdot 5.5$ 尺の 13.5 尺位である。

先のS B06建物跡との切り合いが認められ、こちらが古いものと知られるが、その時期については確定することができなかった。

(13) S B 29建物跡(図-20) 桁行4間であるが、2間×2間の2室に仕切られている。柱間寸法は、桁行で $5.0 \cdot 6.0 \cdot 5.0 \cdot 8.0$ 尺の 24.0 尺程であり、梁行では $6.6 \cdot 6.0$ 尺の 12.6 尺と測定される。

(14) S B 50建物跡(図-21) 柱穴は不揃いであるが桁行4間とみられ、西側に4間×1間を取り、東側に2間×1間を縦横並いに配している。規模は、西側の桁行で $5.0 \cdot 4.0 \cdot 4.3 \cdot 7.5$ 尺の 20.8 尺程となり、南側梁行で 6.0

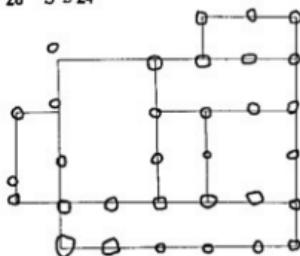
図・図-27 S B 14



・ 6.0尺の12.0尺となっている。

- (5) S B 11建物跡(図-22) 柱行6間と見られるが、柱穴の並びが不揃いのため、柱間寸法もまちまちであり、柱行方向に大きな寸法が見られる。中央に2間×1間の横長の室を取り、その南北に縦長の室を2室づつ並べている。柱行方向で7.5・9.0・5.0・8.0・4.5
・ 6.6尺の40.6尺となり、梁行が7.0・7.0尺の14.0尺程度である。

図・図-28 S B 24



(6)から(8)に挙げた建物跡については、出土遺物よりもその時期を決定することができず、また、重複関係から見ても、S B 06建物跡とS B 07建物跡との切り合いより、S B 07建物跡が古いものと推定できるのみで、他は全く不明である。

3-d 梁行3間のもの

- (1) S B 16建物跡(図-23) 3間×2間のものに1間×1間の張出しの付いたものであるが、2間の方が柱間寸法が大きいため、こちらを柱行方向とみて、梁行3間のものとして分類した。規模は、柱行方向の張出しへも含めて、5.5・6.0・10.6尺の22.1尺を測り、梁行では4.0・5.0・6.0尺の15.0尺程度のものである。

先に述べたS B 06建物跡、S B 07建物跡との3棟が重複し切り合っており、その中では最も早い時期のものではあるが、具体的には確定できなかった。

- (2) S B 53建物跡(図-24) 柱行4間とみられ、内部は一室である。西側の柱割で梁行3間のものとした。柱行で5.5・8.5・6.0・8.0尺の28.0尺を数え、梁行では5.5・7.0・6.0の18.5尺を測る。前述したS B 27建物跡

図・図-29 S B 03

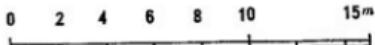
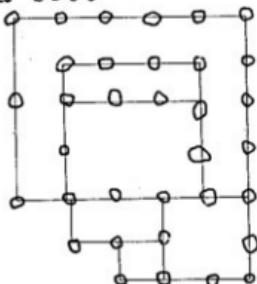


図-30 SB25

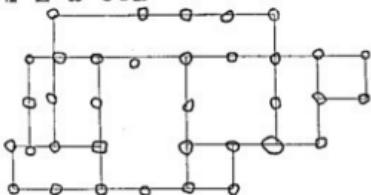


図-31 SB52

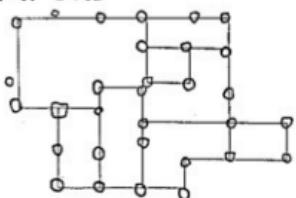


図-32 SB02

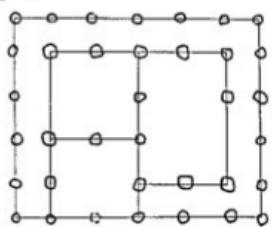
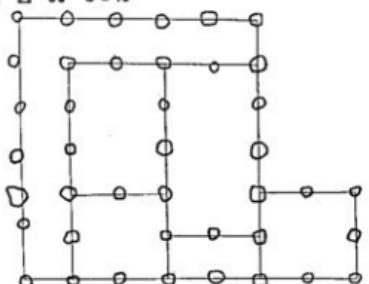


図-33 SB18



0 2 4 6 8 10 15m

や後述するSB52建物跡との柱穴の切り合いから、16世紀後葉のものとみることができる。

(3) SB51建物跡(図-25) 西側で桁行に1間突出し、柱穴の並びも明瞭ではないが、1棟の建物跡と見ている。桁行は、西側の突出し部分で、 $6.0 + 8.5 + 12.0 + 6.6$ 尺の33.1尺と測ることができ、梁行では $6.6 + 6.6 + 9.0$ 尺の22.2尺と見られる。後述するSB20建物跡は、16世紀中葉頃のものとされており、これに切られているところから16世紀前葉以前のものと認られる。

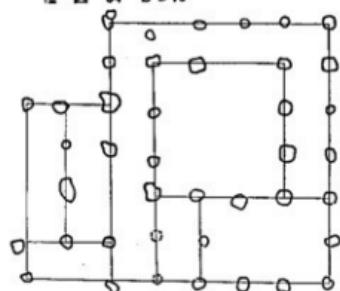
3-e 梁行4間のもの

(1) SB10建物跡(図-26) 鏡型になり、桁行10間に更に1間の突出しがあるという大規模なものである。柱間寸法は、桁行で突出し部分も含めて $7.0 + 6.0 + 7.0 + 7.0 + 6.0 + 6.5 + 6.6 + 6.6 + 6.6 + 7.0 + 7.0 + 7.0$ 尺の80.3尺となり、梁行では西から東端迄 $6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.0 + 5.0 + 5.0 + 6.6 + 7.5$ 尺の56.5尺を測る。出土遺物より16世紀中葉頃と見られている。

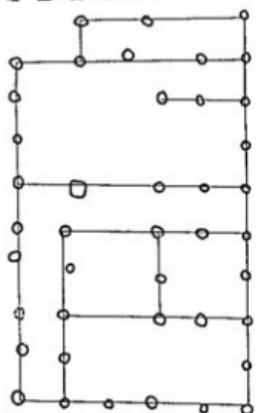
(2) SB14建物跡(図-27) 桁行4間のものに、西側に3間×1間と、東側に2間×1間の張出しを付けている。桁行で西の張出しが $6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.0 + 7.0 + 7.0$ 尺の53.0尺となり、梁行で北から $6.6 + 6.6 + 6.6 + 6.0$ 尺の25.8尺となっている。16世紀中葉のものと見られている。

(3) SB24建物跡(図-28) 桁行5間梁行4間の、西側と北側に、2間×1間の張出しを有している。規模は、桁行で西の張出しが $6.0 + 7.0 + 6.6 + 7.0 + 6.6 + 5.5$ 尺の38.7 尺となり、梁行では、北の張出し迄南から 6.5

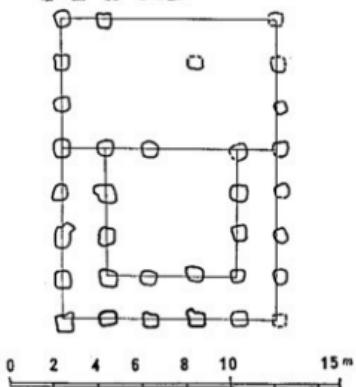
図・図-34 SB 19



図・図-35 SB 08



図・図-36 SB 23



・ 6.5 • 6.5 • 7.0 • 6.0 尺の 32.5 尺となっている。出土遺物からは、その時期は確定できなかったのであるが、16世紀後葉と認られる SB 25 建物跡の柱穴にこの建物跡の柱穴が切られていくことから、16世紀中葉頃のものとみられるのである。

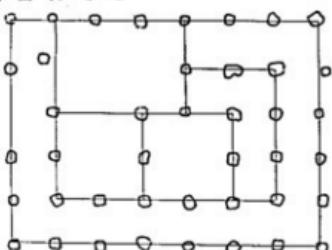
(4) SB 03 建物跡(図-29) 柱行 5 間 梁行 4 間の主屋の南に 4 間 × 2 間の突出しのあるものと見られる。柱間寸法は、柱行 5 間が 6.5 尺の等間で 32.5 尺となり、梁行が北から 6.5 • 5.5 • 6.5 • 6.5 尺の 25.0 尺となり、南の張出し部が 6.5 • 5.5 尺の 12.0 尺である。16世紀中葉頃のものと認められている。

(5) SB 25 建物跡(図-30) 柱行 5 間のものに、西側と東側とに張出しのあるものと見られる。柱間寸法は、柱行 5 間で西から 6.6 • 6.6 • 6.6 • 6.0 尺の 32.4 尺となり、西の張出し部が 6.5 尺、東の 2 間が 6.6 • 7.0 尺の 13.6 尺となっている。梁行は、北から 6.5 • 6.6 • 6.6 尺の 26.3 尺と測ることができる。16世紀後葉のものとされている。

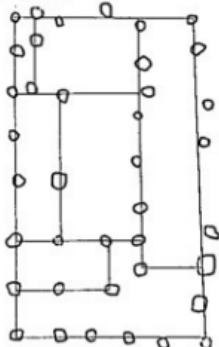
3-f 梁行 5 間のもの

(1) SB 52 建物跡(図-31) かなり直線ではいるが、柱行 5 間と梁行 5 間の東側に 1 間の張出しのある 1 棟の建物跡と認られる。SB 27 建物跡や SB 53 建物跡と重複して検出されたものであり、その柱穴の切り合いかから、これが 17世紀前葉頃のものと認められる。柱間寸法は、柱行で西から 5.5 • 6.5 • 6.6 • 6.5 • 6.5 尺の 31.6 尺の 5 間を数え、東端の張出しが 8.5 尺となっている。梁行では、測定しにくいところもあるが、ほぼ北から 4.5 • 6.0 • 8.0 • 7.0 尺の 25.5 尺と測ることができそうである。

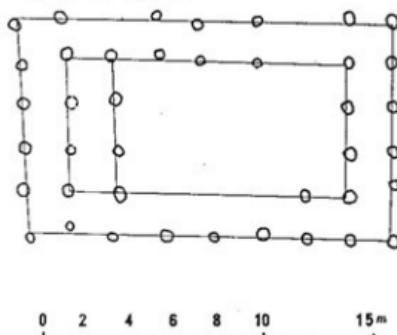
図・図-37 S B 26



図・図-38 S B 31



図・図-39 S B 05



(2) S B 02建物跡(図-32) 柱行6間の整形な建物跡である。出土遺物から16世紀中葉頃と認られている。柱の並びは明瞭であり、柱間寸法もきれいに整っている。柱行では5.0・6.6・6.6・6.6・6.6・5.0尺の36.4尺となり、梁行でも5.0・6.6・6.6・6.6・5.0尺の29.8尺となっているものである。

(3) S B 18建物跡(図-33) 柱行6間の整形な主屋の南東隅に、2間×2間の張出しの付いたものである。柱穴の並びは明瞭であり、柱間寸法も揃っている。柱行では、北から6.6・6.6・6.6・6.6・6.0・6.6尺の39.0尺となり、梁行では、東側の張出しまで7.0尺の等間で49.0尺である。16世紀後葉のものとみられている。

(4) S B 19建物跡(図-34) 柱行6間の主屋の西側に4間×2間の張出しの付いたものと見られる。出土遺物からはその時期を決定しかねたのであるが、先のS B 18建物跡の柱穴との切り合い関係から、16世紀前葉から中葉のものと認られる。柱間寸法も割りと均一であり、柱行方向で北から6.5・6.6・6.6・6.6・6.6・6.6尺の39.5尺と並び、梁行方向では、主屋の西から6.6・6.5・6.5・6.0・7.0尺の32.6尺と測ることができる。

(5) S B 08建物跡(図-35) 柱行8間の主屋の北側に4間×1間の庇を持つものと見ることができるが、柱穴の並びは不揃いであり、不明なところもある。時期もはっきりしないが、S B 10建物跡の柱穴との切り合いから、16世紀後葉のものと認られる。柱間寸法は、柱行が東側の側柱列で、北の庇部分より9間が6.6尺の等間で59.4尺となっており、梁行では、南側柱

図-40 SB30

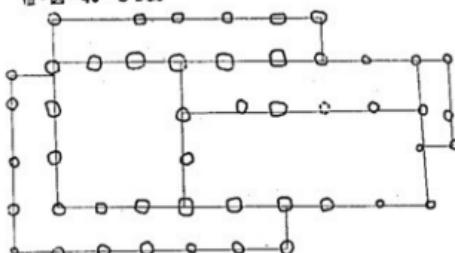


図-41 SB12

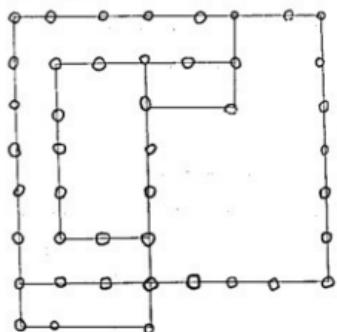
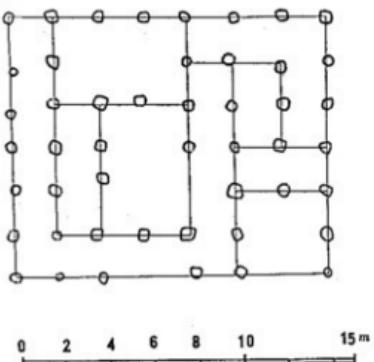


図-42 SB20



列で西より $6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 8.0 \cdot 6.6$ 尺の
34.4 尺と測ることができる。

(6) SB23 建物跡(図-36) 桁行 7 間
の整形な建物跡である。遺物の上から、16世紀
後葉と見られてはいるが、柱穴も大きく、SB
24 建物跡や SB25 建物跡の柱穴に切られている
ところから、16世紀前葉から中葉のものと見る
こともできよう。柱間寸法も整っており、桁行
では南から $6.6 \cdot 6.5 \cdot 6.6 \cdot 6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.6$
 $\cdot 6.5$ 尺の 45.8 尺となり、梁行でも $6.6 \cdot 6.5$
 $\cdot 6.6 \cdot 6.5 \cdot 6.6$ 尺の 32.8 尺と測ることができる。

(7) SB26 建物跡(図-37) 柱穴に不
揃いのところもあるが、桁行 7 間の整形の建物
跡である。出土遺物から 17世紀前葉と見られ
ており、ここ北館では最も新しい時期に属する
ものである。柱間寸法は割と均一性をもら、桁
行が西から $7.0 \cdot 6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.5$
 $\cdot 6.5$ 尺の 46.0 尺となり、梁行も北から $7.5 \cdot$
 $6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.5 \cdot 6.5$ 尺の 33.5 尺となっ
ている。

(8) SB31 建物跡(図-38) 柱穴も不
揃いで、全体も歪んでおり、内部もはっきりし
た間取りではないが、桁行 7 間の 1 棟の建物跡
と見たい。時期については、遺物からは確認で
きていないが、先の SB03 建物跡の柱穴を切っ
て建られているところから、16世紀後葉から 17
世紀前葉と認られる。柱間寸法の測定も困難
であるが、桁行の西側柱列では、北から $5.5 \cdot$
 $6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 6.6 \cdot 9.0 \cdot 7.5 \cdot 7.0$ 尺
の 55.4 尺と並び、梁行では南側柱列で、西から
 $6.6 \cdot 4.5 \cdot 6.0 \cdot 5.0 \cdot 6.6$ 尺の 28.7 尺と測
ることができる。

(9) S B 05建物跡(図-39) 柱穴の並びが、明瞭でないところも多くあり、形も直線でいるが、桁行8間のものと見ることができる1棟の建物跡である。柱間寸法は、桁行が南の側柱列で6.0・6.0・8.0・6.6・8.0・6.5・6.5・6.6尺の54.2尺と測ることができ、梁行は西の側柱列で北から6.0・6.0・6.0・6.6・6.6尺の31.2尺と見ることができる。遺物の面から16世紀前葉のものとしてとらえられている。

(10) S B 30建物跡(図-40) 桁行9間の建物跡と見ることができる。建物跡に歪みもあり、不自然な形のところもあるが、1棟のものと見たい。出土遺物によって、16世紀中葉のものとされている。柱間寸法は、桁行では北の入側柱列で、東の突出し迄含めて6.5・6.5・6.5・6.5・7.0・7.0・7.0・7.0・7.0・4.5尺の65.5尺となり、梁行では、西の入側柱列で6.5・7.0・7.0・7.0・6.6尺の34.1尺程に測ることができる。

3-g 梁行6間のもの

(1) S B 12建物跡(図-41) 桁行7間の大規模な主屋の南西部に、3間×1間の張出しの付いたものであり、16世紀後葉のものと見られている。柱間寸法は、桁行で南の側柱列に沿って6.0・6.5・6.5・6.5・6.0・6.0・8.5尺の46.0尺となり、梁行では、西の側柱列で張出し部も含めて、北より6.5・6.6・6.6・6.6・6.6・6.5・6.5尺の45.9尺と測ることができる。

(2) S B 20建物跡(図-42) これも大規模な桁行7間の整形な建物跡である。遺物の関係から、16世紀中葉頃のものと認られている。柱間寸法は、桁行方向では西より6.5・6.5・6.6・6.6・7.5・6.6尺の46.9尺位、梁行では、北より7.5・6.5・6.5・6.6・6.6・6.5尺の40.2尺と測ることができる。

3-h 小結

北館にて検出された掘立柱建物跡の内、建物跡として完結していると見ている38棟について、その規模を、梁行柱間数によって分類して述べたものである。

梁行のないものから、梁行3間の小規模なもの迄が21棟を数え、その内の15棟迄が梁行2間のものである。これはまた、16世紀前葉以前のものから16世紀後葉や17世紀前葉と見られるもの迄、北館の存続した各時期に亘って造られたものであったことも知られる。このことは、梁行2間の身舎だけの建物が、古代以来、最も基本的な建物の形であったことを考えると、至極、当然のことではある。

梁行が4間以上の大規模なものは、6間のもの迄、総計17棟あり、その内で、梁行5間のものが10例を占めている。これを使われていた時期の点から見ると、16世紀前葉以前とされるものが3棟、16世紀中葉が2棟、16世紀後葉から17世紀前葉のものが5棟となっている。

梁行5間の建物は、3間梁の大きな室の両側に庇の付いた形が基本となっているものと見られる。古代に於いては、身舎の梁間を2間とするのが通例であり、古代の建築表示法であった間面記法の前提ともなっていたのであるが、中世になり、住生活の様式が変化し、また、構造技術の発達とともに合せて、身舎3間梁のものがきて来るのである。東北地方北部に於いて、この形の見られるのが同時頃

となるのかは明らかではないが、岩手県の調査例では、15世紀のものとされる丸子館遺跡に於いては、この身舎梁間3間の建物跡は検出されておらず、16世紀の鹿島館遺跡に於ける大規模なものに於いてこの形を見る事ができるのである。東北地方北部に於いて、3間梁の建築の造られる時期としての見当をこの辺りにおくことができるかもしれません、ここ北館の掘立柱建物跡についても、一応あてはまるのではないかと考えている。

各建物跡の柱穴に従って、柱間寸法の計測をも行ったのであるが、統一された柱間寸法が検出されたものは、極めて少ない。掘立柱の柱穴ということもあり、また、現場で直接に測定できたものも少ないためかとも考えているが、特に、小規模なものについては、柱間寸法に計画性のなかったものかとも察しられる。その中で、6.6尺（約2.00m）という寸法は、使用頻度が最も多く、注目される数値である。7.0尺ともならず、6.5尺でもないこの数値は、何処から導かれたものか不明であり、近世の古民家などに見られる6.3尺とも異なり、より古い時期のものと見られるものである。

川上賀博士の『日本中世住宅の研究』には、宝徳二年（1450）以前のものとして、京都の「成就院会所・源氏間」では、会所の柱間が7.0尺であり、源氏間では6.6尺であったこと、更に、文明十七年（1485）の奈良の「仏地院主殿」に於いては、9間×6間の建物の柱間が6.6尺であったことが挙げられているが、この寸法そのものについては言及されていない。

同時期の八戸市・根城跡で検出されている掘立柱建物跡の柱間寸法との比較からも、更に検討されなければならない課題であろう。

4 その平面形式について

ここでは、梁行柱間4間以上の大きな規模のものについて、推定される建造時期に従って、その平面形式の特徴を考察するものである。建造時期によって区分すると、16世紀前葉以前のものが3例、16世紀中葉と見られるものが7例、16世紀後葉から17世紀前葉とされるものが7例となる。

4-a 16世紀前葉以前のもの

この時期とされている建物跡の特色は、その内部に於いて、細かな間仕切りのなされていないことである。

S B05建物跡（図-39）では、その内部に5間×3間という長大な室を持ち、3間×1間の室を統一にして、これを四面庇が囲む、というものである。身舎の梁間が3間とはなっているが、古代の寝殿を想定させるような形である。このような平面形式は、ここで日常の生活がなされていたというよりも、むしろ、大きな行事や儀式のための建物であったことがうかがわれる。

他の2例、S B19建物跡（図-34）とS B23建物跡（図-36）については、一つの共通した特徴を見る事ができる。それは、建物跡の内部中央に、3間×3間の室を一つ有していることである。S B19建物跡（図-34）では、この3間×3間の室の西・北・東の三方に庇が回り、この室の南に接して1間×2間と3間×2間の室が取られ、更に西側に、4間×2間の張出し部がある。また、S B23建物跡（図-36）では、この室の西・南・東に庇が回り、北に接して5間×3間の大きな室が取られて

いる。

ここに見られた3間×3間の室は、畿内中央に於いては、室町時代中期の会所や主殿に見られたものである。それらに於いて、3間×3間の室は「九間」と呼ばれ、対面座敷の主室として用いられたものであることが指摘されている（註1）。ここ浪岡城跡北館に於いても、当然、そのような使われ方が想定されるのであるが、16世紀前葉以前とされる大規模な建物跡3棟の内2棟迄がこの「九間」を有していることは注目される。

4-b 16世紀中葉のもの

この時期になつても、S B30建物跡（図-40）のように、先の3間×3間の「九間」を持つもののあることは、或る種の接客様式として、この形式の対面座敷が必要であったことを推察させる。また、S B14建物跡（図-27）のように、身舎梁間を2間とし、南・西・北の三方に庇を回すという、住宅形式としてはより古いと見られるものも建られているのである。

S B03建物跡（図-29）では、内部中央に3間×2間の室を取り、これに接して北側に3間×1間の室を設けている。あたかもこれは、先に見た「九間」の北1間を仕切った形であり、建物の主室が、正方形のものから縱長の形に移って行く過程が示されているのかもしれない。同様のことは、S B10建物跡（図-26）の北側に於いても見ることができる。

S B24建物跡（図-28）、S B02建物跡（図-32）、S B20建物跡（図-42）、更にS B10建物跡（図-26）に於いては、共通して、3間×2間の室と2間×2間の室とによって、その間取りが構成されている。これらは当時は、夫々「六間」、「四間」と呼ばれていた室である。

S B24建物跡（図-28）では、主屋と見られる桁行5間梁行4間の中で、西側に3間×2間の室を取り、その南東に2間×1間の室を置き、更に、2間×2間の室を設けて、この2室の北側に3間×1間の部分を取っている。そして、南側5間分に1間の庇が付いている。

S B02建物跡（図-32）に於いては、西側に2間×2間を2室取り、その東に北寄せに接して3間×2間の室を置き、周囲に庇を回している。

S B20建物跡（図-42）は、先の「九間」を「三間」と「六間」とに分割し、その北側に接して3間×2間の室を設け、この部分に庇を回し、その東側に奥部分とも見られるところを付けている。2間×2間の室を南へ置き、2間×1間の室を介して庇と接するのがこの部分である。

S B10建物跡（図-26）は、鍵型の大規模なものである。南に2間×2間の室をL字型に3室配し、その北側に3間×2間、3間×1間、3間×2間の室を並べ、南から西に庇を回し、更に、L字型3室に接して東側に4間×4間の大きな室を取っている。これ迄に見た北館の掘立柱建物跡の平面形式よりすると特異なものであるが、細かな間仕切りのなされていることや、土間と見られる部分のあることなど、日常居住用のものであった可能性が高い。

4-c 16世紀後葉のもの

明らかにこの時期と認られるものは、4棟である。この時期のものの平面形式の特色は、4間×2

間の縦長の室が見られることである。

S B25建物跡（図-30）は、3間×2間の室の東側に接して2間×2間の室を置いて、北から西へ庇を回している。この形式は、先に見た16世紀中葉の平面形式の特徴であったものであり、後葉迄も引継がれた基本的な形式の一つでもあったのであろう。

S B08建物跡（図-35）は、南に4間×2間の「八間」と呼ばれた室を取り、その北側に2間×2間を2室統合して接し、これに、北・西の二面に庇を付いている。そして更に、その北側に5間×3間の大きな室を取り、その北に4間分の庇を付けている。

S B18建物跡（図-33）に於いては、3間×2間の室と2間×2間の室とが続く形が見られるが、ここでもこの東側に接して4間×2間の縦長の室が取られている。これは、この時期になって見られる新しい形であり、この部分に北から西へ庇が回っている。

S B12建物跡（図-41）では、この「八間」の室の三方に庇を回し、これに接する形で4間×4間の大きな室を取り、その北側に2間×2間の室を置いている。全体で、桁行7間、梁行6間という大きなものであるが、4間×2間の室が独立した形で取られているのが特色である。

4-d 17世紀前葉のもの

16世紀後葉から17世紀前葉と見られるS B31建物跡（図-38）については、先にも述べたように、ここに並ぶ柱穴は不揃いであり、内部の間取りも明瞭ではない。しかしここでは、そのほぼ中央に4間×2間の縦長の室を持つことが見られ、その西側に3間×1間のもの、更に北側には3間×2間の室を置き、東側に7間×1間の長大な室を設けたものと解したい。

S B52建物跡（図-31）は、S B27建物跡（図-13）やS B53建物跡（図-24）との切り合い関係から、17世紀前葉のものとされたのであるが、S B31建物跡（図-38）と同様に、柱穴の並びは今一つ明解さを欠き、間取りも難解である。北西隅に3間×2間の室のある外は、小さく間仕切りされ、食違いの仕切りのされていた様子もうかがわれ、複雑である。

S B26建物跡（図-37）は、桁行7間、梁行5間という大規模なものであり、内部中央の南側に2間×2間の室を2室統合して置き、その北側に接して3間×2間と2間×1間の室とを組み合わせ、この部分に西・南・東と庇が回り、更に、東側に孫庇が付くという平面である。3間×2間と2間×2間の室の組合せの間取りは、この時期迄造られていたのである。

4-e 小結

浪岡城跡北館に於いて検出された掘立柱建物跡の内、梁行柱間4間以上のものについて、その建造時期に従って、それらの平面形式の変遷を概観した。

古代の寝殿造と近世初頭に完成する書院造とは、日本住宅史の中での、二大形式としてとらえられており、寝殿造の住宅が簡略化され、武家社会の接客様式に適合するように変化し、発展する中で、書院造住宅が形成されていったものと解されている。そして、ここ浪岡城跡の時期が、丁度その過渡期に当っているのである。

図-43 大瀬川館跡 B d 15-1 建物跡

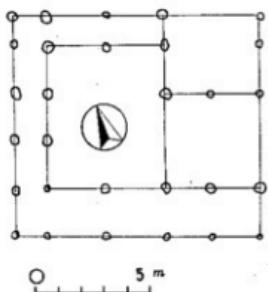


図-44 一戸城跡 S B 05 建物跡

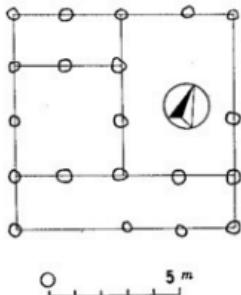
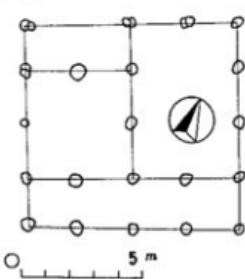


図-45 一戸城跡 S B 06 建物跡



ここでは、16世紀前葉以前のものとされた建物跡の中に、古代の寝殿を想定させるものもある中に、当時の武家社会の邸宅に於いて、重要なものの一つであった「会所」を推定せしめるようなものが在り、その内部中央に、接客座敷の主室としての「九間」が取られているものを見ることが出来るのである。

16世紀中葉になると、建物跡も多くなり、ここ北館の最盛期とでも呼びうるような様相を見せるのであるが、建物跡の平面形式に於いても変化が認られる。

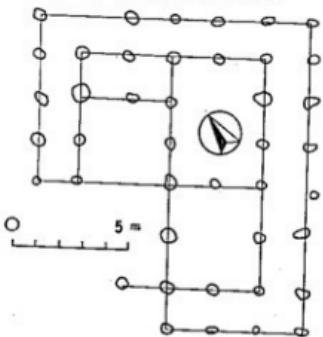
「九間」は未だ残されているが、3間×2間と3間×1間とに分割したと見られるものが現れ、更に、3間×2間と2間×2間という形の室との組合せで、その平面を構成している例が多くなっている。即ち、「主殿」或は「客殿」と見られ得るような建物跡が検出されているのである。

16世紀後葉以降に於いても、この傾向は更に強くなり、2間×2間の2室の続き間から、4間×2間の室が生れ、これが、主室として用いられた形が見られるのが、この時期の大きな特徴である。

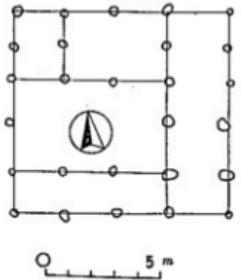
ここ北館では、S B 05建物跡(図-39)や、S B 14建物跡(図-27)のような、寝殿造系のものから、「会所」風のものや「主殿」「客殿」風のものを経て、S B 18建物跡(図-33)や、S B 26建物跡(図-37)のような書院造系の建物跡への変遷が、見て取れるのである。

同じ青森県で、ほぼ同時期の中世城郭跡である八戸市・根城跡に於いても、40棟を越す掘立柱建物跡が報告されている。そこでは、桁行12間・13間といった大規模なものもあったりする

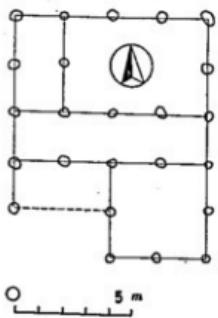
図・図-46 秋田館遺跡N.5建物跡



図・図-47 館コ遺跡Ⅰ建物跡



図・図-48 館コ遺跡Ⅱ建物跡



が、その殆どが、室を1列にだけ配しており、2列平面とみなしうるものは、僅か1・2例である（註2）。それに対して、ここ北館の掘立柱建物跡に於いては、根城跡とは逆に、1列平面と見られるものは、2・3例だけで、他の大部分は2列平面の形を取り、中には、3列平面とみなしうるようなものも2・3例含まれているのである。

東北地方北部に於る他県の例から、この2列平面を拾って見ると、岩手県・大瀬川館遺跡Bd 15-1建物跡（図-43）が注目される。これは、浪岡城跡S B02建物跡（図-32）とよく似た間取りを持っている。その違いは、東西が反転しているのと、図-43で東に底のないことだけである。大瀬川館遺跡の出土遺物から見た年代は、16世紀半ばから後半に求められており、時期の点でもずれはないようである。外には、岩手県・一戸城跡S B05建物跡（図-44）やS B06建物跡（図-45）、岩手県・興田館遺跡N.5建物跡（図-46）があり、秋田県・館コ遺跡Ⅰ建物跡（図-47）やⅡ建物跡（図-48）を挙げることができるのであるが、ここ浪岡城跡ほど豊富に検出されているところはないようである。

古代の寝殿造が変形していく過程の一つとして、北庇の拡張と間仕切りの発達が挙げられている（註4）。寝殿に於ける身舎や南庇、また東西の庇は、儀式や行事の際の「晴」の席として用いることのあったために、小部屋に仕切ることがなされなかったのに対して、北庇は、日常の私的生活の場として、次第に、孫庇を出すなど、その拡張も行われ、細かな間仕切りもなされ、中世には、部屋を2列に配したもののが出現し、後には3列平面も見ることができるのであ

る（註5）。

ここ浪岡城跡北館の掘立柱建物跡に於いては、それらの過程をも見ることができ、これ迄、中央の資料によって緩られて来た中世住宅史に対して、ここ北東北の地から、新しい知見を提唱し得る可能性も出て来ている。

5. むすび

浪岡城跡北館より検出された掘立柱建物跡について、現段階での考察を述べたものである。ここでは、上屋構造についての考察は省いてあり、後の機会に譲りたい。

その外にも、不明な点が多く残されている。中でも、夫々の建物跡の機能や用途というものを推定し得る資料が乏しい。そして、これらの建物の機能などを推察するためにも、また、平面形式の在り方や上屋構造などを考察する場合にも、その建物跡の出入口の位置は、重要な要素となるものである。また、建物跡の内部の土間部分の有無やその位置や広がりなども知りたい項目である。これらは、現在殆ど検出されておらず、今後より詳細な調査に待たなければならない。

これらと関連して、北館内の通路についても不明である。溝や堀が巧に配されて、夫々の空間を区切っていたことが想定され、それらについての検討も、今後なされなければならないであろう。

浪岡城跡に於いては、北館の調査を終えて、内館へ移っており、そこでも多數の掘立柱建物跡が検出されており、今後も不明な点を解明すべく、調査検討を続けてゆきたい所存である。（850131）

註

1. 川上 賢博士 「日本中世住宅の研究」
2. 拙稿 「根城跡の掘立柱建物跡について」（史跡根城跡発掘調査報告書Ⅱ」所収）
3. 拙稿 「東北地方北部の中世城郭にみられる掘立柱建物跡について」（「八戸工業大学紀要」第3巻・所収）
4. 太田博太郎博士 「日本住宅史」（「新訂・建築学大系28・独立住宅」所収）
5. 平井 聖博士 「日本の近世住宅」ほか

IX 浪岡城跡北館出土の生活用具について

——特に鉄製品・銅製品に関して——

三 浦 貞栄治

1. はじめに

浪岡城跡から出土する生活用具は、その属性によって分類すると陶磁器・土器・鉄製品・銅製品・木製品・石製品等多種多様に存在するが、今回昭和53年から昭和58年まで出土した鉄製品・銅製品を中心して総括的紹介をしてみたい。

また、鉄製品・銅製品の中で紹介項目としては、炊事関係の鍋・火箸、化粧関係の毛抜き・鏡・耳かき・鉄、発火具・灯明関係の鉄皿・火打金、建築具として釘・鋸、馬具として轡・蹄鉄、農具として鎌・鋤、生産工具として苧引金、計量具として秤、裁縫具として針、いろいろにかける鉄金具、宗教的色彩の濃い鉢などを取り上げる。

2. 鉄製品

a 鍋

北館のS E10(79F 231)、S E67(82F 593)、S T27(79F 588)、S T132(81F 740)、S T184(82F 980)、S X10(80F 3)、S X95(82F 206)、J 48 Pit(82 F 198)その他の箇所から出土しているが、北館の南半分の遺構に多くみられる。鉄鍋の破片は、同じ覆土の中から陶磁器、火箸、硯、石臼他の生活用具と共に出土している。覆土が人為的に堆積されたものが多いが、生活舞台の変遷がうかがわれる。また、總じて鉄・銅製の生活用品は短軸(南北)50より東側寄りから出土している。生活に何らかの変化があって諸道具が埋没または遺棄されて残存するにいたったものと思われる。鍋の形状は外耳、内耳の鉄鍋で、口径25cmの鍋(80F 3)(図1-1)も1個出土している。S X10遺構の床面から二つに割れた状態で出ている。この遺構はS T51、S T52の周囲にあって、S X11、S X12、S X13に隣接しているので炊事関係のものと考えられている。鍋(80F 3)の形は口線上端に外耳がついて鉄をさしこむ穴が2個横に並んであいている。底部に三足を有した形状である。

内耳の鉄鍋は、耳の部分(81F 740)が出土している。図1-2に示した内耳鉄鍋は昭和59年度内館から出土した参考資料である。他に鍋の底足の破片、鍋の口縁部がくの字状にそり返った破片(79F 225)などが他の道具の破片と共に出土している。

また、伏せた鉄鍋の中に鎌、苧引金、ナワなどが入っている状態で出土しているものがあるが注目される。(昭和59年度内館調査にて出土したもの。昭和61年3月報告予定)

b 火箸

炭火、焚火を挟む火箸の使用は古く、最初は木、竹などで作ったであろうといわれている。しかし、木製のものは腐って残ることが少なく、鉄、銅などの金属のものが比較的多く出土している。北館の

出土遺物の中にも鉄製の火箸が10数点見える。その形状は丸形、角形で一部にねじりが入ったりしている。また、頭部に木製の柄が残存しているものや漆が付着したものがある。S T13、S T34、S T81、S E21、S E28、S E20、S E57、S X125 その他C49区の覆土から火箸が出土している。いずれも陶磁器類、鉄釘、毛抜き、鉄鍋、石臼などの生活用具と一緒に発掘されている。

S T34の火箸(79F 297)〔図1-3〕は出土した火箸のうちで最長のもので39.7cmある。上端に長さ12.5cmのねじりが入っていて角形のものである。角形はS T13(79F 536)、S E21(80F 942)、P Q・55区(80F 18)、S E57(81F 1060)他など、丸形はS T81(80F 823)、S E28(80F 914)〔図1-5〕、S E20(80F 606)〔図1-4〕他などから出土している。遺構の覆土は人為的に埋められたり、S T13(79F 536)のように新旧のわからない遺構もあるが、北館に居住した人々の使用したものと思われる。頭部を輪や鎖でつないだものは出土していないが、S T81の火箸(80F 823)は、陶磁器類や銅鏡、硯、古鏡、鉄釘、皿、小札、鉄釘他と一緒に出土しており、中心的な生活の場であったことが推測される。この火箸は手で握る柄の部分に木部が少し残っている。また、S E57の火箸(81F 1060)は長さ38.0cm、角形で手で握る部分にねじりが入っている。しかも2本一対の状態で出土している。

c 學引金

麻の素皮を取り去るのに使うのが學引金である。麻を學引板にのせて學引金でこすって素皮を取るのに用いるが、麻布の着物を着用する生活にとっては大事な生活用具である。

北館から10点余り出土しているが、G~L区、51~59区の範囲に散在した形で発掘されている。手で握る木の部分が残存しているのがS T12(79F 400)、S T31(79F 223)〔図1-6〕、S E28(80F 910)〔図1-7〕の遺構から出土している。S X120(82F 749)の竪穴遺構は自然堆積の状態であり、その覆土からは學引金の他に陶磁器類、小柄、小刀、火箸、鉄釘、煙管、古鏡など多量の遺物が出土している。当時の生活を推測させるような出土状況である。

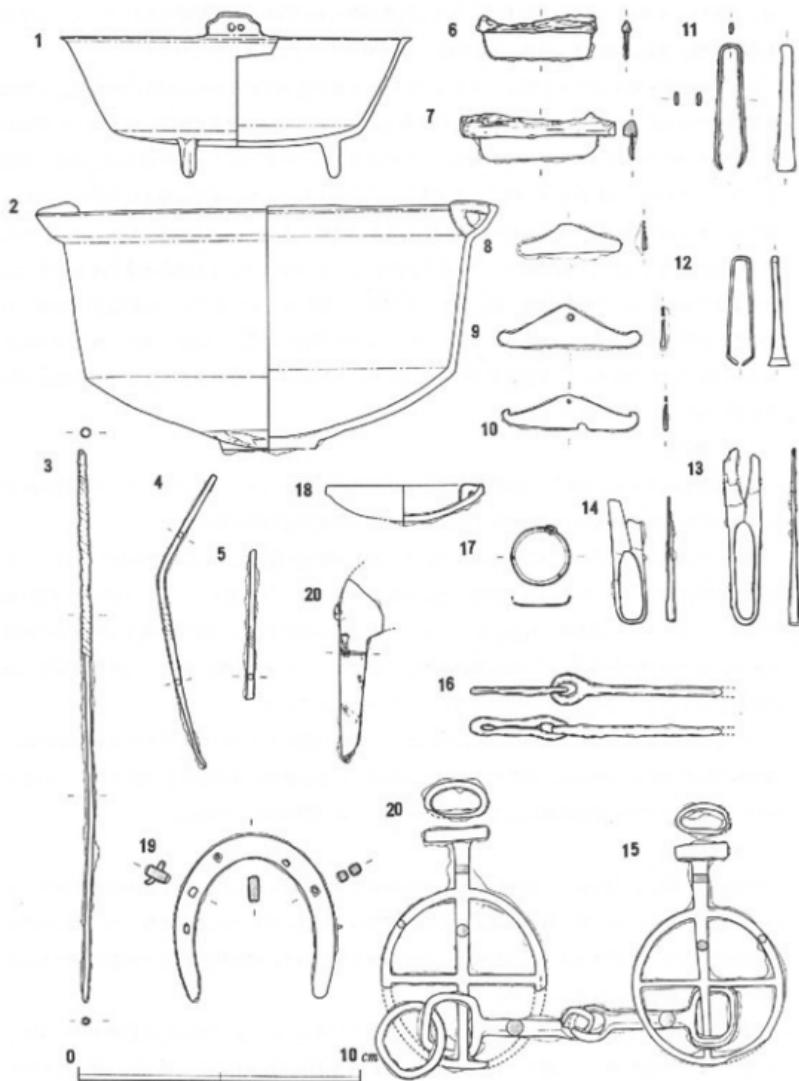
その他の學引金も諸遺物と一緒に出土しており、いずれの場所も生活の場を思わせるものである。遺物番号79F 223、79F 276、79F 400、79F 595については最初、火打金として取り扱っているが、八戸市教育委員会から指摘されたように、その形状からみて學引金と思われる。

d 火打金

発火具の一種で、火打石にこの火打金を打ち合わせて発火させる。古くは縁などの破片を利用していたようであるが、その後、鍛冶屋によって発火専用の火打金が作られるようになった。火打石に火打金を打ち合わせて発火させて、それを火口に移して火をおこす。火口には朽ち木や柔らかい木、消し炭を粉末にしたもののが用いられた。

北館から出土した火打金は6点あり、I 58区(79F 28)〔図1-10〕、S E10(79F 203)〔図1-9〕、S E68(82F 883)〔図1-8〕、J 49区(82F 19)、H44区(82F 517)などから散在した形で出土している。火打石も57年度の発掘で5点ほど見つかっている。

Ⅱ・図-1 生活用具実測図(1)



火打金は鉄製で三角形の形状をしている。火打石に打ちつける部分を底辺とすると、相対する角の部分に小さな穴があって、携帯に用いる紐を結びつけるようになっている。79F28の遺物は三角形は高くないが、底辺の両端が折り返して上部中央に向かって鋭角をなしている。火打金が出土しているいずれの遺構も、他の多くの遺物が出土している。

e 毛抜き

S T34 (79F 287) [図1-11]、S E10 (79F 301)、S X36 (80F 1019)、F53 Pit (81F 784) [図1-12]から毛抜きが4点出土している。S T34は人為的に堆積した覆土のようであるが、その中から完全な形のもの (79F 287) (鉄製) が探掘されている。鉄のようなU字形をして頭がかみ合うようになっている。S E10の井戸から出た毛抜き (79F 301) は、部分的なもので毛抜きかどうか問題がある。S X36の小さな井戸の毛抜き (80F 1019) やF53 Pitの毛抜き (81F 784) はその形がよく残っている遺物である。

f 鉄

鉄は中世まで婦人の化粧道具、理髪に使われていたようで、一般の人々が衣服を脱ぐには小刀を使ったといわれている。現在のU字形の握り鉄で糸を切ったり、小さい布を切ったのは、近世以後のことのようである。

北館から4点ほど出土した報告があるが、O34区の土壌上面から発掘された遺物 (79F 539) は、指1本を入れるラシャ鉄の取っ手のような形状であるが、ラシャ鉄が明治以後日本で製造され普及したことを探せ考へてみると、鉄の一部分と見るには無理がある。S X 121 (82F 774) [図1-13]、S T 155 (82F 87) [図1-14] の遺構からは沢山の遺物が出土しているが、握り鉄が各々1個ずつ出ている。二つの鉄とも握りの部分が残っていて、刃の先端が欠けている形状で、全体として細長い作りである。

g 舞

S T 103の遺構の床面中央から出土した舞 (81F 230) [図1-15] がある。他の遺物小札、硯、古銭、鉄釘などと一緒に出土している。81F 230の舞は手縫をつける水付が欠損し、片方の鏡も半分欠けている。また鏡の結合部分と搦み輪が1個欠けている。舞先は肉厚な鉄で連結されている。鏡の直径は11~13cmで、十字の図柄のものである。面がいにとりつける立聞輪は横円状である。このS T 103の遺構は馬とのつながりが考えられる。PQ55区の覆土から舞状のもの (80F 50) [図1-16] が出土しているが、1個は噛状の鉄棒が2本連結されていて、舞の一部と思われる。もう1個は噛状の片方だけであるが、出土状況からみて同じく舞のものと推定される。

h 鉄皿

皿は直徑の長さによって大中小と分けて考えられるが、D53区 (81F 169)、L52区 (81F 942) [図1-17]、S D61 (82F 1108) [図1-18] の覆土から出土したものは、いずれも小皿に該当するものである。81F 942は径4.08cmで3箇所に穿孔がある銅製の皿である。L52区の遺構は覆土が攪乱され

ているので時代的な推測はむずかしい。82F 1108の皿は径11.3cmで内側口縁部に3箇所内耳がある。皿を吊して使う場合としては油皿としての用途が考えられる。明治頃までは魚燈油を鉢に入れて布切れの芯をさしこんで灯をともしたこともある。その場合、皿は宙吊りにして用いる。

i 踏鉄

踏鉄はO55、I55区の覆土から発掘されているが、その覆土が攪乱されていることと踏鉄の普及した時期を考えると古いものでないようである。

日本で踏鉄が使われたのは明治頃からだというから、北館から出土した踏鉄は明治以後のものと思われる。I55区から出土した踏鉄(79F 434)〔図1-19〕は全形が残っていて釘穴が4つ確認できる。O55区のもの(79F 502)はその形状が半分位のものである。

j 錐

錐は鎌倉時代には刀と柄の角度が直角に近く、今日のような形のものが使用されている。江戸時代になるとイネやムギを刈り取る鋸錐が発達して来ているが、北館のF53区の箇所から錐のようなものが数点出土し、その中に鋸錐が1点入っている。長さ18.5cm、幅2.0cm、厚さ0.22cmのものでイネ刈り錐の形状をなしている。(81F 141)

S T15の遺物(79F 228)は形状からみると田の畔の草を切り、整地をするために用いる「タチ」のようであり、錐と異なるものと思われる。

S T55(80F 198)〔図1-20〕は深さ38cmの床面からの出土であり、その上層から陶磁器類、小札、古鏡なども出ており、古い遺物のようである。ただ柄の基部だけの出土なのでどのような用途に使われた錐なのかは不明である。他に、伏せた鉄鍋の中に入っていた錐があるが、刀部が直線的で信州錐の形状に似ている。同じ場所から風呂鍬の刃先、小刀などが一緒に出土している。

k 釘

和釘は古くから使われ、洋釘は明治に入ってから用いられている。北館から出土した釘は角釘の類で鉄製の和釘である。その形状は断面が四角形であり、頭部が片側に折れまがった皆折釘のものが殆どである。その出土範囲が広く、本数も多い。(53年度は35点、54年度は224点、55年度は475点、56年度は380点、57年度は460点出土している。)55年度はS T77から「字形(80F 434)〔図2-1〕」の遺物が出土している。恐らく折釘の一種かと思われる。56年度の報告書には計測済みの和釘が23点(長さ1寸ないし5寸位)記載されてある。そのうち4点は打ち込んだ部分の本部が付着したものである。57年度のもので計測されたものは15本である。

l 鍼

鍼は大別すると風呂鍬、金鍬、特殊鍬になるが、昭和59年度内館で出土したものは風呂鍬である。(S61.3報告予定)風呂鍬は刀床部が風呂と呼ばれる木製の台と鉄製の刃先とからできている。出土遺物は木の台がなく、鉄製の刃先だけである。その刃部は普通の鍬に比べて幅が広くて全体的にみて四角な形をしている。この鍬は、伏せた鉄鍋の中から錐、小刀、なわ、孝引金などと一緒に出土した

ものである。

m 鉤金具

いろいろの上に吊されてあって鍋や釜をかける道具が自在鉤である。その下端に鍋の鉢をかけるL字形の鉤がある。木製のものもあるが、金属製のものが一般的である。北館 S T38の79F 265は鉄製の鉤である。S T38の遺構の上にS T19、S T24、S T26が構築されているので、堆積状態が不明で鉤と関連ありそうな出土遺物もない。

n 錠

角材や板を結合するために用いる和釘の一つとして錠がある。それは丸角、長方形の断面の鉄棒で、両端が曲げられ、先がとがった金物である。

北館から出土した錠は角錠で、普通錠の形状を呈している。これらは北館の中央より東側寄りの調査地区で出土している。S T12の79F 186(図2-2)(長さ7.1cm)、S T10の79F 355(図2-3)(長さ5.9cm)は少し変形的な錠である。S X17の80F 259(図2-4)は長さ4.3cm、H51の81F 792は長さ6.6cm、S T117の81F 306は長さ5.8cmであるが、80F 259と81F 792は打ち込み釘の部分が短い。81F 306は打ち込みの部分が長い。これと似たものはS E10の79F 239(図2-5)で、長持などの家具の取っ手ではないかと考えられる。

3. 銅製品

○ 煙管

日本へ煙草が伝わったのは元亀、天正の頃といわれ、その頃はアシまたは細い竹を使った竹煙草であった。そして慶長頃に煙管で喫煙するのが流行したという。

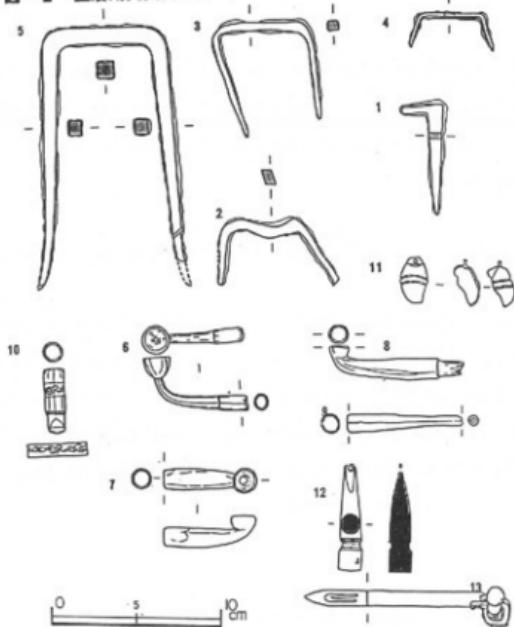
北館の遺構から出土した煙管の部分品は6点位であるが、S X 120から出土したもの(82F 584)(図2-6)は雁首の脂返しが細長く、羅字の部分が太くふくらんだ形状で、河骨形の煙管に似ている。K57区の煙管(80F 33)(図2-7)は雁首と羅字の部分も銅製で吸い口まで銅で作られたものと思われる。全体的に細めの作りである。M53区のもの(81F 8)(図2-8)は羅字の部分が一部残っている雁首である。吸い口の部分も3点位出土しているが、完全な形状のものはPQ55区の出土物(80F 5)(図2-9)である。

北館の表土採集の吸い口(82F 1160)(図2-10)は×字状の文様が一回り彫り込まれてある。江戸時代の初めに雁首と吸い口に唐模、雷竜の意匠が彫られるようになり、中期には和風的な花鳥にかわったともいわれているから、その流れの意匠の一つかと思われる。57年度の報告書に吸い口の部分と記載されているが、むしろ雁首と羅字との接合部分とみられる遺物である。

p 銅鏡

S T81の覆土から80F 794、80F 822の銅鏡が出土したが、菊花双雀文様のものである。80F 794は外形9.8cm、厚さ0.8cmで表面は内側がややへこんで純い光沢を有し、部分的にワラ状のものが付着している。背面には内輪の中に20個の菊花と二羽の雀が対峙した状態で配置され、中央に龜紐があ

II・図-2 生活用具実測図(2)



る。内輪外部は放射状に線刻され、隆帯部分に8~10個のこぶが間隔をおいてついてある。

80F 822は外径11.3cm、厚さ0.9cmで外側がやや丸味をもつたものである。表面は光沢を失っており、ワラ状の植物繊維の付着が著しい。背面文様は内輪の中に25個の菊花と二羽の雀、および中央に亀組がみられ、外面にも25個の菊花がついている。

q 鉈

S T77、S T166、E49区の3箇所から鉈の遺物が出土している。一般的には球形の一方に切り込みをつけて、丸(がん)を中心に入れて音を出す鉈と鐘形の中心に舌(ぜつ)を下げる鉈があるが、北館の遺構からは球体の中心に球を入れたものが出土している。

S T77から出土した鉈(80F 339)(図2-11)は、下方に切り込みがあって、上面に穿孔があいている。ただ、S T77は覆土の深さが32cm位で、現代の廃棄物も出てくるような搅乱された土層なので、この鉈を用いた生活がどの位古いものであるか判断に苦しむところである。S T166の床面から出土した鉈(82F 681)は、径1.4cmの球体で、中に小さい金属球のようなものが入っている。なお、昭和58年度においては土鉈も出土しており(Fig.44-4)注目される。

r 耳かき

耳かきは小さい約子形をなしているが、PQ55区出土の銅製のもの(80F 8)は、長さ7.5cm、幅0.3

cmで、全体に金メッキがされてある。それは耳かきの部分が約子形をしており、反対側がL字形に曲がっている。

S 針

鉄・銅製の針の使用は飛鳥、奈良時代からはじまつていて、用途によって長針、短針と使い分けている。一般的にはやがて、針を専門に製造する針屋が出てくるようになり、江戸時代には針師といわれる専門製針業者があらわれている。

北館 S X 111 出土の鋼針（82F 444）は長さ2.31cm、幅0.22cmで途中で折れているため、全長は不明である。また、太さが0.22mmであるが、唐針やメリケン針は0.51mm～0.89mm位の太さであるとの比較してみると太めのものであることがわかる。頭部に糸を通すための孔が大きくあけられてある。このS X 111の遺構は径100cmの中に遺物が集中して出ており、陶磁器類、小札、革札、鉄釘などと共に鋼針が出土している。

t 秤

北館から出土した秤関係用具としては桿秤の分銅があり、日本でも古くから用いられているものである。その分銅は頂部が面取りされ、一つの孔があいている。全体が円錐形で、下部の方に線条が一本一回り刻み込まれてあって、三角形の彫物も一つついている。（80F 713）〔図2-12〕重さは46.5gである。また、昭和58年度の調査で同形の分銅が2個出土しており、それぞれ重さ26g（83F 6）〔Fig.48-4〕と33g（83F 473）〔Fig.48-3〕を計る。

u 不明銅製品（81F 565）（図2-13）

S T 132は大きな遺構で、出土物も陶磁器類から鉄製、銅製のものまで多種であるが、この銅製品は網針と形状が非常によく似ている。ただ、普通は木製、竹製の網針であるが、この出土遺物は銅製品で、しかも、銅製の紙と鉄製らしいものが後端に付着している。後端の基部に穿孔があって紙が接合しているので別な用途が考えられる。

v その他の不明出土遺物

次の数量のものが、用途不明として報告書に記載されている。54年度は鉄製15点、銅製3点。55年度は鉄製7点、銅製7点。56年度は鉄製4点、銅製1点。57年度は鉄製7点、銅製7点。

4.まとめ

以上、生活用具のうち鉄製品・銅製品の一部を紹介した。これらの出土遺物は、当時の人々の日常生活と不可分に結びついた遺物であり、中世という時代背景を考える場合、現代的生活実態とよく似た様相を呈している。これは、中世後半において日本の生活文化が確立してきたという生活史上の特徴をよく表現しているものであり、現存する民具・民俗芸能の原形が出土遺物の中に含まれていると言っても過言ではない。今後、生活用具の時代的発達、展開を考える上で誠に有効な資料である。

〔注〕本文中の遺物Noは、発掘年（ex. 82→1982年）と台帳記載No（ex. F 821→鉄・銅製品の821番）である。

X 浪岡城跡北館出土の銅製品について

工藤 清泰

1. はじめに

浪岡城跡北館から出土した銅製品は、そのほとんどが鋳造されたものであり、製作方法・製作地、搬入経路、使用目的など具体的に説明できる点は少ない。一般に北館から出土する銅製品は、日常生活（この場合、一般民衆のと言った方がよいかも知れない。）から一步踏み出した使用具、つまり支配階層における当時の文化程度を知るための用具として位置づけることが可能と考えている。出土した製品を概観すると、

- | | |
|-----------|------------------------------------|
| I 武具 | 鎧、切羽、小柄、斧、鎌、足金具、火縄鉄、鉄砲玉、かぶと・鎧の部品、他 |
| II 仏具・宗教具 | 六器、金剛盤、香炉、花瓶、錦、鏡 |
| III 交易関係 | 銭貨、おもり（分銅） |
| IV 装身・化粧具 | 鏡、耳搔き、毛抜き鉄 |
| V 建築具調度具 | 銅釘、留具 |
| VI その他 | 銅滓 |

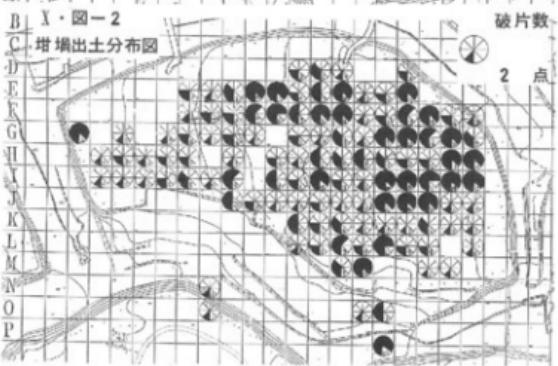
となり、量的には銭貨が圧倒的に多いけれども、個体別の出土では城館および戰闘行為があったという性格上、武具の比率がとても高い。特に、鎧等の刀装具は從来から搬入品のみ使用されていたと考えがちであったが、本城館において鋳造されたと確認できる鎧型・増塙・轆羽口が出土しており、铸造史において新たな局面を向えるに至っている。今回、それら鋳造関係の出土品をまとめ、中世考古学進展の一助となることを期待するものである。

2. 鎧型・増塙・羽口の出土状態と使用時期

鎧型・増塙・羽口がどのような地域から出土しているかを示したのが図-1～3である。鎧型については、北館東側に多く西側ではほとんど出土していないことに注目でき、多く出土するグリッドをひろいあげると、F 53区・G 58区・J 56区がある。（図-1）これらのグリッド内で製鋼に関連する遺構として考えられるものはF 53区がS T 117、G 58区がS T 210、J 56区がS X 46とそれぞれ竪穴遺構であることが言える。しかし、鎧型の多くは遺構の覆土から出土するもので、床面から出土することはほとんどない。考え方をかえるならば、これらの遺構周辺で作業をし、終了した時点で鎧型等の廃棄場所としてこれらの遺構を使用したとみることもできるが、竪穴遺構廃棄の状況をより適確に把握しないことは断定的に結論づける事は時期早尚である。

また、増塙の出土状況は発掘区全域に広がりをみせるものの、E 50区、F 53区、I 52区、F 57区、G 58区、J 56・57区、を中心とする区域に多くの出土をみている（図-2）。さらに羽口については、総数が少ないながらも、F 53区、H 55区、G 58区周辺に分布がみられる（図-3）。

このような、鎧型・増塙・羽口をセット関係として出土するグリッドは、F 53区、G 58区であり、



前述した遺構に伴うことが多い。F 53区 S T 117では鉄型・堀・羽口の他、青磁・染付白磁・美濃灰釉・瓦器・擂鉢等の陶磁器類、鐵釘・火箸・小札・かすがい等の鉄製品、切羽・鉤・装飾品等の銅製品および銅洋・銭貨・石鉢・臼・火打石等の石製品、漆器が出土しており遺構の廃棄時期は16世紀後半以前であると推定される。G 58区 S T 210では、青磁・白磁・染付美濃灰釉・擂鉢・瓦器等の陶磁器類、釘・小刀・小札・鉄・火箸・学引金・銅の鉢等の鉄製品、切羽・装飾品等の銅製品および銅洋・銭貨・硯・砥石等の石製品、漆器、

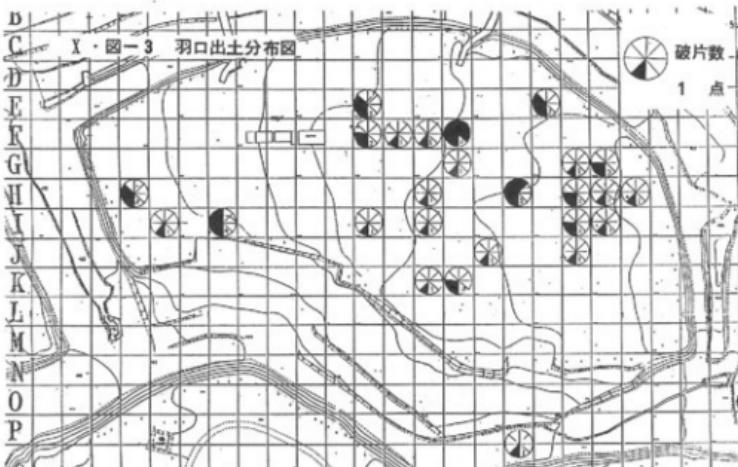
くるみなどが出土しており、S T 117と同じく廃棄時期は16世紀後半以前と思われる。

鉄型・堀・羽口の使用時期が16世紀後半以前とすれば、浪岡城が最盛期であった16世紀前半から中頃にかけて、さかんに鉄鋼作業をしていたことになり浪岡城内は単なる生活の場だけでなく生産作業の場でもあったことになる。

特に、鉄型の出土頻度の高い地区は比較的大形の掘立柱建物跡の東側部分に集中していることも注目できる。城郭跡は夏は南西から北東にむける風向、冬は北西から南東に吹ける季節風が多い場所であり、製鋼に関して亜硫酸ガスが発生し悪臭をはなつ条件を考えるならば、屋敷の東側で作業をしたという推測は妥当性を有しないであろうか?。ちなみに出土頻度の高いF 53区はS B12、G 58区はSB30、J 56区はS B02が比定できる。

ただ、出土分布図の中で注意しなければならない点は、鉄型・堀・羽口とも堀跡からの出土もみられる点である。これらの遺物は、使用後に一括して廃棄される可能性が高く、その捨て場として堀

跡が選ばれることは、平場内だけの調査で銅鋳物の生産方法を把握するのは不充分と言わざるを得ない。また、銅鋳に際して出る銅滓の出土分布をみると(図4)、鋳型・坩堝・羽口の出土分布とは明確な対応をみせず、出土量・出土分布からのみ考える場合の限界があることを認めざるを得ない。



3. 鋳型の特徴と製作方法

鋳型と推定できる破片は総数で96片出土しているが、同一破片と思われるものも少なからず存在するため個体数にした場合は、20～30個ぐらいと考えられる。（ただし、湯口の部分が5個体分しか出土していないためさらに少なくなる可能性もある。）これらの中で、大部分は鋤ないしは切羽の類の鋳型であり、若干製作品不明のもの（図5-16）も存在するが現在までに鋤・切羽以外の鋳型は出土していない。

鋤の形としては、いわゆる丸形鋤と木瓜鋤があり、前者は全体を12分割した透し鋤（図5-1）と14分割した透し鋤（図5-2）、猪目および変形巴文の透しを施した鋤（図5-4～9）、後者は文様を付けない平鋤（図5-3）と環状の透しを入れる鋤（図5-10・11）がある。これらの中で笄櫛が認められるものは丸形透し鋤（図5-1）だけであり、他の破片には認められない。

鋳型の破片を観察した限りでは、大きく四ヶ所の部位に分類できる。

- I 鋳型の雌型。深い彫り込みで銅を流し込む原形。
- II 鋳型の雄型。雌型の上に覆いかぶせる方で彫り込みは浅くしか付けられない。
- III 鋳型の縁。雌型と雄型を合わせた後で縁にすき間なくするよう貼り付けた部分。この部分は、しばしば雌型あるいは雄型の縁を伸ばして覆いかぶせるものもみられる。
- IV 鋳型の湯口あるいは鉢口部分。

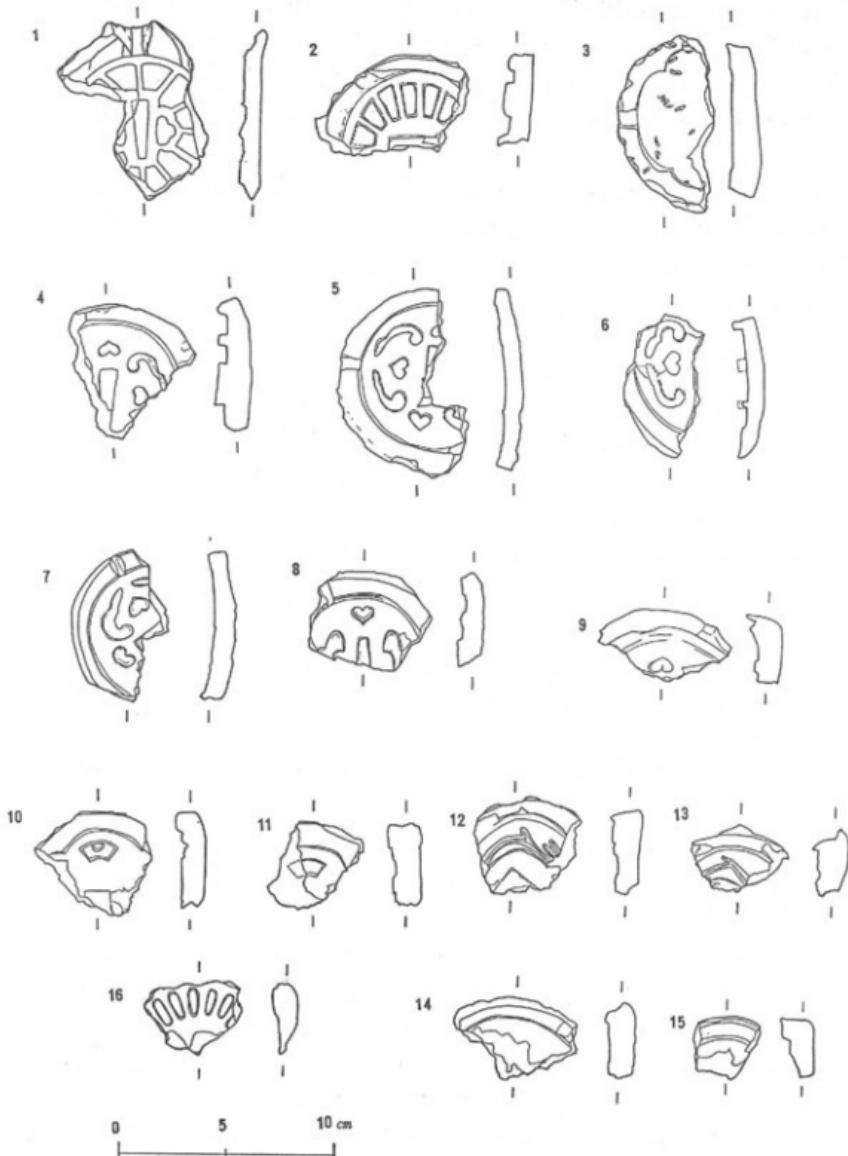
これは型どり成形時の合わせ方法と、製品を取り出す時の破壊方法によっていろいろな破片状態となるはずであるが、いずれの場合でも上記の四ヶ所の部位に割られているものが多い。

鋳型白体は内面が暗灰色に低火度のなま焼け状態で製品面は比較的滑かなのに対し、外表面は褐色から灰色の色調で瞬間的に高温度の鋳流物がかった部分は表面が焼けただれた状態で無数の細い気泡と光沢面だけが残っている。胎土には、植物質遺物（大部分が粋と思われる）と小石が多量に含まれ、割れ目にその痕跡が明瞭なものも多い。

さて、これらの鋳型の製作方法はいかなるものであろう。未熟な観察からではあるが以下の試案を考えてみた。

- (1) 鋳造する原型を用意する。この場合、原型となるものは金属製・土製・石製・木製のいずれでもかまわないと思われ、比較的単純に整形できるものと考えられる。（今まで、この原型と思われる遺物は出土していない。）
- (2) 粘土に粋等の植物質のものと小石を混ぜ、ある程度形を整えた後に原型の一面に強く押圧する。（これを雌型とする。）この時原型の表面には細かい砂を付着させるらしく、鋳型と原型が接する面には石英質の細片が多くみられる。しかし、この押圧の過程で図5-2の雌型は透し部分にあたる内面の突起を、滑面の上に貼り付けた後に押圧しているらしく、その痕跡が明瞭に認められることから、単純に押圧（型押し）作業だけだったかという点は疑問もある。
- (3) 雌型の上（原型のもう一面）に雄型と同様の粘土を押圧ぎみに貼り合わせる。（これを雄型と

I・図一五 鋳型実測図



する)この場合の押圧は雌型に比較すれば輪郭と透し部分が識別できる程度である。

- (4) 貼り合わせた雌型と雄型の側面に合口と思われるきざみを1~2ヶ所に入れる。
- (5) 雌型・雄型がある程度乾燥した段階で相方を取りはずし、原型を抜いた状態で再度貼り合せる。そして、一ヶ所に湯口部分を取りつけ、側面のすき間と全体を別の粘土で覆ってしまう。取りはずす時、粘土が柔かすぎると原型との接する面が平らにならずやや歪んだ状態になることもあるようだ。(図5-5・6・7)
- (6) 以上、製作した鋳型を低火度で焼く。
- (7) 鋳型に坩堝で調合した湯を流し込み、冷却するのを待つ。
- (8) 鋳型を破壊し製品を取り出す。

以上であるが、(5)の段階で雌型・雄型を取りはずす方法が今ひとつ理解できない。たとえば図5-4と図5-5は合口の一一致から同一製品の雌型と雄型と考えられるが、実際に貼り合わせてみると側面の接合面はかなりのすき間があり、本当に鋳造できるのかという不安におそわれる所以である。

今後、類例の増加を待って再検討したいと考えている。

4. 鋳型とそれに関連する遺物の発掘事例

銅製品の鋳型が出土する例としては、弥生時代の鋸鐸や奈良時代の和銅鏡等が有名であるが、中世以降の事例は少なかった。しかし、近年の中世遺跡発掘調査事例の増加にともなって鋳造関係品が出土する事例も多くなり、鋳型、坩堝、羽口などが遺跡内における生産構造と結びつけ報告されるようになった。主な事例を述べると、

- ① 浪岡城跡(青森県浪岡町) 鉢の鋳型、坩堝、羽口、銅滓が出土。16世紀主体。
- ② 根城跡(青森県八戸市)(注1) 不明鋳型、坩堝、羽口が出土。16~17世紀主体。
- ③ 後城遺跡(秋田県秋田市)(注2) 坩堝、羽口が出土。15世紀主体。
- ④ 小枝指七館(秋田県鹿角市)(注3) 坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑤ 柳田館跡(岩手県紫波町)(注4) 坩堝、羽口、鋳型(報告書に記述)が出土。16世紀主体。
- ⑥ 一戸城跡(岩手県一戸町)(注5) 坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑦ 大谷口城跡(千葉県松戸市)(注6) 銅鏡を溶融した坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑧ 八王子城跡(東京都八王子市)(注7) 羽口、坩堝、鉄砲玉の鋳型が出土。16世紀主体。
- ⑨ 勝沼氏館跡(山梨県勝沼町)(注8) 坩堝(溶融物付着土器という名称)が出土。16世紀主体。
- ⑩ 塩田城跡(長野県上田市)(注9) 羽口、坩堝が出土。16世紀主体。
- ⑪ 本覚寺遺跡(神奈川県鎌倉市)(注10) 羽口、取瓶、坩堝、鋳型が出土。14世紀前半主体。
- ⑫ 平安京左京八條三坊二町(京都市下京区)(注11) 刀装具の鋳型、仏具の鋳型、羽口、坩堝が出土。13世紀主体。

などの遺跡があり、鎌倉市と京都市の例を除けばいずれも 15・16世紀を主体とする城館跡で出土していることが注目できる。鉄型は、現在まで 6 遺跡で出土し、具体的に製作品名がわかるものは浪岡城跡、八王子城跡、平安京左京八條三坊二町の 3 遺跡だけである。坩堝は、上記 12 遺跡の他、草戸千軒町遺跡（広島県）、浜の館遺跡（熊本県）でも出土しているらしく、ほぼ全国的広がりをもって確認されるようである。特に鎌倉の場合は本覚寺遺跡だけでなく、藏屋敷遺跡、長勝寺遺跡、二ノ鳥居西遺跡、光明寺裏遺跡、スイミングスクール遺跡、鶴岡八幡宮境内遺跡など、市内各所から鉄銅に関連する遺物が出土しているという（注 12）。また、京都の平安京左京八條三坊二町の場合は、刀装金具の鉄型として兜金 6 個、鞘尻 2 個、兜金あるいは鞘尻と推定されるものが 2 個、足金物 8 個、槍金 5 個、縁金物 7 個、責金 6 個、座金物 4 個と刀装具に用いる金具すべてにわたって検出されたという（注 13）。鎌倉と京都の場合は遺物の対応する年代が鎌倉時代（13世紀が主体）ということもあり、①から⑩までの遺跡とは性格が異なり、いわゆる都市における遺物と理解してよいと思う。

このように鉄銅に関連する遺物は、中世全般を通じてしかも全国的な分布を呈して発見されており、今後さらに資料は増加するものとみられる。

5. 考 察

以上、浪岡城跡出土の鉄銅関連遺物と類例を述べたが、これらの遺物は 16世紀後半の城館跡から出土する例が多く、戦国時代という歴史背景を考え若干の問題点を述べてみたい。

鉄銅関連の遺物の中で坩堝を最初に取り上げたのは、昭和 30 年に発掘調査された小枝指七館遺跡の報告書である。報告書は、土製るつぼの出土と近くから検出された炉跡と関連づけ、青銅鋳造に使用したものであり、同遺跡から多数出土した無銘鏡も鋳造したのではないかという見解を出している。昭和 37 年に調査された大谷口城跡では、かわらけに鉄銅が溶融状態で付着しており、同じく出土した鉄砲玉の色調と類似することから銃弾作りとの関連に注目している。以上の 2 例は、鉄銅の際に銭貨あるいは鏡貨と鉄砲玉に言及した点で興味深く、勝沼氏館跡を調査した萩原・八巻氏は「武田氏悪鏡供出令書」の悪鏡を集め鉄砲玉をつくろうとした事柄に触れ、城館内の小殿治的遺構および坩堝との関連を示唆している（注 14）。しかしながら八王子城で出土している鉄砲玉の鉄型は、鉄玉の鉄型であろうと推測しており、柳田館跡から出土した坩堝付着岸の成分分析では鉄鉄の鉄物岸という結果が得られるなど、鉄型や坩堝がすべて鉄銅に使用したものではなく、鉄鉄・鉄銅の二面性があることも注意しておかなければならぬと考えられる。

浪岡城跡から出土した鉄の鉄型についても、表面観察からすれば縫合の付着など鉄銅に関連した遺物と見れるが、鍛造した鉄鉄の地金に銅をメッキした可能性も、鉄本来の機能からすれば考えられる事であり、今後は化学分析による資料検討も必要になるであろう。ところで、浪岡城の鏡はどのような目的でどのような人々によって製作されたのであろう。前述したように、坩堝の出土状態が発掘区全域にわたってみられるることは、鉄造作業がある限られた期間・場所だけでおこなわれていたもので

なく、城館期全期において継続されていたと考えることができる。その事は、渡り職的な鋳物師の存在というより、城館内において定住する鋳物師の存在を想定でき鎌倉におけるあり方（注15）と違うような印象を受ける。つまり、中世前半の様相と戦国期に近く在地領主が制権を争う時期の様相の相違であり、鋳物師など戦略上必要な職人を領主の支配下にとどめておくようになるのではないだろうか。

また鋳の製作目的も、単に自分達が使用するためだけではなく、部下への恩賞としてさしつけたり（透し鋳などが多いことから）、北海道などの銅製品稀少地域、あるいは多量に搬入されている陶磁器等のみかえりとして、城館から搬出する交易品としての位置づけも考慮しなければならないであろう。

注1 八戸市教育委員会 史跡根城跡発掘調査報告書 1983

注2 秋田市教育委員会 後城遺跡発掘調査報告書 1981

注3 江上波夫他「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七鉢遺跡」『館址』所収 1958

注4 岩手県教育委員会 東北縱貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ（柳田館遺跡） 1980

注5 一戸町教育委員会 一戸城跡・昭和57年度発掘調査概報 1983

注6 松戸市教育委員会 大谷口・松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告 1970

注7 八王子市教育委員会 八王子城 1983

注8 勝沼町教育委員会 勝沼氏館跡調査概報Ⅰ 1977、同Ⅱ 1978

注9 上田市教育委員会 塩田城跡第1次発掘調査概報 1976

注10 大三輪龍彦編 中世鎌倉の発掘 1983

注11 原田一敏 「平安京左京八條三坊二町」平安京跡研究調査報告書第6輯 第6章1節・第7章4節 1983 財団法人古代学協会

注12 a) 注10と同じ

b) 鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 藏屋敷遺跡 1984

c) 鎌倉市鶴岡八幡宮研修道場用地発掘調査団 研修道場用地発掘調査報告書 1983

注13 注11と同じ

注14 萩原三雄・八巻与志夫「甲斐の中世城館址研究－勝沼氏館跡の調査を中心に」『季刊どるめ』No18』所収 1983

注15 注10と同じ

注16 図示した鋳型の出土区等は表1の通りである。

X・表-1 鋼型鋳錠表

No	遺物 No	出土区(遺構)	層位	器形	軸調・色調	胎	土	計測 値	特徴	備考
5-1	80P7529	I 55	I	鉢型	浅黄橙色・灰褐色	浅黄橙色・暗灰色	黑	8.16×6.23×1.17	銅付着	
5-2	82P1467	E 50 S T 165	フク土	"	灰褐色・黑褐色	黑	褐	7.27×4.84×1.33		
5-3	80P7788	G 55 S X 37	フク土	"	灰白色・黑灰色	黑	色	8.33×4.40×1.42	6.55から付着	
5-4	83P498	G 58	I下	"	明黄橙色・灰色	灰	色	6.23×5.53×1.70		
5-5	83P1915	G 58 S T 210	フク土	"	灰白色・黑褐色	灰	色	8.60×6.04×1.17		
5-6	83P1770	G 58 S T 210	フク土	"	明黄橙色・灰色	灰白色	灰褐色	6.58×3.38×1.30		
5-7	83P1691	G 58 S T 210	"	"	灰白色・灰褐色	灰白色	灰褐色	7.04×4.56×1.18	銅付着	
5-8	83P1781	G 58 S T 210	"	"	黄橙色・灰褐色	黄	橙色	5.75×5.04×1.21		
5-9	83P1790	"	"	"	灰白色・黑色	黑	色	6.06×3.24×1.67	銅付着	
5-10	83P1944	G 57 S X 164	フク土	"	浅黄橙色・灰褐色	灰褐色	黑灰色	5.08×5.04×1.45		
5-11	83P1724	G 58 S T 210	フク土	"	明黄橙色・黑灰色	黑	灰	4.90×3.72×1.70		
5-12	83P1765	"	"	"	灰白色・灰褐色	黑	灰	5.23×4.52×1.77		
5-13	83P1642	G 59	"	"	灰白色・灰褐色	黑	灰	4.45×3.10×1.91		
5-14	83P1767	G 58 S T 210	"	"	灰黄色・灰褐色	灰	褐	5.66×3.84×1.52		
5-15	80P301	I 56 S T 63	フク土	"	灰黄色・灰色	灰	黄	3.38×2.92×1.50		
5-16	80P1567	P Q 55 S H 05	フク土	"	"	-	-	4.60×3.40×1.20		

X 浪岡城跡出土の木製具について

葛 西 善 一

1. はじめに

出土する木材には、どんな小型の物でもそれぞれに歴史をもつものと解して見るのだが、さて、それが何に使用されたかと、判断に困るものもある。

今回は、木製具のうち2～3品目に絞って観察記録してみることにした。

2. 井戸枠

城址の中には随分井戸が多く出る。こんなにも多くの井戸を掘りあげたものかと思う程井戸の数が多い。井戸の中には、水を汲みあげる為のものでなく貯蔵庫として使用したものもあるだろうし、既に老朽して埋立てたものもある。それらも同じ条件で発掘するので井戸数が多くなるものと思っている。

さて、天正の落城の際、どれだけの井戸を使用していたか、それを裏付けるものはないが、井戸枠のあるものは当時使用中のものと解しても差支えないものと思う。

2-a 焼け跡のある側板

今まで出土した井戸枠には円も楕円形もなく、皆方形のものであった。枠は4～8本の枠骨で固められ、骨には納が彫られて横に抑え木（ぬき）で側板をしっかりと抑えを利しているが、この枠組みの中には明白に焼跡の見られるのがある。

記号（83S E73M24）で、この側板の巾は44.5センチ、長さ165センチ、厚さ3.5センチで多くの側板の中では巾広の方である。

件の痕跡は、板の下部から計ってみて約50センチで、面積は大人の掌一つ半位もある。いったいこの焼跡はどうして出来たのだろうか、そこに焦点をあててみた。

まず、井戸を掘る際、まだ土中におろきぬ前に火の不始末で焼跡をつくったかと途方もないことを考えてみたが、どのつまりは落城の際、城中の建物に火を放たれその燃え残りが井戸に放り込まれてくすぶった時にできたものではあるまいか。

そうとなれば、城中の井戸は大体水が涸れていて、水深は50センチ程度であったろうか、元より河岸段丘に構築された城郭で、周りに水濠があるものの、井戸水は不充分であったかも知れない。落城も夏場の7月、旱天続きであれば水不足を来していたとしても当然である。

井戸の発掘の場合、落城以前に埋立てられていた井戸は論外であるが、使用中のものは木炭やら灰などが多く詰っている。

2-b 枠骨

一つの井戸に枠を入れる時、柱目の割板が何枚位を使用しているか、その井戸の大小にもよるが、8枚～10枚前後である。隅々には枠骨がありその枠を固めているが、その骨は4本は大部分であるが、

中には8本のものもあった。その中から2例を引いて書いてみよう。

II・図一



SE 73 十字柱

II・図二



SE 61 十字柱

出土した棹骨で最も長いのは211cm、そして11~10.5cmの角張ったものであったらしいが(図1)水を汲みあげているうちに、上部の方が割りへり、更に落穂後の長い年月は腐敗も加えて槍の様な形になった。

こゝで(図2)と比較してみると、老朽化して使用済となつた場合、再び掘りあげて更に使用したものと、もう耐用度が無いものとしてそのまま埋め置したものもあるに違いないと思った。

節くれだった図2を見ると、長い年月の使用期間を感じられる。節は木のどの辺を使用したかも相分り、尚納穴を作る時難儀をするので無節の部をえらんでいることもわかる。それにしても木材を切断する時、鉈の様なものを使用したらしく断面に苦労の跡がありありと分る。

尚、棹骨で判断するに、側板よりも骨の方が若干出ている。尚から考えると下部だけにあつたようになる。図1は鉈の様なもので木肌を滑にしたが図2は摩耗の中にも^{ちような}鉈か手斧で削って均した痕跡を残している。

2-c 納と板押え(ぬき)と楔

図1・2共に一方に枘が彫られている。そこには側板を押えるためのぬきがある。そのぬき板(棒といつた方がよい)はまちまちで弓状に曲ったものの中にはある。材質は板も骨もぬきもヒバ材と見るが、ぬきの中には皮質が残っているのが1本あって、それはナラ材とも見られる。

次に楔の大きいのには棹の大小からみて驚く。現在、私の考えからすれば可能な限り枘は大きく彫り、結果は楔をもって枘に合せて堅固にしたのだと考えられる。その方が細工師としては楽で結果もよいとなれば、甚だ素人臭いとも思われるし、曲ったどんな木材でもやりとげる腕もあると思えば逆に唯の素人とも思われない。この楔の出過ぎを切るのに鋸^{のこぎり}の使用もあったというが、それを見つけずになつていて。ついでであるから、この鋸の使用についてこの項を終りたい。

2-d 鋸の使用した例

普通木材を切断する場合、誰しも鋸でというのが現代人であるが、当時はそれが珍しかった。工具を論ずるのは私の分野ではないが、木製具を見ているうちにどうしても避けて通れないものがある。さてこの材をどんなもので作ったかを考えるのは常識である。

図3(鋸を使った木片)を見て貰いたい。

II・図-3



鉢を使った木片

この木片は木製具を作る時、余分な所なので不用でありそれを切り捨てる部分であったらしく、梢の部分であることが判る。材質は杉と思う。

木片は直径で 5.5 cm、たかの知れた小片であるが、それを切断するために大変苦労の跡が見られる。2~3回も回して断片に鉢の段をつけている。これでは小学生 3 年生位の子供がきればこうなる。

どうして鉢の使用が発達しなかったかが問題になるが、それを簡単に云うと現在の様にアサリ(目抜り)が不充分で、工具としては甚だ難点があったらしい。鉢をタテ・ヨコびきとして自由に使えるのは未だ時間を要するようである。

2-e 工具や工具の柄や鞘は

井戸枠を作るにもそれぞれの工具を使用した例をあげてきた。その工具の出土や工具の機能を發揮させるには附属する木製具がある筈である。木材の保存はその環境に支配されることは誰でも頗けるが、出土木製具の中にはそれらしい物がないので、いざ記録する際に事を欠く。鉢の調査では出土の可能性が充分であるからそれに期待したい。

3. 曲物

曲物・曲輪という名前は一般的な名称であるが、此の地方では蒸籠が訛って「ヘロ」と言っていた。
ヘロにコの愛称をもつて「ヘロコ」と呼び、それが御飯入れの「ワッパ」も菜物(副食)を入れる、小型ワッパもヘロで通っていたらしい。

それがだんだんに、語り物にもある「秋田名物曲輪ッパ」が一般化し、戦時中は金属器の払底と共に、この曲輪ッパが必ず食事用の什器の中に顔を出すようになったが、戦後の復興と共にだんだんその面影もなくなり、現在は特別の民芸什器に斜陽化して今日に至っている。

3-a 出土した曲物

これは曲物の類だと判定される木製具は少なくないが、それが完全に近いものは至って珍しい。それ程、この種の出土品は形体や製作過程に手を施すので、余程よい環境にない限り保守は困難をもつているものと思う。

出土した物は極一部であるが、当時城中で使用していたものは小は神域で使用する口すゝぎ用柄物をはじめ、大は水溜用にする開口桶、蒸器の櫃や蒸籠、そのほか多種多様の大きさのものを使用していたと思って差支えあるまい。

そうはいうものの、城址で出土したものは限られ、小さな破片でどの部分であるか見当のつかない

ものは省略し、図に書いた蒸籠を紹介しよう。

蒸籠A

図4は完全形に近い。見て判る通り土圧のため三角形になっている。中型の蒸籠である。上下2枚の鉢を巻いているのは蒸器の形だというが、手ごろなところからお鉢を使ったかも知れぬ。若し蒸籠であれば附隨した框や籠が出土すると元気づけられるのだが、今のところ未だそのものを見てない。底板と思われる厚板はよく出土するが、どれを見ても当の蒸籠のものと断定するものはない。

この蒸籠の形は前述のように崩れていて計測しにくかったが高さ24.3cm、直徑は27.5cm位あった。鉢巻にした巻板の巾は4.3cmでその厚さは0.5cm、板の縁り用は桜の皮である。桜の皮のことをこの地方では櫛と呼び、櫛皮で縫めたともいう。（一部にコゲ跡あり甚だ印象的）

蒸籠B

図5は出土中、形としては最大級である。しかしあスケッチに見られるように甚だ無駄な形骸とも思われる姿で現われたので、原形は想像の域で我慢して貰わなければならぬ。

まずは計測するに最も高い所で40.5cm、直徑ははぐれて正確さを欠くが59cmを見る。2枚綴りか3枚綴りかは分らぬが、現物は2枚で出土した。柵目を割った剥板の厚さも一定はしてなく、大体0.5センチでそれ以上は見られない。

この蒸籠で発見したことは、大型のものの曲面を作る方法として年輪に対して直角になるよう、鋭利な小刀で切り込んでいることである。切り込み疵の間は1.5cm位で全体についている。

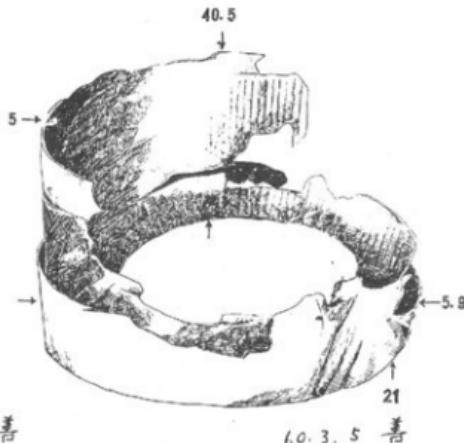
II・図-4

蒸籠A



II・図-5

蒸籠B



ところが、調査者にとって有難いことは、重ねた剥板が分離したお蔭で更に斜線のうすい疵跡が図の様に見られることである。これで大型物を形良く曲面をつくるには、こんな方法でやったのかが判明した。材質はヒバである。ヒバ材であるから長い年月を冥府の中に生きつけ、再度出現して歴史の証言者になったのかも知れぬ

3-b 百見より技術師との対談

S60年1月佳日、出土品の一部を持参して、実際の製作過程の見学のため曲物屋を訪問した。南津軽郡藤崎町の木挽町に住む境さん宅へである。その時の対談を要約すれば

出土品の一部を見て

「これはヒバ材ですね。曲物はヒバ材に限ったものではなくスギ・サワラ・ヒノキを使います」

土中に入つてから450年位になるが

「スギ材なら既に腐っていたでしょう。そこがヒバ材の良いところ、この実物は水に流されていましたよ。ふちが丸くなっている」

境さんの細工場の作品を見て、今使用の材料はどこ産ですか。

「大鶴の奥山には未だ良質のスギ・ヒバがあります。ヒバの方が安い。先日の競りで直径70センチ、長さ5メートルで160万円で落札され買った人は秋田の人です」

今まで手がけたものにはどんなものがありますか。

「何んでも注文次第でね、甌や蒸籠は勿論、下肥柄杓・水通し・鉢物(櫃物)大輪ッパ小輪ッパ、祭神事用など、未だあるが数えきれないね」

境さんの周囲には例の削円形をした昔なつかしい便器が山程積んでいた。

「結構注文がありますよ。こうして纏めて作ってますかね」

次に細工には是非ともなければならない工具をあげて貰った。前記の様に工具の分野ではないが、工具には柄や鞘等の附属物がある。その為にも捨ておく訳には參らぬ。その工具をスケッチしておいた。

工具は切れるでしょう。

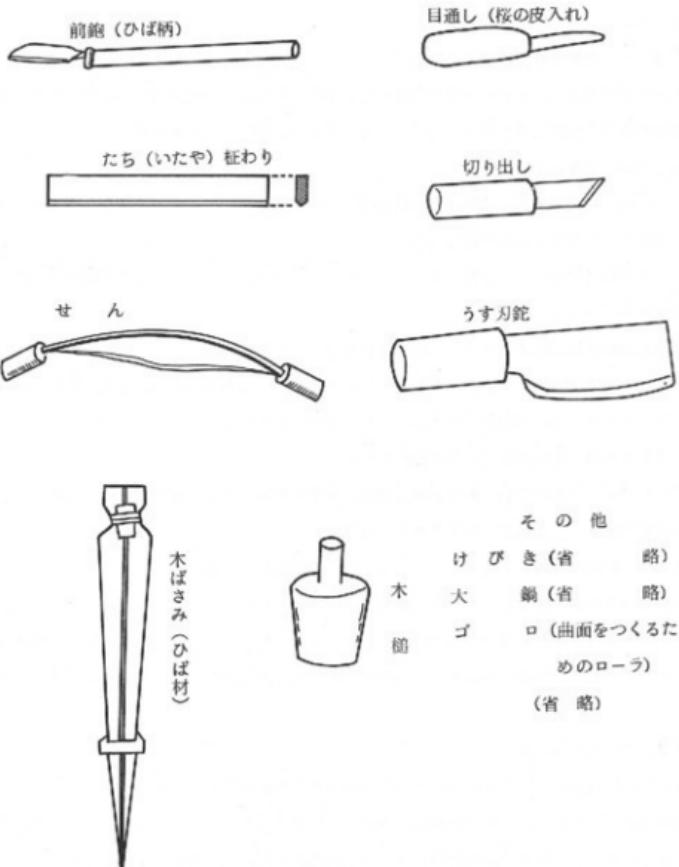
「市販の物は用に立ちませんね、そこで名のある刀工に作らせています」

曲輪物は作る形からして限度がある。現在の様に金属やポリエチレンの錫形作りには競り合うとかなうまい。そういう意味で曲輪物の形体は北畠時代から現在まで大した変化もなかったと思われる。

境さんの工具を見ても判る通り(図6)、さして複雑な機械とて一切なく、曲物師は全くの手細工であり古代・中世から引きつがれた古典であると思った。

60.3.5

Ⅱ・図一 6 曲物に使用の工具



XII 浪岡城跡北館出土の須恵器・土師器について ——特に壺形土器の形態分類を中心に——

麥農圖 漢一

1. はじめに

浪岡城跡北館から出土する須恵器・土師器の量はダンボール箱にして30箱以上にものぼるが、完形品は稀少で、全形・器種を判定する事が不可能な小破片がほとんどであった。これは、築城時の地表の掘削、その後の住居の建替え、近年の農地化によって土砂の攪乱からくる事でやむをえぬ事である。須恵器・土師器が城館期以前の所産であることは、造構の出土状態からみても知れるところであるが、製作年代・使用年代については県内において今だ不明確な点が多い。今回、昭和58年度までに出土した須恵器・土師器について概略を述べ、特に环形土器については製作技法・法量等から数形態に分類し、資料提示するものである。

2. 离散器

器形としては、壺形、壺形（図1-1・2・3・4・5）、甕形がある。甕形に関しては特に小破片が多く、全形を把握する事は困難な状況にある。しかし、これら須恵器の供給窯元としては出土遺物の特徴（口縁部の特徴、同一ヘラ書き記号の検出例）と地理的に近い事から五所川原市前田野目窯跡群であろうと考えていた。これをさらに確定的にしたのは、昭和57年度調査報告書における奈良教育大学三村利一氏の須恵器と珠洲系片の胎土分析の結果であった。以下、項目別に記述する。

2-4 瘤形(中·大型)

胎土は不均一性の砂粒を含み、焼成が良く色調も青灰色を呈する器片と器厚内部が赤銅色を呈するものもみられる。器表面に黒色の光沢を有するものと白色の付着物がみられる器とがある。大型の甕は肩部まで叩目を有し(図1-6)、器片によっては櫛目状の文様も一定せず格子目状に交差したり、深さ・幅等もまちまちである。中型甕では叩き目を半分位埋め戻している器片もある。

2-b ヘラ書き記号を有する器片

刻まれている箇所は环形では脛部下位と底部、靴形・壺形ではすべて肩部から頸部にかけてである。今まで確認されている記号で、欠落している部位に刻まれて判読できない器片も相当数ある。

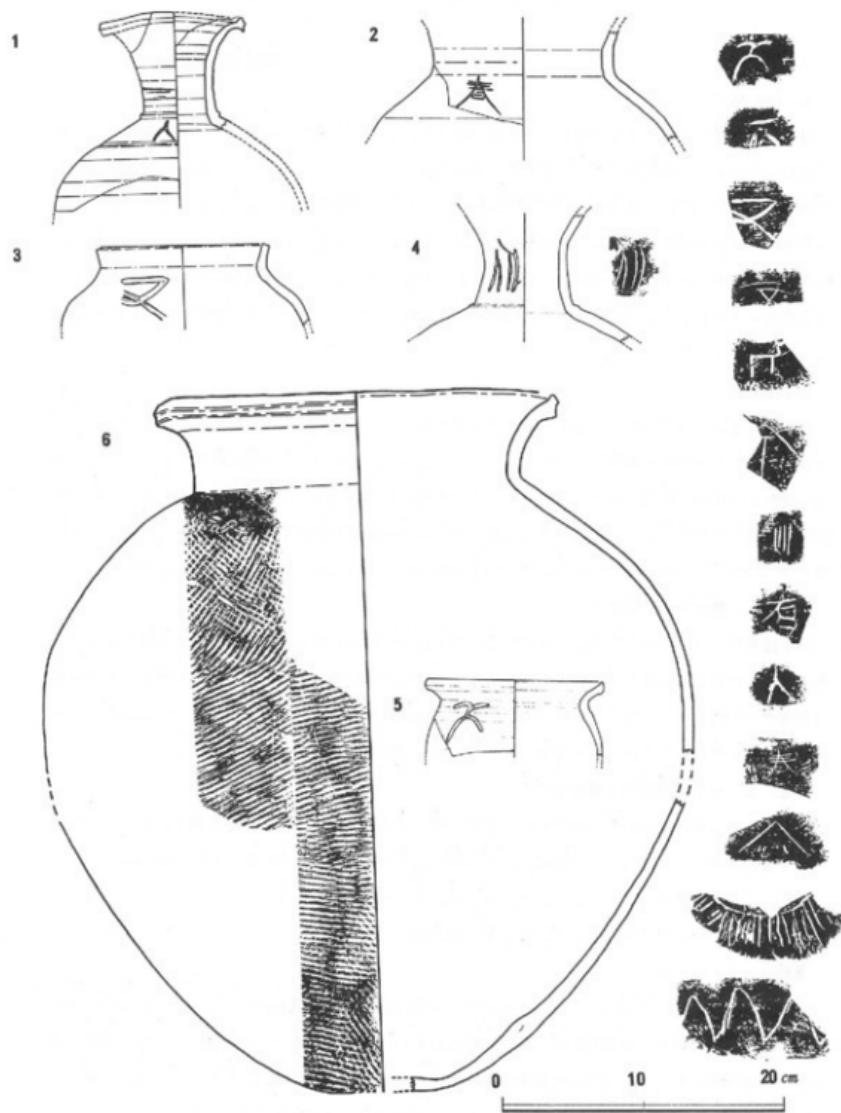
环形山 M、V、X、△、▽、水、火、月、V、V、#、り、十

壳形 大 小 又 纵 横 ζ V₁ V₂ 春 有

卷之二

以上が確認されている記号であるが、特記すべき事は昭和57年度調査時に文字（春、有）の刻まれた壺形が出土しており、供給先からの要請で刻んだものか今まで県内では検出されていない器片である。北館より出土したヘラ書き記号の中で4例（川、卅、八、X）が昭和50年五所川原市前田野目砂田窯跡発掘調査報告書、中の27例中みられる。今後の調査でさらに数はふえると思われる。

図・図一 須恵器実測図



2-c 火ダスキを有する壺形器片

胎土は均一的な砂粒を含み、土こしが充分なのが器厚内の剥離・中空・亀裂が見られず器厚も一定の厚みを持っている。色調は個々の完成品までの燃焼温度の相違、時間等からくるのか一定せず、青灰色から灰色、明褐色と変化に富んでいる。硬度も完全に焼き締まっている器片からソフトで土師器と区別つけ難いものまである。ヘラ書き記号は胴部下位、底部に刻まれているが特別の記号はみられない。焼成時に重ね積みをして窯面積の有効的活用をはかったと思われるが、窯内の場所によって還元焼成の恩恵を受けない場所に置いて、比較的低温度で焼かれている。別に考えるとすれば、大型の器類とは燃焼時間の相違、高火度に対して耐える胎土、完成出荷率等から器類にあった比較的小型の窯で焼いていたと思われる。

2-d 酸化須恵器の壺形器片

須恵器と土師器の中間に位置する器類で分類上問題のある器類である。胎土は微妙を含み全体的に器表面に砂粒の為にザラザラした感がある。色調は胎土中の鉄分が高温の為に変色して明褐色、赤褐色を呈する。硬度は土師器より硬く叩くと金属音を発する。器形は壺形である。大型の器形の検出例がなく小形の壺形である事、須恵器としての特徴的なヘラ書き記号が刻まれていない事、などから日常生活の要求度により、須恵器生産と平行して比較的高度な技術を必要としないで誰にでも作れる器類ではなかろうか。登り窯的な煙道、天井を持たないで直接酸化焼成する野窯式の方法で同じ器だけを大量に焼いたのではないだろうか。

注) 酸化須恵器 — 分類上まだ正式な名称・位置付けがなされていないために本報告書で便宜上使用的した過渡的用語である。

3. 土師器

器形は壺形と壺形が有り、壺形は復元可能な個体は無く詳細な把握が出来ないので記述を省き壺形のみ記述する。出土状態も順序・遺構と関係有るものは少ない。量的には底部と胴部片が多く全体的に焼成、胎土組成は良好なものが多い。残存部の特徴のあるものを抽出して記述する。

3-a 内黒壺

ロクロ台使用で器内面を炭化している。カーボンの付着に差がみられ、表面に墨液を塗ったようになくなっている器。タール状の付着物が認められる器。使用時間が長かったのか、技法としてミガキを施しているのか、光沢のある器。器形は深みを持ち底部からの湾曲度が少く、直立状態の器から底部より外側に湾曲し丸みを持つ器。整形痕の有る器は内面底部より放射状の暗文を有する器などがある。

3-b ロクロ不使用の器

器形はすべて壺形である。製作技法としては、手づくね法、輪積み法、で全体に器厚は厚く、外面をヘラ削りによる整形痕がみられるものもあり底部痕は砂蹠、蘆編の圧痕を有するもの又は木葉痕を刻んだ器などがある。色調は灰褐色を呈するもの、焼成時の斑からくると思われる器体の一部が黒く

く変色している器もみられる。器に統一的制約を持たず製作者の意志にまかせて自由に製作されているものを見ていると素朴さの中に暖かさを感じる器類である。

3-c ロクロ使用の器

ロクロ台使用の坏形は、須恵器の坏、酸化須恵器の坏と整形上の相違点はみられないで一括して形状から大別する。

3-c-1 血状坏型 器高が低く底より直線的に外反して全体に器厚が薄くてそのまま口縁部までびいている。

3-c-2 浅鉢状坏形 器高が若干高くなり、外反する角度が胴部中央部位から丸みを持ってさらに外側に角度を変えて反り口縁部の広い器。

3-c-3 碗状坏形 器高が高く底部よりの立ち上がりが強く胴部を丸くそのまま口縁部まで続き口縁部が薄くなる。

これらの中には中間的器もみられるが、日常生活からの要求以外に、工人好み、技術度が多分に影響しているのであろう。他に砂粒の多少、底部内面に出来る小突起、外面の指による横方向へのゆるい波状の起伏なども分類上の特徴となろう。

4. 浪岡城跡北館出土の坏形土器

上述した須恵器・土師器の中で彫磨具の主体となる坏形土器を、器形・成形・焼成・整形・胎土等からまとめてみる。この場合、器形的には前述したように皿状、浅鉢状、碗状と3形態に分類可能であるがそれを数値の面からみると、器高に対する口径の比率が、

(皿) 2.7 > (浅鉢) 2.4 > 碗

となり、この数値が一応の目やすとなる。しかし、器の大小によっては数値に若干の変動がみられ、

2-c 火ダスキを有する坏

2-d 酸化須恵器の坏

3-a 内黒坏

と分類しているが、この他にいわゆる須恵器坏、土師器坏を加え5分類できる。さらに製作技法からは、

3-b ロクロ不使用の器

3-c ロクロ使用の器

の二つに分類でき、底部の切り離し技法とともに分類上のメルクマールとなりえる。

このように、坏形土器を分類する場合どこに重点を置くか問題となる所であるが、浪岡城跡の場合には出土層位、出土遺構による相違は顯著に認められず、時間差による分類は実際上不可能である。さらに、前述した酸化須恵器という用語にも表われた通り、通常の土師器・須恵器という分類も妥当性は薄い。そのため、筆者は整形および器体表面の特徴を中心に以下のように分類してみた。

A類 いわゆる内黒の坏。器内面に意図して黒色処理を施しているもの。ロクロ使用。

B類 血状坏。器高に対する口径の比率が2.7以上のもの。ロクロ使用。

C類 器体表面に火ダスキおよび酸化斑文がみられぬ、いわゆる土師器坏。ロクロ使用。

D類 器体表面に酸化斑文と環元部分はみられるものの火ダスキがみられない、いわゆる酸化須恵器坏。ロクロ使用。

E類 器体表面に火ダスキを有するもの。ロクロ使用。

F類 ロクロを使用しない坏

G類 いわゆる耳皿。

H類 その他の坏。

4-a A類の坏(図2-1~6)

本類はロクロを使用し、器内面をカーボン付着によって黒色処理している。器形的には碗状のものが多い中で直線的立ち上がりを呈するもの(3)もある。内面処理の面では、光沢の著しいもの(4・5)と薄く色あせているもの(2)があり、内面底から放射状に暗文を有するもの(1・5)は技法的特徴である。焼成状態は、すべて土師器質である。

4-b B類の坏(図2-7~14)

本類はロクロを使用し、器高に対する口径の比率が2.7以上の、いわゆる血状坏である。器形上の特徴としては、底部立ち上がりを肉厚に整形し直線的に口縁が開くものが多いのに対し、(10)は明確に立ち上がり部を形成せず脣部が内湾ぎみに立ち上がった後口縁が外反する例である。焼成状態では、土師器質の焼き上がりを呈するもの(13・14)からいわゆる酸化須恵器質の焼き上がりを呈するもの(7~12)まであり、後者の胎土には小石を含有して器面に露呈する特色がある。

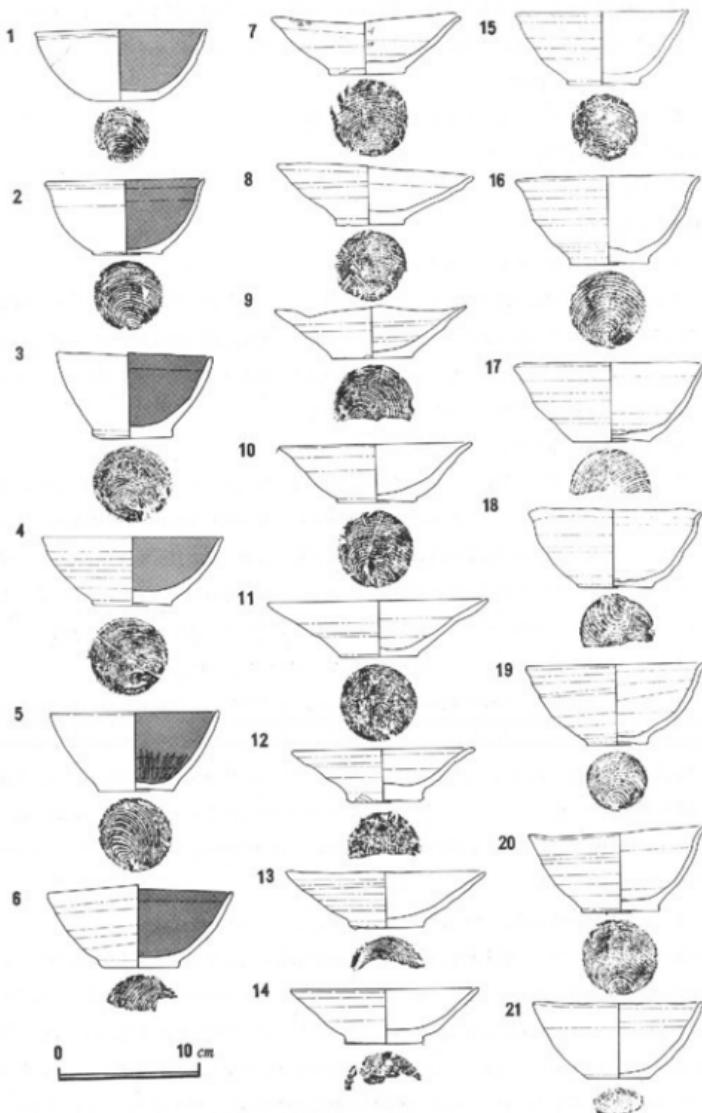
4-c C類の坏(図2-15~19・21、図3-22~29、図4-49)

本類はロクロを使用し、全般に赤味の少ない黄白色の色調を呈し、後述するD・E類よりは軟質な焼き上がりを呈する土師器質のものである。器形上の特徴としては碗状のものが多い中で、口縁が外反する浅鉢状のもの(25~28)もみられる。胎土は、比較的精選されたものが多いが、多量の小石を含有し器面がザラザラしたもの(15・24~26・29・49)もあり、すべて同一素材(粘土)で製作したとは言いかたい。また、器体内面にタールあるいは炭化物が付したもの(23~26)もあり、饗膳以外の使用目的があったと考えられる。

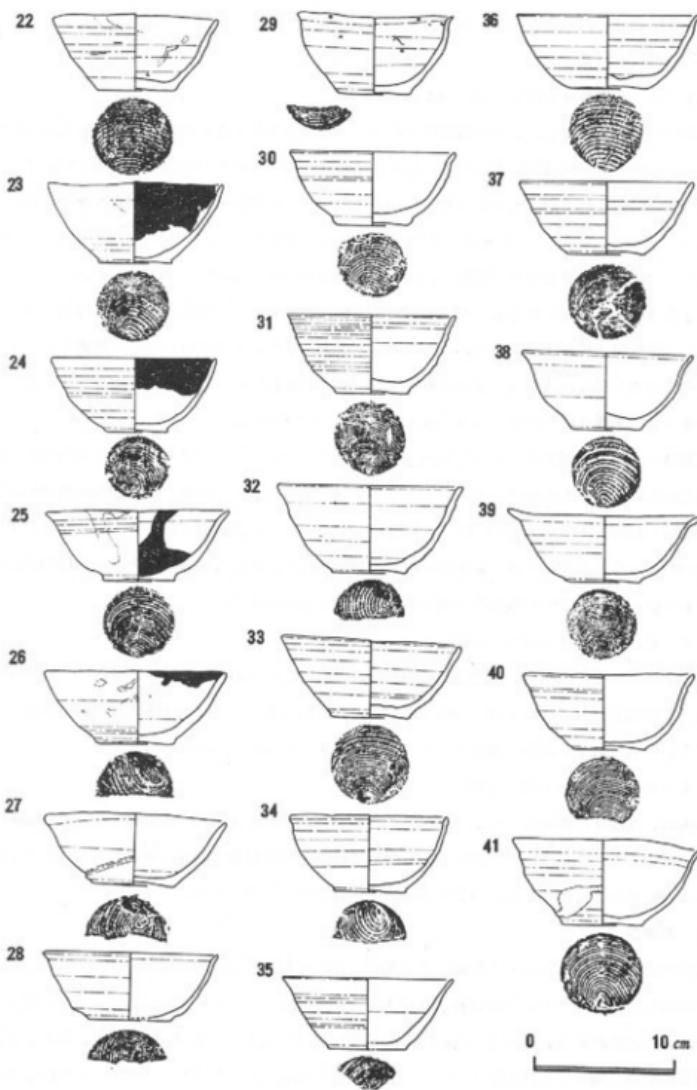
4-d D類の坏(図2-20、図3-30~41、図4-42~44)

本類はロクロを使用し、器体表面の一部または全般に酸化斑文を認められるものである。また、本類の中には酸化斑文とともに須恵器特有の還元状態を呈する焼き上がりをみせるもの(40)があるため酸化須恵器という名称を使用した。器形上の特徴としては、碗状の形が多く、口縁が広く外反する例(39・43)は特徴的である。またこの二例は(34)とともに表面を丁寧に調整し他の器体とは相違が認められる。器体の色調としては、赤褐色(酸化状態)のものが多い中で、(20)は黄白色、(30・35・42)などは暗灰色を呈する部分が多く、焼成条件が一律でなかったことを示すと思われる。

III・図-2 环形土器実測図(1)



III・図-3 环形土器実測図(2)



また、整形上の特徴として、内面見込み部分にロクロの巻き上げ痕がそのまま残ったり、中央部が小突起状を呈するもの（31・33・36・38・44）があり、後述するE類にも認められることから製作技法の特色として興味深い。

4-e E類の壺（図4-51～61、図5-62）

本類はロクロを使用し、いわゆる器体に火ダスキの痕跡を有するものである。器形上の特徴として碗状のものが多く、浅鉢状のものも若干存在するが前述した数値上からは明確に比定できず、さらに皿状の器は現在まで1点の出土もみられない。焼成温度とも関係あるが、色調の点を述べると、黄白色（52・54）、暗灰色（51・56・57・59・60）、黄灰色（53・55・61）、黒灰色（62）とバラエティーに富み、重ね焼きの影響で口縁部だけが還元状態になっているものも多い。火ダスキは、1～3本の紐を十字にかけるものが一般的であるが、きっちり「十」字に組み合わせるほどではないらしい。（61）などは放射状にかけている例である。本類で完形のものにはかならず書き記号が認められ、その点で（58）は火ダスキ痕は観察できないが本類に包括してさしつかえないと考えた。

4-f F類の壺（図4-45～48・50、図5-63～65）

本類はロクロを使用せず、手づくね法、輪積み法で成形したものである。器形上の特徴としては皿状に近いもの（48）から碗状のものまであり、全体に内厚な成形である。底の調整特に特徴があり、静止糸切痕（45）、木葉痕（46・48）、砂礫痕（63～65）、蘆編痕（50）やヘラによる切り離しではないかとみられるもの（47）もある。焼成はC類に近く、軟質な焼き上がりで、器体外面に縦位のヘラ削り痕（48）や縦位の調整痕（63）の認められるものがある。

4-g G類の壺（図5-66～69）

本類はロクロを使用して、小型皿状に成形した後耳皿として再成形したものである。焼成上の特徴から、C類に含まれるもの（66～68）とD類に含まれるもの（69）があり、後者は明確に耳皿とはいえないかもしれないが、成形・焼成上のミスによって生じた器かもしれない。

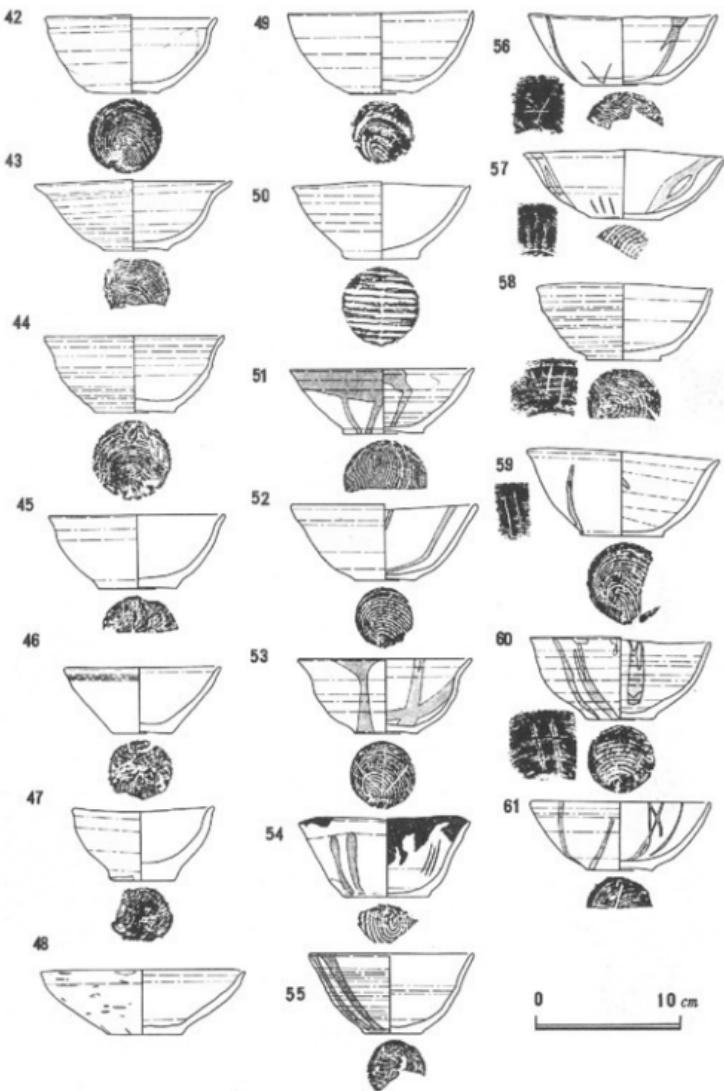
4-h H類の壺（図5-70）

本例は、深皿状の器形を呈し、外面はロクロ整形痕をそのまま残し、内面はナデによる調整がなされた器である。胎土は小石を多量に含み、焼成もC類の中で良質なものと類似している。この他に、H類に入るものとしては、高台を有するもの（図示できず）などがある。

5. むすび

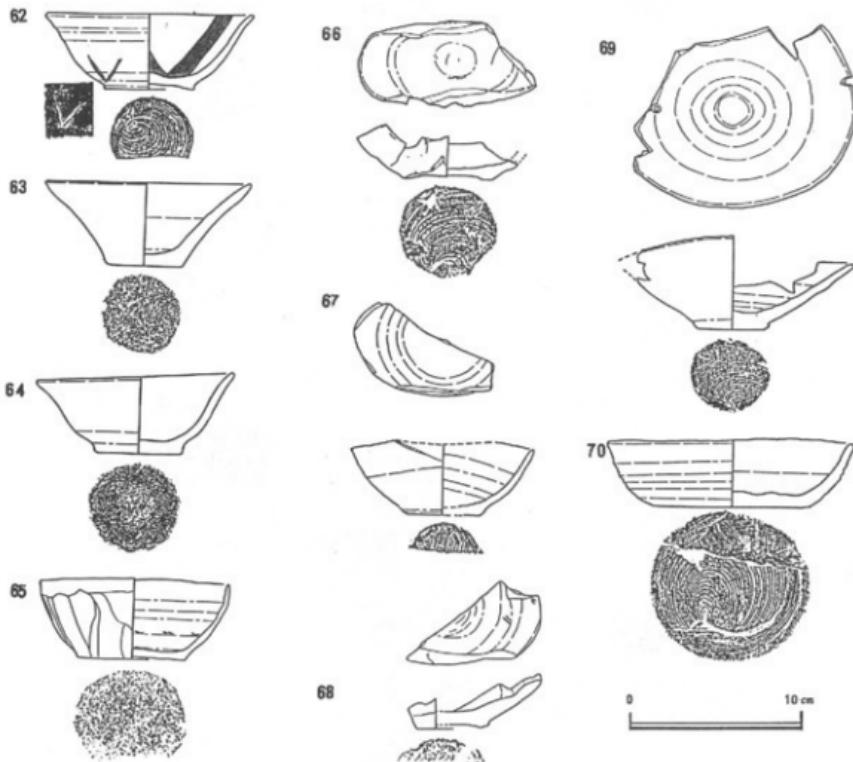
浪岡城跡北館から出土した土師器・須恵器は、器形・製作技法の多様性からその特色をまとめることは困難な作業であった。今回は特に壺形土器を中心まとめたが、形態分類の基準をどこに設定するかで試行錯誤が続き、今後も本稿の内容を吟味してゆく必要性を痛感している。それは、形態分類と時間的変遷（編年）の問題がアンバランスな状況であることに起因し、今後は浪岡城跡出土品以外のものと比較検討することが重要な課題である。現状では本稿に提示した資料は13世紀以前に製作した資料であるということしか言えない。

III・図一4 坯形土器実測図(3)



今までには、須恵器、土師器とに大別してきたが、今後さらに新しい位置づけが必要であると思われ、そのためには今までの推察の域から脱出し、正確な窯跡の発見、化学的に胎土分析することも一方法と思われる。一例として器体に含まれる鉄分の高温による酸化第二鉄への移行度合い(鉄分の溶解度)、硬度を数字的に標示、他は色調、叩き音等を加味することによって多少の線を引けるのではないかと考えている。

Ⅲ・図-5 壱形土器実測図(4)



Ⅲ・表-1 环形土器計測表

No	遺物 No	出士 地点	遺構名	層位	口径	底径	器高	口径 ／器高	底径 ／器高	口径 ／底径	器高 ／底径	底調整	特徴
1	82P 2557	J 51	S X 81	フク土	12.2	4.1	5.3	2.3	0.8	3.0	0.3	右回転糸切	内黒調整
2	81P 639	" "	"	"	11.4	5.1	5.4	2.1	0.9	2.2	0	"	"
3	83P 2655	F 45	S D 75	フク土	11.1	5.8	6.3	1.8	0.9	1.9	0.5	"	"
4	80P 2103	G 54	S X 23	フク土	12.7	5.7	5.1	2.5	1.1	2.2	0.3	"	"
5	82P 542	J 51	S X 81	フク土	11.9	5.3	5.9	2.0	0.9	2.2	0.2	"	"
6	81P 2644	H + I 50	S D 32	フク土	13.2	5.2	5.8	2.3	0.9	2.5	0.3	"	"
7	82P 2307	G 50	ピット内	フク土	13.6	5.3	4.4	3.1	1.2	2.6	0.2	静止糸切	皿状
8	82P 2558	"	S X 107	"	14.0	4.9	4.5	3.1	1.1	2.9	1.2	静止糸切	"
9	82P 638	J 51	S X 81	"	13.7	5.8	3.7	3.7	1.6	2.4	0.4	右回転糸切	"
10	80P 1516	H 55	-	II	13.5	5.4	4.2	3.2	1.3	2.5	0.4	"	"
11	82P 2436	H 42	-	II	15.7	5.5	4.1	3.8	1.3	2.9	0	"	"
12	82P 1850	H 43	S X 130	フク土	13.1	4.8	4.8	2.7	1.0	2.7	0	?	"
13	80P 5450	L 54	S D 16	フク土	14.3	5.3	4.3	3.3	1.2	2.7	0.4	右回転糸切	"
14	78P 1434	H 47	S T 08	フク土	13.5	5.7	4.1	3.3	1.4	2.4	0.5	"	"
15	80P 1480	H 54	S X 20	フク土	12.2	5.2	5.4	2.3	1.0	2.3	0.4	"	土師器
16	82P 2353	D 51	S T 160	フク土	13.2	5.6	5.8	2.3	1.0	2.4	0.1	"	"
17	79P 4273	J 58	S T 40	フク土	13.6	5.5	5.6	2.4	1.0	2.5	0.1	"	"
18	81P 2075	L 53	S X 16	フク土	12.4	5.2	5.7	2.2	0.9	2.4	0.3	"	"
19	81P 2452	L 53	-	-	12.8	4.3	5.7	2.2	0.8	3.0	-	"	"
20	83P 2654	F 44	S D 75	フク土	12.7	5.5	6.2	2.0	0.9	2.3	0.7	"	酸化須恵器
21	81P 2641	G 51	-	IV	12.1	4.5	5.8	2.1	0.8	2.7	0.4	"	土師器
22	82P 2357	D 50	S T 167	フク土	11.8	5.5	5.4	2.2	1.0	2.1	0.3	静止糸切	"
23	82P 2350	E 51	S T 159	フク土	12.5	5.3	5.8	2.2	0.9	2.4	0.2	右回転糸切	"
24	82P 2359	D 51	S T 150	フク土	11.8	4.3	5.3	2.2	0.8	2.7	-	"	"
25	82P 2423	D 51	S T 159	フク土	13.1	5.0	5.0	2.6	1.0	2.6	0.2	"	"
26	79P 4391	J 58	S X 05	フク土	13.0	5.5	5.3	2.5	1.0	2.4	0.1	"	"
27	81P 238	G 51	S T 151	フク土	13.0	5.8	5.1	2.5	1.1	2.2	0.4	"	"
28	80P 1481	H 54	S X 20	フク土	12.2	5.8	5.0	2.4	1.2	2.1	0.4	"	"
29	81P 2072	L 53	-	III	11.1	5.2	5.7	1.9	0.9	2.1	-	"	"
30	80P 557	H 54	-	I	11.6	4.8	5.5	2.1	0.9	2.4	0.4	"	酸化須恵器
31	82P 1851	H 43	S X 130	フク土	11.9	5.1	5.7	2.1	0.9	2.3	0.3	"	"
32	78P 538	L69~O68	S D 01	フク土	13.2	5.4	6.2	2.1	0.9	2.4	0.1	"	"
33	81P 2304	K 52	S X 81	フク土	12.8	5.6	5.8	2.2	1.0	2.3	0.8	"	"
34	81P 2476	H 49	-	-	11.3	5.1	5.6	2.0	0.9	2.2	0.2	"	"

No	遺物 No	出土 グリッド	遺構名	層位	口径	底径	器高	口径 ／ 器高	底径 ／ 器高	口径 ／ 底径	器高 格差	底調整	特 徴
35	80P 1393	F 54	S D 09	フク土	12.2	5.6	5.5	2.2	1.0	2.2	0.3	右回転糸切	酸化須患者
36	79P 4274	J 58	S X 05	フク土	12.9	5.4	5.1	2.5	1.1	2.4	0.3	"	"
37	79P 896	J 59	-	I	12.4	5.5	5.2	2.4	1.1	2.3	0.2	"	"
38	81P 2100	H 50	S D 32	フク土	12.2	5.0	5.7	2.1	0.9	2.4	-	"	"
39	82P 2454	G 50	S X 107	フク土	13.8	5.4	5.2	2.7	1.0	2.6	0.4	"	"
40	82P 440	G 50	-	I	11.7	5.2	5.4	2.2	1.0	2.3	0.1	"	"
41	79P 4280	J 58	S X 05	フク土	13.2	5.7	6.2	2.1	0.9	2.3	0.8	"	"
42	81P 2032	H 50	S D 32	フク土	12.2	5.2	5.6	2.2	0.9	2.3	0.4	"	"
43	81P 2299	G 51	S T 151	フク土	14.0	5.2	5.2	2.7	1.0	2.7	0.2	"	"
44	82P 1852	H 43	S X 130	フク土	12.7	5.6	5.8	2.2	1.0	2.3	0.4	"	"
45	80P 251	L 54	-	I	12.3	5.6	5.4	2.3	1.0	2.2	0.1	静止糸切	ロクロ不使用
46	81P 10865	L 56	S D 15	フク土	11.2	4.2	4.8	2.3	0.9	2.7	-	木葉痕	"
47	82P 2360	G 50	S D 64	フク土	10.1	4.8	5.4	1.9	0.9	2.1	0.2	ヘラ?	"
48	81P 2467	I 52	S T 102	フク土	14.5	5.3	4.6	3.2	1.2	2.7	-	木葉痕	ヘラ削り
49	79P 4275	J 58	S T 39	フク土	13.1	4.6	5.7	2.3	0.8	2.8	0.2	右回転糸切	土師器
50	80P 1220	K 54	S D 16	フク土	12.4	5.4	5.4	2.3	1.0	2.3	0.3	翼圓圧痕	輪積み ロクロ不使用
51	80P 1209	L 54	S D 16	フク土	13.1	5.8	5.0	2.6	1.2	2.3	0.5	静止糸切	火ダスキ
52	80P 659	G 55	S D 11	フク土	13.2	4.2	5.6	2.4	0.8	3.1	0.6	右回転糸切	"
53	80P 1199	K 54	S D 16	フク土	12.4	4.4	5.4	2.3	0.8	2.8	0.2	"	"
54	82P 2477	D 51	S T 159	フク土	12.1	5.8	5.8	2.1	1.0	2.1	0.4	"	"
55	82P 2431	D 49	S D 61	フク土	11.7	4.3	5.6	2.0	0.7	2.7	-	"	"
56	81P 2276	H 50	-	I	13.2	5.5	5.2	2.5	1.1	2.4	0.4	"	"
57	82P 2356	D 50	S T 167	フク土	14.2	5.0	5.0	2.8	1.0	2.8	0.7	"	"
58	82P 2389	E 50	S X 150	フク土	12.1	5.2	5.5	2.2	0.9	2.3	0.3	"	"
59	82P 2351	D 51	S T 159	フク土	13.4	5.8	6.2	2.2	0.9	2.3	0.7	"	"
60	82P 2157	H 42	S X 132	床面	12.5	4.8	6.0	2.1	0.8	2.6	0.5	"	"
61	80P 160	E 55	S D 10	床面	12.6	4.6	5.0	2.5	0.9	2.7	0.1	"	"
62	80P 1452	G 54	S X 20	フク土	12.3	5.4	4.8	2.6	1.1	2.3	0.2	"	"
63	82P 1966	H 46	S T 186	フク土	12.2	4.6	5.0	2.4	0.9	2.7	0.1	砂圧痕	ロクロ不使用
64	82P 2424	D 51	S T 159	フク土	11.7	5.3	5.0	2.3	1.1	2.2	0.9	"	"
65	81P 2306	K 52	S X 81	フク土	11.2	6.3	4.9	2.3	1.3	1.8	0.4	"	"
66	83P 1463	E 48	-	I 上	-	--	-	-	-	-	-	右回転糸切	耳皿
67	82P 2453	G 50	S X 107	フク土	-	-	-	-	-	-	-	"	"
68	79P 4010	Q 55	-	I	-	--	-	-	-	-	-	"	"
69	80P 819	E 54	-	I	-	--	-	-	-	-	-	"	"
70	78P 1000	J 47	-	黒色土	14.5	9.1	4.1	3.5	2.2	1.6	-	"	

III まとめ

村 越 潔・工 廉 清 泰

1. はじめに

浪岡城跡の発掘調査は、昭和52年から始まり昭和59年をもって、主館と推定した北館の平場調査における遺構および遺物の概略を把握するに至った。この間に、全国的にみても中世遺跡の調査は増加の一歩をたどり、「中世考古学」なる言葉が定着しつつある。こと青森県においても、継続調査中の浪岡城跡、根城跡をはじめ、尻八館跡、堀越城跡、浜通遺跡、独孤遺跡、境関館跡等、続々と中世資料を示している。それらの中で、浪岡城跡は天正年間に落城という考古学的には検出遺構、出土遺物を把握しやすい歴史事実があったため、出土遺物に関しては東北北半部でも屈指の資料価値を有している。

今回、昭和58年度調査の報告とともに、北館内における遺構・遺物を一度総括してみようとする調査員の声があり、各項目について分担執筆をお願いした次第である。そのため、本報告書は、単なる事実記載にとどまらず、現状で把握できる浪岡城跡の実体を掘り下げた論文集的意味もあり、今後の中世考古学研究にあたっての敲台であることをおことわりする。なお、各項目から導びかれる問題点を提示し、まとめてかえたいと思う。

2. 検出遺構の問題点

検出遺構には防禦遺構と生活遺構がある。前者には堀跡、土壘・土居跡、柵跡、門跡、樊形遺構等があり、後者には掘立柱建物跡、竪穴遺構（竪穴建物跡）、井戸跡、溝跡、焼土遺構、土塙墓等がある。

2-a 遺構の構築時期と配置の問題

2-b 遺構間に機能分担があったか？ 特に掘立柱建物跡と竪穴建物跡の関係

2-c 遺構の地域的特色の問題

○掘立柱建物跡は二面併列の部屋割で根城跡と対照的であり、間取りが京都的である。

○竪穴建物跡は從来東北北半の城館に多いと考えてきたが、鎌倉市街地の調査や関西においても検出されるようになり、絵巻物に表われる民家も竪穴建物があることから、中世全般において一般的な住居形態であったことが知られる。

○2-bの部分で、掘立柱建物跡と併存して竪穴建物跡が存在している事実は、階級の差異による住居の相違なのか、機能（倉庫・作業場・兵事の簡易住居・集会場・季節的住居・他）による相違なのか、結論を出すには時期早急の段階である。

2-d 炊事遺構は囲炉裏が主体であった？

○鉄鍋の出土とかまだ遺構の稀少性から、炉事は囲炉裏や火鉢を使っていたらしい。

3. 出土遺物の問題点

出土遺物の一覧はⅣ-2に示してある。

3-a 陶磁器の搬入と交易の問題

- 出土陶磁器の50%以上が舶載品であり、地元産のものはほとんどない。
- 経済活動の活性化と、中世における日本海交易（それ以前からの系譜）の発達。

3-b 鉄・銅製品の豊富さと生産活動の問題

- 城館という遺跡の性格、戦闘があったという歴史事実から武具の出土が多い。
- 特に銅製錫の鋳型およびそれと関連する遺物の出土は、城館内における工業活動の実態という面から問題は大きい。
- 銅製品の中で、仏具関係の遺物（金剛輪・六器・香炉）は当時の宗教的・文化的程度を知るために重要なである。
- 鉄鍋（吊耳・内耳両方併存）の使用頻度、火箸、多量の釘の出土から、自給的生産形態があったのではないだろうか？

3-c 茶臼と天目茶碗の出土から「茶の湯」がおこなわれていたと考えられる。

3-d 出土遺物が破片等で出土する場合、器種同定さえも困難な状況にあり、Ⅲ三浦論文にてみられる民俗資料等からの比較検討が必要である。（特に木製品・鉄製品等）

3-e 備蓄銭行為および地鎮的銭貨出土の問題点

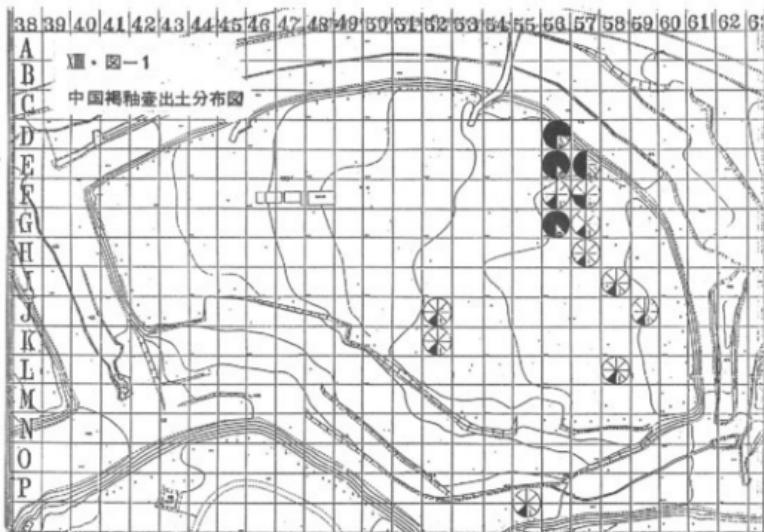
- 備蓄銭は銭貨を紐に通した状態で出土し、柱穴等に10～30枚まとめて埋めるのは地鎮的な行為と推定される。

3-f 遺物の出土状態をみると、陶磁器の同一個体片でも130m離れた地点から出土したもののが接合することもあり、一部の遺構を除けば出土遺物は廃棄された場所から後世の擾乱によって移動しているものが多い。この事は、遺物の原位置から層位的に年代や使用時間差を把握することは非常に困難な状況と言わざるをえない。（図-1）

4. 遺構と遺物の問題

4-a 遺構の構築時期および廃棄時期を決定するメルクマールとして出土遺物があり浪岡城跡の場合は陶磁器を利用する場合が多い。しかし、浪岡城の存続時期は130年前後と推定され、時期の細分は難しい。陶磁器も、破壊・廃棄されない場合は伝世するが多く、遺構出土の陶磁器をもって（床面等）遺構の廃絶時期を決定することには不安がともなう。陶磁器の場合は、あくまでセット関係（器種別による量的把握）から、概略的決定しか不可能である。たとえば、唐津焼が搬入する16世紀後半のものとそれ以前というように、全国的な陶磁器搬入の時期と対照しながら時期決定してゆく必要がある。

4-b 遺構の性格決定には出土遺物が重要である。しかし、竪穴建物跡のように遺物の出土が破片だけとか、床面出土のものがなく覆土からのみ出土する場合は、明確に竪穴建物跡



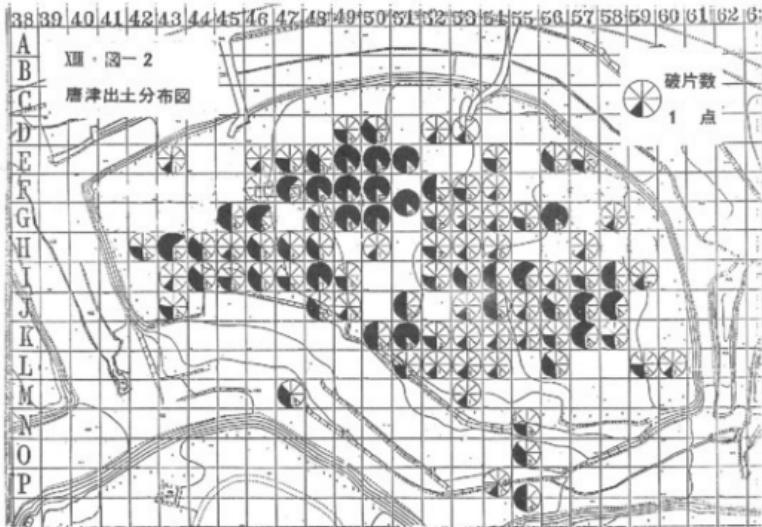
が住居であるとか、倉庫であるとかは断言できない状況にある。

4-c 据立柱建物跡のように、残存する下部構造が柱穴だけのような場合、遺構の範囲およびその周辺から出土する遺物を精査する必要がある。

○浪岡城跡の調査は10mグリッドで実施しているが、各器種の出土分布を整理する（平面的に）ことによって関連すると思われる建物跡の機能を透影できるのではないかという仮説をもって、その作業を進めている。たとえば、北館内における唐津皿の出土分布をみると（図-2）、ほぼ全般的に出土する傾向とともに、特に多く出土する区域があることに注目できる。E・F・G-49・50・51区の付近は特に分布の濃厚な部分であり、据立柱建物跡 S B12（高島論文第Ⅲ期に位置づけられる）の周辺であるという好対照を示している。おそらく、16世紀後半から17世紀前半にかけては、この地区が生活の中心地域として位置づけられていた、と思われる所以である。

5. むすび

浪岡城跡における発掘調査は、今後北館以外の館を中心におこなわれることとなる。我々がここ7年あまり、北館を中心とした調査を実施してきた背景には、平場が7~8館存在する城館における各館の有機的構成がどのようなものであったか、ということを理解するためでありそのためには拠点となる一平場の全域を調査する必要性を痛感していたからに他ならない。北館における種々の問題点は、



今後の調査における重要な発掘調査視点となるであろうし、そのことが、県内外における中世考古学発展の契機になれば幸いである。

付 表(c h .)

Ch. 1 → (Fig. 3 对応) SB-30 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	方	31 × 27	34	
a-2	方	50 × 48	50	
a-3	不	47 × 46	36	
a-4	方	67 × 59	62	
a-5	方	39 × 33	75	
a-6	方	52 × 46	58	
a-7	方	62 × 59	66	
b-1	不	80 × 55	35	
b-2	方	52 × 48	85	
b-3	方	51 × 39	59	
b-4	不	57 × 54	64	
b-5	方	74 × 54	61	
b-6	方	62 × 60	74	
b-7	方	61 × 56	105	
b-8	方	60 × 54	57	
b-9	方	28 × 28	63	
b-10	方	42 × 34	21	
c-1	方	42 × 36	46	
c-2	不	45 × 40	78	
c-5	不	61 × 50	70	
c-10	方	27 × 25	56	
c-11	方	41 × 33	18	
d-1	方	53 × 44	26	
d-2	方	65 × 65	49	
d-5	不	50 × 48	62	
d-6	不	52 × 43	59	
d-7	方	51 × 40	87	
d-9	円	47 × 46	38	
d-10	不	53 × 35	62	
d-11	方	40 × 37	33	
e-1	方	50 × 40	48	
e-2	方	60 × 58	65	
e-3	方	72 × 72	63	
e-4	方	91 × 78	51	
e-5	方	85 × 72	44	
e-6	方	79 × 66	65	
e-7	方	71 × 69	103	
e-8	方	52 × 39	82	
e-9	不	30 × 25	60	
e-10	方	39 × 34	56	
e-11	方	33 × 31	39	
f-2	方	38 × 34	42	
f-4	方	47 × 46	14	
f-5	方	51 × 49	20	
f-6	方	45 × 39	58	
f-7	方	71 × 56	60	
f-8	方	69 × 51	57	

Ch. 2 → (Fig. 4 对応) SB-32 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	不	65 × 59	77	
a-2	不	71 × 62	80	
a-3	方	68 × 65	69	
a-4	方	44 × 33	125	
a-5	方	48 × 45	76	
a-6	方	54 × 41	60	
a-7	方	42 × 40	54	
b-1	不	60 × 58	84	
b-2	不	56 × 56	68	
b-3	方	55 × 48	67	
b-4	方	52 × 33	77	
b-5	方	49 × 48	70	
b-6	方	44 × 36	64	
b-7	方	56 × 50	53	
c-6	不	51 × 47	78	
c-7	方	48 × 44	70	

Ch. 3 → (Fig. 4 对応) SB-58 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-2	方	52 × 44	46	
a-3	不	50 × 39	63	
a-4	方	56 × 48	60	
a-5	方	35 × 25	69	
a-6	不	45 × 37	45	
b-1	方	57 × 46	47	
b-2	方	60 × 47	60	
b-3	方	57 × 45	62	
b-4	方	43 × 34	62	
b-5	不	74 × 60	54	
b-6	方	49 × 41	42	
c-5	方	58 × 42	48	
c-6	方	41 × 30	54	

Ch. 4 → (Fig. 5 对応) SB-54 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	不	43 × 32	40	
a-2	方	54 × 46	16	
a-3	方	61 × 52	64	
a-4	方	58 × 56	30	
a-5	方	47 × 44	45	
a-6	方	53 × 50	31	
a-7	不	51 × 48	69	
a-8	不	44 × 36	83	
b-1	方	48 × 46	79	
b-2	不	64 × 50	29	
b-5	方	60 × 59	29	
b-8	不	35 × 26	67	
c-1	不	52 × 32	50	
c-2	不	57 × 43	37	
c-3	不	48 × 40	28	
c-4	不	41 × 41	22	
c-5	方	51 × 44	59	
c-6	方	52 × 50	56	
c-8	円	37 × 34	45	

Ch.5 → (Fig.5 对応) SB-56 柱穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	方	41 × 34	22	
a-2	不	37 × 31	63	
a-3	不	42 × 42	62	
a-4	方	35 × 34	52	
a-5	方	40 × 33	67	
a-7	方	35 × 30	47	
b-1	方	53 × 45	43	
b-2	方	41 × 40	25	
b-3	方	46 × 32	66	
b-4	方	41 × 39	20	
b-5	方	43 × 38	14	
b-6	方	49 × 44	22	
b-7	方	41 × 38	55	

Ch.6 → (Fig.6 对応) SB-55 柱穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	方	41 × 38	47	
a-2	方	28 × 27	84	
a-3	不	52 × 38	54	
b-3	方	40 × 39	53	
c-1	不	53 × 43	31	
c-1'	方	44 × 40	36	
c-2	方	41 × 30	61	
c-3	不	69 × 55	52	

Ch.7 → (Fig.6 对応) SB-29 柱穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	方	48 × 35	48	
a-3	不	61 × 55	59	
b-1	不	65 × 54	46	
b-3	方	34 × 33	38	
c-1	方	42 × 36	53	
c-2	方	58 × 50	34	
c-3	方	39 × 38	48	
d-3	不	41 × 30	43	
e-1	不	34 × 33	78	
e-2	方	51 × 49	50	
e-3	方	54 × 52	42	

Ch.8 → (Fig.6 对応) SB-50 柱穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	方	38 × 32	66	
a-2	方	39 × 38	63	
a-3	方	46 × 39	55	
b-1	方	34 × 33	63	
b-2	不	34 × 34	36	
b-3	方	35 × 33	41	
c-1	不	34 × 23	53	
d-1	方	30 × 27	21	
d-2	方	32 × 30	28	
d-3	方	33 × 31	36	
d-4	方	32 × 26	55	
e-1	方	30 × 26	20	
e-2	方	38 × 36	43	
e-3	円	26 × 25	20	
e-4	方	35 × 34	59	

Ch.9 → (Fig.7 对応) SB-11 柱穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (mm)	深さ (mm)	備 考
a-1	円	43 × 41	64	
a-2	不	42 × 41	65	
a-3	方	45 × 41	64	
b-1	方	37 × 37	63	
b-2	不	71 × 63	22	
b-3	不	44 × 40	24	
c-1	方	41 × 38	58	
c-2	不	48 × 47	52	
d-1	方	39 × 36	67	
d-2	方	39 × 33	56	
d-3	不	61 × 49	67	
e-1	方	59 × 38	84	
e-2	不	64 × 45	64	
e-3	方	44 × 35	40	
f-1	方	46 × 30	42	
f-2	不	43 × 39	44	
f-3	方	39 × 37	53	
g-1'	不	32 × 27	35	
g-1	不	35 × 29	37	
g-2	方	39 × 33	35	
g-3	方	41 × 37	36	
g-3'	方	39 × 36	18	

Ch₁₀→(Fig. 8 対応) SB=22 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	不	41×33	21	
a-2	不	49×44	13	
a-3	方	50×43	47	
b-1	方	33×31	37	
b-2	不	34×29	42	
b-3	不	42×31	33	
c-1	方	52×47	35	
c-2	方	43×31	42	
c-3	方	39×35	37	
d-1	方	31×28	47	
d-3	不	43×31	60	
e-1	方	57×53	49	
e-2	方	46×38	57	
e-3	方	41×35	40	
f-1	方	47×46	37	
f-2	方	52×47	36	
f-2'	方	48×47	67	
f-3	不	39×35	30	

Ch₁₁→(Fig. 8 対応) SB=16 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	42×38	36	
a-2	方	57×42	38	
a-3	方	42×38	38	
a-4	方	48×48	45	
b-1	方	67×60	48	
b-4	方	49×45	13	
c-1	方	52×51	45	
c-3	方	39×38	22	
c-4	方	47×42	7	
d-1	方	53×52	51	
d-3	方	49×47	14	

Ch₁₂→(Fig. 8 対応) SB=28 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	円	37×37	42	
a-2	不	43×35	34	
a-3	円	38×36	32	
b-1	不	27×23	71	
b-3	方	29×26	52	
c-1	不	34×32	42	
c-3	方	46×30	54	
d-1	不	49×39	54	
d-3	方	44×39	54	

Ch₁₃→(Fig. 9 対応) SB=31 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	45×44	69	
a-2	方	50×48	68	
a-3	方	54×44	32	
a-4	方	42×37	45	
a-5	方	37×32	35	
a-6	方	47×43	—	
b-1	方	54×48	68	
b-2	方	42×39	43	
b-3	方	54×44	24	
b-6	方	72×59	20	
b-6'	不	80×73	16	
c-1	方	73×49	72	
c-2	方	55×48	—	
c-3	方	47×35	—	
c-4	不	47×39	49	
c-6	不	47×47	26	
d-1	方	45×44	63	
d-2	方	79×69	74	
d-4	方	49×32	60	
d-4'	不	46×33	59	
e-1	方	45×41	20	
e-4	不	39×27	23	
e-6	方	39×34	22	
f-1	方	48×41	47	
f-1'	方	45×43	34	
f-2	方	61×55	99	
f-4	方	45×43	63	
f-6	方	46×38	8	
g-1	不	54×47	77	
g-1'	方	57×51	47	
g-4	方	61×54	79	
g-6	不	60×49	30	
h-1	小	37×31	32	
h-1'	方	53×53	48	
h-2	方	45×32	26	
h-3	方	61×49	34	
h-4	不	44×43	27	
h-6	方	51×36	35	

Ch.14→(Fig.10対応) SB-51 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	38×34	71	
a-2	方	56×54	71	
b-1	方	33×25	69	
b-2	方	43×34	82	
b-3	方	28×34	51	
b-4	方	30×29	81	
b-5	方	24×20	51	
c-1	方	51×46	46	
c-2	方	34×29	37	
c-3	方	30×29	47	
c-5	方	48×47	56	
c-5'	不	37×34	41	
d-1	方	43×39	24	
d-2	方	34×33	15	
d-3	方	37×34	53	
d-5	不	35×31	57	
e-1	方	36×32	20	
e-2	方	33×31	37	
e-3	方	37×34	45	
e-5	方	36×34	65	

Ch.15→(Fig.11対応) SB-52 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-2	不	53×52	44	
a-3	方	39×35	43	
a-4	方	51×36	37	
a-5	方	49×42	46	
b-2	方	37×36	43	
b-3	方	48×41	48	
b-4	方	40×36	41	
b-5	方	35×30	15	
b-6	方	35×31	28	
b-7	不	35×33	39	
c-1	方	44×39	29	
c-2	不	72×69	36	
c-3	方	27×27	61	
c-4	方	39×32	67	
c-6	方	40×38	41	
c-7	方	49×39	20	
d-1	方	34×34	57	
d-3	方	52×41	65	
d-4	方	47×41	56	
d-4'	方	43×41	48	
d-5	方	46×46	44	
d-6	方	47×39	55	
e-4	不	40×29	48	
e-5	方	34×34	51	
e-6	不	37×36	34	
f-1	不	43×37	56	
f-2	方	45×39	52	
f-3	方	37×32	68	
f-4	不	25×24	27	
f-5	方	39×34	14	
f-6	不	31×29	47	

Ch.16→(Fig.12対応) SB-53 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
a-1	方	32×28	44	
a-3	方	40×22	49	
a-4	方	29×28	49	
a-5	不	35×28	38	
b-5	方	33×29	38	
c-1	方	28×27	28	
c-5	不	68×35	56	
d-1	方	45×39	69	
d-2	方	44×44	30	
d-3	不	57×40	55	
d-4	方	49×46	81	
d-5	方	50×40	66	

Ch.17→(Fig.13対応)

(a) ST-192 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	45×44	78	
2	方	39×34	63	
3	方	42×37	63	
4	方	40×35	73	
5	方	48×42	68	
6	方	33×31	42	
7	方	33×31	79	
8	方	44×41	81	
9	方	40×31	86	抜き取り痕
10	方	43×32	73	
11	方	38×30	69	
12	方	38×35	56	
13	方	36×32	37	
14	方	32×31	50	
15	方	32×32	45	抜き取り痕
16	方	32×29	58	

(b) ST-192 優土順序柱記表

順序番号	特徴
1	暗褐色土 (10YR3/3)。
2	黒褐色土 (10YR3/2) に褐色砂質土 (10YR4/6) を 2% と明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を 1% と微量の炭化物を含む泥層 (埋乱層)。
3	暗褐色土 (10YR3/3) 中プロック状の褐色砂質土 (10YR4/6) を 20% 中プロック状の明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を 2% 含む。
4	褐色砂質土 (10YR4/6) に暗褐色土 (10YR3/3) を 30% 含む。
5	黒褐色土 (10YR3/2) 中プロック状の褐色砂質土 (10YR4/6) を 10% 中プロック状の明黄褐色砂質土 (10YR7/6) を 2%、にふい黄褐色粘土 (10YR6/3) と炭化物を微量含む。
6	暗褐色土 (10YR3/3) に褐色砂質土 (10YR4/6) を 2% より若干の炭化物と少量の墨色灰 (10YR2/1) を含む。
7	黒褐色土 (10YR3/2) 中褐色砂質土 (10YR4/6) と炭化物を含む黒色灰 (10YR2/1) も一部見られる。

Ch. 18 → (Fig. 14 対応)

(a) S T - 200 柱穴計測表

8	黒色灰(10 YR 2/1)。
9	明黄褐色砂質土(10 YR 6/8)。 (ビット内覆土)
10	暗褐色土(10 YR 3/3)に灰白色灰(10 YR 7/1)を30%と炭化物を微細含む。
11	暗褐色土(10 YR 3/3)に黒色土(7.5 YR 1.7/1)を30%含む泥層に中ブロック状の黄褐色砂質土(10 YR 7/8)を70%含む。
12	黒褐色土(10 YR 2/2)。しまりなし。
13	灰白色灰(10 YR 7/1)。
14	にない褐色土(7.5 YR 7/3)に灰黃褐色灰(2.5 YR 7/2)を極厚い板状に含む。
15	地山、明黄褐色砂質土(10 YR 7/6)。

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	30 × 27	68	
2	方	26 × 26	88	
3	方	42 × 33	42	
4	方	60 × 25	53	
5	方	40 × 28	70	
6	方	39 × 35	62	
7	方	27 × 23	64	
8	不	30 × 29	65	

(b) S T - 200 売土層序記表

層序No	特徴
1	暗褐色土(7.5 YR 3/4)に明褐色土(7.5 YR 5/6)が小粒状に7%混入。
2	暗褐色土(7.5 YR 3/3)と灰白色土(5 YR 7/1)との泥層に1%の炭化物を含む。
3	黒褐色土(10 YR 3/1)と灰(5)との泥層に1%の炭化物を含む。
4	灰(7.5 Y 8/1)。
5	暗褐色土(10 YR 3/3)と明黄褐色土(10 YR 6/6)との泥層に黒色土(10 YR 1.7/1)を1%含む。
6	にない黄褐色土(10 YR 4/3)と黄褐色砂質土(10 YR 5/6)との泥層に中粒状の石を3%含む。
7	暗褐色土(10 YR 3/4)。
8	黒色土(10 YR 1.7/1)。
9	砂質土(磁鐵鉄が含まれる)。
10	地山(粘土10 YR 7/4を含む)。粘土を張つてある。(鉢床)

Ch. 19 → (Fig. 15 対応)

(a) S T - 201、206 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	円	41 × 47	93	
2	方	36 × 31	76	
3	方	47 × 40	85	
4	方	41 × 36	71	
5	方	52 × 40	84	
6	方	42 × 32	71	
7	方	53 × 45	80	
8	方	53 × 40	78	
9	方	37 × 36	80	
10	方	66 × 45	79	
11	円	28 × 32	76	
12	円	32 × 32	72	
13	方	20 × 19	45	
14	方	18 × 18	25	
15	方	29 × 29	30	
16	円	20 × 20	37	
17	方	25 × 20	36	
18	方	35 × 29	46	
19	円	30 × 23	22	
20	円	33 × 29	78	

(b) S T - 201、206 売土層序記表

S X - 153

層序No	特徴
1	極暗赤褐色土(5 YR 2/3)に1%の炭化物と粒子状の褐色砂質土(7.5 YR 7/8)が1%含まれる。
2	暗褐色土(7.5 YR 3/3)に粒子状の黄褐色砂質土(7.5 YR 7/8)が50%含まれる。しまりなし。
3	暗褐色土(10 YR 3/4)に明黃褐色砂質土(10 YR 6/8)が7%含まれる。
4	暗褐色土(10 YR 3/4)に灰白色灰(7.5 Y 8/2)が全体に含まれる。
5	暗赤褐色土(5 YR 3/3)に粒子状の褐色砂質土(7.5 YR 6/8)を2%と小ブロック状の黄褐色粘土(10 YR 7/8)を1%含む。しまりなし。
6	極暗赤褐色土(5 YR 2/3)に1%の炭化物と粒子状の褐色砂質土(7.5 YR 6/8)が7%含まれる。
7	暗褐色土(7.5 YR 3/3)と黄褐色砂質土(10 YR 7/8)の鉢端。
8	暗褐色土(7.5 YR 3/3)に暗灰色灰(N 3/0)が多量に含まれる。

9	暗赤褐色土(5YR3/3)に褐色砂質土(7.5YR6/8)が小ブロック状に10%、炭化物が1%含まれる。
10	明赤褐色砂質土(2.5Y7/6)と褐色砂質土(7.5YR6/8)の50%の混層。
11	黒褐色土(10YR2/3)に灰白色土(7.5YR2/2)が細い帯状に入っている。
12	黒褐色土(10YR2/3)に、褐色砂質土(7.5YR6/8)が3%含まれ炭化物1%、淡黄色灰(7.5YR8/3)が帶状に含まれる。
13	浅褐色砂質土(10YR8/4)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)が層を呈する。
14	黒色土(10YR2/1)。
15	明褐色砂質土(10YR6/8)に黄褐色バニス(10YR8/8)を1%含む。
16	暗褐色土(10YR3/4)に明褐色土(7.5YR5/8)が粒子状に10%含まれる混層、黃褐色粘土(10YR8/8)が含まれる。
17	暗褐色土(7.5YR3/3)に暗灰色灰(3Y3/0)が多量に含まれる。
18	暗褐色土(7.5YR3/3)で特性を持つ。
19	黄褐色砂質土(10YR7/8)と暗褐色砂質土(7.5YR3/4)との混層。
20	黒色土(10YR2/1)。
21	暗褐色土(7.5YR5/3)、風化あり。
22	明褐色粘土(7.5YR5/8)に淡黄色バニス(7.5YR8/3)が1%含まれる。

Ch. 20→(Fig. 16 斜面)

(a) S T - 202 植穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	24 × 23	58	
2	方	27 × 26	30	
3	不	28 × 22	48	
4	方	26 × 26	76	
5	円	26 × 24	39	
6	方	23 × 23	23	
7	方	25 × 21	36	
8	不	26 × 24	48	
9	不	28 × 27	62	
10	円	27 × 27	38	
11	方	26 × 22	48	

(b) S X - 160

S T - 202, 212 覆土層序柱記表

層序No.	特 徴
1	浅黄色砂質土(2.5Y7/4)に黒褐色土(10YR2/2)を10%含む混層に黄褐色土(10YR7/8)が細小～中塊を2%、炭化物を1%含む。
2	黒褐色土(10YR2/2)に浅黄色砂質土(2.5Y7/4)を5%含む混層に淡黄色土(2.5Y7/4)と明黃褐色土(2.5Y7/6)の小～大塊を30%含み、黃褐色土(10YR7/8)と灰色灰(7.5Y6/1)と炭化物をそれぞれ2%含む。しまりあり。

23	黄色砂質土(2.5Y8/8)と黄褐色土(7.5YR3/3)との混層。
24	白暗褐色土(7.5YR2/3)。
25	黒色土(10YR1.7/1)。
26	黒褐色土(10YR2/3)に黒土上(10YR2/1)が30%、淡黄色灰(2.5Y8/3)が薄い板状に入っている。
27	黒褐色土(10YR2/3)に淡黄色灰(2.5Y8/3)の50%の混層。
28	褐暗褐色土(5YR2/3)にふい黄色灰(2.5Y6/3)が一部分、明黃褐色灰(2.5Y7/6)が極めて狭く入っている。
29	黒褐色土(7.5YR3/2)に黄色粘土(2.5Y8/6)が小ブロック状に3%含まれる層と黄色砂質土(2.5Y8/8)の層がサンディッシュ状になっている。
30	炭化物。
31	暗褐色土(7.5YR3/3)と齒褐色砂質土(10YR7/8)の混層。
32	順褐色土(7.5YR3/3)と黄褐色砂質土(10YR7/8)のブロック状の混層、黃褐色砂質土(10YR6/8)を1%含む。しまりあり。
33	黒色土(10YR2/1)と暗褐色土(7.5YR3/3)のブロック状の混層。
34	明黃褐色砂質土塊(10YR6/8)。
35	暗褐色土(7.5YR3/3)と黄褐色砂質土(10YR7/8)の混層。
36	地山 黄褐色砂質土(10YR5/6)。

3	黒褐色土(10YR3/2)と褐色砂質土(10YR4/4)の50%ずつの混層に、淡黄色土(10YR7/8)の極小塊と炭化物をそれぞれ1%ずつ含む。
4	褐色土(10YR4/4)と浅黃褐色砂質土(10YR8/4)の50%ずつの混層。しまりなし。
5	暗褐色土(10YR3/3)に灰色灰(7.5Y6/1)と灰土灰(2.5Y8/2)を50%含み、炭化物を10%含む。しまりあり。
6	褐色土(10YR4/4)に黒褐色土(10YR2/2)の中塊を2%、明褐色砂質土(7.5YR5/8)の小～中塊を25%、淡黃褐色土(10YR8/4)の小塊を5%含む。
7	褐色土(10YR4/4)に明黃褐色砂質土(7.5YR5/8)の小塊を5%含んだものに灰色灰(7.5Y5/1)を60%含む。
8	褐色土(10YR4/4)に明黃褐色砂質土(7.5YR5/8)の小塊と淡黃褐色土(10YR8/3)の小塊をそれぞれ8%と黒褐色土(10YR2/2)の大塊を2%、炭化物を1%含む。
9	暗褐色土(10YR3/4)に明黃褐色砂質土(7.5YR5/8)と淡黃褐色土(10YR8/3)と黒褐色土(10YR2/2)の小塊をそれぞれ10%ずつ含む。
10	地山、明黃褐色土(10YR7/6)。

Ch. 21→(Fig. 17 対応)

(a) S T - 203 植穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	48 × 28	94	抜き取り痕
2	方	30 × 28	60	"
3	円	30 × 30	84	"
4	円	20 × 30	75	
5	方	34 × 23	85	抜き取り痕
6	円	30 × 24	60	"
7	円	26 × 24	80	"
8	円	30 × 30	106	
9	円	30 × 24	60	抜き取り痕
10	方	30 × 24	80	
11	円	30 × 23	74	抜き取り痕
12	円	35 × 29	88	
13	円	27 × 26	74	抜き取り痕
14	円	30 × 24	60	
15	円	26 × 26	80	
16	円	35 × 34	70	

Ch. 22→(Fig. 18 対応)

(a) S T - 204 植穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	21 × 19	28	
2	方	20 × 18	44	
3	方	16 × 16	39	
4	方	35 × 25	27	
5	方	39 × 31	28	
6	方	22 × 18	42	

Ch. 23→(Fig. 18 対応)

(a) S T - 205 植穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	20 × 19	39	
2	方	28 × 22	49	
3	方	16 × 16	41	
4	方	21 × 21	36	
5	方	22 × 21	48	
6	方	23 × 22	36	
7	方	21 × 20	31	

(b) S T - 205 覆土層序記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10 YR 3/2) に黄褐色砂質土 (10 YR 5/6) と明赤褐色砂質土 (5 YR 8/8) の極小～中粒を 3～5%、炭化物を 1% 含む。
2	黒褐色土 (10 YR 2/1) に明黄褐色砂質土 (10 YR 7/6) の小粒と灰白色灰 (10 YR 7/1) と炭化物をそれぞれ 1%ずつ含む。
3	黒褐色土 (7.5 YR 2/1) に、にぶい黄褐色灰 (10 YR 7/3) を 10% 含む。しまりあり。
4	黒褐色土 (10 YR 3/2) に、にぶい黄褐色灰 (10 YR 7/3) を 40%、暗色灰 (5 YR 7/6) を 15%、黒褐色土 (7.5 YR 2/1) を 5% 含む。
5	黒褐色土 (7.5 YR 2/1) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と炭化物をそれぞれ 10%ずつ含む。

(b) S T - 203 覆土層序記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明褐色砂質土 (7.5 YR 5/8) の極小粒と風化色土 (7.5 YR 3/1) の中粒を 10% 含む。しまり強し。
2	黒褐色土 (10 YR 2/2) の中粒と明黃褐色土 (10 YR 6/4) の極小粒を 1%、下部に黒色土 (10 YR 1.7/1) と褐色砂質土 (10 YR 4/6) が混入。
3	褐色土 (10 YR 3/4) に明黃褐色砂質土 (10 YR 6/8) の極小～中粒を 2% 含む。
4	淡黃褐色土 (2.5 YR 8/4) に明黃褐色土 (10 YR 6/8) の極小～中粒を 2% 含む。しまりなし。
5	明黃褐色砂質土 (10 YR 7/6) に淡黃褐色砂質土 (5 YR 8/4) と黒色土 (7.5 YR 2/1) が混在している。
6	黒褐色土 (10 YR 1.7/1)。
7	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明黃褐色砂質土 (10 YR 7/6) が 40% 配入。しまりなし。
8	褐色砂質土 (10 YR 4/6) に赤褐色 (5 YR 4/8) の中粒の酸化鉄を 1% 含む。しまりなし。
9	暗褐色土 (10 YR 3/3) に削り原一灰 (2.5 G YR 7/1) を 45% 含む。しまりなし。
10	地山、褐色砂質土 (7.5 YR 4/6) と明黃褐色砂質土 (2.5 YR 7/6) の 50% の配混。

(b) S T - 204 覆土層序記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (7.5 YR 2/2) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) の大粒を 1%、黄褐色砂質土 (10 YR 5/7) を大粒状に 5～8%、黒灰 (N 1.5/0) を大粒状に 1% 含む。
2	黒褐色土 (10 YR 2/2) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) を中～大粒状に 10%、黄褐色砂質土 (10 YR 5/7) を大粒状に 7%、黒灰 (N 1.5/0) を大粒状に 1% 含む。しまりあり。
3	黒褐色土 (7.5 YR 2/1) に明赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) の中粒を 1%、褐色砂質土 (10 YR 4/5) が侵入。
4	地山、褐色砂質土 (10 YR 4/5) に赤褐色砂質土 (2.5 YR 5/8) が中～大粒状に 35% 配在する。

(b) S T - 205 覆土層序記表

層序No	特徴
6	黒褐色土 (10 YR 2/2) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と明黃褐色砂質土 (10 YR 7/6) の極小粒をそれぞれ 20%ずつ含む。
7	黒褐色土 (10 YR 2/1) に灰白色灰 (10 YR 8/2) と明黃褐色砂質土 (10 YR 7/6) の極小粒をそれぞれ 20%ずつ含む。
8	黃褐色砂質土 (10 YR 5/6) に黒褐色土 (10 YR 2/1) の極小粒が 30% と灰白色灰 (10 YR 8/2) を 2～3% 含む。
9	黒褐色土 (10 YR 1.7/1) しまりあり。
10	地山、黃褐色砂質土 (10 YR 5/6)、明黃褐色砂質土 (10 YR 7/6) との 50% の混層。

Ch. 21→(Fig. 19 対応)

(a) S T - 207 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	28 × 20	48	
2	円	30 × 25	11	
3	円	20 × 20	23	
4	円	23 × 22	33	
5	方	27 × 26	38	
6	方	22 × 22	50	
7	方	21 × 19	27	
8	円	28 × 22	43	
9	方	22 × 21	38	
10	方	25 × 25	35	
11	方	22 × 22	31	
12	円	32 × 27	66	
13	方	35 × 30	7	
14	円	33 × 32	93	

(b) S T - 207 覆土層序記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10YR 2/2)に褐色砂質土(10YR 4/8)と黒色土(7.5YR 2/1)が混入したものに、赤褐色砂質土(5YR 4/8)の中塊を2%、灰白(7.5Y 8/2)を1%含む、しまりあり。
2	黒褐色土(10YR 2/2)に黒褐色砂質土(10YR 5/8)と赤褐色砂質土(5YR 4/8)の極小～中塊を2～5%含む、炭化物を1%含む、しまりあり。
3	地山、黄褐色砂質土(10YR 5/8)に赤褐色砂質土(5YR 4/8)が中～大塊状に40%混在する。

Ch. 25→(Fig. 20 対応)

(a) S T - 208 柱穴計測表

Pit No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	27 × 24	89	
2	円	34 × 30	42	
3	方	40 × 31	78	
4	不	40 × 30	65	
5	方	27 × 24	65	
6	円	26 × 24	40	
7	方	23 × 22	57	
8	方	35 × 27	35	
9	円	42 × 40	37	
10	方	26 × 23	41	
11	方	25 × 23	36	

(b) S T - 208 覆土層序記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10YR 2/3)に黄褐色砂質土(10YR 6/8)を1%含む。
2	黒褐色土(7.5YR 2/3)に黄褐色砂質土(10YR 6/8)を1%含む。
3	黒褐色土(10YR 2/3)に黄褐色土(10YR 5/8)と明赤褐色土(5YR 5/8)を小ブロック状に3%含む。
4	黒褐色土(10YR 2/1)に明褐色土(7.5YR 5/8)を若干含む。しまりなし。

層序No.	特徴
5	黒褐色土(7.5YR 2/2)に黄褐色土(10YR 5/8)を2%含む。
6	黒褐色土(7.5YR 2/2)に黄褐色砂質土(10YR 6/8)を40%含む。
7	黒褐色土(7.5YR 2/2)に黄褐色土(10YR 5/8)を20%含む。綠色土(10GY 5/1)を3%含む。
8	黒褐色土(10YR 2/1)に黄褐色土(10YR 5/8)を5%含む。
9	明黃褐色砂質土(10YR 6/8)と暗褐色土(7.5YR 3/3)の混在。
10	暗褐色土(7.5YR 3/3)に明褐色土(7.5YR 5/8)と黄褐色土(10YR 5/6)を3%含む。
11	黒褐色土(10YR 3/2)と明褐色土(7.5YR 5/8)の混在に黑色土(7.5YR 2/1)を1%含み、灰を帶状に30%含む。
12	黒褐色土(10YR 2/3)に明褐色土(7.5YR 5/8)、赤褐色土(5YR 5/8)、黃褐色土(10YR 5/8)を若干含む。
13	黒褐色土(5YR 2/1)と暗褐色土(7.5YR 3/3)の混在に橙色土(7.5YR 6/8)と黄褐色土(10YR 5/8)をブロック状に7%含む。
14	地山、黄褐色砂質土(10YR 6/8)。

(c) S T - 208 出土遺物観察表

PLN	Fig No.	遺物No.	出土区(礫場)	層位	形態	種別、色調	胎土文	様	特徴	備考
	20-1	P1596	F58 ST-208	フク土	香炉	黒色	暗灰色	上部 胎文 下部 巴文のスタンプ	口縁部 黒色研磨	

PLN	Fig No.	遺物No.	出土区(礫場)	層位	名 称	計測値(長×幅×厚)cm	特 徴	備 考
	20-2	F 684	G58 ST-208	フク土	笄	7.90 × 1.33 × 0.22		

Ch. 26→(Fig. 21 対応)

(a) ST-210 植穴剖面表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	29 × 28	42	
2	方	29 × 26	49	
3	方	21 × 20	73	抜き取り痕
4	円	32 × 27	49	
5	円	20 × 20	40	
6	方	31 × 30	64	
7	方	30 × 21	57	
8	方	37 × 36	54	
9	方	22 × 20	48	
10	方	32 × 22	44	抜き取り痕
11	方	29 × 22	7	
12	円	29 × 25	56	

(b) ST-210 覆土層剖面表

調査No.	特徴
1	黒褐色(5YR2/2)に炭化物を2%と褐灰色灰(7.5YR6/1)を30%含む。
2	黒褐色土(5YR2/2)に褐灰色灰(7.5YR6/1)を70%、炭化物を5%含む。
3	黒褐色土(5YR2/2)に粒状の黄褐色砂質土(7.5YR7/8)を1%、炭化物を5%含む。
4	暗赤褐色土(5YR3/2)に黄褐色土を1%と炭化物を含む。
5	褐色鐵土(5YR6/8)。
6	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)を10%と炭化物を3%含む。
7	暗褐色土(10YR3/3)に明黃褐色土(10YR6/8)をブロック状に20%と炭化物を10%と黒褐色土(5YR3/1)を7%と赤褐色土(5YR5/8)を3%含む。
8	極暗褐色土(7.5YR2/3)に黄褐色砂質土(5YR5/8)を小プロック状に30%、炭化物を15%含む。しまりあり。
9	黒褐色土(7.5YR3/2)に棕色砂質土(7.5YR6/8)の50%の混入。
10	褐色質浮石礫、淡黃褐色土(10YR8/4)。
11	地山、黄褐色砂質土(10YR6/8)。

Ch. 27→(Fig. 22 対応)

(a) ST-213 植穴剖面表

Pit No.	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	33 × 28	29	
2	方	27 × 25	40	
3	方	21 × 21	30	
4	方	35 × 33	67	
5	方	37 × 29	52	
6	方	39 × 34	73	
7	方	37 × 27	51	
8	方	36 × 25	69	

(b) ST-213、ST-222、SX-152、SX-154、SX-195、SK-01 土壌層序記表

調査No.	特徴
1	黒褐色土(10YR3/2)、中央に灰白色土(7.5YR8/2)を若干含み、中粒状の石を3%含む。
2	暗褐色土(10YR3/3)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との混入。
3	2より明褐色砂質土(7.5YR5/6)が若干多い。
4	2より暗褐色土(10YR3/3)が若干多い。
5	明褐色砂質土(7.5YR5/6)。
6	黒褐色土(7.5YR3/2)と明褐色砂質土(7.5YR8/6)を1%、炭化物を3%、全体に1%含む。
7	黒褐色土(7.5YR3/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/6)を1%含む。
8	黒褐色土(7.5YR3/2)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混じる炭化物を1%含む。
9	暗褐色土(10YR3/4)に若干の黄褐色砂質土(10YR5/8)を含む。
10	暗褐色土(10YR3/3)と褐色砂質土(10YR4/6)との混じ、中央に糯米と炭化物を1%含む。
11	黒褐色土(7.5YR3/2)褐灰色土(10YR4/1)、糯米、50%以上の炭化物を含む。
12	明褐色砂質土(7.5YR5/6)と褐色砂質土(7.5YR4/4)との混じて黒褐色土(7.5YR1.7/1)を1%含む。
13	黒褐色土(10YR3/2)と褐色砂質土(10YR4/4)との混じて褐灰色土(10YR4/1)と1%の炭化物を含む。
14	黒褐色土(10YR2/2)に1%の褐灰色土(10YR4/1)と炭化物を含む。
15	褐色土(7.5YR4/4)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混じて炭化物を1%と小粒状の石を含む。
16	褐色土(7.5YR3/3)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との混じ。
17	17に若干、明褐色土(7.5YR5/6)を含む。
19	黒褐色土(10YR2/2)に炭化物を1%含む。
20	黒褐色土(10YR3/2)に褐色砂質土(10YR4/6)を5%と炭化物を1%含む。
21	褐色土(7.5YR4/3)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混じて褐灰色土(10YR4/1)と1%の炭化物を含む。
22	黒褐色土(10YR2/2)。
23	黒褐色土(7.5YR3/2)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)との混じて黒褐色土(7.5YR1.7/1)を1%含む。
24	褐色砂質土(7.5YR4/6)。
25	黒褐色土(7.5YR2/1)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混じ。
26	黒褐色土(7.5YR2/1)。

27	黒褐色土(10YR3/2)に若干の黒色灰(7.5 YR2/1)と褐色砂質土(7.5YR4/6)を含む。
28	褐色砂質土(10YR4/4)。
29	暗褐色土(10YR3/4)と明褐色砂質土(7.5YR5/6)との混層に黒色土(7.5YR1.7/1)と1%の炭化物を含む。
30	明褐色砂質土(7.5YR5/8)。
31	黒色土(10YR1.7/1)と明褐色砂質土(7.5YR5/8)との混層。
32	褐色砂質土(7.5YR4/6)。
33	黒色土(7.5YR1.7/1)。
34	黒色土(7.5YR1.7/1)と褐色砂質土(7.5YR4/6)との混層。
35	堆山。
36	黄色砂質土(25YR8/6)と暗褐色土(10YR3/3)の混層。
37	暗褐色土(10YR3/3)に小プロック状の黄褐色砂質土(10YR8/8)を30%、礫を多量に含む。
38	暗褐色土(10YR3/3)に小プロック状の黄褐色砂質土(10YR8/8)を50%、礫を多量に含む。
39	黒色土(10YR2/1)。
40	黒褐色土(10YR3/2)と黒色土(10YR2/1)の混層に黄褐色砂質土(10YR8/8)を5%含む。
42	暗褐色土(10YR3/3)と黄褐色砂質土(10YR7/8)の混層。
43	褐色土(7.5YR4/4)に粒子状の明黃褐色土(10YR7/6)を15%、礫を多量に含む。
44	黒褐色土(7.5YR2/2)に小プロック状の黄褐色砂質土(10YR8/8)を1%含む。
45	明褐色土(10YR6/6)に黒褐色土(7.5YR2/2)を1%、淡黄色バニス(25YR8/3)を2%、礫を5%含む。
46	褐色灰灰(7.5YR4/1)と暗灰色灰(7.5YR6/1)と黒色灰(10YR1.7/1)の混層。
47	明褐色砂質土(10YR7/6)に淡黄色バニス(25YR8/3)と礫を3%含む。
48	黒褐色粘土(10YR3/2)と黄褐色砂質土(10YR5/6)の混層。
49	褐色砂質土(10YR4/6)に黒褐色粘土(10YR3/2)を1%含む。

Ch. 28→(Fig. 23 対応)

(a) S T - 215 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	32×23	43	
2	方	29×27	42	
3	方	25×25	49	
4	方	30×26	46	
5	方	30×30	38	
6	円	24×22	38	
7	方	25×24	16	
8	方	39×25	27	

(b) S T - 215 複土層序記表
S X - 178

層序No	特徴
1	暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色砂質土(10YR7/8)をブロック状に20%含み、炭化物、礫、に多い黄褐色粘土(10YR7/3)を2%含む。
2	暗褐色土(10YR3/3)に黄褐色粘土(10YR7/3)の混層に礫と炭化物を1%含む。
3	暗褐色土(10YR3/3)。

S X - 178 複土層序記表

4	黒褐色土(10YR2/2)に明褐色砂質土(7.5YR5/8)の粒子を若干含む。
5	黒褐色土(10YR2/2)に黄褐色砂質土(10YR5/8)の極小~小塊を30%、灰黃褐色土(10YR4/2)を若干含む。
6	黒褐色土(10YR2/2)に灰黃褐色土(10YR4/2)と黒色土(10YR1.7/1)の混層。
7	灰黃褐色土(10YR4/2)に黒褐色土(10YR2/2)を10%、明黃褐色土(10YR7/6)と灰白色灰(10YR7/1)を若干含む。
8	灰黃褐色土(10YR4/2)と黒褐色土(10YR2/2)とに多い灰黃褐色土(10YR5/4)と灰白色灰(10YR7/1)の混層。
9	橙褐色土(10YR6/6)に多い暗褐色土(7.5YR6/4)の混層に黒褐色土(10YR2/2)を5%含む。しまりなし。
10	黒色土(10YR1.7/1)に炭化物を若干含む。
11	黒褐色土(10YR2/2)に灰白色灰(10YR7/1)を10%、にない黄褐色土(10YR5/4)を5%、炭化物を若干含む。しまりなし。
12	黒褐色土(10YR2/2)。しまりあり。
13	黑色土(10YR2/1)に黄褐色砂質土(10YR5/6)の極小塊を10%含む。しまりあり。
14	黒色土(10YR1.7/1)。しまりあり。
15	堆山。黄褐色砂質土(10YR5/6)。

Ch. 29→(Fig. 24 対応)

(a) S T - 216, 230 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	30×30	40	S T - 216柱穴
2	方	33×30	30	〃
3	方	32×30	40	〃
4	方	32×32	49	〃
5	方	28×25	30	〃
6	方	35×34	49	〃
7	方	32×28	40	S T - 216柱穴
8	方	36×33	49	〃
9	方	23×21	44	〃
10	方	28×28	46	〃
11	方	32×26	52	〃
12	方	26×23	49	〃

(b) S T - 216, 230 覆土層序記表

層序No	特徴
1	暗褐色土(7.5YR 2/3)と明褐色砂質土(7.5YR 5/6)との混層に若干の黒色灰(7.5YR 2/1)と5%の炭化物が混入。
2	暗褐色土(7.5YR 5/6)に5%の明褐色砂質土(7.5YR 5/8)と若干の炭化物を含む。
3	灰(10YR 6/1)。
4	黒色灰(10YR 2/1)と炭化物。
5	黒褐色土(10YR 3/2)に明褐色土(10YR 6/6)を少しおこす試験に1%含む。
6	地山、黄褐色砂質土(10YR 5/6)。

Ch. 30→(Fig. 25 対応)

(a) S T - 217 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	22 × 22	13	
2	方	26 × 25	8	
3	方	24 × 20	5	
4	方	37 × 29	14	
5	方	26 × 25	39	
6	方	26 × 26	12	
7	方	28 × 25	20	
8	方	27 × 22	21	
9	方	29 × 25	47	
10	方	25 × 21	14	
11	方	23 × 22	39	
12	方	28 × 26	24	
13	方	37 × 27	36	
14	方	26 × 23	45	
15	方	23 × 20	40	
16	方	33 × 24	45	
17	方	29 × 27	13	
18	方	23 × 22	43	
19	方	27 × 24	16	
20	方	34 × 30	13	

(b) S T - 217 覆土層序記表

層序No	特徴
1	暗褐色土(7.5YR 2/3) しまりなし。
2	黒褐色土(5YR 2/1)と暗褐色土(7.5YR 3/3)との混層、しまりあり。
3	地山、明褐色砂質土(10YR 6/6)。

Ch. 31→(Fig. 26 対応)

(a) S T - 218 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	34 × 24	45	
2	方	26 × 24	50	
3	方	30 × 28	50	
4	方	30 × 30	52	
5	方	32 × 30	66	
6	方	30 × 28	50	
7	方	28 × 21	42	
8	方	20 × 16	14	

(b) S T - 218, 226 覆土層序記表
S X - 187

層序No	特徴
1	黒褐色土(10YR 3/2)に褐色灰(10YR 4/1)を30%、炭化物と褐色土(5YR 7/6)を若干含む、しまりあり。
2	暗褐色土(10YR 3/3)に黃褐色砂質土(10YR 5/6)の小粒の混層、炭化物を若干含む。
3	暗褐色土(10YR 3/3)。
4	黃褐色砂質土(10YR 5/6)に赤褐色土(2.5YR 4/8)の小粒を若干含む、しまりなし。
5	にじみ黄褐色粘土(10YR 5/4)に炭化物を10%含む、しまりあり。
6	黒褐色土(10YR 2/1)と明褐色土(7.5YR 5/6)と大塊状の炭化物の混層。
7	黒褐色土(10YR 2/1)と黃褐色砂質土(10YR 5/6)の小粒とにじみ黄褐色粘土(10YR 5/4)と大塊状の炭化物の混層。
8	黒色灰(10YR 2/1)と小粒の炭化物の混層。
9	黃褐色砂質土(10YR 5/6)。
10	灰褐色土(10YR 4/2)。
11	黒褐色土(10YR 2/2)に黃褐色砂質土(10YR 5/6)の小粒を若干含む。
12	黒褐色土(10YR 2/2)と灰白色灰(10YR 8/2)の混層、しまりあり。
13	黒褐色土(10YR 3/2)に明褐色砂質土(10YR 5/6)の極小～中塊を30%、褐灰色灰(10YR 5/1)を5%含む。
14	黒褐色土(10YR 3/2)と黒褐色土(10YR 4/1)と褐色砂質土(10YR 4/4)の混層。
15	黒褐色土(10YR 2/2)と黒褐色土(10YR 4/1)と褐色砂質土(10YR 4/4)の混層に炭化物を若干含む、しまりやあり。
16	明褐色土(10YR 6/4)と黒褐色土(10YR 2/3)の混層、しまりあり。
17	黒色土(10YR 1.7/1)と黒褐色土(10YR 2/3)の混層、しまりあり。
18	にじみ黄褐色粘土(10YR 5/3)。
19	黃褐色砂質土(10YR 5/6)。
20	地山、黄褐色砂質土(10YR 5/6)。

Ch. 32→(Fig. 27 対応)

(a) S X - 155 柱穴計測表

Pit No	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	48 × 46	68	
2	方	24 × 22	51	
3	不	46 × 42	45	
4	方	40 × 36	58	
5	方	37 × 33	74	抜き取り痕
6	方	48 × 39	67	〃
7	方	42 × 35	78	
8	不	36 × 35	48	抜き取り痕
9	方	48 × 46	48	
10	方	57 × 48	66	
11	方	42 × 32	66	抜き取り痕
12	方	44 × 39	80	〃

Ch. 33 → (Fig. 28 対応)
(a) S T - 223 深土層序注記表

層序No	特徴
1	極暗赤褐色土 (5YR2/3) に 1% の炭化物と粒子状の橙色砂質土 (7.5YR7/8) が 50% 含まれる。
2	暗赤褐色土 (5YR3/3) に粒子状の橙色砂質土 (7.5YR6/8) を 2% と小ブロック状の黃褐色粘土 (10YR8/8) を 1% 含む。しまりなし。
3	暗褐色土 (7.5YR3/3) に明褐色砂質土 (7.5YR5/8) が 5% の混層に灰白色バミス (7.5YR8/2) が 1% 含まれている。
4	暗褐色土 (7.5YR3/3) が 30%、明褐色砂質土 (7.5YR5/8) が 70% の混層に灰白色バミス (7.5YR8/2) 、橙色砂質土 (7.5YR1/8) が 1% 合まれる。
5	極暗赤褐色土 (5YR2/3) に 1% の炭化物と粒子状の橙色砂質土 (7.5YR6/8) が 7% 含まれる。
6	暗黃褐色砂質土 (10YR6/8) に粒子状の橙色砂質土 (7.5YR7/8) が 10% と黃褐色粘土 (10YR7/8) が 1% 含まれる。
7	暗褐色土 (10YR3/4)。
8	黒褐色土 (7.5YR3/2) と褐色土 (7.5YR4/6) の 50% の混層。
9	暗赤褐色土 (5YR3/3) に小ブロック状の橙色砂質土 (7.5YR6/8) が 10% と炭化物が 1% 含まれる。
10	黃褐色砂質土 (10YR5/8)。
11	極暗赤褐色土 (5YR2/3) に黒褐色土 (7.5YR2/1) が 30% 含まれる。
12	黃褐色砂質土 (10YR8/8)。
13	黒褐色土 (10YR2/3) に灰白色灰 (7.5YR8/2) が細い帶状に混入。
14	浅褐色砂質土 (10YR8/4) と明褐色砂質土 (7.5YR5/8) の層を呈する。
15	黒褐色土 (10YR2/1)。
16	明褐色粘土 (7.5YR5/8) に淡褐色バミス (7.5YR8/3) が 1% 含まれる。
17	暗褐色土 (10YR3/4) に黃褐色砂質土 (10YR7/8) を粒子状に含む。
18	暗褐色土 (10YR3/4) の中に黒褐色土 (10YR2/1) が多層に含まれる、部分的に明黃褐色砂質土 (10YR6/8) を含む。
19	黃褐色砂質土 (10YR7/8) と暗褐色土 (7.5YR3/4) の混層で黄褐色に伴う漂を多量に含む。
20	黃色砂質土 (2.5Y7/8)。
21	黄色砂質土 (2.5Y7/8) に部分的に暗褐色砂質土 (7.5YR3/4) 、黒褐色土 (10YR2/1) を含む。
22	淡黃褐色砂質土 (2.5Y8/4) に黃褐色砂質土 (10YR6/8) が 30% 含まれる混層に暗褐色土 (10YR3/4) が 2% 含まれる。
23	淡褐色粘土 (2.5Y8/4)。
24	地山、黃褐色砂質土 (10YR5/6)。

(a) S T - 224 植穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	円	40 × 30	50	
2	円	36 × 30	43	
3	円	30 × 25	45	
4	円	25 × 23	40	
5	円	27 × 24	32	
6	円	30 × 23	32	
7	円	30 × 20	34	

(b) S T - 224 深土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2) と褐色砂質土 (10YR6/4) の混層に若干の炭化物を含む。
2	地山

Ch. 34 → (Fig. 28 対応)

(a) S T - 225 植穴計測表

Pit No	形状	長径 × 短径 (cm)	深さ (cm)	備考
1	方	21 × 20	37	
2	方	15 × 14	28	
3	方	18 × 17	28	
4	方	16 × 16	31	
5	円	16 × 12	38	
6	方	19 × 18	34	
7	方	21 × 21	40	
8	方	22 × 22	38	
9	方	20 × 17	33	

(b) S T - 226 深土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10YR2/2) に粒子状の明褐色砂質土 (10YR6/6) を 5%、種白褐土 (7.5YR6/6) を 5%、炭化物を若干含む。しまりなし。
2	黒褐色土 (10YR2/2) に種小塊～中塊の明黃褐色砂質土 (10YR6/8) を 10%、炭化物を若干含む。
3	黒褐色土 (10YR2/3) に種小塊～中塊の明黃褐色砂質土 (10YR6/8) を 10%、炭化物を若干含む。
4	黒褐色土 (10YR2/3) に小塊の明黃褐色砂質土を若干、炭化物を 10%、種白褐土 (7.5YR6/6) を若干含む。しまりなし。
5	種白褐土 (7.5YR6/6) と暗赤褐色土 (5YR3/6) と褐灰色灰 (10YR4/1) と黒褐色土 (10YR1.7/1) の混層、しまりなし。
6	黒褐色土 (10YR2/2) に明褐色砂質土 (7.5YR5/6) の中塊 2 個とにぶい黃褐色粘土を 5%、炭化物を若干含む。
7	にぶい黃褐色粘土 (10YR6/3)、しまりあり。
8	黑色土 (10YR2/1) に明褐色砂質土 (7.5YR5/6) の極小塊を 3%、炭化物とにぶい黃褐色粘土 (10YR6/3) と灰白色灰 (10YR8/1) を若干含む。しまりあり。

9	黒褐色土(10YR 2/2)と黒色土(10YR 1.7/1)の混潤。
10	黒褐色砂質土(10YR 5/6)。(地山)

Ch. 35→(Fig. 28 対応)

S T - 232 地層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(5YR 2/1)にしじみ貝、ナイロン、網のカラ、アルミハクを多量含む。しまりあり。
2	砂質土の塊。
3	黒褐色土(5YR 2/1)に明赤褐色砂質土(5YR 5/6)と褐色砂質土(7.5YR 4/6)の小~大塊を15%、黒色土(10YR 1.7/1)を1%含む。
4	地山

Ch. 36→(Fig. 29 対応)

(a) S T - 234 柱穴計測表

Pt. No.	形状	長径×短径(cm)	深さ(cm)	備考
1	方	32×28	64	
2	方	34×33	64	
3	方	36×35	73	抜き取り痕
4	方	44×30	74	
5	方	38×29	50	
6	方	30×30	74	
7	円	25×25	74	抜き取り痕
8	方	37×30	74	〃
9	方	33×25	80	〃
10	円	32×30	38	
11	円	30×26	52	
12	円	22×20	50	

(b) S T - 234 地層序注記表

層序No.	特徴
1	黒色土(10YR 2/1)に灰黃褐色粘土(10YR 5/2)を30%含む。
2	黒褐色粘土(10YR 3/1)にしまりなし。
3	黒色土(10YR 2/1)に極小~小塊の褐色砂質土(10YR 4/6)と赤褐色砂質土(5YR 4/8)を30%含む。
4	黒褐色土(10YR 3/2)に極小塊の褐色砂質土(10YR 4/6)を3%含む。
5	黒褐色土(10YR 3/2)に極小~小塊の褐色砂質土(10YR 4/6)と明黃褐色砂質土(10YR 7/6)と赤褐色砂質土(5YR 4/8)を3%含むしまりあり。
6	黒色土(10YR 2/1)に極小~小塊の褐色砂質土(10YR 4/6)と明黃褐色砂質土(10YR 7/6)と赤褐色砂質土(5YR 4/8)を20%含むしまりあり。
7	黒色土(10YR 2/1)に小~中塊の明黃褐色砂質土(7.5YR 5/8)と明黃褐色砂質土(10YR 7/6)の極小塊を10%含む。炭化物若干あり。
8	黒褐色土(10YR 3/2)と黒色土(10YR 1.7/1)と極小~小塊のない黃褐色粘土(10YR 5/3)と明黃褐色砂質土(10YR 7/6)と中塊の黃褐色砂質土(10YR 5/6)の混潤。しまりあり。
9	黒褐色土(10YR 2/1)と極小~中塊の黄褐色砂質土(10YR 5/6)と中塊の明褐色砂質土(7.5YR 5/8)と明褐色砂質土(10YR 5/4)と褐色砂質土(10YR 4/4)と褐色砂質土(10YR 4/4)の混潤。ただし削痕の石壁がわは互層になっている。
10	黒色土(10YR 2/1)に小塊のない黄褐色粘土(10YR 5/3)と中塊と黄褐色砂質土(10YR 5/6)と明褐色砂質土(7.5YR 5/8)と極小~小塊の明褐色砂質土(10YR 7/6)を30%含む。
11	黒色土(10YR 2/1)と中塊の黄褐色砂質土(10YR 4/6)と明褐色砂質土(10YR 6/6)の混潤。しまりあり。
12	明黃褐色砂質土(10YR 6/8)。
13	黒色土(10YR 2/1)に灰白色灰(10YR 7/1)を30%含む。炭化物若干あり。
14	地山。明黃褐色砂質土(10YR 6/8)。

(c) S T - 234 観察表

PL. No.	Fig. No.	遺物No.	出土区(遺構)	層位	器形	釉調・色調	胎土	文様	特徴	備考
	29-1	P2668	G43 S T - 234	フク土	皿	青白色	白色	刻線、外縁一文字文 號込 吉祥文	善哉底	

Ch. 37→(Fig. 30 対応)
S T - 209 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10YR 3/2)に黄褐色土(10YR 5/8)と明赤褐色土(5YR 5/8)を小ブロック状に3%含む。
2	黒色土(10YR 2/1)に明褐色土(7.5YR 5/6)を含む、しまりなし。
3	黒褐色土(10YR 3/2)と明褐色土(7.5YR 5/8)の混じるに黑色土(7.5YR 2/1)を20%含む、黄褐色砂質土(10YR 7/8)をブロック状に10%と炭化物を含む。
4	黒色土(7.5YR 2/1)。
5	黒褐色土(7.5YR 2/2)に黄褐色土(10YR 5/8)を2%含む。
6	地山、黄褐色砂質土(10YR 5/6)。

Ch. 38→(Fig. 30 対応)

S T - 214 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	明黃褐色砂質土(10YR 7/6)に暗褐色土(10YR 3/4)を40%含む(混じ)。
2	黒褐色土(10YR 3/2)に黄褐色砂質土(10YR 7/8)をブロック状に30%含み、褐色灰(10YR 1/5)と炭化物を1%含み、礫を5%含む。
3	黒褐色土(10YR 2/3)に礫を2%含む。
4	暗褐色土(10YR 3/3)に黄褐色砂質土(10YR 7/8)を小ブロック状に3%含む、炭化物も微量に含む。
5	暗褐色土(10YR 3/3)と黄褐色砂質土(10YR 7/8)を粒子状に1%含む、炭化物も微量に含む。
6	暗褐色土(10YR 3/3)と黄褐色砂質土(10YR 7/8)の混じるに黄褐色砂質土(7.5YR 7/8)を大ブロック状に3%含み、礫を10%含む、しまりなし。
7	黒褐色土(10YR 2/2)。礫1%と炭化物1%を含む、顯性あり。
8	地山、黄褐色砂質土(10YR 5/6)。

Ch. 39→(Fig. 30 対応)

S T - 223 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	暗褐色土(10YR 3/3)に1%の黄色砂質土(2.5YR 7/8)を含む。
2	暗褐色土(10YR 3/3)に黄褐色砂質土(7.5YR 7/8)を30%含む。
3	黒褐色土(10YR 3/2)に黄褐色砂質土(7.5YR 7/8)と炭化物を1%含む。
4	黒褐色土(10YR 3/2)と黑色灰(10YR 1.7/1)が若干の混じる。
5	黒褐色土(10YR 2/2)。
6	地山、明黃褐色砂質土(10YR 6/6)。

Ch. 40→(Fig. 30 対応)

S T - 231 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10YR 2/2)に黒色灰(10YR 1.7/1)を中板状に含む。
2	灰白色灰(10YR 8/2)、しまりなし。
3	黒褐色土(10YR 3/2)に灰白色灰(10YR 8/2)を薄い板状に含む。
4	黒褐色土(10YR 2/2)に黒色灰(10YR 1.7/1)を中板状に含む。
5	黒褐色土(10YR 3/2)に明赤褐色砂質土(5YR 5/3)の小塊を3%含む。
6	明赤褐色砂質土(5YR 5/8)。
7	地山、黄褐色砂質土(7.5YR 6/8)。

Ch. 41→(Fig. 30 対応)

S T - 227 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	褐色土上(7.5YR 4/3)に多量の灰(7.5YR 6/1)と少量の炭化物混入。
2	黒褐色土上(7.5YR 2/2)に黄褐色砂質土(7.5YR 5/8)5%と若干の黒色灰(7.5YR 1.7/1)が混入。
3	褐色土(7.5YR 4/3)に3%の黄褐色砂質土(7.5YR 6/8)と若干の黒色灰(7.5YR 1.7/1)が混入。
4	暗褐色土上(7.5YR 3/3)に3%の大ブロック状の黄褐色砂質土(7.5YR 6/8)と若干の炭化物混入。
5	暗褐色土(7.5YR 3/3)に灰(10YR 4/1)を多量に含む。
6	暗褐色土(7.5YR 3/3)と若干の黄褐色砂質土(10YR 5/6)との混じる。
7	黒色土(10YR 2/1)。
8	暗暗褐色土(7.5YR 2/3)。
9	黄褐色砂質土(7.5YR 6/8)。
10	暗褐色土(7.5YR 2/3)に若干の暗褐色灰(7.5YR 6/1)と(10YR 6/4)が混入。
11	地山、黄褐色砂質土(7.5YR 6/8)。

Ch. 42→(Fig. 31 対応)

S T - 233 覆土層序注記表

層序No.	特徴
1	黒褐色土(10YR 2/2)に褐色砂質土(10YR 4/4)を巾～極大粒C5%含む。
2	褐色土(10YR 2/1)に明褐色砂質土(7.5YR 5/8)を極大粒C1%含む。
3	黒褐色土(10YR 3/2)と褐色砂質土(7.5YR 4/6)の混じる。
4	黒褐色土(7.5YR 2/2)に明褐色砂質土(7.5YR 4/6)を極小～極大粒C1%含む。
5	黄褐色砂質土(10YR 5/8)。(地山)

Ch. 43→(Fig. 31 対応)
SX-170 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (5YR 2/1) に暗褐色砂質土 (10Y R 3/4) を含む。
2	黒色土 (7.5YR 2/1)。
3	褐色砂質土 (10YR 4/6)。 (堆山)

Ch. 44→(Fig. 31 対応)

SX-160、SX-161、SX-162 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10YR 3/2) に黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) を 2% 含む。
2	黒褐色土 (10YR 3/2) と黄褐色砂質土 (10Y R 7/8) の混觸。
3	黃褐色砂質土 (10YR 8/3) と明黃褐色砂質土 (10YR 6/8) の混觸に若干の暗褐色土 (10Y R 8/3) を含む。
4	暗褐色土 (10YR 3/4)。
5	2 より黒褐色土 (10YR 3/2) が若干多く、炭化物を 1% 含む。
6	明赤褐色砂質土 (5YR 5/8)。下層は酸化鉄分が多く赤褐色砂質土 (5YR 4/8) である。
7	暗褐色土 (7.5YR 3/3) と明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) と明褐色砂質土 (7.5YR 5/6) の混觸。
8	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (5YR 5/8) が 1% の混觸。
9	浅黄色砂質土 (2.5YR 7/4) と暗褐色土 (7.5YR 3/3) の混觸。
10	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) を 5% 炭化物を 3%、下層に黑色灰 (7.5YR 1.7/1) を含む。
11	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に黄褐色砂質土 (7.5Y R 7/8) を 3%、炭化物を 3% 含む。
12	明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) に若干の炭化物を含む。
13	明黃褐色砂質土 (10YR 6/6)。
14	褐色砂質土 (7.5YR 4/6)。
15	明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) と酸化鉄分が多い赤褐色砂質土 (5YR 4/8) と明褐色砂質土 (10YR 6/6) がブロック状に混觸。
16	黒褐色土 (10YR 3/2) に明褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) が 20% 錐入。
17	暗褐色土 (10YR 3/2) と明褐色砂質土 (7.5Y R 5/8) の混觸に若干の炭化物を含む。
18	黒色土 (10YR 2/1) に若干の明褐色砂質土 (7.5YR 5/8) が錐入。活性あり。
19	黃褐色砂質土 (10YR 5/6)。
20	浅黄色砂質土 (2.5YR 7/4) に鉛鉱鉄を含む。
21	浅黄色砂質土 (2.5YR 7/4)。 (堆山)

Ch. 45→(Fig. 32 対応)

(a) SE-71 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に暗赤褐色土 (5YR 3/6) と明褐色土 (7.5YR 5/8) の小粒状に 1% 炭化物を 1% 含む。しまり無い。
2	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に暗赤褐色土 (5YR 3/6) と明褐色土 (7.5YR 5/8) が小粒状に 1% 炭化物を 1% 含む。しまり無い。
3	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に明黃褐色土 (10Y R 7/6) が粒子状に 5%、炭化物を 1% 含む。
4	褐色土 (7.5YR 4/3) と褐色土 (10YR 4/4) の混觸に炭化物が 2% 錐入。しまり無い。
5	暗褐色土 (7.5YR 3/4) に炭化物を 1% 含む。しまりなし。
6	暗褐色土 (10YR 3/3) に明黃褐色土 (10YR 6/8) を 30% 含む。
7	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に小ブロック状の褐色土 (10YR 4/6) が 1% と炭化物を 1% 含む。
8	黒褐色土 (7.5YR 2/2) に小ブロック状の褐色土 (10YR 4/6) に 1% 明黃褐色土 (10YR 5/4) が 1%、炭化物を 2% 含む。しまり非常に無い。
9	褐色土 (7.5YR 4/3) と褐色土 (10YR 4/4) の混觸に褐色土 (7.5YR 6/8) を 1% と炭化物を 2% 含む。
10	暗褐色土 (7.5YR 3/3) に明褐色土 (7.5YR 5/8) と 1% 黄褐色砂質土 (10YR 7/3) 明黃褐色土 (10YR 7/6) と黒色土 (5YR 1.7/1) を 10% 含む。活性少々あり。
11	小ブロック状の明黃褐色砂質土 (10YR 6/8) に暗褐色土 (10YR 3/3) がまだら状に 20% 錐入。
12	黒色土 (7.5YR 2/1)。
13	灰オーリーブ色砂質土 (5Y 6/2)。

(b) S E - 71 出土箇所記表

P L №	Fig №	遺物№	出土区(遺構)	層位	性質	器形	軸調・色別	粘土	文様	特徴	備考
17-1	32-1	P1136	G 56 S E 71	フク土	磨津	皿	灰褐色	橙色	一	口縁が外反している	

P L №	Fig №	遺物№	出土区(遺構)	層位	製品名	形状	色 調	木堆	文様	特 徴	備考
-	32-2	M 30	G 56 S E 71	セガソノ 内 フク土	曲 物						

Ch. 46→(Fig. 33 対応)

S E - 73 覆土層序注記表

層序№	特 徴
1	黒色土(7.5YR 2/1) しまりあり。
2	Iに浅黄褐色砂質土(10 YRS 3/3)の小粒子が15%混入。しまりあり。
3	黒褐色土(10 YR 3/2)に浅黄褐色砂質土(10 YR 8/3)、黃褐色粘質土(10 YR 5/8)と明黄褐色砂(10 YR 6/8)が50:38:2:10の混觸。
4	黒褐色土(10 YR 3/2)に浅黄褐色砂質土(10 YR 8/3)の灰白色石(7.5YR 8/2)が45:40:5:10の混觸。
5	浅黄褐色砂質土(10 YR 8/3)に黃褐色砂質土(2.5Y 7/8)を10%混入。しまりあり。
6	明褐色砂質土(10 YR 8/8)と明赤褐色砂質土(5YR 5/8)の混觸。
7	オリーブ褐色土(7.5Y 2/2)に炭化物を5%含む。しまりあり。
8	オリーブ褐色土(5GY 2/1)。
9	オリーブ褐色土(7.5Y 2/2)に炭化物を5%含む。しまりあり。
10	暗オリーブ灰色灰(2.5GY 3/1)。
11	オリーブ褐色土(7.5Y 3/2)。
12	灰白色灰(5Y 7/2)。
13	黒色土(10 YR 2/1) 20%と赤褐色土(5YR 4/6)の混觸。
14	黒色土(10 YR 2/1)。しまりあり。
15	黒色土(10 YR 2/1)と褐色土(10 YR 4/6)の混觸。
16	黒褐色土に黃褐色砂質土を薄い凸レンズ状に含む。炭化物小量あり。
17	黃褐色砂質土。
18	黒褐色土に黃褐色砂質土を若干含む。酸性あり。
19	暗褐色土と黃褐色砂質土の互層。
20	砂質土と粘土の10cmぐらいづつの互層。
21	砂質土と粘土の混觸、多量の川原石を含む。

Ch. 47→(Fig. 34 対応)

S E - 72 覆土層序注記表

層序№	特 徴
1	赤黒色土(2.5YR 2/1)しまりはあるがもらい。
2	暗赤褐色土(5YR 3/2)に赤褐色土を中粒状に5%含む。粘性がありしまりが強め。
3	黒褐色土(5YR 2/1)、粘性がなくもない。

4	黒色土(7.5YR 2/1)に極小の赤褐色砂質土を30%含む。しまりなし。
5	暗赤褐色砂質土(5YR 3/2)に黒褐色土を50%、大粒状の石を30%含む。しまりなし。
6	暗褐色砂質土(7.5YR 3/3)に中粒状の石を1%含む。
7	にぶい黃褐色砂質土(10 YR 5/4)、しまりがあるがもらい。
8	褐色砂質土(10 YR 4/4)に中、小粒状の石を3%含む。しまりはあるがもらい。
9	暗褐色砂質土(7.5YR 3/3)に大粒状の石を2%含む。しまりあり。
10	暗褐色土(5YR 3/2)に極小の淡黄色砂質土(10 YR 8/3)を15%含む。多少しまりあり。
11	極小粒状の黃褐色砂質土(2.5Y 5/3)、しまりなし。
12	極小粒状のにぶい黃褐色土(10 YR 4/3)、しまりなし。
13	黒褐色土(10 YR 2/3)に黃褐色土(10 YR 5/6)が25%、炭化物を1%含む。多少粘性あり。
14	黒色土(10 YR 2/1)に炭化物を10%含む。多少粘性あり。
15	黒褐色土(7.5YR 2/2)、多少粘性あり。
16	黒色土(7.5YR 1.7/1)、多少粘性あり。
17	黒褐色土(7.5YR 3/1)、多少粘性あり。
18	黒褐色粘土(10 YR 3/1)。
19	黒色土(7.5YR 2/1)に炭化物を7%含む。粘性あり。
20	明黃褐色土(10 YR 6/8)に黒色土(7.5YR 2/1)が10%混入。

Ch. 48→(Fig. 34 対応)

S E - 74 覆土層序注記表

層序№	特 徴
1	暗褐色土(7.5YR 3/4)に若干の黒色土(7.5YR 1.7/1)を含む。
2	暗褐色土(7.5YR 3/3)。
3	暗褐色粘土(7.5YR 4/3)。
4	暗褐色粘土(7.5YR 4/2)。
5	4に砂質土(10 YR 6/4)が薄い板状にあり。その上に若干の褐灰色灰(7.5YR 4/1)がある。
6	暗褐色土(10 YR 2/2)に若干の砂質土(10 YR 6/4)を含む。
7	暗褐色土(7.5YR 3/4)と砂質土(10 YR 6/4)の混触。

8	7より若干砂質土が少ない。
9	砂質土 (10YR6/4)に若干の暗褐色土 (7.5Y R3/4)が混入。
10	砂質土 (10YR5/3)。
11	黒褐色土 (10YR5/2)、湿性あり。
12	砂質土 (10YR5/3)、湿性あり。
13	黄褐色砂質土。
14	青白色バミスと黄白色バミスの混層に板灰石が若干混入。

Ch. 49 → (Fig. 34 対応)

S E - 75 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	黒褐色土 (10YR2/3)に明褐色砂質土 (7.5Y R5/8) の稍小～小塊を 5%ほど含む。しまりあり。
2	明眞褐色砂質土 (10YR7/6)。(地山)

S E - 77 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	純褐色土 (7.5YR6/4)に灰白色 (7.5YR8/1) のシルトを約 40%含む、粘性が強く、しまりが非常に強い。
2	黒褐色土 (10YR2/2)に赤褐色 (5YR4/8) の砂質土小塊を約 10%含む。
3	黒色土 (10YR2/1)に黒褐色灰 (N 1.5/0) を中粒灰 (約 30%含む)。
4	黒色土 (10YR2/1)に黒褐色灰 (N 1.5/0) を中粒灰 (約 30%)、褐色 (7.5YR4/3) の砂質土を約 5%含む、湿性強し。
5	黒褐色土 (7.5YR2/1)に黒褐色灰 (N 1.5/0) を樹下部に薄い板状に含む、粘性あり。
6	黒褐色土 (5YR3/1)に赤褐色 (7.5YR4/3) の砂質土を約 3%含む。
7	明褐色 (7.5YR5/7) と灰白色 (10YR8/2) の砂質土塊の混層。
8	黒褐色土 (10YR2/3)に赤褐色 (5YR4/8) の砂質土中塊を約 8%含む。
9	黒褐色土 (10YR2/3)にはぶい黄褐色土 (10YR5/3)の箇中部に混入している、共に粘土である。
10	にぶい黄褐色砂 (10YR6/4)、しまりなし。
11	黒褐色土 (10YR2/2)、湿性あり。
12	黒色土 (10YR1.7/1) と暗赤褐色粘質土 (5Y R3/2) の混層、赤褐色 (5YR4/8) と褐色 (7.5YR4/3) の砂質土を含む、湿性あり。

Ch. 51 → (Fig. 36 対応)

S E - 79 覆土層序注記表

層序No	特徴
1	暗褐色土。
2	暗褐色灰礫。
3	暗褐色土に若干の粘質を含む。
4	暗褐色粘質土。
5	暗褐色土に若干の砂質を含む。
6	暗褐色土と黄褐色砂質土の混層。
7	黒色灰。
8	5より若干砂質を多く含む。
9	黒色灰に下の白色灰を含む。
10	暗褐色土に黄褐色砂質土をブロック状に含む。
11	暗褐色土と黄褐色砂質の混層に黄白色バミス泥人。
12	暗褐色灰土。

Ch. 52 → (Fig. 37 対応)

(a) S B - 57 (門跡)

S H - 10 (柱穴過構造)

Pit No	形状	長径 × 短径 (cm)	深さ (m)	備考
P - 1	方	108 × 82	284	
P - 2	方	127 × 107	163	
P - 3	方	100 × 94	99	
P - 4	方	83 × 73	100	

S B - 57 (門跡)

S H - 10 (柱穴直墻)

層序No	特徴
1	黒褐色土 (5YR2/1)。
2	暗褐色土 (7.5YR3/4) と灰褐色灰 (7.5YR5/2) の混層に、炭化物を若干含む、湿性あり。
3	灰褐色灰 (7.5YR5/2) と浅黃褐色灰 (7.5YR8/4) の混層、湿性あり。
4	灰褐色灰 (7.5YR5/2) と黒褐色灰 (10YR1.7/1) の約 1 : 9 の混層、湿性あり。
5	赤褐色砂質土 (5YR4/8) と明褐色砂質土 (7.5YR5/8) と黒褐色土 (10YR2/3) の混層に浅黃褐色灰 (7.5YR8/4) を 5%、炭化物を若干含む、しまりあり。
6	黒褐色土 (5YR2/1) に明赤褐色砂質土 (5Y R3/8) を中粒状に約 1%含む、しまりあり。
7	黒褐色土 (7.5YR2/2) と明褐色砂質土 (7.5Y R5/8) との混層、しまり強い。
8	黒褐色土 (7.5YR2/2) と明褐色砂質土 (7.5Y R5/8) との混層に黒色土 (7.5YR2/1) を若干含む、しまりあり。
9	黒褐色土 (5YR2/1) に黄褐色砂質土 (10YR5/6) との混層、部分的に单層になっている、しまり強い。
10	黒褐色土 (10YR2/2)、しまり非常に強い。
11	黄褐色 (10YR5/6)、赤褐色 (5YR4/8) の砂質土。(地山)

Ch. 52 → (Fig. 38 対応)

SK-01 山土遺物観察表

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	西壁	图形	種別・色調	胎土	文様	特徴	備考
38-1	P1176	D 56	S K 01	床面直上	互立	垂	淡黄褐色～黑色	灰黄褐色	一	口縁部に片口	

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺構)	層位	名稱	計測値(長×幅×厚)cm	特徴	備考
38-2	F 354	D 56	S K 01	フク土	不明鉄製品	(3.78) × (3.46) × 0.24		
38-3	F 355	D 56	S K 01	フク土	不明鉄製品	(4.50) × 1.80 × 0.18		

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺物)	層位	名稱	外縁	外縁	外縁	内縁	内縁	内縁	重量(g)	備考
38-4	C 120	D 56	S K 01	フク土	無文鏡	2.3	0.6	0.8	—	—	—		

Ch. 54 → (Fig. 40 対応) 青磁觀察表

P L No	Fig No	遺物No	出土区(遺物)	層位	图形	種別・色調	胎土	文様	特徴	備考
15-3	40-1	P 646	G56	I 上	碗	青 緑 色	白 色	外面部：		
—	40-2	P2227	E48+Pit	フク上	碗	青 緑 色	暗 灰 色	外面部：	連井文の捺痕	
15-1	40-3	P1528	E48+SE74	フク土	碗	青 灰 色	灰 色	外面部：	窓沿面文有	
15-5	40-4	P2128	G57+SX168	フク土	碗	青 淡 色	暗 灰 色	見込：蛇の目		
—	40-5	P1867	G58+ST210	フク土	碗	青 緑 色	白 色	—	二次加熱	
15-4	40-6	P1975	G58+SX163	フク土	碗	青 緑 色	灰 色	内外面：割線文		
15-2	40-7	P1699	F43	I	碗	青 緑 色	白 色	内面：割線文		
15-9	40-8	P2540	E47+SX181	フク土	皿	青 緑 色	暗 灰 色	内面：割線文	見込：印花文	
15-10	40-9	P2047	H57+SX166	フク土	皿	青 緑 色	暗 灰 色	内面：割線文	見込：印花文	
15-8	40-10	P2077	G57+SX167	フク土	皿	青 灰 色	灰 色	内面：印花文	腹内にバラつき有	
—	40-11	P2093	G57+SX167	フク土	皿	暗 緑 色	暗 灰 色	内面：割線文		
—	40-12	P1617	G58+ST210	フク土	皿	青 緑 色	灰 色	内面：割線文	見込：印花文	
15-7	40-13	P2074	G57+SX167	フク土	皿	青 灰 色	暗 灰 色	内面：割線文	二次加熱	
—	40-14	P2429	F43	I 上	小皿	青 緑 色	白 色	外面：連井文		
15-11	40-15	P2365	G43	I	小皿	青 緑 色	灰 色	内面：割線		
15-6	40-16	P2379	G43	I 上	碗	青 緑 色	白 色	内面：割線	見込：「壽」	
15-42	40-17	P2349	F43	II 盆	青 緑 色	白 色	内面：割線文	スタンプ		
15-16	40-18	P1210	E48	I	香炉	青 白 色	白 色	—		
15-17	40-18	P2122	G57+SX164	フク土	香炉	青 白 色	白 色	—		P L 15 № 16 と 同一個体
15-13	40-19	P 644	G56	I 上	香炉	青 緑 色	白 色	—	口縁部直下に独立 り有。	
15-14	40-19	P 643	G56	I 上	香炉	青 緑 色	白 色	—	高台直上に一つの 穿孔有。	P L 15 № 13 と 同一個体
15-15	40-20	P1953	G57 Pit	フク土	香炉	青 緑 色	灰 色	—		P L 15 № 15 と 同一個体
—	40-20	P2136	G57+SX164	フク土	香炉	青 緑 色	灰 色	—		

Ch. 55 →(Fig. 41対応) 白釉、不明動植物紋及

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物No.	出土区(遺跡)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	微	備	考
16-2	41-1	P1776	G56-ST210	フク土	皿	白 色	白	色	白	一				
16-1	41-2	P2557	G45-SX182	フク土	皿	白 色	白	色	白	一				
16-4	41-3	P 747	D56-SX195	フク土	碗	黄 白	白	色	黄	一				
16-3	41-4	P2226	F45		III	白	色	白	色	一	外底八角の刻り有 高台4ヶ所の刻り有			
16-19	41-~	P1985	G57 Pit	フク土	皿	白 绿	白	色	白	一	内面：胸部から見 込にかけ刻り有			

Ch. 56 →(Fig. 41対応) 染付 觀察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物No.	出土区(遺跡)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	微	備	考
16-17	41-5	P 31	H57	I	皿	青 白	青	白	青	白	一			
16-13	41-6	P1173	E47	II	皿	青 白	白	色	白	一	内面：盆文有 外面：牡丹唐草文			
16-9	41-7	P1489	E47-ST216	フク土	碗	暗青 灰色	青	白	青	白	外底：一条の纏模			
-	41-8	P1118	E49-ST166	フク土	皿	青 白	白	色	白	一	内面：二条の纏模 唐草文			
16-16	41-9	P 571	G38	II 下	皿	青 白	白	色	白	一	脚足外面：			
16-15	41-10	P1457	F46	I	皿	青 口	白	白	白	一	牡丹唐草文 見込：王政卿子文			
16-11	41-11	P2445	G48-SE77	フク土	皿	青 白	白	色	白	一	脚部外面：牡丹 牡丹唐草文 見込：褐磨文			
16-5	41-12	P2446	F47-ST243	フク土	皿	暗青 灰色	白	色	白	一	外面：波瀾文帶 苔青底、下半に 色墨葉文			
16-6	41-13	P2447	F47-ST218	フク土	皿	暗青 灰色	灰	白	色	一	外面：波瀾文帶 苔青底、下半に 墨線	見込、底部： 無施釉		
16-7	41-14	P2250	F43	I	皿	暗青 黄色	黄	灰	色	一	外面脚部： 芭蕉葉文 見込：捺花文	疊付部分・無施釉		
16-8	41-15	P2608	G43-ST234	フク土	皿	青 白	色	灰	白	一	見込：吉祥文			
16-10	41-16	P 575	H58	II 下	皿	白	色	白	色	一	内面：四方禪文			
16-14	41-17	P2703	F42	I	皿	青 白	白	色	白	一	内面：花鳥文			
16-12	41-18	P2751	G40-41 SH410	フク土	皿	青 白	白	色	白	一	内面：花鳥文			
16-18	41-19	P2242	G45	III	皿	青 白	白	色	白	一				

Ch. 57 →(Fig. 42対応) 中国海軸盤(呂宋産)観察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物No.	出土区(遺跡)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	微	備	考
19	42-1	P1469	G56-SE 71	フク土	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			
19	42-1	P2078	G56 Pit	フク土	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			
19	42-1	P 244	J52	II	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			
19	42-1	P1830	D56-SX195	フク土	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			
19	42-1	P1834	E56-SX195	フク土	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			
19	42-1	P1358	E56-SX195	フク土	皿	黄 紅	色	淡	黃	色	一			

Ch. 58→(PL. 20対応) 赤絵 觀察表													
PL-Nr.	Fig No.	遺物No.	出土区(部)	層位	形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	鑑	考
20-12	-	P1426	H55	II 上	皿	灰 白色	白	色	外面:二条の模様 牡丹唐草文 内面:二条の模様			1980出土	
20-13	-	P1993	G48・SE 77	フク上	皿	灰 白色	淡	灰色	外面:一条の模様 牡丹文 内面:一条の模様				
20-14	-	P4621	P54	II 瓢	灰 白色	淡	灰色	外面:一条の模様 牡丹文 内面:二条の模様			1979出土		
20-15	-	P1842	H47 Pit	フク上	碗	灰 白色	淡	灰色	外面:一条の模様 内面:二条の模様			1978出土	
20-16	-	P1818	F50 SE 68	フク土	碗	灰 白色	淡	灰色	内外面:牡丹文			1982出土	
20-17	-	北船表探		碗	灰 白色	淡	灰色	外面:牡丹文			1979出土		
20-18	-	P 498	J57・ST 62	フク土	碗	灰 白色	白	色				1980出土	
20-19	-	P2206	G50・SX109	フク土	皿	灰 白色	淡	灰色	外面高台: 一条の模様 内面見込: 二~三条の模様			1982出土	
		P 372	ST13	フク土	皿	灰 白色	淡	灰色	内面:西方釋文				

Ch. 59→(Fig. 42対応) 朝鮮 观察表													
PL-Nr.	Fig No.	遺物No.	出土区(部)	層位	形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	鑑	考
20-1	42-2	P 610	H59	II 下	碗	灰 白色	淡	灰色	-			83F 57 ST 204C セクション内床 面P 1882と接着	
20-2	-	P1489	144・SE 67	フク上	皿	灰 白色	暗	灰色	-	黄灰色透明釉			
20-3	-	P 96	J49	I	皿	灰 白色	暗	灰色	-	黄灰色透明釉		1982出土	
20-4	-	-	L47 帽跡	フク土	碗	灰 白色	暗	灰色	-	透明釉		1978出土	
20-5	-	P 222	F45	II 瓢	碗	灰 白色	暗	灰色	-	透明釉			
20-6	-	P4630	L58	II 瓢	碗	灰 白色	暗	灰色	-	透明釉		1979出土	
20-7	-	P4631	L58	II 瓢	碗	灰 白色	暗	灰色	-	透明釉		1979出土	
20-8	-	P1833	E56-SX195	フク土	碗	灰 白色	暗	灰色	-	黄灰色透明釉			
20-9	-	P2722	G43・ST234	フク土	皿	灰 白色	暗	灰色	-	黄灰色透明釉 一次加熱			
20-10	-	P 60	L53	I 下	皿	黄 白色	暗	色	-			1981出土	
20-11	-	P1087	L47 帽跡	フク土	碗	黄 白色	暗	色	-			1979出土	

Ch. 60→(Fig. 42対応) 美濃・鈴鹿 观察表													
PL-Nr.	Fig No.	遺物No.	出土区(部)	層位	形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	鑑	考
17-1	-	P2052	G57・SX167	フク土	碗	暗	緑	色	暗	灰色	-	胸部で袖口	
17-2	42-5	P 596	G56	II	碗	暗	緑	色	暗	灰色	-	二次加熱	
17-3	42-4	P 894	F57・ST201	フク土	碗	暗	緑	色	暗	灰色	-	二次加熱	
17-4	42-3	P 75	HG41-ST201	フク土	水注	暗	緑	色	暗	灰色	-	胸部で袖口	
17-5	42-6	P 861	F57・ST201	フク土	小皿	暗	緑	色	暗	白色	-		
17-6	42-7	P2165	F45	I 小杯	碗	暗	緑	色	暗	白色	-		
17-7	-	P 506	H59	II	碗	暗	緑	色	暗	白色	-		
17-8	42-10	P 653	G56	I 上	皿	暗	緑	色	暗	白色	-	見込と正面輪ドチ痕	
17-9	42-8	P1539	F48・SE 79	フク土	皿	暗	緑	色	暗	白色	-		
17-10	42-9	P2467	F47・ST218	フク土	碗	暗	緑	色	暗	白色	-	見込と正面輪ドチ痕	
17-11	42-11	P 77	G41・SH 10	フク土	碗	暗	緑	色	暗	白色	-	見込:菊花文	
17-12	42-12	P2436	G48・SE 77	フク土	楕円	暗	緑	色	暗	灰色	-		
17-13	42-13	P2496	F47・ST218	フク土	碗	暗	黒	色	暗	灰色	-	外面部:袖口	
17-14	-	P1985	G57 Pit	フク土	皿	白	緑	色	白	色	-	内面:觸部から見 込にかけ刻り有	

Ch. 61 → (Fig. 43 対応) 唐津 観察表

PL-Nr	Fig-Nr	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文	様	特	備	備	考
17-1	32-1	P1136	G56+SE71	フク土	直	灰 橙 色	橙 色	-	-	胴部: 細止り			
17-2	43-3	P2179	G46	Ⅰ	直	灰 緑 色	暗 灰 色	-	-	胴部: 細止り			
17-3	43-2	P2241	G45	Ⅱ	直	灰 橙 色	暗 橙 色	-	-	胴部: 細止り			
17-4	43-1	P1281	G56+SE71	フク土	鉢	暗 灰 色	暗 橙 色	-	-				
17-5	43-5	P2265	G44	I	鉢	暗 灰 色	暗 橙 色	-	-				
17-6	43-4	P1506	F47+ST218	フク土	暗 緑 色	暗 灰 色	-	-	-				

Ch. 52 → (Fig. 43・44 対応) 瓦 器 観察表

PL-Nr	Fig-Nr	遺物No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文	様	特	備	備	考
-	43-6	P2083	G56 Pit	フク土	火鉢	黒・橙色	暗 灰 色	-	口縁外面: 二条の輪郭 四豪状スタンプ	研磨			
-	43-7	P1398	E56+SX195	フク土	火鉢	にぶい橙色	暗灰褐色	-	外面縁部: 算木状文、丸に 十字のスタンプ				
-	43-8	P1862	H58+SE 73	フク土	火鉢	黒 色	暗灰褐色	-	外面口縁部、底 部: 離唇 U字の指文状ス タンプ	脚有。研磨			
-	43-9	P1308	F58+ST208	フク土	壺	黒 色	暗灰褐色	-	外面縁部: 2列 の雷文スタンプ 三つ巴文スタン プ	研磨			
-	43-10	P2044	G58 Pit	フク土	壺	黄 橙 色	淡黄灰色	-	外面: 雷文、ス タンプ、剝離文	研磨			
-	43-11	P 774	E56+ST200	フク土	取手	黒 色	暗灰褐色	-	外面縁部: 上面横 へのナデ跡、 下面縁への ナデ跡。研磨				
-	44-1	P1306	D56+SX195	フク土	壺	黒・橙色	暗 灰 色	-	-				
-	44-2	P 923	H57+ST204	フク土	火鉢	黒 色	暗 灰 色	-	外面: 八豪状ス タンプ	研磨			
-	44-3	P 114	D56+SX195	フク土	火鉢	黒 色	暗 灰 色	-	外面: 口縁部、 胴部中央に波状 形隆起。貼り付 け。下半に五弁 花状の貼り付け 文				

Ch. 63 → (Fig. 44 対応) 土 路 観察表

PL-Nr	Fig-Nr	遺物 No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文	様	特	備	備	考
18-7	44-4	83P 983	H58+ST205	床面直上	-	にぶい青緑色	淡黄褐色	-	-				

Ch. 64 → (Fig. 44 対応) 坪 路 観察表

PL-Nr	Fig-Nr	遺物 No	出土区(遺構)	層 位	器形	釉調・色調	胎 土	文	様	特	備	備	考
-	44-5	84P 176	G41+ST192	床面直上	-	-	-	-	-	-			
-	44-6	83P1877	G58+ST210	フク上	-	-	-	-	-	-			
-	44-7	83P1909	G58+ST210	フク上	-	-	-	-	-	-			
18-8	44-8	80P1385	H54+SE 31	フク上	-	-	-	-	-	-			
18-9	44-9	83P2484	G48+SE 72	フク土	-	-	-	-	-	-	内面に墨付着		

Ch. 65 → (Fig. 44 对応) 羽 口 觀察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物 No.	出土区(遺物)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	徵	備 考
-	44-10	83P2055	G57・SX167	フク土	-	黄褐色～暗褐色	橙色	一					
-	44-11	83P1802	G58・ST210	フク土	-	橙色～暗灰色	橙色	一					

Ch. 66 → (PL.21 对応) 伊 方 里 觀察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物 No.	出土区(遺物)	層位	器形	釉調・色調	胎	土	文	様	特	徵	備 考
21-1	-	78P 383	M69	I	皿	綠灰 色	灰白色	一					高台に砂付有
21-2	-	78P 699	M20	I	皿	綠灰 色	灰白色	一					盤打は無地
21-3	-	79P 496	北 鹿 波 漆	一	皿	青白 色	灰白色	一					
21-4	-	81P 6	K52	I	皿	青白 色	灰白色	一					
21-5	-	78P 309	I69・SH04	I	皿	青灰 色	黄白色	一					
21-6	-	78P 395	L68	-	皿	灰 色	灰 色	一					
21-7	-	78P 891	K47	I	皿	青灰 色	灰 色	一					
21-8	-	79P5376	K55	II	皿	青灰 色	灰 色	一					
21-9	-	78P1567	N47	II	下 碗	青白 色	灰白色	一					
21-10	-	79P4015	O45	II	碗	灰 色	灰 色	一					外面、網目文
21-11	-	81P 187	K53	II	碗	青白 色	灰白色	一					
21-12	-	79P2974	P55	II	碗	青灰 色	灰白色	一					
21-13	-	81P 1	I57	I	鉢	青白 色	灰白色	一					
21-14	-	78P1236	K69	I	鉢	綠灰 色	灰白色	一					外面、二重 網目文
21-15	-	81P1768	H49	I	小鉢	青白 色	灰白色	一					盤付に砂付有
21-16	-	81P 558	F53	I	皿	青白 色	灰白色	一					見入鉢ノ目附有
21-17	-	79P6132	N56・SH02	フク土	皿	青白 色	灰白色	一					
21-18	-	78P1312	I47	表 土 土器下端	碗	青白 色	灰白色	一					四方薄
21-19	-	81P 257	J53	II	碗	青白 色	灰白色	一					内面、網目文 外面、二重 網目文
21-20	-	-	北 鹿 波 漆	一	小鉢	青白 色	灰白色	一					
21-21	-	81P1904	H48	I	碗	青白 色	灰白色	一					
21-22	-	79P5437	O54	I	小鉢	青白 色	灰白色	一					内面に砂付有
21-23	-	79P2976	P55	II	小鉢	青白 色	灰白色	一					
21-24	-	79P1468	I58	I	小鉢	青白 色	灰白色	一					

Ch. 67 → (Fig. 45・46 对応) 鋼 製 品 觀察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物 No.	出土区(遺物)	層位	名	称	計	闊	幅	(長×幅×厚) cm	特	徵	備 考
-	45-1	83F 669	G58・ST210	フク土	小刀	刀	(15.99) ×	1.04	0.29				
-	45-2	83F 561	E46	II	上 打	根	(6.86) ×	1.40	0.39				
-	45-3	83F 846	H57・Pi	フク土	鍔 尾	鍔	7.36 ×	1.27	0.40				
-	45-4	83F 943	F48・ST225	フク土	鉄	鉄	(9.67) ×	0.40	0.35				
-	45-5	83F 174	G58	II	上 鍔	鍔	10.16 ×	0.69	0.68				
-	45-6	83F 572	F48・ST214	フク土	鉄	鉄	13.39 ×	1.06	1.04				
-	45-7	83F 83	E56	II	下 鍔	鍔	14.90 ×	1.36	0.58				
-	45-8	83F 303	G59	II	上 打	根	(12.53) ×	外径 1.12	内径				
-	45-9	83F 336	E56・ST200	フク土	不明鉄製品		1.14	×	2.02	0.58			
-	45-10	83F 926	E43	II	小 札		6.86	×	2.09	0.24			
-	45-11	83F 537	E56・ST212	フク土	小 札		7.00	×	2.30	0.23			
-	45-12	83F 247	E56・ST200	フク土	小 札		7.26	×	2.90	0.30			
-	45-13	83F 714	F56・ST212	フク土	小 札		7.28	×	2.23	0.26			
-	45-14	83F 768	G58・ST210	フク土	小 札		6.68	×	2.00	0.23			
-	45-15	83F 681	E56・ST200	フク土	小 札		7.30	×	2.74	0.22			
-	45-16	83F 454	F48	II	小 札		6.57	×	2.74	0.23	重さ 16 g		

-	45-17	83F 15	H50	三日札	(6.59) × 3.48 × 0.29	座付看	
4-3	45-18	83F 360	F56+ST203	床面直上 蛇 状 刀	35.85 × 4.43 × 0.62		
-	45-19	83F 324	D56+SX195	フク土 不明銅製品	(7.77) × 1.93 × 0.70	座付看	
-	46-1	83F 875	G56+ST210	床 面 足	(31.0) × 25.58 × 1.06 × (0.57)		
-	46-2	83F 126	G41+ST192	床 面 火 善	(38.9) × 0.78 × 0.78	重さ約 140 g	
-	46-3	83F 320	F56+ST203	フク土 火 善	(19.72) × 1.48 × 0.60 頭部 0.83 × 0.76		
-	46-4	83F 338	E56+SX195	フク土 火 善	21.88 × 0.65 × 0.56		
-	46-5	83F 52	F57	I 下 鉄の灯明皿	10.75 × 5.22 × 2.72 × (0.43)	重さ約 82 g	直径 5.6cm
-	46-6	84F 120	H41+ST192	フク土 不明銅製品	26.03 × 4.08 × 1.06	重さ約 240 g	
-	46-7	82F135	H42+ST192	フク上 不明銅製品	26.10 × 3.94 × 1.00		
-	46-8	83F 48	E57	I 火 打 金	7.72 × 2.43 × 0.28		
-	46-9	83F 47	E57	I 火 打 金	7.95 × 2.60 × 0.44		
-	46-10	83F 339	E56+SX195	フク土 学 引 金	9.54 × 4.17 × 0.39		
-	46-11	83F 606	G46+SE77	フク土 銛	(14.48) × 0.66 × 0.40 刃 1.27 × 0.36		
-	46-12	83F 650	G58+ST210	フク土 銛	(13.10) × 0.62 × 0.53 刃 0.62 × 0.53		
-	46-13	83F 549	H58+SE73	フク土 かすがい	7.37 × 2.50 × 0.74 × (0.37)		
-	46-14	84F 116	G41+ST192	床面直上 かすがい	5.10 × 4.01 × 0.75 × (0.46)		
-	47-1	83F1100	E42	I 角 钺	(14.26) × 2.08 × 1.62 頭部 0.96 × 0.66		
-	47-2	83F1079	E43	I 下 角 钺	(9.92) × 0.76 × 0.79		
-	47-3	83F1082	G41+SH10	フク土 鐸	刃長 16.8、刃幅 6.7、柄長 9.34		
-	47-4	83F1051	G46+ST229	フク土 鐘	刃長 15.32、刃幅 5.03、柄長 11.93		
-	47-5	83F 349	H58+ST205	フク土 輪状銅製品	3.56 × 2.84 × 0.37		
-	47-6	83F 583	E47+ST216	フク土 輪状銅製品	4.12 × 3.36 × 0.81		
-	47-7	83F 783	H58+SE76	フク土 輪状銅製品	3.92 × 3.90 × 0.35		

Ch. 68 → (Fig. 48 対応) 鋼製品 観察表

PL-Nr.	Fig-Nr.	通物 No.	出土区 順序	部位	名 称	特 微	備 考
-	48-1	84F 112	G41+ST192	床面直上 香 伊	(12.20) × (7.32) × 0.17		
19-1	48-2	83F 381	G56+ST203	フク土 尼 金 物	4.52 × 3.50 × 0.16		
19-10	48-3	83F 473	F57+ST201	フク土 銅 鐘	5.11 × 1.56 × 1.56	重さ33g	
19-11	48-4	83F 6	G58	I 銅 鐘	5.44 × 1.49 × 1.49	重さ26g	
19-13	48-5	84F 110	H41+ST192	フク土 鐘	4.60 × 2.12 × 0.69		
19-12	48-6	83F 125	G57	I 上 脚	3.99 × 1.36 × 1.02		
19-14	48-7	83F 914	G44	I 上 六 鏡	径 6.88 × 高さ 1.20		
-	48-8	83F 930	G43	I 六 鏡	径 8.50 × 高さ 1.00		
19-15	48-9	83F 38	E57	I 上 銅 盔	径 4.18 × 0.76 × 0.19	金無付箋	
19-17	48-10	83F 758	E56+ST220	フク土 不明銅製品	(3.42) × 0.72 × 0.72		
19-20	48-11	83F 529	E56+SX155	フク土 不明銅製品	径 1.88 × 高さ 0.37		
19-7	48-12	83F 478	F57+ST201	フク土 銅 細	5.59 × 0.59 × 0.37	頭部 0.38 × 0.37	
19-6	48-13	83F 54	F58	II 不明銅製品	(6.32) × 径 0.38		
19-5	48-14	83F 255	F57+ST201	フク土 不明銅製品	(9.40) × 径 0.44		
19-3	48-15	83F 625	E48+ST223	フク土 不明銅製品	6.28 × 0.53 × 0.31		
-	48-16	83F 376	E56+ST200	フク土 取手状銅製品	4.19 × 3.28 × 0.47		
19-9	48-17	83F 66	F57	II 下 花 瓶 ?	4.53 × 2.54 × 0.11		
19-19	48-18	83F 945	G48+SE77	フク土 耳 か き	9.89 × 0.38 × 0.21		
19-8	48-19	83F 766	G59+SX130	フク土 輪状銅製品	3.80 × 2.74 × 径 0.46		
19-18	48-20	83F 536	F56+ST212	フク土 不明銅製品	7.85 × 1.72 × 0.11		
-	48-21	83F 760	H57+SE73	フク土 置	8.06 × 1.14 × 0.33	重さ約 12g	
19-16	48-22	83F 594	E47+ST216	フク土 鉄 鏡 玉	1.21 × 1.12		
-	48-23	83F 573	F58+ST214	フク土 不明銅製品	1.50 × 0.65 × 径 0.20		
19-22	48-24	83F 885	E47+SE75	フク土 小 柄	(10.75) × 1.44 × 0.38		
-	48-25	83F 596	F47+ST217	フク土 小 柄	(9.54) × 1.41 × 0.55		
-	48-26	83F 440	E47	II 小 柄	(8.47) × 1.26 × 0.54		

-	48-27	83F 886	G46	I	牛 タ ル	5.57×径 1.14		吸口
-	48-28	83F 888	G46	I	牛 セ ル	8.64×径 0.94	重さ 16 g	吸口
-	49-29	83F1050	G42	埋	牛 セ ル	491×(空)1.69×(内)1.10×(外)1.05		雁首
19-4	20-2	83F 684	G58・ST208	フク 土	井	(7.90)×1.33×0.22		

Ch. 69 → (Fig. 49 別添) 右 製 品 雜聚表

PL-Nr.	Fig-Nr.	遺物-Nr.	出土区	種類	部 位	名 称	計測値 (長×幅×厚) cm	特 徴	備 考
-	49-1	83S 125	H57・SE 73	フク 土	粉 抹 き	白	(30.80)×(30.80)×12.40		
-	49-2	83S 204	G46・ST240	フク 土	//		28.55×28.80×10.38	逐目の曰	
-	49-3	82S 120	J48・SX 96	フク 土	//		27.60×27.20×10.40		
-	82S 125	J48・SX 96	フク 土	//					
-	49-4	80S 93	G53SB03Pit	床 面					
-	83S 3	E 96	II 下						
-	83S 5	F 58	II 下	茶	白(L 白)		(17.10)×(17.10)×(7.80)		
-	83S 8	F 57	III 下						
-	83S 117	F 58・ST201	フク 土						
-	83S 123	G58・ST210	フク 土						
-	80S 31	F 55	II	茶	白(下白)		(31.40)×(31.40)×8.50		
-	83S 87	F 57・ST201	フク 土						
-	49-5	83S 112	G58・ST210	フク 土	観		9.00×5.46×2.14	裏に「人狀入」の文字あり	
-	83S 128	G58・ST210	フク 土						
-	49-6	83S 127	G59・ST210	床面直上	砾	石	12.22×3.66×1.70		
-	49-7	83S 100	E47・ST216	フク 土	砾	石	(11.62)×5.16×4.62		
-	49-8	83S 230	FG40・41 SF10 上	灰陶より 取	紙	石	6.04×2.37×(1.52)		
-	49-9	83S 96	H58・SE 73	フク 土	現状石製品		(5.29)×1.81×2.23		
-	49-10	83S 186	F 47・ST217	フク 土	自然 石		3.91×3.52×2.04		
-	49-11	83S 78	F 56・ST212	フク 土	自然 石		3.43×2.64×1.99		
-	49-12	83S 76	G56・ST207	フク 土	井		11.24×3.70×1.80		

Ch. 72 續貨計測集計表

No	C-Nr.	名 称	出 土 区	通 構	外 棟	外 棟	外 棟	内 棟	内 棟	内 棟	内 棟	重 量	考
					外壁厚	内壁厚	内壁厚	外壁厚	内壁厚	内壁厚	内壁厚	(g)	
1	C 1	昭聖元宝	E 56 I	、	2.24	—	0.13	1.74	0.765	0.05			
2	C 2	○○○宝	E 56 II下		—	—	0.12	—	—	—	0.03		
3	C 3	洪武通宝	D 56 I		2.325	0.78	0.15	1.74	0.60	0.05			背に「一錢」の字有
4	C 4	無文 銭	H56 I		2.14	—	0.09	—	0.74	—			
5	C 5	ク	〃		2.29	—	0.1	—	0.65	—			
6	C 6	〃	H57 I		1.755	—	0.06	—	1.12	—			
7	C 7	ク	G58 I	1	1.64	—	0.06	—	1.08	—			
8	C 8	〃	〃		1.66	—	0.04	—	0.96	—			
9	C 9	皇宋通宝	E 56 I		2.32	—	0.12	2.0	0.78	0.05			
10	C 10	〃	〃		2.25	—	0.08	—	0.57	—			
11	C 11	祥符元宝	F 56 I		2.46	0.76	0.15	1.87	0.6	0.05			
12	C 12	裕通寶	ク		2.37	0.86	0.11	1.98	0.66	0.03			
13	C 13	判錢不能	E 56 I		—	—	0.13	—	—	—	0.05		
14	C 14	洪武通宝	E 57 II下		2.12	0.62	0.16	1.66	0.5	0.03			
15	C 15	五 截	E 56 II		2.06	—	0.2	—	0.4	—			大正九年
16	C 16	皇宋通宝	F 57 I上		2.24	0.77	0.14	1.8	0.64	0.03			
17	C 17	永樂通宝	F 57 II下		2.46	0.66	0.13	2.13	0.56	0.03			
18	C 18	判錢不能	E 56 II下		—	—	—	—	—	—			計測不可能、2次飛或
19	C 19	太平通宝	ク		2.36	0.72	0.12	1.8	0.6	0.03			
20	C 20	水○○宝	ク		—	—	0.12	—	—	—	0.03		
21	C 21	○○○宝	ク		2.2	—	0.13	—	0.76	—			
22	C 22	天清通宝	ク		2.48	0.78	0.1	2.015	0.62	0.06			
23	C 23	一 截	F 56 II		2.82	—	0.16	—	—	—			明治 13 年

24	C 24	無文 銀	G57 Ⅱ上	1.83	—	0.06	—	0.84	—	
25	C 25	治平元宝	G59 Ⅱ上	2.38	0.75	0.14	L 77	0.66	0.05	
26	C 26	皇宋通宝	F56 Ⅱ下	2.44	—	0.11	L 94	—	0.03	
27	C 27	"	"	2.43	0.88	0.08	L 955	0.68	0.05	
28	C 28	無文 銀	"	2.17	—	0.08	—	0.67	—	
29	C 29	皇宋通宝	"	2.49	0.855	0.11	2.09	0.72	0.04	
30	C 30	開元通寶	"	2.37	0.76	0.1	1.89	0.62	0.03	
31	C 31	○武○寶	G57 Ⅱ上	—	—	0.14	—	—	—	
32	C 32	判錢不能	"	2.26	—	0.1	—	0.58	—	
33	C 33	熙寧元宝	"	2.36	0.78	0.12	1.94	0.68	0.06	
34	C 34	皇宋通宝	F56 Ⅱ上	2.42	0.75	0.1	1.95	0.66	0.02	
35	C 35	判錢不能	G56 Ⅱ	2.18	—	0.08	L 58	0.67	0.03	
36	C 36	永樂通寶	F56 Ⅱ上	2.67	0.81	0.2	2.15	0.62	0.02	件出
37	C 37	淳熙元宝	"	2.56	0.8	0.19	2.2	0.67	0.07	
38	C 38	無文 銀	G56 Ⅱ	—	—	0.055	—	—	—	
39	C 39	洪武通寶	"	2.28	0.68	0.14	L 87	0.56	0.03	
40	C 40	無文 銀	H57 Ⅱ	—	—	0.06	—	—	—	
41	C 41	洪武通寶	"	2.1	0.72	0.21	L 56	0.555	0.05	
42	C 42	元豐通寶	G58 Ⅱ下	2.42	0.84	0.12	1.86	0.63	0.06	
43	C 43	判錢不能	"	—	—	0.08	—	—	—	
44	C 44	景德元宝	H58 Ⅱ下	2.455	0.66	0.1	L 78	0.59	0.03	
45	C 45	嘉祐通寶	G58 Ⅱ下	2.44	0.98	0.13	1.97	0.70	0.05	
46	C 46	洪武通寶	H59 Ⅱ下	2.36	0.64	0.15	2.08	0.78	0.06	
47	C 47	聖宋〇〇	"	—	—	0.13	—	—	0.03	
48	C 48	永樂通寶	"	2.53	0.58	0.18	2.06	0.8	0.05	
49	C 49	半 銀	"	2.23	—	0.13	—	—	—	
50	C 50	熙寧元宝	G58 Ⅱ下	2.47	0.98	0.11	2.55	0.70	0.05	
51	C 51	周通元宝	"	2.44	0.78	0.14	1.95	0.64	0.02	
52	C 52	紹聖元宝	"	2.40	0.78	0.11	L 84	0.60	0.02	
53	C 53	洪武通寶	H58 Ⅱ下	2.36	0.73	0.17	2.00	0.54	0.02	
54	C 54	"	"	2.345	0.64	0.16	1.67	0.48	0.03	
55	C 55	"	"	2.31	0.74	0.125	L 77	0.61	0.02	
56	C 56	無文 銀	G58 Ⅱ上	L 729	—	0.06	—	0.74	—	
57	C 57	元祐通寶	G59 Ⅱ上	2.36	0.70	0.14	1.86	0.63	0.05	
58	C 58	無文 銀	H56 Ⅱ下	—	—	0.1	—	—	—	
59	C 59	"	"	—	—	0.1	—	—	—	計測不可能
60	C 60	判錢不能	"	—	—	—	—	—	—	計測不可能
61	C 61	無文 銀	"	—	—	—	—	—	—	
62	C 62	元豐通寶	H59 Ⅱ下	2.355	0.81	0.12	L 74	0.62	0.03	
63	C 63	大聖光元宝	"	2.42	0.78	0.1	1.96	0.62	0.03	
64	C 64	判錢不能	"	—	—	0.1	—	—	—	
65	C 65	大聖光元宝	"	2.48	0.80	0.11	2.00	0.7	0.05	
66	C 66	皇宋通宝	"	2.44	0.88	0.1	1.97	0.72	0.06	
67	C 67	判錢不能	H58 Ⅱ下	2.40	—	0.1	—	0.68	—	2次焼成
68	C 68	元祐通寶	H59 Ⅱ下	2.24	0.6	0.14	1.82	0.56	0.05	
69	C 69	無文 銀	H58 Ⅱ下	1.88	—	0.05	—	0.7	—	
70	C 70	熙寧元宝	"	2.36	0.76	0.15	L 90	0.61	0.03	
71	C 71	判錢不能	"	2.25	—	0.08	—	0.62	—	
72	C 72	無文 銀	H56 Ⅱ上	1.71	—	0.06	—	1.09	—	
73	C 73	判錢不能	G56 Ⅱ上	—	—	0.11	—	—	—	
74	C 74	元祐通寶	G57 Pit 内フク土	2.46	0.82	0.13	L 90	0.66	0.05	
75	C 75	永樂通寶	E56 Pit 内フク土	2.5	0.665	0.17	2.03	0.55	0.06	
76	C 76	"	F57 Ⅱ上	2.395	0.69	0.16	2.05	0.56	0.05	
77	C 77	洪武通寶	E56 ST 200 フク土	2.36	0.67	0.12	2.00	0.58	0.03	
78	C 78	無文 銀	F57 ST 201 フク土	1.9	—	0.08	—	0.78	—	
79	C 79	判錢不能	"	2.24	—	0.1	—	0.6	—	

80	C 80	共○通宝	G56 ST207 フク土	—	—	0.14	—	—	—	
81	C 81	無文 銀	〃	2.2	—	0.08	—	0.66	—	
82	C 82	開元通宝	F56 ST202 フク土	2.62	0.73	0.12	2.1	0.65	0.05	
83	C 83	無文 銀	G56 SE71 フク土上	1.54	—	0.06	—	1.02	—	
84	C 84	〃	〃	1.64	—	0.06	—	1.0	—	
85	C 85	判読不能	〃	2.0	—	0.08	—	0.64	—	
86	C 86	元祐通宝	E56 ST200 フク土	2.43	0.8	0.13	1.96	0.77	0.05	
87	C 87	判読不能	F57 ST202 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
88	C 88	熙寧元宝	E56 亂上	2.36	0.78	0.11	1.86	0.67	0.04	
89	C 89	政和通宝	F56 ST203 フク土	2.5	0.8	0.12	2.11	0.6	0.08	
90	C 90	永泰通宝	F57 ST201 フク土	2.46	0.7	0.13	2.03	0.52	0.02	
91	C 91	無文 銀	H57 ST204 フク土	2.195	—	0.1	—	0.62	—	
92	C 92	祥符通宝	F57 ST204 フク土	2.38	0.77	0.1	1.92	0.62	0.02	
93	C 93	熙寧元宝	H57 ST204 フク土	2.42	0.8	0.16	1.8	0.66	0.07	
94	C 94	判読不能	H58 ST204 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
95	C 95	水滸通宝	F56 ST203 フク土	2.5	0.63	0.13	2.05	0.57	0.03	
96	C 96	崇祐通宝	D56 SE70 フク土	2.45	0.86	0.1	2.02	0.66	0.05	
97	C 97	永泰通宝	〃	2.47	0.7	0.14	2.1	0.55	0.05	
98	C 98	判読不能	E56 SE70 フク土	2.23	—	0.055	1.93	0.64	0.05	
99	C 99	洪武通宝	G58 亂上	2.095	0.61	0.135	1.70	0.51	0.02	
100	C 100	景祐元宝	〃	2.55	0.88	0.11	1.94	0.66	0.02	
101	C 101	判読不能	F57 亂上	—	—	0.18	—	—	—	
102	C 102	〃	—	—	0.15	—	—	—	—	
103	C 103	無文 銀	H57 ST204 フク土	1.82	—	0.07	—	0.8	—	
104	C 104	淳化元宝	F56 ST203 フク土	2.42	0.7	0.11	1.82	0.57	0.05	
105	C 105	宋通宝	〃	—	—	0.15	—	—	—	2次焼成
106	C 106	皇宋通宝	〃	2.41	0.62	0.12	1.94	0.65	0.03	
107	C 107	元〇〇宝	G56 SE71 フク土	2.22	0.81	0.1	1.91	0.66	0.06	
108	C 108	景德元宝	D56 SE70 フク土	2.46	0.7	0.12	1.8	0.62	0.05	
109	C 109	祥符通宝	E56 SE70 フク土	2.39	0.7	0.15	1.75	0.6	0.06	
110	C 110	開元通宝	〃	2.36	0.8	0.09	2.08	0.68	0.05	
111	C 111	判読不能	F57 ST201 フク土	—	—	0.11	—	—	—	
112	C 112	〇宋〇〇	〃	—	—	0.13	—	—	0.03	
113	C 113	判読不能	D56 SE70 亂上	—	—	0.13	—	—	0.05	
114	C 114	〃	G56SE71セシヨン内フク土	—	—	0.1	—	—	—	
115	C 115	〃	〃	—	—	0.1	—	—	—	
116	C 117	水滸通宝	G56 ST207 床面直上	2.51	0.7	0.17	2.03	0.47	0.06	わら付
117	C 118	無文 銀	G56 SE71 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
118	C 119	元豐通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.84	0.1	1.93	0.7	0.03	
119	C 120	無文 銀	D56 SK01 フク土	2.3	—	0.08	—	0.66	—	
120	C 121	洪武通宝	F56 ST202 フク土	2.36	0.73	0.16	1.845	0.6	0.03	
121	C 122	天慶元宝	F57 ST201 フク土	2.37	0.76	0.12	1.96	0.64	0.02	
122	C 123	無文 銀	H58 ST205 フク土	2.2	—	0.1	—	0.7	—	
123	C 124	永泰通宝	〃	2.54	0.62	0.12	2.09	0.55	0.02	
124	C 125	無文 銀	F56 ST203 フク土	—	—	0.08	—	0.74	—	
125	C 126	天祐通宝	F57 ST201 フク土	2.35	0.82	0.16	1.88	0.63	0.05	
126	C 127	洪武通宝	G56SE71セシヨン内フク土	2.13	0.63	0.1	1.68	0.5	0.05	
127	C 128	〇〇〇宝	E56 SE70 フク土	2.36	0.8	0.12	1.87	0.66	0.05	
128	C 129	〇祐〇〇	F56 ST203 フク土	—	—	0.12	—	—	0.03	
129	C 130	判読不能	F57 ST203 フク土	2.26	—	0.08	—	0.7	—	
130	C 131	洪〇〇〇	E56 ST203 フク土	—	—	0.155	—	—	0.02	
131	C 132	元豐通宝	F56 ST203 フク土	2.3	0.85	0.11	1.89	0.62	0.05	
132	C 133	至道元宝	F56 ST202 フク土	2.5	0.71	0.14	1.795	0.58	0.05	
133	C 134	元〇〇宝	〃	—	—	0.13	—	—	—	
134	C 135	判読不能	E56 ST200 フク土	2.43	—	0.1	1.78	0.6	0.05	
135	C 136	朝鮮通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.7	0.195	1.93	0.56	0.08	

136	C 137	開元通宝	F57 ST201 フク土	2.49	0.75	0.1	2.075	0.66	0.03		
137	C 138	判読不能	"	—	—	—	—	—	—	計測不可能、2次焼成	
138	C 139	"	"	2.23	—	—	—	—	—	2次焼成	
139	C 140	大平通宝	E56 SE70 フク土	2.43	0.73	0.12	1.88	0.6	0.05		
140	C 141	嘉祐通宝	"	2.36	0.86	0.12	1.97	0.74	0.06		
141	C 142	元豐通宝	F56 ST202 フク土	2.42	0.86	0.1	1.79	0.64	0.05		
142	C 143	判読不能	F58 ST206 フク土	2.32	—	0.1	—	0.6	—		
143	C 144	"	"	2.28	—	0.1	—	—	0.05		
144	C 145	聖宋元宝	F57 ST206 フク土	2.40	0.75	0.16	1.84	0.58	0.05		
145	C 146	無文 銀	E56 ST202 フク土	1.755	—	0.08	—	0.82	—		
146	C 147	"	E47 I	2.06	—	0.08	—	0.72	—		
147	C 148	判読不能	F47 I	—	—	0.16	—	—	0.05		
148	C 149	○武通宝	"	2.10	0.7	0.11	1.84	0.59	0.03		
149	C 150	治平元宝	G47 I	2.4	0.66	0.14	1.78	0.56	0.05		
150	C 151	洪武通宝	F47 II	2.26	0.71	0.18	1.78	0.59	0.03	背面に「一錢」の字有	
151	C 152	"	"	2.30	0.69	0.16	1.88	0.56	0.03		
152	C 153	"	"	2.40	0.68	0.14	1.82	0.59	0.05	桙出	
153	C 154	判読不能	"	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
154	C 155	無文 銀	"	1.89	—	0.06	—	0.72	—		
155	C 156	"	"	1.91	—	0.07	—	0.75	—		
156	C 157	○○通宝	"	—	—	0.15	—	—	0.05		
157	C 158	寛永通宝	"	2.5	0.695	0.1	1.94	0.59	0.05	背面に「文」の字有	
158	C 159	元祐通宝	"	2.37	0.77	0.16	1.83	0.6	0.05		
159	C 160	無文 銀	"	1.82	—	—	—	0.81	0.06		
160	C 161	天聖元宝	"	2.49	0.84	0.11	2.00	0.68	0.06		
161	C 162	嘉祐通宝	"	2.39	0.91	0.1	1.9	0.73	—		
162	C 163	元祐通宝	F47 II	2.48	0.74	0.13	1.67	0.62	0.03		
163	C 164	開元通宝	"	2.42	0.795	0.095	2.04	0.68	0.04		
164	C 165	無文 銀	"	—	—	0.085	—	—	—		
165	C 166	"	G47 II	—	—	0.06	—	—	—		
166	C 167	洪武通宝	F56 ST202 フク土	2.39	0.71	0.17	2.06	0.55	0.03		
167	C 168	○○○通宝	"	—	—	0.14	—	—	0.03		
168	C 169	勅寧元宝	E56 ST200 フク土	2.46	0.8	0.11	1.9	0.62	0.05		
169	C 170	聖宋元宝	D56 SE70 フク土	2.36	0.8	0.14	1.8	0.66	0.06		
170	C 171	祥符通宝	"	2.3	0.76	0.13	1.9	0.63	0.05		
171	C 172	○○○通宝	F56 ST202 フク土	—	—	0.095	—	—	0.05		
172	C 173	元祐通宝	F57 ST206 フク土	2.43	0.83	0.14	1.86	0.69	0.03		
173	C 174	開元通宝	F56 ST203 Pt4Pフク土	2.43	0.7	0.12	1.81	0.69	0.03		
174	C 175	判読不能	E56 ST150 フク土	2.24	—	0.1	1.73	0.65	0.05		
175	C 176	洪武通宝	D56 SE70 フク土	2.26	0.7	0.12	1.81	0.62	0.03		
176	C 177	無文 銀	H58 SE73 フク土	—	—	0.06	—	0.7	—		
177	C 178	"	H57 SE73 フク土	1.84	—	0.06	—	0.67	—		
178	C 179	洪武通宝	"	2.2	0.7	0.08	1.93	0.65	0.01		
179	C 180	元祐通宝	D56 SE70 フク土	2.4	0.7	0.11	1.77	0.62	0.03		
180	C 181	皇宋通宝	E56 SE70 フク土	2.46	0.8	0.11	2.00	0.7	0.03		
181	C 182	判読不能	F57 ST201 フク土	2.37	—	0.09	—	0.645	0.02		
182	C 183	無文 銀	H56 SE73 フク土	—	—	0.04	—	—	—		
183	C 184	洪武通宝	E56 SE70 フク土	2.31	0.7	0.14	1.94	0.56	0.05		
184	C 185	元祐通宝	F57 ST221 フク土	2.36	0.78	0.1	1.87	0.66	0.02		
185	C 186	皇宋通宝	"	2.4	0.82	0.14	1.96	0.64	0.05		
186	C 187	○○通宝	"	—	—	0.12	—	—	0.03		
187	C 188	永樂通宝	E56 ST222 体曲	2.43	—	0.15	—	0.62	0.06		
188	C 189	開元通宝	H58 SE73 フク土	2.34	0.77	0.11	1.94	0.65	0.06		
189	C 190	判読不能	"	—	—	0.1	—	—	—		
190	C 191	"	"	—	—	0.06	—	—	—		
191	C 192	元祐通宝	E46 ■上	2.4	0.84	0.12	1.1	0.66	0.06		

192	C 193	判読不能	F48 ST214 フク土	2.4	—	0.1	—	0.64	—	
193	C 194	元祐通宝	〃	2.44	0.85	0.14	2.0	0.7	0.05	
194	C 195	○○○宝	F47 ST215 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
195	C 196	判読不能	〃	—	—	—	—	—	—	計測不可能
196	C 197	〃	F47 ST215 床面	—	—	0.13	—	—	—	2次焼成
197	C 198	〃	E47 ST216 フク土	2.18	—	0.1	—	0.67	—	
198	C 199	〃	〃	2.095	—	0.1	—	0.755	—	
199	C 200	政和通宝	〃	2.62	0.85	0.12	2.15	0.6	0.05	
C201~ C359										
G 56 S T 207 床面より接着して出土のため計測不能										
200	C 360	無文 銀	F47 ST217 フク土	—	—	0.06	—	—	—	
201	C 361	判読不能	F47 ST218 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
202	C 362	無文 銀	〃	—	—	0.06	—	—	—	
203	C 363	判読不能	〃	2.37	—	0.16	—	0.57	—	
204	C 364	至道元宝	F46 ST228 フク土	2.52	0.73	0.16	1.78	0.63	0.05	
205	C 365	無文 銀	〃	1.68	—	0.06	—	0.81	—	
206	C 366	開元通宝	〃	2.4	0.79	0.1	2.0	0.68	0.03	
207	C 367	元祐通宝	F46 S T228 床面直上	2.3	0.79	0.09	L.79	0.65	0.03	
208	C 370	洪武通宝	E56 SE70 フク土	2.38	0.755	0.18	1.96	0.56	0.03	
209	C 371	招慶元宝	〃	2.35	—	0.095	L.93	0.7	0.03	
210	C 372	平蔵不能	F57 ST201 フク土	2.56	—	0.16	—	—	—	
211	C 373	元祐通宝	F57 ■上	2.37	0.74	0.13	1.82	0.63	0.03	
212	C 374	判読不能	F58 ST208 フク土	2.3	—	0.1	—	0.655	—	
213	C 375	開元通宝	〃	2.28	—	0.1	—	0.62	—	
214	C 376	無文 銀	G58 SE72	1.64	—	0.08	—	1.08	—	
215	C 377	永樂通宝	E57 ST221 床面直上	2.54	0.68	0.15	2.07	0.55	0.05	
216	C 378	○○○宝	D56S T202セシ _ム 内 _ム フク土	—	—	0.13	—	—	0.05	
217	C 379	無文 銀	F58 ST208 フク土	—	—	0.09	—	—	—	
218	C 380	乾元重宝	〃	2.36	—	0.1	L.94	0.7	0.05	
219	C 381	平蔵不能	G58 ST210 フク土	2.46	—	0.1	—	0.64	—	2次焼成
220	C 382	御膳通宝	〃	2.32	0.69	0.15	L.93	0.54	0.05	
221	C 383	〃	〃	2.43	0.7	0.15	1.96	0.58	0.05	
222	C 384	祥符元宝	〃	2.46	0.7	0.1	L.77	0.6	0.05	
223	C 385	元豐通宝	〃	2.3	0.8	0.1	L.77	0.6	0.05	
224	C 386	皇宋通宝	G59 ST210 フク土	2.3	0.86	0.1	L.89	0.7	0.05	
225	C 387	無文 銀	G58 ST210 フク土	—	—	—	—	—	—	
226	C 388	皇○通○	F56 S T202 床面直上	—	—	0.1	—	—	0.03	
227	C 389	平蔵不能	G57 SE72 フク土	—	—	0.1	—	—	0.05	
228	C 390	〃	G58 ST208 フク土	2.3	—	0.115	L.79	0.63	0.06	
229	C 391	至道元宝	F58 ST208 フク土	2.46	0.74	0.1	L.96	0.6	—	
230	C 392	至和元宝	G58 ST210 フク土	2.22	0.82	0.09	L.73	0.68	0.05	
231	C 393	無文 銀	〃	—	—	0.04	—	0.7	—	
232	C 394	聖宋元宝	D56S T207セシ _ム 内 _ム フク土	2.43	0.72	0.11	L.85	0.595	0.03	
233	C 395	判読不能	D56ST202セシ _ム 内 _ム フク土	—	—	0.1	—	—	—	
234	C 396	淳化元宝	D58 SE70 フク土	2.4	0.76	0.1	L.83	0.62	0.03	
235	C 397	洪武通宝	〃	2.13	0.62	0.15	1.67	0.49	0.02	
236	C 398	元○通○	G58 ST210 フク土	2.26	0.79	0.06	L.8	0.66	0.06	
237	C 399	平蔵不能	G58 SE72 フク土	—	—	—	—	—	—	2次焼成、計測不可能
238	C 400	開元通宝	D56ST213セシ _ム 内 _ム フク土	2.26	—	0.1	L.71	0.6	0.05	
239	C 401	洪武通宝	G58 ST210 フク土	—	—	0.1	—	—	—	2次焼成
240	C 402	判読不能	G58 ST208 フク土	2.295	—	0.13	—	0.62	—	
241	C 403	洪武通宝	G57 SE72 フク土	2.32	0.72	0.13	L.65	0.53	0.03	
242	C 404	○○豊通宝	D56SE70セシ _ム 内 _ム フク土	—	—	0.13	—	—	0.05	
243	C 405	祥符通宝	G59 ST210 フク土	2.4	0.73	0.11	L.87	0.63	0.03	
244	C 406	至大通宝	G58 ST210 フク土	2.36	0.67	0.14	L.89	0.53	0.05	
245	C 407	無文 銀	G57SE72セシ _ム 内 _ム フク土	1.65	—	0.08	—	0.85	—	

245	C 408	元祐通宝	G58 ST210 床面直上	2.32	0.79	0.12	1.84	0.65	0.05	
247	C 409	永樂通宝	G58 ST210 フク土	2.43	0.68	0.1	1.98	0.54	0.05	
248	C 410	開元通宝	"	2.4	0.84	0.11	1.96	0.6	0.03	
249	C 411	熙寧元宝	E56 SX154 フク土	2.31	0.76	0.1	1.94	0.63	0.05	
250	C 412	○寧元寶	"	—	—	—	0.6	—	—	2次焼成
251	C 413	至○通宝	E56 ST220 フク土	—	—	0.17	—	—	0.03	
252	C 414	元○通宝	G58 ST210 フク土	2.4	0.84	0.1	1.86	0.6	0.05	
253	C 415	永樂通宝	G59 ST210 床面	2.45	0.7	0.14	1.96	0.54	0.06	
254	C 416	"	"	2.43	0.7	0.13	1.98	0.56	0.05	
255	C 417	"	"	2.42	0.64	0.1	1.93	0.53	0.05	
256	C 418	判訛不應	G58 ST210 床面直上	—	—	0.2	—	—	—	2次焼成
257	C 419	永樂通宝	"	2.43	0.695	0.14	1.99	0.53	0.05	
258	C 420	元○通宝	"	2.4	0.9	0.1	1.98	0.6	0.05	
259	C 421	永樂通宝	"	2.45	0.75	0.13	2.0	0.65	0.03	
260	C 422	"	"	2.44	0.78	0.1	1.96	0.58	0.03	
261	C 423	聖宋元宝	"	—	0.8	0.1	1.85	0.62	0.05	
262	C 424	朝鮮通寶	"	—	0.7	0.14	1.95	0.56	0.03	
263	C 425	至道元宝	G58 ST210 フク土	2.4	0.7	0.1	1.8	0.6	0.05	
264	C 426	○通寶	"	2.4	0.7	0.1	—	0.64	0.05	
265	C 427	永樂通寶	"	2.44	0.72	0.12	1.98	0.6	0.05	
266	C 428	"	"	2.4	0.74	0.1	2.0	0.58	0.05	
267	C 429	皇宋通寶	"	2.4	0.995	0.1	2.02	0.73	0.05	
268	C 430	永樂通寶	E56 SX154 フク土	2.51	0.7	0.16	2.08	0.68	0.05	
269	C 431	"	G58 ST210 フク土	2.42	0.66	0.095	2.02	0.55	0.05	
270	C 432	"	"	2.46	0.68	0.1	2.0	0.53	0.05	
271	C 433	天聖元宝	"	2.4	0.8	0.1	1.98	0.67	0.05	
272	C 434	大中通寶	"	2.28	0.78	0.08	1.76	0.6	0.05	
273	C 435	永樂通寶	"	2.43	0.68	0.1	1.96	0.54	0.05	
274	C 436	祥符通寶	G58 ST210:床面	2.48	0.74	0.1	1.98	0.66	—	
275	C 437	銅銘通寶	G58 ST210 フク土	2.36	0.695	0.12	1.94	0.5	0.05	
276	C 438	開元通寶	G58 ST210 床面直上	2.35	0.8	0.13	1.94	0.66	0.05	
277	C 439	永樂通寶	G58 ST210 フク土	2.46	—	0.1	—	0.57	—	
278	C 440	聖道元宝	"	2.43	0.7	0.12	1.74	0.54	0.05	
279	C 441	景德元宝	G58 SX157 フク土	2.44	0.69	0.1	2.0	0.59	0.05	
280	C 442	永樂通寶	G58 ST210 床面	—	0.7	0.1	2.0	0.59	0.03	
281	C 443	○平元寶	G59 SX157 フク土	2.36	0.75	0.1	1.7	0.55	0.02	
282	C 444	永樂通寶	G58 ST210 床面	2.44	0.7	0.1	1.99	0.56	0.05	
283	C 445	"	G58 ST210 床面直上	2.43	0.7	0.1	1.98	0.58	0.05	
284	C 446	淳熙元宝	G59 SX158 床面直上	2.32	0.74	0.12	1.76	0.58	0.03	
285	C 447	銅鑄通寶	G59 SX158 フク土	2.4	0.66	0.14	1.99	0.55	0.03	
286	C 448	"	"	2.36	0.68	0.16	2.0	0.55	0.05	
287	C 449	"	"	2.38	0.7	0.14	1.98	0.57	0.03	
288	C 450	"	"	2.385	0.72	0.17	1.98	0.56	0.05	
289	C 451	大中通寶	"	2.4	0.8	0.12	1.87	0.63	0.03	時一ポイントより上
290	C 452	開元通寶	"	2.3	0.82	0.12	1.77	0.66	0.05	
291	C 453	乾祐通寶	"	2.35	0.8	0.12	1.86	0.65	0.03	
292	C 454	"	"	2.36	0.83	0.14	1.99	0.6	0.03	
293	C 455	永樂通寶	"	2.4	0.7	0.13	2.0	0.57	0.02	
294	C 456	聖道元寶	"	2.41	0.7	0.14	1.66	0.59	0.05	
295	C 457	淳化元宝	G57 SE72 フク土	—	—	0.12	—	—	0.03	
296	C 458	元豐通寶	"	2.4	0.76	0.13	1.9	0.7	0.05	
297	C 459	治平元宝	F58 ST206 床面	2.5	0.75	0.16	1.96	0.65	0.07	
298	C 460	無文錢	F57 ST201 フク土	2.16	—	0.08	—	0.695	—	
299	C 461	○○通寶	E59 SX156セシヨン付フク土	2.31	0.76	0.08	1.88	0.62	0.03	
300	C 462	熙寧元宝	E56 SX154 フク土	2.45	0.7	0.12	1.94	0.54	0.05	フラボ着
301	C 463	洪武通寶	"	2.24	0.66	0.16	1.63	0.5	0.03	前K「一錢」の文字有

302	C 463 B	聖朱元宝	E56 SX154 フク土	2.5	0.76	0.11	1.9	0.76	0.05	
303	C 464	判読不能	F58 ST20セグメント内フク土	2.4	0.84	0.14	1.8	0.67	0.02	
304	C 465	摩訥元宝	"	2.36	0.7	0.1	1.83	0.62	0.05	
305	C 466	判読不能	G57 SX164 フク土	-	-	0.06	-	-	-	
306	C 467	洪武通寶	"	2.22	0.68	0.1	1.83	0.56	0.02	
307	C 468	判読不能	G59 I上	-	-	0.14	-	-	-	
308	C 469	洪武通寶	H59 SE76 フク土	2.32	0.7	0.14	1.9	0.59	0.03	
309	C 470	天元元宝	G57 Pit 内フク土	2.38	0.78	0.14	1.93	0.62	0.03	
310	C 471	無文錢	G57 Pit 内床面	1.82	-	0.06	-	0.74	-	
311	C 472	"	"	-	-	0.07	-	-	-	
312	C 473	"	"	-	-	0.01	-	-	-	2次焼成
313	C 474	"	"	-	-	0.01	-	-	-	
314	C 475	"	"	-	-	0.08	-	-	-	
315	C 476	政和通宝	"	2.34	-	0.1	2.09	0.65	-	
316	C 477	判読不能	G57 SX164 フク土	-	-	0.15	-	-	0.03	
317	C 478	大定通宝	G57 Pit 内フク土	2.43	0.69	0.13	2.1	0.59	0.05	
318	C 479	判読不能	G58 Pit 内フク土	-	-	-	-	-	-	計測不可能
319	C 480	○元元宝	"	2.4	0.78	0.15	1.89	0.6	0.03	
320	C 481	皇宋通宝	G57 Pit 内フク土	2.44	0.83	0.13	2.04	0.69	0.06	
321	C 482	判読不能	G56 Pit 内フク土	2.2	-	0.1	-	0.64	-	
322	C 483	△○○	G57 Pit 内フク土	-	-	0.15	-	-	0.02	
323	C 484	開元通宝	G56 Pit 内フク土	2.48	0.83	0.17	2.14	0.69	0.05	
324	C 485	無文錢	G57 SX166 フク土	-	-	0.05	-	-	-	
325	C 486	洪武通寶	H57 SB56	2.14	0.6	0.16	1.67	0.48	0.05	
326	C 487	"	G57 SX167 フク土	1.86	0.76	0.1	-	0.64	0.03	背面文字有
327	C 488	皇宋通宝	G58 Pit 内 フク土	2.42	-	0.12	2.0	-	0.04	
328	C 489	"	G57 SX167 フク土	2.5	0.82	0.1	1.8	0.7	0.06	
329	C 490	開元通宝	G56 Pit 内 フク土	2.48	0.8	0.1	2.04	0.65	0.05	
330	C 491	皇宋通宝	G57 SX166 フク土	2.4	0.87	0.12	1.94	0.73	0.05	
331	C 492	○○○宝	"	-	-	0.13	-	-	0.03	
332	C 493	判読不能	G57 SX168 フク土	-	-	0.1	-	-	0.07	
333	C 494	無文錢	"	1.82	-	0.035	-	0.68	-	
334	C 495	"	"	1.78	-	0.06	-	0.77	-	
335	C 496	判読不能	G57 SX164 フク土	-	-	0.1	-	-	-	
336	C 497	元祐通宝	"	2.48	0.8	0.1	2.08	0.69	0.05	
337	C 498	判読不能	"	2.76	-	0.11	-	0.63	-	
338	C 499	○祐○宝	G57 SX167 フク土	-	-	-	-	-	0.03	
339	C 500	判読不能	G57 SX164 フク土	-	-	-	-	-	-	2次焼成、計測不能
340	C 501	元豐通宝	"	2.4	-	0.1	1.655	0.6	0.05	
341	C 502	無文錢	G57 内 フク土	2.04	-	0.1	-	0.68	-	
342	C 503	"	G57 SX164 フク土	2.29	-	0.1	-	0.62	-	
343	C 504	開元通宝	G57 SX166 フク土	2.45	-	0.11	2.15	-	0.03	
344	C 505	○○○宝	G57 SX169 床面直上	-	-	0.14	-	-	0.05	2次焼成
345	C 506	惠祐元寶	G57 ST210 フク土	2.4	0.72	0.12	1.86	0.58	0.05	
346	C 507	永樂通寶	G58 ST20セグメント内フク土	2.4	-	0.1	1.94	0.56	0.05	
347	C 508	元符通宝	G58 ST210 床面直上	2.3	0.74	0.1	1.8	0.6	0.06	
348	C 509	天慶元寶	G58 ST210 床面直上	2.3	0.76	0.09	1.89	0.66	0.05	
349	C 510	治平元寶	G58 ST20セグメント内フク土	2.3	0.74	0.1	1.82	0.55	0.05	
350	C 511	崇寧通寶	G58 ST210 床面直上	2.33	0.62	0.1	1.9	0.52	0.05	
351	C 512	洪武通寶	G58 ST20セグメント内フク土	2.2	0.7	0.1	1.98	0.56	0.05	
352	C 513	開元通宝	G 56 I	2.36	-	0.11	-	0.68	0.05	
353	C 514	朝鮮通寶	G58 ST20セグメント内フク土	2.32	0.7	0.1	1.92	0.56	0.01	
354	C 515	永樂通寶	G58 ST20セグメント内床面直上	2.43	0.74	0.145	1.93	0.55	0.05	
355	C 516	靖康元宝	"	2.395	0.73	0.1	1.9	0.62	0.05	
356	C 517	永樂通寶	"	-	0.66	0.1	2.04	0.585	0.05	
357	C 518	判読不能	G 45 I	2.16	-	0.09	-	0.67	-	

358	C 519	元豊通宝	G58 ST240 フク土.	2.355	0.84	0.11	1.82	0.7	0.03		
359	C 520	熙寧元宝	G45 I	2.25	0.76	0.11	1.86	0.69	0.03		
360	C 521	淳○○宝	F44 I	—	—	0.11	—	—	0.03		
361	C 522	永樂通宝	G44 II	2.45	0.7	0.1	2.0	0.58	0.03		
362	C 523	元符通宝	〃	2.38	0.7	0.1	1.75	0.63	0.03		
363	C 524	判読不能	〃	—	—	0.1	—	—	—		
364	C 525	洪武通宝	〃	2.26	0.66	0.1	1.8	0.56	0.03		
365	C 526	〃	〃	2.35	0.78	0.14	1.92	0.6	—		
366	C 527	皇宋通宝	〃	2.4	0.88	0.14	1.9	0.74	0.05		
367	C 528	無文 錢	〃	1.9	—	0.05	—	0.75	—		
368	C 529	判読不能	〃	2.3	0.68	0.12	1.88	0.56	0.02		
369	C 530	無文 錢	〃	1.91	—	0.06	—	0.66	—		
370	C 531	洪武通宝	〃	2.3	0.68	0.12	1.86	0.56	0.02		
371	C 532	〃	〃	2.26	0.68	0.12	1.58	0.54	0.03		
372	C 533	元豐通宝	〃	2.4	0.79	0.095	1.78	0.66	0.02		
373	C 534	判読不能	〃	2.2	—	0.1	—	0.65	—		
374	C 535	皇宋通宝	F43 I	2.45	0.8	0.14	1.88	0.68	0.05		
375	C 536	銅 錢	F42 I	2.7	—	—	—	0.74	—		
376	C 537	無文 錢	G56ST207Pin内フク土	1.9	—	0.11	—	0.7	—		
377	C 538	順寧元宝	G43 I	2.41	0.77	0.15	1.92	0.63	0.06		
378	C 539	無文 錢	G44 II上	2.16	—	0.11	—	0.8	—		
379	C 540	元豐通宝	E43 II	2.3	—	0.1	—	0.66	—		
380	C 541	大○○宝	〃	—	—	0.13	—	—	0.05		
381	C 542	判読不能	E47ST227セシウ内フク土	—	—	—	—	—	—	2次焼成。計測不可能	
382	C 543	無文 錢	〃	1.94	—	0.08	—	0.75	—		
383	C 544	淳化元宝	F42 II上	2.46	0.69	0.13	1.8	0.55	0.03		
384	C 545	淳祐通宝	〃	2.43	0.7	0.12	1.9	0.58	0.04		
385	C 546	判読不能	G48 SE77 フク上	—	—	0.12	—	—	—		
386	C 547	宣德通宝	〃	2.48	0.6	0.1	1.98	0.49	0.03		
387	C 548	判読不能	〃	2.38	—	0.12	—	0.655	—		
388	C 549	宣和通宝	F48 ST225 フク土	2.3	0.78	0.08	1.83	0.38	0.03		
389	C 550	綱定元宝	G48 SE77 フク土	2.44	0.68	0.12	1.9	0.56	0.05		
390	C 551	無文 錢	G43 II	—	—	0.06	—	—	—	C551～C606まで	
391	C 552	○○通宝	〃	2.08	0.7	0.1	1.7	0.59	0.01	回一ポイントより出土	
392	C 553	全道元宝	〃	2.31	0.69	0.16	1.695	0.35	0.03		
393	C 554	〃	〃	2.26	0.8	0.1	1.89	0.84	0.02		
394	C 555	洪武通宝	〃	2.24	0.66	0.11	1.78	0.54	0.05		
395	C 556	〃	〃	2.17	0.7	0.1	1.795	0.56	0.05		
396	C 557	無文 錢	〃	1.88	—	0.04	—	0.71	—		
397	C 558	判読不能	〃	2.27	—	0.08	—	0.62	—		
398	C 559	〃	〃	2.16	—	0.06	—	0.64	—		
399	C 560	無文 錢	〃	2.17	—	0.06	—	0.775	—		
400	C 561	元○○宝	〃	2.36	0.84	0.1	1.86	0.7	0.02		
401	C 562	大德通宝	〃	2.4	0.78	0.1	1.92	0.64	0.02		
402	C 563	判読不能	〃	2.22	0.82	0.1	1.76	0.62	0.03		
403	C 564	洪式通宝	〃	2.26	0.72	0.12	1.86	0.57	0.01		
404	C 565	○○○宝	〃	2.32	0.78	0.12	1.92	0.64	0.05		
405	C 566	元豊通宝	〃	2.4	0.8	0.1	1.895	0.64	0.02		
406	C 567	洪武通宝	〃	2.26	0.8	0.1	1.86	0.6	0.01		
407	C 568	無文 錢	〃	1.95	—	0.06	—	0.74	—		
408	C 569	〃	〃	2.2	—	0.07	—	0.63	—		
409	C 570	判読不能	〃	2.26	—	0.1	—	0.6	—		
410	C 571	皇宋通宝	〃	2.32	0.8	0.1	1.97	0.6	0.05		
411	C 572	無文 錢	〃	2.18	—	0.06	—	0.66	—		
412	C 573	判読不能	〃	2.29	0.8	0.12	1.8	0.7	0.05		
413	C 574	元祐通宝	〃	2.3	0.8	0.1	1.86	0.67	0.03		

414	C 575	天聖元宝	G43 I	2.3	0.87	0.1	1.85	0.62	0.06	
415	C 576	聖寧元宝	"	2.33	0.79	0.13	1.84	0.68	0.03	
416	C 577	無文 銀	"	1.94	—	0.06	—	0.73	—	
417	C 578	判銭不能	"	2.28	0.8	0.1	1.75	0.65	0.03	
418	C 579	"	"	2.28	—	0.1	—	0.67	—	
419	C 580	無文 銀	"	2.1	—	0.1	—	0.76	—	
420	C 581	洪武通寶	"	2.14	0.74	0.1	1.82	0.6	0.01	
421	C 582	祥符通寶	"	2.199	0.74	0.1	1.76	0.66	0.03	
422	C 583	洪武通寶	"	2.14	—	0.1	1.835	0.6	0.02	
423	C 584	無文 銀	"	1.9	—	0.06	—	0.68	—	
424	C 585	洪武通寶	"	2.2	0.795	0.1	1.88	0.66	0.02	
425	C 586	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—	
426	C 587	"	"	2.1	—	0.06	—	0.75	—	
427	C 588	洪武通寶	"	2.1	0.68	0.1	1.78	0.56	0.05	
428	C 589	祥符元寶	"	2.15	0.76	0.095	1.73	0.62	0.02	
429	C 590	洪武通寶	"	2.18	—	0.1	1.8	—	0.02	
430	C 591	"	"	2.29	0.74	0.1	1.86	0.58	0.03	
431	C 592	無文 銀	"	2.09	—	0.09	—	0.68	—	
432	C 593	判銭不能	"	2.145	—	0.1	—	0.78	—	
433	C 594	洪武通寶	"	2.225	0.78	0.12	1.885	0.58	0.03	
434	C 595	祥符通寶	"	2.36	0.75	0.1	1.82	0.67	0.04	
435	C 596	天聖光仁	"	2.3	—	0.13	2.05	—	0.05	
436	C 597	無文 銀	"	1.95	—	0.06	—	0.69	—	
437	C 598	皇宋通寶	"	2.34	0.78	0.1	1.72	0.66	0.05	
438	C 599	至和通寶	"	2.28	—	0.08	—	0.68	—	
439	C 600	判銭不能	"	2.19	—	0.08	—	0.7	—	
440	C 601	洪武通寶	"	2.195	0.7	0.1	1.81	0.56	0.03	
441	C 602	無文 銀	"	1.895	—	0.06	—	0.66	—	
442	C 603	洪武通寶	"	2.29	0.7	0.13	1.99	0.58	0.03	
443	C 604	祥符元寶	"	2.34	0.78	0.1	1.82	0.68	0.04	
444	C 605	皇宋通寶	"	2.28	0.8	0.1	1.72	0.69	0.05	
445	C 606	無文 銀	"	—	—	0.06	—	0.73	—	
446	C 607	五十 武	F44 I上	1.91	—	0.13	—	—	—	
447	C 608	無文 銀	G43 I上	1.84	—	0.04	—	0.76	—	
448	C 609	皇宋通寶	G48 SE77 フク土	2.43	0.81	0.08	1.75	0.64	0.03	
449	C 610	無文 銀	F47 ST218	1.2	—	0.1	—	0.79	—	
450	C 611	"	"	1.72	—	0.1	—	1.05	—	2次焼成
451	C 612	"	"	1.7	—	0.06	—	0.82	—	
452	C 613	"	"	1.795	—	0.1	—	1.13	—	
453	C 614	洪武通宝	E48 SE74 フク土	2.04	0.71	0.18	1.58	0.52	0.05	背面に「一錢」の文字有
454	C 615	無文 銀	F47 ST28セグメント内フク土上	1.77	—	0.05	—	0.955	—	
455	C 616	"	"	1.68	—	0.06	—	0.89	—	
456	C 617	"	"	1.6	—	0.1	—	1.1	—	
457	C 618	"	G47 ST28セグメント内フク土	1.46	—	0.06	—	1.07	—	
458	C 619	判銭不能	G46 ST231 フク土	—	—	—	—	—	—	
459	C 620	聖寧元宝	F48 ST231セグメント内フク土	2.38	0.77	0.12	1.9	0.62	0.05	
460	C 621	判銭不能	G48 ST235 フク土	—	—	0.14	—	—	0.05	
461	C 622	洪武通宝	F47 Pit 内床面	1.96	—	0.06	1.74	0.74	0.02	
462	C 623	無文 銀	G48 Pit 内フク土	1.94	—	0.06	—	0.74	—	
463	C 624	"	E48 Pit 内フク土	2.32	—	0.11	—	0.7	—	
464	C 625	元豐通寶	E46 SB32 フク土	2.48	0.78	0.11	1.8	0.6	0.05	
465	C 626	宣和通寶	"	2.4	0.74	0.1	2.06	0.6	0.05	
466	C 627	至和元寶	"	2.39	0.7	0.1	1.8	0.6	0.05	
467	C 628	天聖元宝	"	2.5	0.815	0.115	1.99	0.68	0.05	
468	C 629	祥符通寶	"	2.4	0.7	0.1	1.92	0.61	0.05	
469	C 630	永樂通寶	"	2.4	0.695	0.12	2.08	0.58	0.05	

470	C 631	聖宋通宝	E46 SB32 フク土	2.48	0.72	0.1	1.65	0.6	0.05	
471	C 632	至道元宝	"	2.4	0.69	0.1	1.64	0.6	0.03	
472	C 633	正隆元宝	"	2.4	0.74	0.1	2.0	0.66	0.05	
473	C 634	判銭不斂	G56 ST237 フク土	—	—	0.12	—	—	—	
474	C 635	聖宋元宝	F59 SD34 フク土	2.4	0.81	0.12	1.97	0.68	0.03	
475	C 636	淳熙元宝	F59 SX158 フク土	2.37	0.82	0.15	1.74	0.65	0.05	
476	C 637	熙寧元宝	F46 ST228セシヨン内フク土	2.35	0.8	0.1	1.84	0.69	0.05	
477	C 638	無文 銀	G45 Pit 内フク土	1.36	—	0.05	—	0.86	—	
478	C 639	開元通宝	G44 SX185 フク土	—	—	0.14	—	0.66	0.06	
479	C 640	熙寧元宝	F42 SX186(SX145)埋上	2.36	0.77	0.12	1.74	0.67	0.05	
480	C 641	無文 銀	E47 SX179 フク土	—	—	0.06	—	—	—	
481	C 642	"	F47 SX179 フク土	—	—	—	—	—	—	計測不可能
482	C 643	判銭不斂	G43 ST234 フク土	2.42	—	0.1	—	0.62	—	
483	C 644	永泰通宝	G45 SX176 フク土	2.54	—	0.1	—	0.54	—	
484	C 645	無文 銀	G42 ST234床面直上	2.16	—	0.055	—	0.64	—	
485	C 646	判銭不能	G43 ST234 フク土	2.25	—	0.055	—	0.58	—	
486	C 647	無文 銀	G45 Pit 内フク土	1.7	—	0.06	—	0.89	—	
487	C 648	判銭不能	G45 ■上	2.295	—	0.11	—	0.6	—	
488	C 649	"	G44 Pit 内フク土	—	—	0.14	—	—	0.03	
489	C 650	聖宋通宝	E57 ST201床面	—	—	—	—	—	—	計測不可能
490	C 651	水榮通宝	G45 SX193 フク土	2.51	0.7	0.14	2.12	0.59	0.03	
491	C 652	"	G45 ■下	2.50	0.66	0.16	2.08	0.54	0.05	
492	C 653	○○○宝	G45 SX192 フク土	—	—	0.1	—	—	0.01	
493	C 654	洪武通宝	E43 ■下	2.28	0.7	0.14	1.88	0.39	0.03	
494	C 655	判銭不斂	"	2.3	—	—	—	0.64	—	調べポイントより出土
495	C 656	"	"	2.28	—	0.11	—	0.63	—	O555とC657は平行着
496	C 657	"	"	2.18	—	0.12	—	0.58	—	
497	C 658	元祐通宝	G46 ST239 フク土	2.58	0.86	0.12	1.92	0.69	0.05	
498	C 659	○○○宝	G46 ■	—	—	0.15	—	—	—	
499	C 660	無文 銀	G45 ST240 フク土	—	—	0.06	—	0.96	—	
500	C 661	開元通宝	"	2.28	0.75	0.11	1.95	0.64	0.03	
501	C 662	洪武通宝	G41 SH10セシヨン内フク土	2.04	0.62	0.1	1.6	0.46	0.05	背に文字有
502	C 663	判銭不能	"	2.41	—	0.12	1.84	0.51	0.05	
503	C 664	應永通宝	北朝表揮	2.3	0.8	0.1	1.9	0.55	0.05	背に「小」の文字有
504	C 665	無文 銀	"	2.28	—	0.09	—	0.6	—	
505	C 666	"	" B区	1.18	—	0.08	—	0.7	—	
506	C 667	○聖○○	G58 ST209 フク土	—	—	0.1	—	—	—	
507	C 668	無文 銀	F43 ■	1.82	—	0.08	—	0.7	—	
508	C 701	洪武通宝	G45 SP10 フク土	2.2	0.75	0.1	1.8	0.6	0.02	
509	C 702	無文 銀	"	2.12	—	0.12	—	0.84	—	
510	C 703	"	"	2.2	—	0.095	—	0.66	—	
511	C 704	淳熙元宝	"	2.2	0.79	0.1	1.66	0.65	0.03	
512	C 705	判銭不能	"	2.28	—	0.12	1.92	0.7	0.05	
513	C 706	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—	
514	C 707	元豐通宝	"	2.44	0.74	0.08	1.14	0.65	0.01	
515	C 708	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.68	—	
516	C 709	洪武通宝	"	2.16	0.74	0.1	1.84	0.62	0.02	
517	C 710	"	"	2.18	0.77	0.11	1.86	0.68	0.02	
518	C 711	開元通宝	"	2.35	0.8	0.12	1.86	0.66	0.03	
519	C 712	無文 銀	"	2.17	—	0.1	—	0.8	—	
520	C 713	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.9	0.64	0.03	
521	C 714	元豐通宝	"	2.4	0.82	0.1	1.98	0.73	0.03	
522	C 715	紹聖元宝	"	2.36	—	0.1	1.84	0.755	0.02	
523	C 716	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.96	—	
524	C 717	天聖元宝	"	2.4	—	0.08	1.94	0.7	—	
525	C 718	祥符通宝	"	2.32	0.8	0.12	1.77	0.7	0.02	

526	C 719	無文 戲	G45 SP 10 フク土	2.16	—	0.00	—	0.7	0.03		
527	C 720	〃	〃	2.17	—	0.1	—	0.82	—		
528	C 721	〃	〃	2.25	—	0.09	—	0.74	—		
529	C 722	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.69	—		
530	C 723	〃	〃	2.25	—	0.1	—	0.7	—		
531	C 724	祥符元宝	〃	2.26	—	0.1	1.84	0.72	0.03		
532	C 725	開元通寶	〃	2.36	0.68	0.1	1.84	0.66	0.03		
533	C 726	洪武通寶	〃	2.19	0.74	0.12	1.88	0.6	0.02		
534	C 727	政和通寶	〃	2.43	0.8	0.1	2.1	0.68	0.02		
535	C 728	祥符通寶	〃	2.24	0.74	0.1	1.7	0.62	0.03		
536	C 729	開元通寶	〃	2.2	0.8	0.09	1.8	0.74	0.02		
537	C 730	聖宋元宝	〃	2.25	0.8	0.1	1.76	0.7	0.03		
538	C 731	淳祐元宝	〃	2.3	0.66	0.1	2.0	0.68	0.02		
539	C 732	洪武通寶	〃	2.1	0.73	0.1	1.8	0.58	0.02		
540	C 733	無文 戲	〃	2.13	—	0.1	—	0.65	—		
541	C 734	〃	〃	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
542	C 735	洪武通寶	〃	2.2	0.74	0.1	1.83	0.65	0.02		
543	C 736	咸平元宝	〃	2.4	0.7	0.1	1.78	0.56	0.02		
544	C 737	祥符元宝	〃	2.43	0.68	0.12	1.84	0.58	0.02		
545	C 738	皇宋元宝	〃	2.4	0.87	0.12	2.0	0.67	0.05		
546	C 739	天禧通寶	〃	2.5	0.8	0.1	2.06	0.7	0.03		
547	C 740	開元通寶	〃	2.44	0.78	0.12	1.96	0.68	0.05		
548	C 741	元豐通寶	〃	2.46	0.8	0.1	1.8	0.67	0.02		
549	C 742	咸平元宝	〃	2.46	0.76	0.1	1.82	0.64	0.02		
550	C 743	大聖元寶	〃	2.5	0.77	0.14	2.0	0.7	0.02		
551	C 744	嘉祐通寶	〃	2.5	0.87	0.1	1.9	0.74	0.05		
552	C 745	元祐通寶	〃	2.42	0.82	0.12	1.94	0.7	0.02		
553	C 746	開元通寶	〃	2.46	0.75	0.13	2.05	0.7	0.02		
554	C 747	皇宋通寶	〃	2.46	0.85	0.13	1.92	0.74	0.03		
555	C 748	昭聖元寶	〃	2.43	0.77	0.1	1.82	0.58	0.02		
556	C 749	洪武通寶	〃	2.14	0.72	0.1	1.86	0.62	0.02		
557	C 750	開元通寶	〃	2.26	0.7	0.1	1.86	0.6	0.03		
558	C 751	無文 戲	〃	2.1	—	0.1	—	0.73	—		
559	C 752	天禧通寶	〃	2.43	0.7	0.14	1.88	0.62	0.05		
560	C 753	元祐通寶	〃	2.16	—	0.08	—	0.72	0.03		
561	C 754	淳祐元寶	〃	2.3	0.83	0.1	1.895	0.69	0.02		
562	C 755	熙寧元宝	〃	2.29	0.72	0.1	1.88	0.58	0.03		
563	C 756	嘉祐通寶	〃	2.34	0.8	0.1	1.88	0.68	0.03		
564	C 757	元祐通寶	〃	2.3	0.82	0.1	1.84	0.7	0.05		
565	C 758	洪武通寶	〃	2.06	0.76	0.1	—	0.6	0.02		
566	C 759	無文 戲	〃	2.2	—	0.1	1.86	0.7	—		
567	C 760	元祐通寶	〃	2.32	0.89	0.12	1.89	0.65	0.05		
568	C 761	洪武通寶	〃	2.2	0.8	0.08	—	0.66	0.01		
569	C 762	〇〇〇寶	〃	2.22	—	0.12	—	0.67	—		
570	C 763	無文 戲	〃	2.2	—	0.07	—	0.7	—		
571	C 764	〃	〃	2.15	—	0.08	—	0.78	—		
572	C 765	元祐通寶	〃	2.2	—	0.09	1.69	0.64	0.05		
573	C 766	無文 戲	〃	2.16	—	0.1	—	0.75	—		
574	C 767	洪武通寶	〃	2.17	0.74	0.1	1.79	0.58	0.03		
575	C 768	開元通寶	〃	2.22	0.81	0.1	1.9	0.69	0.02		
576	C 769	洪武通寶	〃	2.28	0.7	0.18	1.84	0.5	0.05		
577	C 770	無文 戲	〃	2.1	—	0.1	—	0.79	—		
578	C 771	開元通寶	〃	2.32	0.78	0.1	1.9	0.65	0.05		
579	C 772	〇〇通寶	〃	2.16	0.83	0.1	1.72	0.6	0.03		
580	C 773	天禧通寶	〃	2.34	0.76	0.1	1.8	0.62	0.03		
581	C 774	利錢不能	〃	2.28	—	0.1	—	0.66	0.05		

582	C 775	無文 銀	G45 SP 10 フク土	2.22	—	0.08	—	0.56	—		
583	C 776	"	"	2.2	—	0.09	—	0.78	—		
584	C 777	"	"	2.18	—	0.08	—	0.7	—		
585	C 778	"	"	2.1	—	0.1	—	0.66	—		
586	C 779	"	"	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
587	C 780	元祐通宝	"	2.29	0.84	0.1	1.8	0.64	0.02		
588	C 781	○○○宝	"	2.16	0.8	0.08	1.67	0.76	0.01		
589	C 782	無文 銀	"	2.19	0.89	0.1	1.84	0.7	—		
590	C 783	熙寧元宝	"	2.3	0.76	0.1	1.84	0.7	0.03		
591	C 784	元豐通宝	"	2.24	0.83	0.08	1.9	0.6	0.01		
592	C 785	"	"	2.25	—	0.09	—	0.56	0.02		
593	C 786	無文 銀	"	2.15	0.76	0.1	1.7	0.7	—		
594	C 787	判銭不能	"	2.16	—	0.06	—	0.6	0.01		
595	C 788	洪武通寶	"	2.16	0.76	0.1	1.76	0.6	—		
596	C 789	祥符通宝	"	2.4	—	0.1	—	0.6	0.02		
597	C 790	無文 銀	"	2.2	0.72	0.12	1.88	0.64	—		
598	C 791	洪武通宝	"	2.28	—	0.13	—	0.56	0.03		
599	C 792	無文 銀	"	2.12	—	0.1	—	0.78	—		
600	C 793	○○通○	"	2.32	—	0.1	1.9	0.6	0.03		
601	C 794	開元通宝	"	2.13	—	0.08	1.83	0.54	0.03		
602	C 795	洪武通宝	"	2.32	0.72	0.12	2.0	0.58	0.05		
603	C 796	齊背元寶	"	2.2	—	0.09	1.67	0.6	0.02		
604	C 797	洪武通宝	"	2.28	0.74	0.1	1.87	0.56	0.05		
605	C 798	皇宋通宝	"	2.29	0.79	0.1	1.76	0.66	0.03		
606	C 799	無文 銀	"	2.1	—	0.1	—	0.7	—		
607	C 800	皇宋通宝	"	2.2	0.86	0.08	1.77	0.66	0.05		
608	C 801	判銭不能	"	2.1	—	0.09	—	0.65	0.05		
609	C 802	開元通宝	"	2.23	0.86	0.06	1.86	0.63	0.03		
610	C 803	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.1	1.82	0.6	0.01		
611	C 804	無文 銀	"	2.2	—	0.05	—	0.68	—		
612	C 805	洪武通宝	"	2.25	0.8	0.1	1.86	0.6	0.05		
613	C 806	皇宋通宝	"	2.26	0.86	0.1	1.74	0.65	0.05		
614	C 807	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.65	—		
615	C 808	洪武通宝	"	2.08	0.76	0.08	1.8	0.64	0.05		
616	C 809	"	"	2.29	0.8	0.1	1.89	0.6	0.03		
617	C 810	無文 銀	"	2.22	—	0.1	—	0.67	—		
618	C 811	熙寧通宝	"	2.4	0.88	0.1	1.97	0.7	0.05		
619	C 812	無文 銀	"	2.3	—	0.08	—	0.66	—		
620	C 813	元祐通宝	"	2.46	0.82	0.1	2.04	0.67	0.05		
621	C 814	洪武通宝	"	2.16	0.7	0.1	1.8	0.58	0.02		
622	C 815	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.63	—		
623	C 816	太平通宝	"	2.34	0.7	0.07	2.0	0.6	0.03		
624	C 817	洪武通宝	"	2.16	0.75	0.1	1.75	0.56	0.05		
625	C 818	開元通宝	"	2.4	0.78	0.12	2.04	0.65	0.05		
626	C 819	元豐通宝	"	2.3	0.89	0.1	1.98	0.7	0.05		
627	C 820	洪武通宝	"	2.28	0.7	0.13	1.86	0.56	0.05		
628	C 821	無文 銀	"	2.16	—	0.1	—	0.7	—		
629	C 822	元豐通宝	"	2.2	—	0.05	—	0.69	—		
630	C 823	天聖元宝	"	2.22	—	0.06	—	0.68	—		
631	C 824	無文 銀	"	2.2	0.7	0.12	1.82	0.56	0.02		
632	C 825	"	"	2.18	—	0.08	—	—	—		
633	C 826	洪武通宝	"	2.24	—	0.08	—	0.72	—		
634	C 827	判銭不能	"	—	—	0.12	—	0.64	—		
635	C 828	無文 銀	"	2.16	0.78	0.1	1.88	0.63	0.05		
636	C 829	"	"	2.2	—	0.1	—	0.68	—		
637	C 830	元祐通宝	"	2.36	0.66	0.1	1.76	0.56	0.02		

638	C 834	無文 銀	G 45 SP 10 プク土	2.22	—	0.1	—	0.68	—
639	C 832	洪武通宝	"	2.16	0.66	0.1	1.76	0.56	0.02
640	C 833	祥符元宝	"	2.12	—	0.08	1.7	0.59	0.03
641	C 834	洪武通宝	"	2.22	0.7	0.13	1.8	0.57	0.03
642	C 835	無文 銀	"	2.24	—	0.12	—	0.64	—
643	C 836	臨安元寶	"	2.34	0.89	0.1	1.88	0.68	0.03
644	C 837	黑文 銀	"	2.22	—	0.12	—	0.74	—
645	C 838	天祐通寶	"	2.34	0.82	0.09	1.88	0.7	0.03
646	C 839	洪武通宝	"	2.16	0.7	0.1	1.82	0.57	0.02
647	C 840	物錢不能	"	2.26	—	0.1	1.8	0.64	—
648	C 841	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.64	—
649	C 842	洪武通宝	"	2.23	0.68	0.125	1.82	0.54	0.03
650	C 843	無文 銀	"	2.16	—	0.1	—	0.7	—
651	C 844	裕聖元寶	"	2.3	0.78	0.1	1.83	0.62	0.02
652	C 845	洪武通宝	"	2.2	0.7	0.12	1.84	0.56	0.03
653	C 846	無文 銀	"	2.1	—	0.07	—	0.74	—
654	C 847	皇宋通寶	"	2.27	0.76	0.09	1.8	0.59	0.01
655	C 848	祥符元寶	"	2.16	0.7	0.1	1.66	0.59	0.02
656	C 849	無文 銀	"	2.28	—	0.12	—	0.6	—
657	C 850	"	"	2.22	—	0.1	—	0.7	—
658	C 851	洪武通宝	"	2.24	0.74	0.1	1.87	0.55	0.01
659	C 852	"	"	2.24	0.74	0.08	1.8	0.62	0.01
660	C 853	元豐通寶	"	2.3	0.83	0.1	1.82	0.7	0.03
661	C 854	無文 銀	"	2.18	—	0.1	—	0.7	—
662	C 855	"	"	2.16	—	0.08	—	0.76	—
663	C 856	皇宋通寶	"	2.3	0.84	0.08	1.84	0.68	0.05
664	C 857	慶元通寶	"	2.36	0.82	0.1	1.87	0.64	0.03
665	C 858	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.69	—
666	C 859	洪武通宝	"	2.26	0.76	0.14	1.9	0.56	0.03
667	C 860	無文 銀	"	2.16	—	0.06	—	0.7	—
668	C 861	"	"	2.16	—	0.1	—	0.7	—
669	C 862	元祐通寶	"	2.24	0.8	0.1	1.82	0.67	0.02
670	C 863	洪武通宝	"	2.1	0.74	0.1	1.78	0.6	0.01
671	C 864	熙寧元寶	"	2.3	0.865	0.08	1.86	0.7	0.05
672	C 865	無文 銀	"	2.28	—	0.06	—	0.68	—
673	C 866	乾元重寶	"	2.35	0.74	0.12	1.83	0.64	0.05
674	C 867	無文 銀	"	2.24	—	0.1	—	0.66	—
675	C 868	"	"	2.24	—	0.07	—	0.6	—
676	C 869	元祐通寶	"	2.34	0.84	0.1	1.82	0.68	0.02
677	C 870	皇宋通寶	"	2.24	0.82	0.08	1.76	0.82	0.03
678	C 871	無文 銀	"	2.15	—	0.09	—	0.68	—
679	C 872	洪武通宝	"	2.26	0.74	0.13	1.82	0.55	0.02
680	C 873	無文 銀	"	2.16	—	0.09	—	0.67	—
681	C 874	祥符元寶	"	2.2	0.77	0.1	1.79	0.65	0.05
682	C 875	元祐通宝	"	2.3	0.86	0.1	1.8	0.67	0.03
683	C 876	元豐通寶	"	2.34	0.77	0.1	1.73	0.68	0.04
684	C 877	洪武通宝	"	2.19	0.7	0.13	1.84	0.56	0.03
685	C 878	祥符元寶	"	2.3	0.7	0.08	1.76	0.6	0.04
686	C 879	皇宋通宝	"	2.36	0.86	0.1	1.8	0.6	0.03
687	C 880	元祐通寶	"	2.11	0.84	0.07	1.7	0.59	0.01
688	C 881	無文 銀	"	2.15	—	0.1	—	0.75	—
689	C 882	洪武通宝	"	2.27	0.8	0.13	1.88	0.64	0.05
690	C 883	"	"	2.18	0.72	0.12	1.84	0.57	0.01
691	C 884	祥符元寶	"	2.41	0.74	0.1	1.76	0.62	0.03
692	C 885	洪武通宝	"	2.25	0.7	0.14	1.81	0.56	0.02
693	C 886	"	"	2.14	0.7	0.12	1.8	0.56	0.03

694	C 887	無文 銀	G45 SP10 フカ土	2.08	—	0.1	—	0.7	—
695	C 888	"	"	2.25	—	0.1	—	0.66	—
696	C 889	明道元宝	"	2.46	0.86	0.1	1.98	0.67	0.05
697	C 890	咸平元宝	"	2.43	0.74	0.1	1.7	0.6	0.02
698	C 891	元祐通宝	"	2.1	0.8	0.06	1.65	0.73	0.03
699	C 892	開元通寶	"	2.3	0.8	0.1	1.8	0.63	0.03
700	C 893	無文 銀	"	2.16	—	0.09	—	0.67	—
701	C 894	洪武通寶	"	2.23	0.7	0.14	1.86	0.55	0.03
702	C 895	皇宋通寶	"	2.2	0.88	0.1	1.86	0.72	0.05
703	C 896	洪武通寶	"	2.26	0.75	0.12	1.87	0.57	0.02
704	C 897	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.68	—
705	C 898	祥符元宝	"	2.1	0.75	0.1	1.55	0.64	0.02
706	C 899	無文 銀	"	2.18	—	0.1	—	0.74	—
707	C 900	"	"	2.18	—	0.1	—	0.69	—
708	C 901	元祐通寶	"	2.2	0.9	0.1	1.74	0.63	0.05
709	C 902	祥符元宝	"	2.26	0.77	0.1	1.74	0.63	0.02
710	C 903	元祐通寶	"	2.38	0.86	0.1	1.75	0.67	0.03
711	C 904	洪武通寶	"	2.22	0.72	0.1	1.84	0.58	0.03
712	C 905	崇寧元宝	"	2.4	0.7	0.1	1.94	0.6	0.02
713	C 906	無文 銀	"	2.1	—	0.06	—	0.69	—
714	C 907	洪武通寶	"	2.3	0.74	0.12	1.9	0.6	0.03
715	C 908	無文 銀	"	2.16	—	0.06	—	0.78	—
716	C 909	宋宋通寶	"	2.26	0.8	0.08	1.83	0.65	0.02
717	C 910	無文 銀	"	2.96	—	0.05	—	0.63	—
718	C 911	洪武通寶	"	2.23	—	0.11	1.9	0.63	0.05
719	C 912	無文 銀	"	2.08	—	0.08	—	0.67	—
720	C 913	洪武通寶	"	2.09	0.72	0.1	1.78	0.59	0.01
721	C 914	無文 銀	"	2.14	—	0.08	—	0.7	—
722	C 915	"	"	2.16	—	0.08	—	0.87	—
723	C 916	海化元宝	"	2.2	0.89	0.08	1.85	0.67	0.01
724	C 917	無文 銀	"	2.3	—	0.08	—	0.66	—
725	C 918	洪武通寶	"	2.2	0.76	0.1	1.86	0.66	0.02
726	C 919	"	"	2.18	0.6	0.18	1.83	0.6	0.03
727	C 920	元豐通寶	"	2.32	0.82	0.1	1.74	0.62	0.05
728	C 921	開元通寶	"	2.15	0.84	0.08	1.78	0.65	0.02
729	C 922	測武通寶	"	2.08	0.7	0.1	1.82	0.575	0.09
730	C 923	"	"	2.13	0.76	0.1	1.8	0.56	0.02
731	C 924	無文 銀	"	2.14	—	0.09	—	0.64	—
732	C 925	洪武通寶	"	2.16	0.79	0.1	1.86	0.77	0.01
733	C 926	太平通聖	"	2.34	0.79	0.09	1.88	0.66	0.01
734	C 927	開元通寶	"	2.1	0.72	0.08	1.68	0.58	0.02
735	C 928	洪武通寶	"	2.28	0.75	0.1	1.68	0.6	0.03
736	C 929	開元通鑄	"	2.3	0.81	0.08	1.86	0.62	0.01
737	C 930	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.68	—
738	C 931	"	"	1.88	—	0.05	—	0.65	—
739	C 932	洪武通寶	"	2.08	0.74	0.05	1.8	0.66	0.01
740	C 933	綱定元宝	"	2.46	0.87	0.1	2.1	0.7	0.03
741	C 934	洪武通寶	"	2.1	0.78	0.1	1.8	0.7	0.01
742	C 935	祥符通寶	"	2.27	0.7	0.09	1.95	0.7	0.02
743	C 936	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.63	—
744	C 937	皇宋元宝	"	2.2	—	0.09	1.8	0.63	0.03
745	C 938	祥符通寶	"	2.16	0.84	0.08	1.74	0.62	0.03
746	C 939	洪武通寶	"	2.18	0.77	0.1	1.83	0.64	0.02
747	C 940	相寧元宝	"	2.39	0.88	0.1	1.87	0.66	0.05
748	C 941	無文 銀	"	2.2	—	0.07	—	0.67	—
749	C 942	相寧元宝	"	2.34	0.82	0.15	1.9	0.62	0.06

750	C 943	無文 錢	G45 SP 10 フク土	2.26	—	0.06	—	0.62	—
751	C 944	"	"	2.07	—	0.06	—	0.7	—
752	C 945	"	"	2.18	—	0.1	—	0.7	—
753	C 946	洪武通宝	"	2.29	0.7	0.1	1.8	0.62	0.02
754	C 947	祥符元宝	"	2.36	—	0.1	1.84	0.63	0.03
755	C 948	無文 錢	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—
756	C 949	無寧元宝	"	2.3	0.84	0.08	1.9	0.7	0.03
757	C 950	洪武通宝	"	2.04	0.69	0.1	1.68	0.54	0.05
758	C 951	無文 錢	"	2.11	—	0.08	—	0.74	—
759	C 952	"	"	2.12	—	0.06	—	0.72	—
760	C 953	"	"	2.08	—	0.06	—	0.7	—
761	C 954	元祐通宝	"	2.25	0.87	0.1	1.8	0.66	0.03
762	C 955	熙熙○○	"	2.34	0.79	0.08	1.96	0.6	0.03
763	C 956	洪武通宝	"	2.2	0.78	0.1	1.87	0.64	0.02
764	C 957	無文 錢	"	2.09	—	0.1	—	0.7	—
765	C 958	"	"	2.32	—	0.1	—	0.72	—
766	C 959	"	"	2.0	—	0.1	—	0.64	—
767	C 960	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.9	0.67	0.09
768	C 961	無文 錢	"	2.13	—	0.09	—	0.77	—
769	C 962	"	"	2.23	—	0.1	—	0.6	—
770	C 963	洪武通宝	"	2.18	0.74	0.09	1.93	0.56	0.01
771	C 964	天聖元宝	"	2.36	0.695	0.1	1.8	0.64	0.03
772	C 965	無文 錢	"	2.2	—	0.1	—	0.74	—
773	C 966	元祐通宝	"	2.48	0.82	0.12	1.9	0.6	0.03
774	C 967	無文 錢	"	2.16	—	0.11	—	0.8	—
775	C 968	開元通寶	"	2.34	0.84	0.09	2.0	0.69	0.02
776	C 969	無文 錢	"	2.12	—	0.08	—	0.62	—
777	C 970	熙熙元寶	"	2.4	0.66	0.1	1.8	0.64	0.05
778	C 971	祥符通宝	"	2.43	0.74	0.11	1.82	0.62	0.03
779	C 972	聖宋通宝	"	2.47	0.84	0.12	1.96	0.67	0.02
780	C 973	開元通寶	"	2.42	0.78	0.095	1.98	0.72	0.08
781	C 974	祥符通宝	"	2.4	0.72	0.11	1.85	0.62	0.05
782	C 975	政和通宝	"	2.45	0.865	0.12	2.05	0.67	0.02
783	C 976	天禧通宝	"	2.43	0.74	0.1	1.9	0.64	0.05
784	C 977	紹聖元宝	"	2.37	0.79	0.14	1.84	0.66	0.08
785	C 978	聖宋通宝	"	2.4	0.84	0.12	2.0	0.62	0.02
786	C 979	"	"	2.44	0.94	0.11	2.0	0.75	0.03
787	C 980	平至元宝	"	2.42	0.69	0.1	1.8	0.6	0.03
788	C 981	開元通寶	"	2.45	0.77	0.14	1.97	0.66	0.05
789	C 982	天祐通宝	"	2.45	0.7	0.12	1.87	0.64	0.03
790	C 983	紹聖元宝	"	2.48	0.74	0.12	1.74	0.6	0.03
791	C 984	聖宋通宝	"	2.5	0.9	0.12	2.0	0.73	0.06
792	C 985	開元通寶	"	2.43	0.76	0.1	1.83	0.67	0.04
793	C 986	政和通宝	"	2.38	0.76	0.12	1.93	0.6	0.02
794	C 987	祥符元宝	"	2.43	0.76	0.1	1.97	0.65	0.02
795	C 988	聖宋元宝	"	2.38	0.8	0.12	1.955	0.62	0.03
796	C 989	天聖元宝	"	2.53	0.9	0.1	2.17	0.73	0.02
797	C 990	紹聖元宝	"	2.33	0.83	0.1	1.8	0.58	0.03
798	C 991	聖宋通宝	"	2.36	0.8	0.09	1.87	0.69	0.02
799	C 992	正隆元宝	"	2.44	0.76	0.12	2.12	0.62	0.02
800	C 993	大聖元宝	"	2.5	0.87	0.12	2.1	0.7	0.05
801	C 994	永樂通寶	"	2.48	0.7	0.16	2.08	0.58	0.02
802	C 995	元符通宝	"	2.36	0.76	0.12	1.8	0.6	0.05
803	C 996	元豐通宝	"	2.47	0.8	0.13	1.86	0.68	0.03
804	C 997	天祐通宝	"	2.4	0.7	0.11	1.86	0.56	0.03
805	C 998	祥符元宝	"	2.38	0.74	0.1	1.86	0.62	0.03

806	C 995	幽寧元宝	G 45 SP10 フク士	2.36	0.79	0.13	1.84	0.67	0.02
807	C 1000	聖宋元宝	"	2.5	0.77	0.12	1.95	0.63	0.02
808	C 1001	元豐通寶	"	2.4	0.8	0.14	1.86	0.65	0.05
809	C 1002	熙元通寶	"	2.42	0.76	0.14	2.06	0.66	0.05
810	C 1003	天聖通寶	"	2.53	0.87	0.12	2.2	0.75	0.01
811	C 1004	元豐通寶	"	2.42	0.83	0.1	1.795	0.7	0.03
812	C 1005	治平元宝	"	2.44	0.77	0.095	1.92	0.69	0.02
813	C 1006	宋神元寶	"	2.4	0.75	0.1	1.86	0.63	0.01
814	C 1007	嘉祐通寶	"	2.37	0.8	0.1	1.9	0.7	0.02
815	C 1008	聖宋元寶	"	2.36	0.7	0.13	1.79	0.6	0.02
816	C 1009	洪武通寶	"	2.3	0.72	0.14	1.94	0.6	0.05
817	C 1010	元祐通寶	"	2.4	0.8	0.13	1.83	0.68	0.03
818	C 1011	洪武通寶	"	2.28	0.7	0.15	1.94	0.56	0.02
819	C 1012	元祐通寶	"	2.36	0.83	0.12	1.9	0.75	0.03
820	C 1013	洪武通寶	"	2.34	0.73	0.13	1.95	0.6	0.02
821	C 1014	無文 義	"	2.24	—	0.1	—	0.7	—
822	C 1015	洪武通寶	"	2.23	0.78	0.1	1.9	0.7	0.02
823	C 1016	無文 義	"	2.2	—	0.1	—	0.72	—
824	C 1017	洪武通寶	"	2.3	0.78	0.12	1.95	0.65	0.03
825	C 1018	太平通寶	"	2.42	0.77	0.1	1.86	0.62	0.02
826	C 1019	宋宋通寶	"	2.32	0.92	0.1	1.9	0.76	0.02
827	C 1020	大中通寶	"	2.3	0.78	0.1	1.9	0.66	0.02
828	C 1021	元豐通寶	"	2.42	0.8	0.13	1.87	0.7	0.03
829	C 1022	○○元寶	"	2.3	0.83	0.1	1.86	0.7	0.02
830	C 1023	無文 義	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—
831	C 1024	洪武通寶	"	2.14	0.6	0.14	1.66	0.5	0.02
832	C 1025	"	"	2.16	0.7	0.1	1.86	0.6	0.02
833	C 1026	"	"	2.25	0.7	0.13	1.82	0.58	0.03
834	C 1027	皇宋通寶	"	2.38	0.95	0.1	1.96	0.8	0.02
835	C 1028	洪武通寶	"	2.22	0.7	0.13	1.9	0.6	0.02
836	C 1029	熙寧元宝	"	2.38	0.8	0.13	1.85	0.7	0.03
837	C 1030	天聖元宝	"	2.46	0.8	0.12	2.0	0.76	0.04
838	C 1031	無文 義	"	2.34	—	0.1	—	0.64	—
839	C 1032	洪武通寶	"	2.3	0.7	0.12	1.8	0.57	0.03
840	C 1033	聖宋通寶	"	2.26	0.74	0.1	1.67	0.6	0.02
841	C 1034	洪武通寶	"	2.4	0.75	0.14	1.96	0.56	0.03
842	C 1035	紹聖元宝	"	2.4	—	0.12	1.95	0.68	0.02
843	C 1036	洪武通寶	"	2.26	0.7	0.13	1.86	0.58	0.03
844	C 1037	開元通寶	"	2.37	0.82	0.1	2.04	0.65	0.03
845	C 1038	皇宋通寶	"	2.42	0.8	0.12	1.86	0.7	0.02
846	C 1039	洪武通寶	"	2.34	0.68	0.14	1.8	0.68	0.02
847	C 1040	"	"	2.2	0.7	0.14	1.9	0.58	0.02
848	C 1041	"	"	2.2	0.7	0.1	1.83	0.6	0.02
849	C 1042	洪武通寶	"	2.24	0.7	0.13	1.96	0.6	0.03
850	C 1043	"	"	2.2	0.74	0.12	1.9	0.58	0.03
851	C 1044	無文 義	"	2.3	—	0.12	—	0.58	—
852	C 1045	洪武通寶	"	2.2	0.73	0.12	1.84	0.6	0.02
853	C 1046	天禧通寶	"	2.48	0.7	0.12	2.0	0.64	0.02
854	C 1047	元祐通寶	"	2.33	0.7	0.1	1.74	0.67	0.03
855	C 1048	洪武通寶	"	2.4	0.72	0.13	1.86	0.6	0.03
856	C 1049	祥符通寶	"	2.34	0.8	0.12	1.8	0.62	0.02
857	C 1050	洪武通寶	"	2.29	0.7	0.13	1.9	0.58	0.03
858	C 1051	"	"	2.24	0.73	0.13	1.825	0.55	0.03
859	C 1052	熙寧元宝	"	2.25	0.8	0.13	1.96	0.7	0.02
860	C 1053	聖祐元宝	"	2.4	0.7	0.12	2.0	0.6	0.03
861	C 1054	洪武通寶	"	2.23	0.7	0.13	1.86	0.5	0.03

862	C1055	洪武通宝	G45 SP 10 フク土	2.23	0.67	0.13	1.84	0.595	0.03		
863	C1056	昭聖元宝	"	2.33	0.7	0.13	1.77	0.65	0.02		
864	C1057	無文 錢	"	2.24	—	0.1	—	0.64	—		
865	C1058	昭聖元宝	"	2.46	0.76	0.1	1.79	0.7	0.02		
866	C1059	皇宋通宝	"	2.38	0.88	0.1	1.95	0.73	0.05		
867	C1060	洪武通宝	"	2.44	0.7	0.15	1.9	0.58	0.02		
868	C1061	永和通宝	"	2.46	0.73	0.13	1.96	0.67	0.05		
869	C1062	治平元宝	"	2.3	0.77	0.13	1.9	0.65	0.03		
870	C1063	洪武通宝	"	2.23	0.7	0.13	1.84	0.58	0.02		
871	C1064	"	"	2.3	0.7	0.14	1.86	0.61	0.03		
872	C1065	"	"	2.18	0.74	0.14	1.82	0.56	0.02		
873	C1066	"	"	2.25	0.73	0.1	1.8	0.6	0.02		
874	C1067	無文 錢	"	2.26	—	0.11	—	0.62	—		
875	C1068	洪武通宝	"	2.2	0.72	0.1	1.8	0.6	0.02		
876	C1069	兒朱通寶	"	2.5	0.87	0.13	2.0	0.7	0.02		
877	C1070	祥符元宝	"	2.3	0.72	0.1	1.8	0.6	0.03		
878	C1071	洪武通宝	"	2.24	0.7	0.12	1.9	0.57	0.03		
879	C1072	"	"	2.28	0.75	0.12	1.9	0.6	0.03		
880	C1073	元符通宝	"	2.44	0.8	0.12	1.95	0.6	0.05		
881	C1074	大德通宝	"	2.34	0.74	0.14	1.97	0.65	0.03		
882	C1075	祥符元宝	"	2.17	0.7	0.1	1.74	0.6	0.02		
883	C1076	元祐通宝	"	2.37	0.78	0.14	1.86	0.19	0.05		
884	C1077	洪武通宝	"	2.3	0.68	0.12	1.9	0.58	0.03		
885	C1078	"	"	2.16	0.73	0.14	1.9	0.6	0.02		
886	C1079	無文 錢	"	2.25	—	0.08	—	0.6	—		
887	C1080	元祐通宝	"	2.44	0.86	0.12	1.92	0.69	0.05		
888	C1081	洪武通宝	"	2.13	0.67	0.1	1.8	0.54	0.02		
889	C1082	判院不能	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.62	0.05		
890	C1083	洪武通宝	"	2.24	0.7	0.13	1.9	0.55	0.05		
891	C1084	大德通宝	"	2.28	0.74	0.06	1.8	0.6	0.01		
892	C1085	昭聖元宝	"	2.26	0.76	0.1	1.7	0.58	0.05		
893	C1086	洪武通宝	"	2.29	0.7	0.12	1.84	0.57	0.03		
894	C1087	"	"	2.2	0.7	0.1	1.84	0.56	0.02		
895	C1088	"	"	2.29	0.76	0.12	1.8	0.6	0.05		
896	C1089	"	"	2.20	0.79	0.1	1.84	0.6	0.05		
897	C1090	"	"	2.06	0.76	0.1	1.82	0.62	0.02		
898	C1091	祥符通宝	"	2.17	0.8	0.08	1.76	0.6	0.05		
899	C1092	無文 錢	"	2.2	—	0.12	—	0.6	—		
900	C1093	"	"	2.09	—	0.08	—	0.69	—		
901	C1094	昭聖元宝	"	2.195	0.8	0.14	1.88	0.66	0.05		
902	C1095	無文 錢	"	2.28	—	0.1	—	0.6	—		
903	C1096	"	"	2.1	—	0.1	—	0.56	—		
904	C1097	"	"	2.18	—	0.1	—	0.74	—		
905	C1098	元祐通宝	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.65	0.06		
906	C1099	正應元寶	"	2.3	0.76	0.1	2.05	0.58	0.05		
907	C1100	慶元通宝	"	2.12	—	0.07	—	0.67	—		
908	C1101	開元通宝	"	2.3	0.84	0.1	1.94	0.65	0.05		
909	C1102	昭聖元寶	"	2.34	0.9	0.14	2.0	0.7	0.05		
910	C1103	無文 錢	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
911	C1104	祥符元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.78	0.7	0.03		
912	C1105	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.14	1.79	0.56	0.04		
913	C1106	開元通宝	"	2.24	0.84	0.06	1.79	0.75	0.05		
914	C1107	洪武通宝	"	2.28	0.7	0.1	1.89	0.59	0.05		
915	C1108	無文 錢	"	2.22	—	0.1	—	0.62	—		
916	C1109	"	"	2.06	—	0.1	—	0.7	—		
917	C1110	洪武通宝	"	2.14	0.7	0.1	1.79	0.58	0.03		

918	C1111	無文 戲	G45 SP10 フク土	2.16	—	0.1	—	0.6	—
919	C1112	"	"	2.2	—	0.1	—	0.62	—
920	C1113	元祐通宝	"	2.2	0.78	0.1	1.76	0.66	0.05
921	C1114	洪武通宝	"	2.27	0.7	0.1	1.86	0.55	0.05
922	C1115	"	"	2.19	0.7	0.08	1.78	0.575	0.05
923	C1116	判銭不能	"	2.14	0.8	0.08	1.7	0.68	0.05
924	C1117	朝鮮通宝	"	2.39	0.7	0.1	1.98	0.56	0.05
925	C1118	洪武通宝	"	2.2	0.68	0.1	1.82	0.56	0.05
926	C1119	無文 戲	"	2.2	—	0.1	—	0.67	—
927	C1120	祥符元宝	"	2.3	0.78	0.08	1.86	0.62	0.03
928	C1121	祥符通宝	"	2.22	0.78	0.1	1.755	0.6	0.05
929	C1122	祥符元宝	"	2.32	0.78	0.1	1.86	0.595	0.05
930	C1123	天祐通宝	"	2.32	0.795	0.08	1.96	0.65	0.05
931	C1124	皇宋通宝	"	2.3	0.86	0.1	1.9	0.68	0.06
932	C1125	無文 戲	"	2.25	—	0.1	—	0.58	—
933	C1126	洪武通宝	"	2.2	0.73	0.1	1.87	0.58	0.02
934	C1127	無文 戲	"	2.14	—	0.08	—	0.68	—
935	C1128	"	"	2.25	—	0.1	—	0.56	—
936	C1129	"	"	2.16	—	0.06	—	0.65	—
937	C1130	洪武通宝	"	2.1	0.75	0.08	1.87	0.58	0.03
938	C1131	"	"	2.22	0.7	0.1	1.82	0.56	0.05
939	C1132	無文 戲	"	2.12	—	0.09	—	0.68	—
940	C1133	洪武通宝	"	2.28	0.74	0.1	1.88	0.58	0.05
941	C1134	"	"	2.24	0.8	0.1	1.89	0.64	0.03
942	C1135	元豐通寶	"	2.285	0.76	0.1	1.78	0.6	0.06
943	C1136	無文 戲	"	2.22	—	0.08	—	0.62	—
944	C1137	咸平元宝	"	2.2	0.8	0.06	1.8	0.6	0.03
945	C1138	祥符通宝	"	2.2	0.8	0.1	1.8	0.66	0.03
946	C1139	"	"	2.38	0.8	0.1	1.8	0.63	0.05
947	C1140	洪武通宝	"	2.19	0.7	0.14	1.83	0.54	0.05
948	C1141	祥符元宝	"	2.37	0.82	0.1	1.86	0.62	0.05
949	C1142	元豐通寶	"	2.4	0.75	0.1	1.84	0.62	0.05
950	C1143	判銭不能	"	2.16	—	0.04	—	0.64	—
951	C1144	無文 戲	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—
952	C1145	天聖元宝	"	2.26	—	0.1	1.8	0.75	0.05
953	C1146	無文 戲	"	2.22	—	0.1	—	0.66	—
954	C1147	○○○寶	"	2.2	0.87	0.1	1.76	0.65	0.03
955	C1148	洪武通宝	"	2.26	—	0.1	—	0.74	—
956	C1149	"	"	2.14	0.7	0.1	1.79	0.56	0.03
957	C1150	"	"	2.2	0.7	0.1	1.84	0.59	0.02
958	C1151	"	"	2.15	0.74	0.1	1.86	0.6	0.02
959	C1152	"	"	2.04	0.7	0.1	1.7	0.52	0.03
960	C1153	"	"	2.2	0.76	0.1	1.9	0.57	0.05
961	C1154	祥符通宝	"	2.39	0.8	0.1	1.84	0.64	0.02
962	C1155	熙祐元宝	"	2.32	0.8	0.1	1.93	0.64	0.05
963	C1156	洪武通宝	"	2.1	0.715	0.08	1.76	0.6	0.03
964	C1157	"	"	2.18	0.7	0.1	1.8	0.58	0.05
965	C1158	無文 戲	"	2.18	—	0.06	—	0.72	—
966	C1159	"	"	2.19	—	0.1	—	0.68	—
967	C1160	大清通宝	"	2.33	0.76	0.1	1.85	0.62	0.05
968	C1161	洪武通宝	"	2.28	0.76	0.1	1.98	0.62	0.05
969	C1162	祥符元宝	"	2.2	0.73	0.1	1.78	0.63	0.03
970	C1163	祥符通宝	"	2.3	0.76	0.08	1.83	0.6	0.05
971	C1164	洪武通宝	"	2.22	0.7	0.13	1.81	0.55	0.03
972	C1165	無文 戲	"	2.26	—	0.08	—	0.76	—
973	C1166	開元通宝	"	2.3	0.8	0.08	1.95	0.64	0.02

974	C 1167	洪武通宝	G45 SP10 フク上	2.2	0.68	0.1	1.84	0.56	0.03
975	C 1168	皇宋通宝	"	2.26	0.8	0.1	1.92	0.66	0.06
976	C 1169	洪武通寶	"	2.26	0.7	0.16	1.9	0.54	0.05
977	C 1170	無文 錢	"	2.18	—	0.08	—	0.62	—
978	C 1171	祥符通宝	"	2.3	0.82	0.1	1.7	0.6	0.03
979	C 1172	洪武通寶	"	2.32	0.74	0.18	2.0	0.55	0.05
980	C 1173	判錢不能	"	2.2	0.78	0.1	1.76	0.63	0.05
981	C 1174	洪武通宝	"	2.25	0.7	0.1	1.88	0.6	0.05
982	C 1175	○元元宝	"	2.2	0.8	0.06	1.8	0.67	0.05
983	C 1176	洪武通宝	"	2.24	0.695	0.1	1.86	0.58	0.02
984	C 1177	"	"	2.2	0.68	0.1	1.8	0.55	0.02
985	C 1178	皇宋通宝	"	2.2	0.84	0.1	1.88	0.62	0.02
986	C 1179	治平元宝	"	2.26	0.78	0.1	1.73	0.54	0.03
987	C 1180	元祐通宝	"	2.31	0.78	0.09	1.76	0.62	0.05
988	C 1181	政和通宝	"	2.495	0.76	0.1	1.95	0.58	0.05
989	C 1182	洪武通宝	"	2.24	0.74	0.1	1.81	0.56	0.02
990	C 1183	元豐通宝	"	2.4	0.74	0.1	1.84	0.61	0.05
991	C 1184	裕聖元宝	"	2.4	0.76	0.1	1.62	0.6	0.05
992	C 1185	無文 錢	"	2.17	—	0.08	—	0.785	—
993	C 1186	洪武通宝	"	2.26	0.74	0.12	1.88	0.57	0.05
994	C 1187	祥符通宝	"	2.32	0.78	0.1	1.82	0.66	0.05
995	C 1188	"	"	2.28	0.7	0.08	1.67	0.575	0.05
996	C 1189	洪武通宝	"	2.26	0.82	0.1	1.86	0.64	0.05
997	C 1190	"	"	2.18	0.72	0.13	1.84	0.54	0.05
998	C 1191	淳祐元宝	"	2.25	0.84	0.1	1.86	0.72	0.05
999	C 1192	大德通宝	"	2.3	0.79	0.08	1.89	0.64	0.05
1000	C 1193	無文 錢	"	2.13	—	0.08	—	0.74	—
1001	C 1194	洪武通宝	"	2.24	0.8	0.1	1.98	0.68	0.05
1002	C 1195	無文 錢	"	2.19	—	0.08	—	0.7	—
1003	C 1196	判錢不能	"	2.3	0.88	0.1	1.96	0.66	0.05
1004	C 1197	無文 錢	"	2.38	—	0.12	—	0.5	—
1005	C 1198	洪武通宝	"	2.18	0.7	0.1	1.84	0.58	0.02
1006	C 1199	祥符元宝	"	2.28	0.76	0.08	1.86	0.64	0.02
1007	C 1200	洪武通宝	"	2.19	0.76	0.08	1.78	0.59	0.02
1008	C 1201	治平元宝	"	2.3	0.8	0.09	1.89	0.7	0.03
1009	C 1202	洪武O宝	"	2.28	0.79	0.1	1.88	0.6	0.03
1010	C 1203	洪武通宝	"	2.18	0.69	0.1	1.8	0.6	0.05
1011	C 1204	"	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.58	0.03
1012	C 1205	判錢不能	"	2.2	—	0.08	1.7	0.79	0.05
1013	C 1206	洪武通宝	"	2.12	0.83	0.1	1.8	0.6	0.05
1014	C 1207	"	"	2.3	0.76	0.14	1.95	0.6	0.05
1015	C 1208	無文 錢	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—
1016	C 1209	洪武通宝	"	2.19	—	0.09	1.78	0.66	0.03
1017	C 1210	無文 錢	"	2.22	—	0.1	—	0.6	—
1018	C 1211	大德通宝	"	2.28	0.76	0.1	1.86	0.64	0.05
1019	C 1212	無文 錢	"	2.33	—	0.1	—	0.7	—
1020	C 1213	祥符元宝	"	2.26	—	0.1	1.9	—	0.02
1021	C 1214	全道元宝	"	2.3	0.72	0.1	1.74	0.56	0.03
1022	C 1215	祥符元宝	"	2.36	0.8	0.06	1.86	0.67	0.02
1023	C 1216	○O通宝	"	2.34	0.7	0.08	1.8	0.56	0.03
1024	C 1217	祥符通宝	"	2.26	0.76	0.1	1.78	0.64	0.05
1025	C 1218	"	"	2.23	0.74	0.1	1.74	0.62	0.03
1026	C 1219	"	"	2.5	0.7	0.14	1.8	0.59	0.09
1027	C 1220	洪武通宝	"	2.28	0.73	0.1	1.88	0.58	0.05
1028	C 1221	判錢不能	"	2.2	—	0.08	1.74	0.68	0.02
1029	C 1222	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.87	0.62	0.02

1030	C 1223	祥符通宝	G45 SP 10 フク十.	2.3	0.78	0.1	1.8	0.67	0.05	
1031	C 1224	洪武通宝	"	2.2	—	0.1	1.78	0.63	0.05	
1032	C 1225	無文 繩	"	2.2	—	0.1	—	0.58	—	
1033	C 1226	皇宋通宝	"	2.16	0.77	0.1	1.7	0.56	0.03	
1034	C 1227	無文 繩	"	2.09	—	0.1	—	0.7	—	
1035	C 1228	洪武通宝	"	2.19	0.74	0.1	1.84	0.6	0.05	
1036	C 1229	"	"	2.22	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03	
1037	C 1230	祥符通宝	"	2.16	0.69	0.08	1.7	0.58	0.05	
1038	C 1231	元豐通宝	"	2.3	0.84	0.1	1.82	0.6	0.05	
1039	C 1232	皇宋通宝	"	2.32	0.76	0.1	1.8	0.6	0.03	
1040	C 1233	判院不能	"	2.24	0.78	0.08	1.78	0.6	0.05	
1041	C 1234	無文 繩	"	2.18	—	0.06	—	0.6	—	
1042	C 1235	崇聖元宝	"	2.18	0.76	0.1	1.7	0.6	0.05	
1043	C 1236	判院不能	"	2.18	—	0.1	1.7	0.78	0.05	
1044	C 1237	崇聖元宝	"	2.3	0.75	0.095	1.87	0.6	0.03	
1045	C 1238	洪武通宝	"	2.14	0.7	0.1	1.78	0.6	0.03	
1046	C 1239	"	"	2.2	0.73	0.12	1.72	0.64	0.05	
1047	C 1240	"	"	2.2	0.7	0.1	1.9	0.6	0.02	
1048	C 1241	無文 繩	"	2.28	—	0.12	—	0.6	—	
1049	C 1242	"	"	2.18	—	0.1	—	0.8	—	
1050	C 1243	"	"	2.34	—	0.08	—	0.95	—	
1051	C 1244	洪武通宝	"	2.23	0.69	0.15	1.9	0.6	0.03	
1052	C 1245	無文 繩	"	2.27	—	0.08	—	0.64	—	
1053	C 1246	洪武通宝	"	2.29	0.7	0.14	1.88	0.62	0.03	
1054	C 1247	"	"	2.18	0.78	0.1	1.87	0.7	0.02	
1055	C 1248	無文 繩	"	2.17	—	0.09	—	0.67	—	
1056	C 1249	"	"	2.14	—	0.1	—	0.59	—	
1057	C 1250	"	"	2.34	—	0.13	—	0.75	—	
1058	C 1251	洪武通宝	"	2.2	0.72	0.1	1.89	0.67	0.02	
1059	C 1252	"	"	2.33	0.77	0.13	1.9	0.55	0.03	
1060	C 1253	"	"	2.13	0.7	0.11	1.8	0.6	0.01	
1061	C 1254	無文 繩	"	2.25	—	0.08	—	0.66	—	
1062	C 1255	"	"	2.2	—	0.1	—	0.67	—	
1063	C 1256	"	"	2.14	—	0.08	—	0.75	—	
1064	C 1257	大德通宝	"	2.25	0.75	0.12	1.8	0.57	0.06	
1065	C 1258	開元通宝	"	2.25	—	0.09	1.93	0.74	0.02	
1066	C 1259	無文 繩	"	2.13	—	0.1	—	0.68	—	
1067	C 1260	"	"	2.17	—	0.09	—	0.74	—	
1068	C 1261	"	"	2.2	—	0.1	—	0.65	—	
1069	C 1262	○○○寶	"	2.3	0.86	0.11	2.0	0.63	0.03	
1070	C 1263	無文 繩	"	2.2	—	0.08	—	0.64	—	
1071	C 1264	洪武通宝	"	2.09	0.73	0.12	1.75	0.68	0.05	
1072	C 1265	無文 繩	"	2.2	—	0.07	—	0.65	—	
1073	C 1266	判院不能	"	2.2	—	0.1	1.8	0.66	0.03	
1074	C 1267	無文 繩	"	2.15	—	0.1	—	0.67	—	
1075	C 1268	洪武通宝	"	2.22	0.7	0.16	1.87	0.6	0.03	
1076	C 1269	皇宋通宝	"	2.17	0.8	0.1	1.7	0.63	0.02	
1077	C 1270	淳祐元宝	"	2.25	0.72	0.2	1.87	0.86	—	
1078	C 1271	無文 繩	"	2.28	—	0.08	—	0.74	—	
1079	C 1272	開元通宝	"	2.38	—	0.12	2.0	0.—	0.02	
1080	C 1273	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.1	1.93	0.7	0.01	
1081	C 1274	"	"	2.2	0.7	0.1	1.88	0.62	0.01	
1082	C 1275	皇宋通宝	"	2.28	0.9	0.13	1.77	0.72	0.02	
1083	C 1276	祥符通宝	"	2.32	0.76	0.1	1.85	0.65	0.02	
1084	C 1277	大觀元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.88	0.65	0.02	
1085	C 1278	洪武通宝	"	2.24	0.695	0.12	1.77	0.58	0.01	

1086	C 1279	大聖元宝	G45 SP 10 フク士	2.28	0.82	0.1	1.92	0.61	0.03
1087	C 1280	無文 銀	"	2.16	—	0.1	—	0.695	—
1088	C 1281	聖寧元宝	"	2.38	0.79	0.1	1.92	0.73	0.03
1089	C 1282	判訖不能	"	2.37	—	0.1	—	0.63	—
1090	C 1283	無文 銀	"	—	—	—	—	—	—
1091	C 1284	"	"	—	—	—	—	—	—
1092	C 1285	聖宋通寶	"	2.36	0.88	0.1	1.9	0.68	0.03
1093	C 1286	嘉祐元宝	"	2.5	0.96	0.14	2.0	0.76	0.05
1094	C 1287	無文 銀	"	2.15	—	0.08	—	0.74	—
1095	C 1288	開元通寶	"	2.2	—	0.08	1.8	0.6	0.02
1096	C 1289	無文 銀	"	2.16	—	0.08	—	0.64	—
1097	C 1290	元豐通寶	"	2.32	0.74	0.1	1.69	0.84	0.03
1098	C 1291	聖宋元宝	"	2.26	0.77	0.1	1.87	0.65	0.03
1099	C 1292	永柔通宝	"	2.43	—	0.1	2.07	—	0.02
1100	C 1293	無文 銀	"	2.25	—	0.08	—	0.6	—
1101	C 1294	洪武通寶	"	2.16	0.7	0.1	1.76	0.62	0.02
1102	C 1295	宣和通寶	"	2.43	0.7	0.14	1.97	0.6	0.03
1103	C 1296	元祐通寶	"	2.16	0.83	0.1	1.78	0.68	0.03
1104	C 1297	洪武通寶	"	2.13	0.78	0.1	1.84	0.62	0.01
1105	C 1298	無文 銀	"	2.17	—	0.08	—	0.7	—
1106	C 1299	嘉祐通寶	"	2.37	0.8	0.11	2.0	0.68	0.03
1107	C 1300	聖寧元宝	"	2.44	0.86	0.13	1.98	0.7	0.03
1108	C 1301	咸淳元宝	"	2.4	0.9	0.12	1.94	0.695	0.05
1109	C 1302A	供貳通寶	"	2.24	—	0.11	1.1	—	0.03
1110	B	"	"	2.29	0.73	0.16	1.9	0.6	0.05
1111	C 1303	祥符通寶	"	2.4	0.78	0.1	1.82	0.63	0.03
1112	C 1304	元祐通寶	"	2.2	0.79	0.5	1.8	0.68	0.05
1113	C 1305	天祐通寶	"	2.3	—	0.1	1.9	0.6	0.03
1114	C 1306	聖宋通寶	"	2.43	—	0.12	1.98	0.6	0.06
1115	C 1307	洪武通寶	"	2.26	0.7	0.13	1.84	0.58	0.03
1116	C 1308	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.7	—
1117	C 1309	聖寧元宝	"	2.38	0.87	0.14	1.93	0.64	0.05
1118	C 1310	宣和通寶	"	2.46	0.74	0.18	2.06	0.62	0.03
1119	C 1311	洪武通寶	"	2.17	0.74	0.1	1.8	0.64	0.02
1120	C 1312	"	"	2.22	0.77	0.1	1.9	0.63	0.01
1121	C 1313	"	"	2.28	0.72	0.15	1.88	0.59	0.02
1122	C 1314	"	"	2.16	0.73	0.1	1.83	0.57	0.02
1123	C 1315	元祐通寶	"	2.2	0.76	0.12	1.68	0.67	0.05
1124	C 1316	洪武通寶	"	2.32	0.73	0.12	1.95	0.6	0.03
1125	C 1317	無文 銀	"	2.14	—	0.095	—	0.7	—
1126	C 1318	治平元宝	"	2.23	0.75	0.07	1.78	0.66	0.02
1127	C 1319	無文 銀	"	2.18	—	0.08	—	0.7	—
1128	C 1320	供貳通寶	"	2.26	0.7	0.1	1.98	0.57	0.03
1129	C 1321	無文 銀	"	2.22	—	0.06	—	0.69	—
1130	C 1322	祥符元宝	"	2.3	0.74	0.09	1.86	0.62	0.05
1131	C 1323	開元通寶	"	2.38	0.8	0.1	1.92	0.66	0.05
1132	C 1324	無文 銀	"	2.18	—	0.1	—	0.74	—
1133	C 1325	洪武通寶	"	2.24	0.7	0.1	1.86	0.6	0.03
1134	C 1326	祥符元宝	"	2.4	0.72	0.1	1.8	0.6	0.02
1135	C 1327	開元通寶	"	2.19	—	0.1	1.79	0.6	0.05
1136	C 1328	洪武通寶	"	2.05	0.7	0.1	1.7	0.56	0.03
1137	C 1329	太平通寶	"	2.22	0.7	0.1	1.7	0.5	0.02
1138	C 1330	洪武通寶	"	2.18	0.76	0.09	1.8	0.58	0.05
1139	C 1331	"	"	2.2	0.7	0.1	1.94	0.55	0.05
1140	C 1332	"	"	2.25	0.74	0.13	1.87	0.58	0.05
1141	C 1333	"	"	2.12	0.69	0.1	1.78	0.58	0.03

伴出

背に「元」の文字有

1142	C 1334	洪武通宝	G45 SP 10 フク土	2.2	0.7	0.1	1.8	0.58	0.03
1143	C 1335	元豊通宝	"	2.28	0.8	0.1	1.83	0.66	0.03
1144	C 1336	洪武通宝	"	2.3	0.7	0.14	1.8	0.56	0.05
1145	C 1337	紹聖元宝	"	2.3	0.8	0.1	1.74	0.64	0.03
1146	C 1338	元祐通宝	"	2.36	0.87	0.1	1.88	0.66	0.05
1147	C 1339	熙寧元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.8	0.7	0.05
1148	C 1340	元祐通宝	"	2.34	0.8	0.1	1.87	0.68	0.05
1149	C 1341	洪武通宝	"	2.18	0.7	0.1	1.8	0.58	0.02
1150	C 1342	判銭不能	"	2.24	0.8	0.1	1.8	0.6	0.07
1151	C 1343	祥符元宝	"	2.2	0.76	0.1	1.74	0.56	0.05
1152	C 1344	判銭不能	"	2.3	0.8	0.1	1.7	0.6	0.05
1153	C 1345	洪武通宝	"	2.2	0.73	0.1	1.8	0.56	0.01
1154	C 1346	"	"	2.22	0.72	0.1	1.96	0.6	0.02
1155	C 1347	紹聖元宝	"	2.3	0.8	0.1	1.84	0.56	0.05
1156	C 1348	無文 銀	"	2.24	—	0.1	—	0.66	—
1157	C 1349	"	"	2.22	—	0.08	—	0.6	—
1158	C 1350	大觀通寶	"	2.43	0.8	0.12	2.17	0.67	0.05
1159	C 1351	無文 銀	"	2.27	—	0.12	—	0.66	—
1160	C 1352	○○○宝	"	2.16	—	0.08	—	0.8	—
1161	C 1353	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.7	—
1162	C 1354	洪武通宝	"	2.3	0.7	0.13	1.88	0.5	0.03
1163	C 1356	嘉祐通寶	"	2.29	0.8	0.1	1.9	0.64	0.05
1164	C 1357	洪武通宝	"	2.22	0.7	0.1	1.84	0.56	0.05
1165	C 1358	判銭不能	"	2.26	0.89	0.08	1.9	0.66	0.03
1166	C 1359	洪武通宝	"	2.19	0.78	0.08	1.8	0.6	0.05
1167	C 1360	無文 銀	"	2.3	—	0.1	—	0.6	—
1168	C 1361	祥符元宝	"	2.38	0.85	0.1	2.0	0.66	0.03
1169	C 1362	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.54	—
1170	C 1363	洪武通宝	"	2.28	0.7	0.13	1.93	0.63	0.05
1171	C 1364	"	"	2.26	0.75	0.1	1.84	0.6	0.05
1172	C 1365	判銭不能	"	2.3	—	0.1	—	0.66	—
1173	C 1366	皇宋通宝	"	2.4	0.8	0.1	1.84	0.74	0.03
1174	C 1367	洪武通宝	"	2.16	0.7	0.12	1.9	0.6	0.02
1175	C 1368	祥符元宝	"	2.4	0.68	0.1	1.83	0.64	0.05
1176	C 1369	元豊通宝	"	2.48	0.85	0.1	1.9	0.65	0.08
1177	C 1370	太平通宝	"	2.4	0.7	0.12	1.86	0.62	0.03
1178	C 1371	洪武通宝	"	2.26	0.66	0.14	1.8	0.6	0.03
1179	C 1372	無文 銀	"	2.1	—	0.1	—	0.74	—
1180	C 1373	開元通宝	"	2.4	0.83	0.1	2.0	0.7	0.03
1181	C 1374	"	"	2.29	0.8	0.1	1.96	0.7	0.05
1182	C 1375	無文 銀	"	2.27	—	0.08	—	0.67	—
1183	C 1376	"	"	2.2	—	0.1	—	0.72	—
1184	C 1377	政和通宝	"	2.38	0.7	0.1	2.08	0.62	0.03
1185	C 1378	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—
1186	C 1379	紹聖元宝	"	2.38	0.79	0.1	1.86	0.7	0.05
1187	C 1380	熙寧元宝	"	2.26	0.86	0.16	1.8	0.66	0.02
1188	C 1381	無文 銀	"	2.08	—	0.07	—	0.77	—
1189	C 1382	祥符通宝	"	2.3	0.7	0.1	1.86	0.64	0.03
1190	C 1383	判銭不能	"	2.25	—	0.09	1.87	0.64	0.05
1191	C 1384	祥符元宝	"	2.3	0.79	0.1	1.8	0.6	0.03
1192	C 1385	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.82	0.6	0.03
1193	C 1386	無文 銀	"	2.33	—	0.1	—	0.68	—
1194	C 1387	元祐通宝	"	2.4	0.9	0.09	1.9	0.68	0.05
1195	C 1388	洪武通宝	"	2.17	0.76	0.1	1.83	0.6	0.02
1196	C 1389	祥符元宝	"	2.32	0.8	0.08	1.8	0.64	0.02
1197	C 1390	判銭不能	"	2.26	—	0.12	—	0.67	—

背に「一」の文字有

1198	C 1391	無文銭	G45 SP10 フク土	2.22	—	0.1	—	0.595	—
1199	C 1392	"	"	2.24	—	0.095	—	0.72	—
1200	C 1393	洪武通宝	"	2.08	0.74	0.16	1.84	0.58	0.05
1201	C 1394	"	"	2.18	0.68	0.14	1.8	0.59	0.05
1202	C 1395	無文銭	"	2.26	—	0.1	—	0.63	—
1203	C 1396	洪武通宝	"	2.2	0.7	0.1	1.82	0.68	0.02
1204	C 1397	"	"	2.22	0.7	0.1	1.9	0.63	0.03
1205	C 1398	判読不能	"	—	—	—	—	—	C1399の接着のため計算不可
1206	C 1399	"	"	2.43	0.82	0.14	2.0	0.66	0.05
1207	C 1400	洪武通宝	"	2.2	0.77	0.1	1.9	0.6	0.02
1208	C 1401	祐平通宝	"	2.36	—	0.1	1.82	0.75	0.02
1209	C 1402	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.94	0.64	0.05
1210	C 1403	無寧元宝	"	2.34	0.8	0.1	1.77	0.6	0.07
1211	C 1404	元豐通宝	"	2.48	0.74	0.1	1.8	0.68	0.03
1212	C 1405	無文銭	"	2.23	—	0.1	—	0.72	—
1213	C 1406	"	"	2.18	—	0.12	—	0.74	—
1214	C 1407	判読不能	"	2.24	—	0.07	—	0.7	—
1215	C 1408	元豐通宝	"	2.45	0.79	0.12	1.82	0.66	0.05
1216	C 1409	祐平元宝	"	2.32	0.8	0.1	1.8	0.7	0.01
1217	C 1410	無文銭	"	2.2	—	0.08	—	0.76	—
1218	C 1411	洪武通宝	"	2.4	—	0.1	1.9	—	0.03
1219	C 1412	祥符元宝	"	2.2	0.76	0.08	1.77	0.6	0.09
1220	C 1413	天福通宝	"	2.46	0.8	0.1	2.06	0.66	0.03
1221	C 1414	無文銭	"	2.2	—	0.1	—	0.67	—
1222	C 1415	聖宋元宝	"	2.39	0.84	0.1	1.98	0.69	0.05
1223	C 1416	無文銭	"	2.22	—	0.1	—	0.64	—
1224	C 1417	判読不能	"	2.3	—	0.1	1.83	0.6	0.03
1225	C 1418	無文銭	"	2.15	—	0.1	—	0.64	—
1226	C 1419	"	"	2.27	—	0.1	—	0.64	—
1227	C 1420	"	"	2.17	—	0.1	—	0.68	—
1228	C 1421	"	"	2.16	—	0.09	—	0.79	—
1229	C 1422	政和通宝	"	2.34	0.78	0.08	1.84	0.7	0.03
1230	C 1423	無文銭	"	2.18	—	0.08	—	0.65	—
1231	C 1424	淳○元宝	"	2.28	0.8	0.1	1.8	0.62	0.03
1232	C 1425	祐聖元宝	"	2.3	0.78	0.09	1.86	0.66	0.03
1233	C 1426	祥符通宝	"	2.22	0.7	0.1	1.8	0.62	0.03
1234	C 1427	洪武通宝	"	2.07	0.7	0.1	1.7	0.6	0.03
1235	C 1428	宣和通宝	"	2.36	0.77	0.13	1.97	0.65	0.05
1236	C 1429	洪武通宝	"	2.25	0.7	0.1	1.6	0.56	0.03
1237	C 1430	祥符元宝	"	2.16	—	0.09	1.7	—	0.03
1238	C 1431	元祐通宝	"	2.5	0.86	0.1	1.8	0.64	0.03
1239	C 1432	無文銭	"	2.1	—	0.1	—	0.7	—
1240	C 1433	太平通宝	"	2.4	0.7	0.1	1.96	0.62	0.03
1241	C 1434	天福通宝	"	2.3	0.77	0.1	1.89	0.67	0.03
1242	C 1435	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.8	0.56	0.03
1243	C 1436	治平元宝	"	2.36	0.76	0.1	1.94	0.68	0.03
1244	C 1437	判読不能	"	2.25	—	0.09	—	0.67	—
1245	C 1438	祥符元宝	"	2.32	—	0.1	1.8	—	0.01
1246	C 1439	聖宋元宝	"	2.2	0.8	0.08	2.0	0.6	0.02
1247	C 1440	大聖元宝	"	2.25	0.83	0.1	1.86	0.62	0.03
1248	C 1441	無文銭	"	2.16	—	0.1	—	0.66	—
1249	C 1442	洪武通宝	"	2.34	0.78	0.12	1.8	0.59	0.05
1250	C 1443	"	"	2.26	0.74	0.1	1.88	0.6	0.02
1251	C 1444	"	"	2.17	0.78	0.1	1.8	0.62	0.03
1252	C 1445	判読不能	"	2.18	0.9	0.08	1.82	0.6	0.03
1253	C 1446	無文銭	"	2.16	—	0.07	—	0.64	—

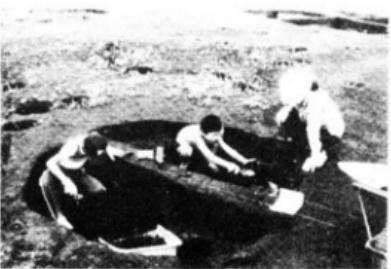
1254	C 1447	開元通宝	G45 SP10 フク土	2.18	—	0.06	0.69	0.6	0.02		
1255	C 1448	無文 銭	〃	2.2	—	0.095	—	0.6	—		
1256	C 1449	洪武通宝	〃	2.19	0.76	0.09	1.8	0.58	0.04		
1257	C 1450	〃	〃	2.28	0.7	0.13	1.9	0.6	0.05		
1258	C 1451	開元通宝	〃	2.16	—	0.08	1.78	0.6	0.05		
1259	C 1452	洪武通宝	〃	2.15	0.72	0.1	1.81	0.6	0.04		
1260	C 1453	〃	〃	2.14	0.755	0.1	1.84	0.58	0.03		
1261	C 1454	祥符元宝	〃	2.18	—	0.08	1.74	0.68	0.02		
1262	C 1455	無文 銭	〃	2.34	—	0.05	—	0.64	—		
1263	C 1456	洪武通宝	〃	2.3	0.7	0.12	1.88	0.58	0.05		
1264	C 1457	無文 銭	〃	2.16	—	0.09	—	0.7	—		
1265	C 1458	判読不能	〃	2.22	0.9	0.1	1.8	0.68	0.05		
1266	C 1459	皇宋通宝	〃	2.33	0.85	0.09	1.86	0.6	0.05		
1267	C 1460	洪武通宝	〃	2.36	0.78	0.13	1.9	0.6	0.04		
1268	C 1461	〃	〃	2.3	0.7	0.12	1.88	0.58	0.02		
1269	C 1462	祥符通宝	〃	2.45	0.76	0.12	1.93	0.62	0.05		
1270	C 1463	元祐通宝	〃	2.32	0.88	0.12	1.86	0.67	0.05		
1271	C 1464	洪武通宝	〃	2.1	0.78	0.08	1.77	0.6	0.02		
1272	C 1465	〃	〃	2.39	0.7	0.1	1.9	0.56	0.03		
1273	C 1466	〃	〃	2.26	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03		
1274	C 1467	無文 銭	〃	2.215	—	0.1	—	0.67	—		
1275	C 1468	洪武通宝	〃	2.2	0.76	0.13	1.86	0.56	0.03		
1276	C 1469	大觀通宝	〃	2.3	0.81	0.09	1.82	0.64	0.05		
1277	C 1470	元祐通宝	〃	2.24	0.86	0.09	1.8	0.66	0.05		
1278	C 1471	〃	〃	2.48	0.76	0.13	1.78	0.6	0.03		
1279	C 1472	祥符元宝	〃	2.48	0.74	0.1	1.76	0.58	0.05		
1280	C 1473	無文 銭	〃	2.2	—	0.08	—	0.7	—		
1281	C 1474	洪武通宝	〃	2.28	0.715	0.14	1.89	0.56	0.05		
1282	C 1475	〃	〃	2.24	0.72	0.13	1.9	0.57	0.05		
1283	C 1476	開元通宝	〃	2.24	—	0.1	1.9	0.64	0.05		
1284	C 1477	祥符元宝	〃	2.3	0.74	0.09	1.68	0.58	0.05		
1285	C 1478	洪武通宝	〃	2.24	0.73	0.14	1.86	0.56	0.05		
1286	C 1479	〃	〃	2.14	0.73	0.1	1.76	0.55	0.03		
1287	C 1480	天聖元宝	〃	2.2	0.87	0.06	1.84	0.66	0.05		
1288	C 1481	洪武通宝	〃	2.24	0.7	0.1	1.84	0.57	0.03		
1289	C 1482	〇〇〇宝	〃	2.17	0.93	0.08	1.78	0.73	0.05		
1290	C 1483	熙寧元宝	〃	2.2	0.92	0.08	1.86	0.7	0.05		
1291	C 1484	轉讀不能	〃	—	—	—	—	—	—	計測不可能	
1292	C 1485	至道元宝	〃	2.4	0.74	0.1	1.68	0.54	0.03		
1293	C 1486	洪武通宝	〃	2.22	0.7	0.12	1.86	0.56	0.05		
1294	C 1487	元祐通宝	〃	2.38	0.85	0.12	1.89	0.695	0.05		
1295	C 1488	無文 銭	〃	2.2	—	0.1	—	0.75	—		
1296	C 1489	天禧通宝	〃	2.23	0.78	0.07	2.0	0.74	0.03		
1297	C 1490	無文 銭	〃	2.3	—	0.06	—	0.68	—		
1298	C 1491	祥符元宝	〃	2.2	—	0.1	1.8	—	0.05		
1299	C 1492	紹熙元年	〃	2.38	0.8	0.12	1.9	0.64	0.03	背に「四」の文字有	
1300	C 1493	洪武通宝	〃	2.23	0.7	0.13	1.85	0.58	0.03		
1301	C 1494	〃	〃	2.2	0.76	0.1	1.78	0.58	0.02		
1302	C 1495	〃	〃	2.22	0.7	0.14	1.9	0.6	0.03		
1303	C 1496	無文 銭	〃	2.16	—	0.08	—	0.64	—		
1304	C 1497	〃	〃	2.2	—	0.09	—	0.59	—		
1305	C 1498	祥符元宝	〃	2.14	0.79	0.07	1.58	0.63	0.03		
1306	C 1499	洪武通宝	〃	2.24	0.7	0.13	1.87	0.58	0.03		
1307	C 1500	無文 銭	〃	2.15	—	0.1	—	0.8	—		
1308	C 1501	洪武通宝	〃	2.2	0.67	0.15	1.86	0.57	0.03		
1309	C 1502	無文 銭	〃	2.24	—	0.1	—	0.68	—		

			G 45 SP 10 フク上	2.2	0.85	0.08	1.53	0.68	0.05		
1310	C 1503	毫素通宝	"	2.26	0.71	0.13	1.86	0.68	0.02		
1311	C 1504	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.1	1.84	0.6	0.03		
1312	C 1505	"	"	2.27	—	0.08	—	0.66	—		
1313	C 1506	無文 銀	"	2.36	0.8	0.1	1.98	0.7	0.03		
1314	C 1507	開元通寶	"	2.34	—	0.09	—	0.74	—		
1315	C 1508	無文 銀	"	2.2	—	0.07	—	0.66	—		
1316	C 1509	"	"	2.24	—	0.1	—	0.64	—		
1317	C 1510	"	"	2.3	0.8	0.1	1.74	0.68	0.03		
1318	C 1511	判說不能	"	2.14	—	0.08	—	0.68	—		
1319	C 1512	無文 銀	"	2.25	—	0.13	1.84	0.6	0.06		
1320	C 1513	洪武通寶	"	2.17	0.7	0.12	1.84	0.54	0.02		
1321	C 1514	無文 銀	"	2.24	—	0.095	—	0.62	—		
1322	C 1515	判說不能	"	2.26	—	0.11	1.85	0.6	0.01		
1323	C 1516	洪武通寶	"	2.2	0.78	0.08	1.85	0.6	0.05		
1324	C 1517	裕聖元寶	"	2.2	0.86	0.1	1.78	0.65	0.03		
1325	C 1518	元祐通寶	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
1326	C 1519	無文 銀	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—		
1327	C 1520	洪武通寶	"	2.18	0.74	0.1	1.93	0.64	0.03		
1328	C 1521	皇宋通寶	"	2.44	0.82	0.1	1.96	0.66	0.03		
1329	C 1522	無文 銀	"	2.2	—	0.095	—	0.67	—		
1330	C 1523	"	"	2.24	—	0.1	—	0.7	—		
1331	C 1524	洪武通寶	"	2.26	0.76	0.1	1.88	0.58	0.02		
1332	C 1525	無文 銀	"	2.2	—	0.08	—	0.6	—		
1333	C 1526	洪武通寶	"	2.2	0.76	0.14	1.8	0.6	0.03		
1334	C 1527	"	"	2.26	0.78	0.14	1.83	0.6	0.01		
1335	C 1528	"	"	2.2	0.7	0.1	1.84	0.56	0.03		
1336	C 1529	"	"	2.25	0.7	0.1	1.8	0.6	0.03		
1337	C 1530	"	"	2.17	0.76	0.1	1.85	0.6	0.03		
1338	C 1531	無文 銀	"	2.16	—	0.08	—	0.62	—		
1339	C 1532	祥符通寶	"	2.2	0.73	0.07	1.64	0.58	0.02		
1340	C 1533	元祐通寶	"	2.3	0.77	0.12	1.8	0.64	0.03		
1341	C 1534	無文 銀	"	2.1	—	0.08	—	0.8	—		
1342	C 1535	"	"	2.33	—	0.1	—	0.6	—		
1343	C 1536	祥符元寶	"	2.27	0.78	0.1	1.8	0.7	0.03		
1344	C 1537	無文 銀	"	2.15	—	0.1	—	0.65	—		
1345	C 1538	祥符通寶	"	2.33	0.79	0.08	1.85	0.65	0.02		
1346	C 1539	洪武通寶	"	2.27	0.7	0.14	1.88	0.6	0.03		
1347	C 1540	開元通寶	"	2.4	0.8	0.1	2.07	0.66	0.03		
1348	C 1541	洪武通寶	"	2.26	0.65	0.1	1.83	0.56	0.03		
1349	C 1542	無文 銀	"	2.25	—	0.08	—	0.57	—		
1350	C 1543	洪武通寶	"	2.17	0.71	0.1	1.83	0.6	0.02		
1351	C 1544	熙寧元寶	"	2.34	0.8	0.1	1.87	0.64	0.05		
1352	C 1545	洪武通寶	"	2.2	0.74	0.1	1.8	0.6	0.01		
1353	C 1546	開元通寶	"	2.36	0.8	0.1	2.06	0.68	0.02		
1354	C 1547	判說不能	"	2.21	0.78	0.06	1.77	0.6	0.08		
1355	C 1548	惠祐元寶	"	2.4	0.9	0.1	1.93	0.72	0.05		
1356	C 1549	洪武通寶	"	2.14	0.78	0.1	1.8	0.64	0.02		
1357	C 1550	開元通寶	"	2.34	0.78	0.1	1.9	0.7	0.03		
1358	C 1551	洪武通寶	"	2.18	0.74	0.1	1.86	0.6	0.02		
1359	C 1552	祥符元寶	"	2.24	0.74	0.085	1.75	0.64	0.02		
1360	C 1553	○○○寶	"	2.26	0.76	0.1	1.85	0.64	0.03		
1361	C 1554	洪武通寶	"	2.22	0.7	0.12	1.75	0.65	0.01		
1362	C 1555	判說不能	"	2.3	0.9	0.08	1.88	0.61	0.03		
1363	C 1556	歲平元寶	"	2.36	0.73	0.09	1.8	0.6	0.02		
1364	C 1557	洪武通寶	"	2.3	0.7	0.13	1.93	0.6	0.03		
1365	C 1558	"	"	2.1	0.7	0.1	1.8	0.65	0.02		

1366	C 1559	洪武通宝	G45 SP10 フク I.	2.15	0.7	0.14	1.8	0.59	0.02
1367	C 1560	"	"	2.13	0.74	0.1	1.83	0.59	0.03
1368	C 1561	"	"	2.17	0.74	0.08	1.76	0.6	0.02
1369	C 1562	皇宋通宝	"	2.36	0.8	0.09	2.0	0.64	0.01
1370	C 1563	祥符元宝	"	2.24	0.76	0.1	1.9	0.63	0.02
1371	C 1564	洪武通宝	"	2.18	0.79	0.1	1.84	0.6	0.02
1372	C 1565	"	"	2.22	0.74	0.13	1.94	0.58	0.01
1373	C 1566	"	"	2.2	0.74	0.13	1.9	0.58	0.02
1374	C 1567	"	"	2.15	0.7	0.12	1.83	0.6	0.03
1375	C 1568	"	"	2.2	0.76	0.1	1.82	0.6	0.01
1376	C 1569	無文錢	"	2.2	—	0.1	—	0.6	—
1377	C 1570	祥符元宝	"	2.39	0.75	0.11	1.86	0.64	0.03
1378	C 1571	大福通宝	"	2.25	0.78	0.09	1.84	0.68	0.03
1379	C 1572	昭聖元宝	"	2.4	0.73	0.1	1.87	0.6	0.03
1380	C 1573	無文錢	"	2.15	—	0.08	—	0.6	—
1381	C 1574	大藏通宝	"	2.38	0.74	0.09	2.0	0.6	0.03
1382	C 1575	朝鮮通寶	"	2.36	0.7	0.1	2.0	0.6	0.03
1383	C 1576	〇〇元宝	"	2.2	0.77	0.1	1.73	0.63	0.03
1384	C 1577	洪武通宝	"	2.3	0.74	0.14	1.97	0.67	0.03
1385	C 1578	昭聖元宝	"	2.19	0.8	0.1	1.75	0.7	0.03
1386	C 1579	洪武通宝	"	2.2	0.75	0.12	1.9	0.6	0.01
1387	C 1580	"	"	2.2	—	0.1	1.87	—	0.02
1388	C 1581	"	"	2.18	0.7	0.13	1.84	0.6	0.01
1389	C 1582	祥符元宝	"	2.38	0.77	0.1	1.9	0.63	0.03
1390	C 1583	開元通寶	"	2.2	0.75	0.1	1.9	0.6	0.02
1391	C 1584	洪武通宝	"	2.2	0.76	0.12	1.8	0.58	0.03
1392	C 1585	朝鮮通寶	"	2.28	0.7	0.16	2.0	0.54	0.05
1393	C 1586	洪武通宝	"	2.16	0.8	0.1	1.85	0.63	0.03
1394	C 1587	"	"	2.14	0.75	0.08	1.77	0.6	0.03
1395	C 1588	熙寧元宝	"	2.36	0.74	0.08	1.72	0.6	0.03
1396	C 1589	洪武通宝	"	2.19	0.74	0.1	1.82	0.58	0.03
1397	C 1590	祥符元宝	"	2.3	0.8	0.1	1.86	0.68	0.03
1398	C 1591	大聖元寶	"	2.42	0.86	0.12	2.0	0.74	0.02
1399	C 1592	皇宋通宝	"	2.35	0.83	0.1	1.97	0.7	0.02
1400	C 1593	洪武通宝	"	2.12	0.7	0.1	1.74	0.58	0.02
1401	C 1594	無文錢	"	2.2	—	0.1	—	0.7	—
1402	C 1595	淳祐元寶	"	2.2	0.8	0.12	1.94	0.67	0.02
1403	C 1596	洪武通宝	"	2.23	0.7	0.12	1.8	0.6	0.03
1404	C 1597	"	"	2.18	0.76	0.12	1.8	0.6	0.03
1405	C 1598	政和通寶	"	2.44	0.74	0.13	2.03	0.62	0.05
1406	C 1599	洪武通宝	"	2.3	0.74	0.1	1.93	0.6	0.02
1407	C 1601	"	"	2.24	0.72	0.12	1.87	0.62	0.03
1408	C 1601	大藏通宝	"	2.37	0.82	0.14	2.06	0.63	0.05
1409	C 1602	洪武通宝	"	2.2	0.74	0.1	1.84	0.6	0.03
1410	C 1603	無文錢	"	2.26	—	0.1	—	0.66	—
昭和59年度北都出土銭貨計測集計表									
1411	C 5	無文錢	G41 ■上	2.33	—	0.1	—	0.61	—
1412	C 6	元豐通宝	G41 ST192 フク土	2.20	0.83	0.13	1.88	0.64	0.05
1413	C 7	元〇通宝	"	2.23	0.715	0.09	1.835	0.63	0.05
1414	C 12	嘉祐元宝	"	2.46	0.9	0.1	2.01	0.765	0.05
1415	C 13	洪武通宝	H41 ST192 フク土	2.12	0.56	0.14	1.7	0.56	0.03
1416	C 14	永樂通宝	"	2.44	0.74	0.115	2.0	0.565	0.03
1417	C 15	洪武〇〇	G41 SH10 フク土	—	—	0.12	—	—	—
1418	C 16	祥符通宝	H41 ST192 フク土	2.48	0.75	0.13	1.99	0.66	0.05
1419	C 17	祥符元宝	"	2.49	0.71	0.11	1.8	0.585	0.05
1420	C 18	無文錢	F40 SH10 フク土	1.58	—	0.055	—	0.79	—

写 真 図 版 (P L.)

P.L.1 児童の発掘調査教室



PL. 2 発掘区と掘立柱建物跡



(1) A区全景 ($W \rightarrow E$) と
SB30全景 ($W \rightarrow E$)



(2) B区全景 ($E \rightarrow W$)



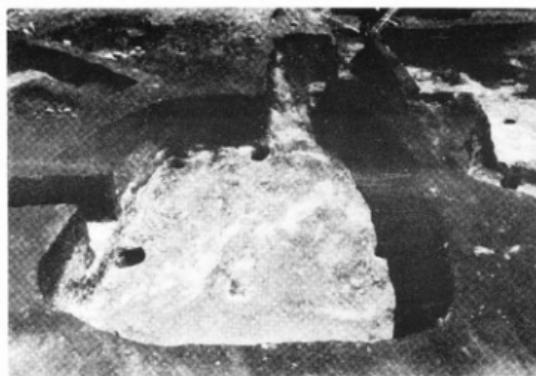
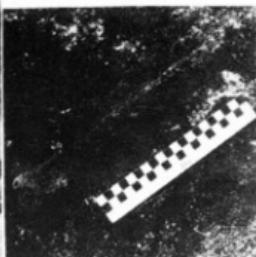
(3) SB32 + SB58 ($W \rightarrow E$)

P L.3 穹穴遺構(I)



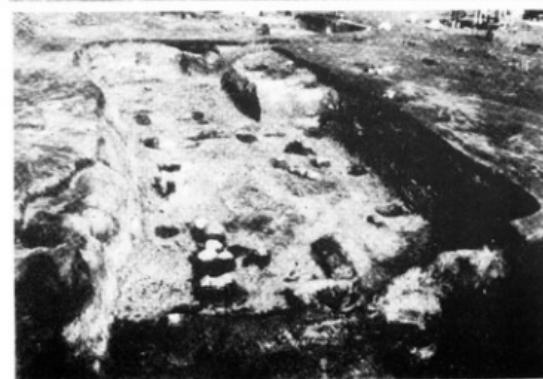
(1) S T 192 (N→S)

(2) S T 192 出土鉄製品



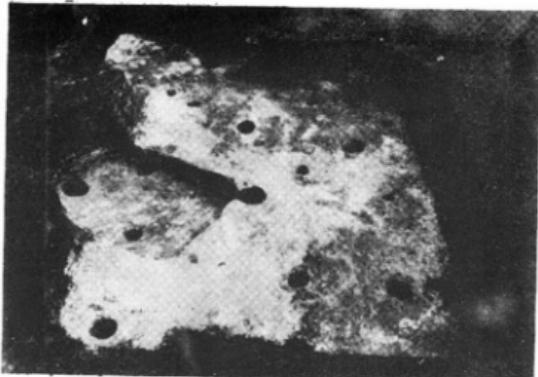
(3) S T 200 (W→E)

(4) S T 200 出土鉄製品



(5) S T 201 (W→E)

P.L.4 懸穴遺構(Ⅱ)



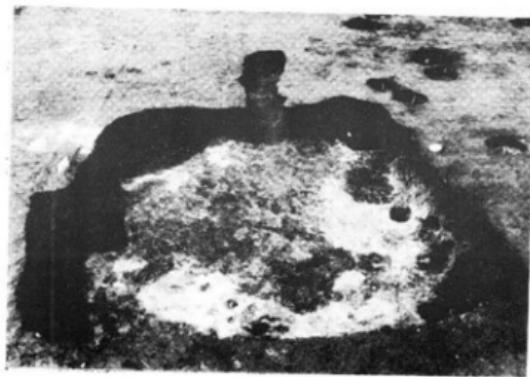
(1) S T 202 (W→E)



(2) S T 203 (W→E)

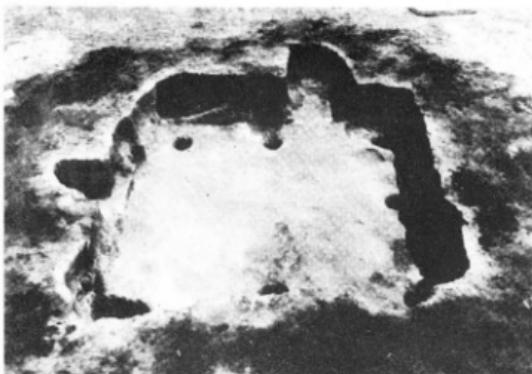


(3) S T 203 出土鉄製品



(4) S T 204 (S→N)

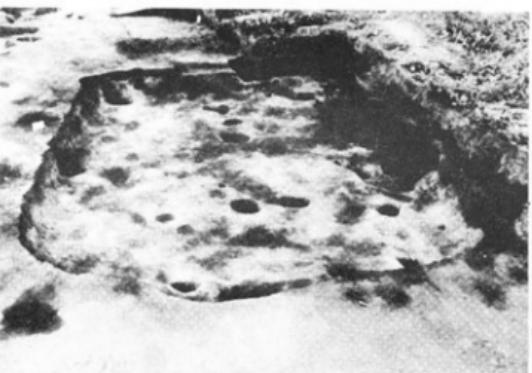
P L. 5 積穴遺構(Ⅲ)



(1) S T 205 (N → S)



(2) S T 206 (N → S)

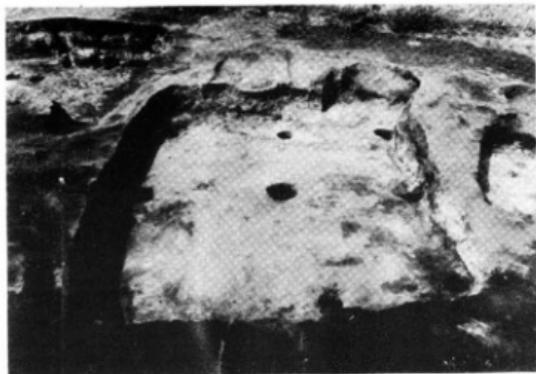


(3) S T 207 (N → S)

(4) S T 207 出土錢貨



P L. 6 穹穴遺構①

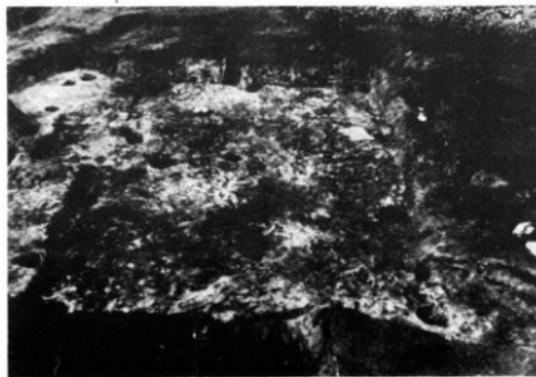


(1) S T 208 (S → N)



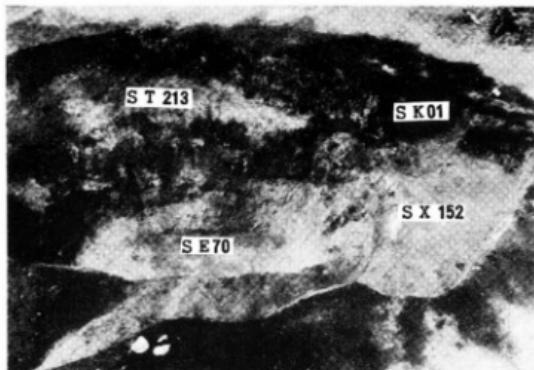
(2) S T 210 遺物出土状態

(3) S T 210 出土鉄型

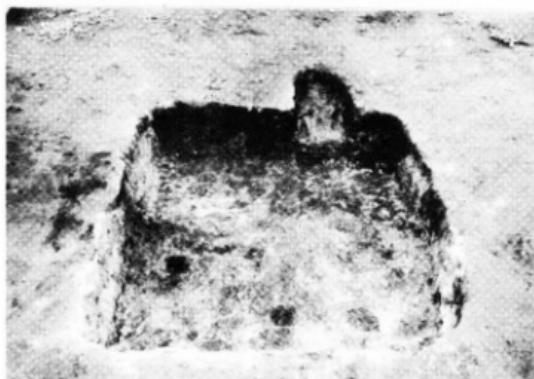


(4) S T 210 (S → N)

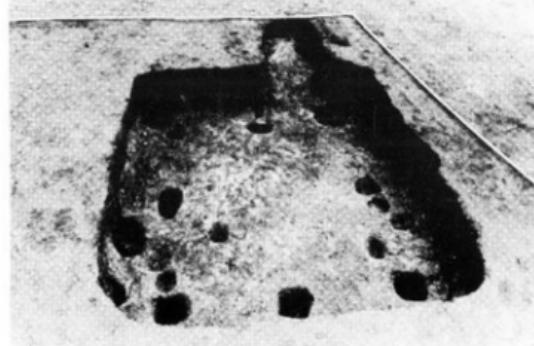
P.L.7 整穴遺構(1)・他



(1) ST 213・SX 152
SE 70・SK 01等
(E→W)



(2) ST 214 (N→S)



(3) ST 215 (W→E)

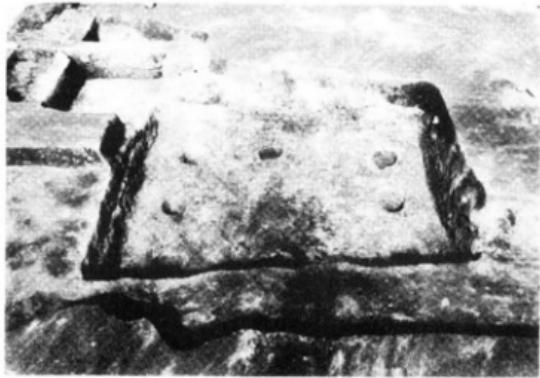
P L.8 積穴遺構(1)



(1) S T 216 (S→N)
柱穴掘り下げ前



(2) S T 217 (W→E)



(3) S T 218 (S→N)

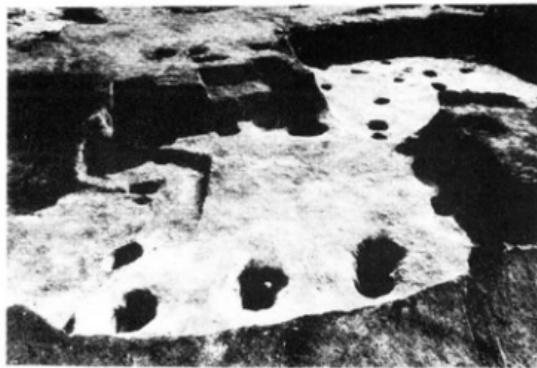
P L. 9 坚穴遺構跡



(1) S T 234 (E → W)

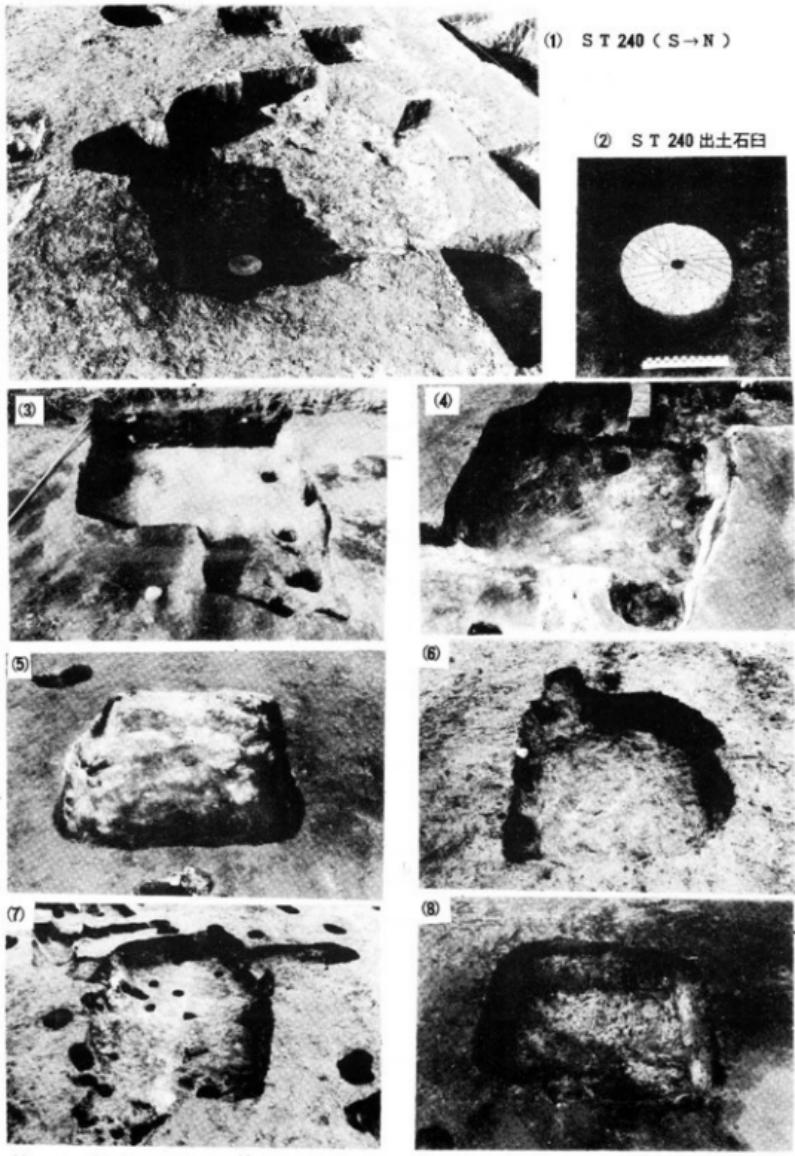


(2) S T 228 (W → E)



(3) S X 155 + S T 221
(N → S)

P L. 10 捣穴遺構 (VII)

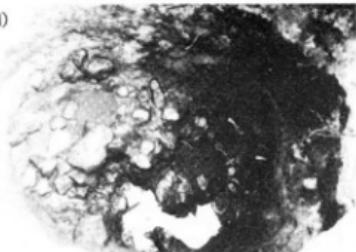


(3) ST 224 (S → N) (4) ST 226 (E → W) (5) ST 231 (W → E)

(6) ST 227 (N → S) (7) ST 232 A + ST 232 B (N → S) (8) ST 223 (N → S)

P.L.11 井戸跡(I)

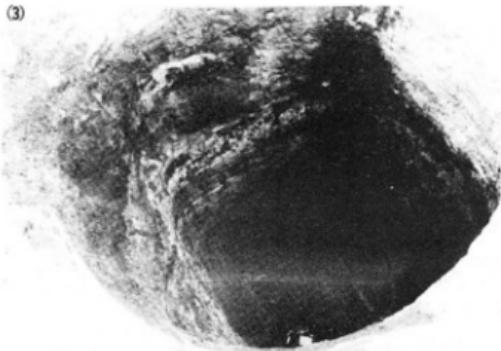
(1)



(2)



(3)



(1) S E71集石状態

(2) S E71出土遺物

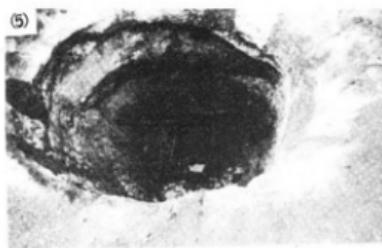
(3) S E72完掘

(4) S E72隅柱・横桟

(4)



(5)



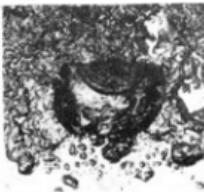
(6)



(7)



(8)



(5) S E74完掘

(6) S E77完掘

(7) S E79木製品出土状態

(8) S E79出土漆器焼

P L. 12 井戸跡(①)



(1) S E 73木枠出土状況

(2) S E 73隅柱(南東)



(3) S E 73隅柱(南西)



(4) S E 73隅柱(北西)



PL.13 土坟墓



(1) SK01全景

(2) SK01人骨



(3) 人骨の取り上げ(森本先生)



(4) 取り上げた人骨頭部

P L.14 桁形遺構



(1) 桁形遺構から西館を眺む



(2) S B 57門跡
(N → S)



(3) 桁形遺構
堀から北館方向を眺む

PL.15 青 磁



PL. 16 白磁・染付



PL. 17 美濃・瀬戸・他



PL. 18 唐津・土鈴・埴輪



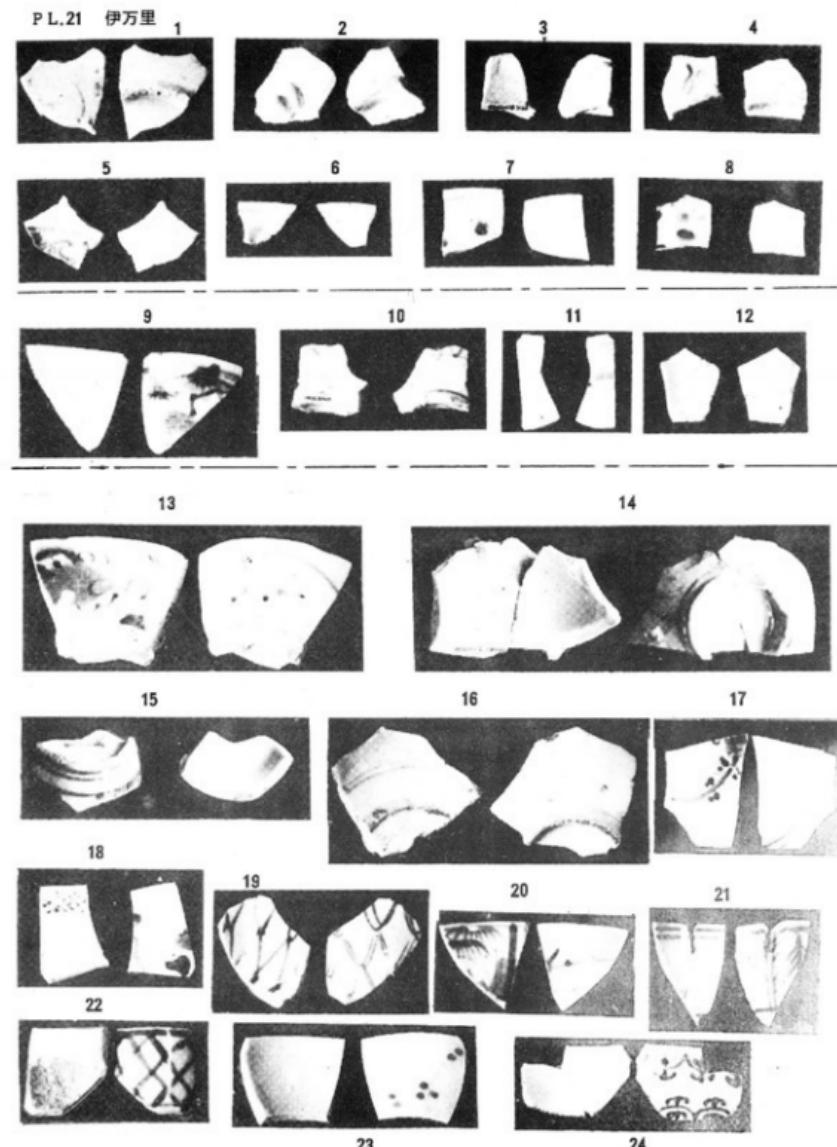


PL. 19
中国搗臼亞
(呂宋壺)

銅製品





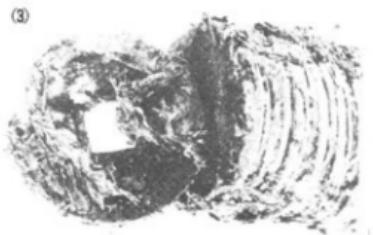
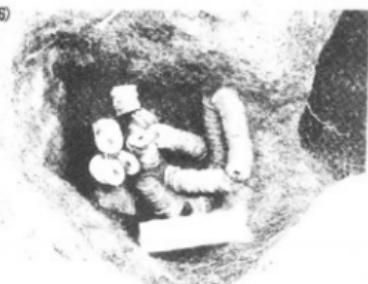


上段：17世紀前半

中段：17世紀後半

下段：18世紀

P L.22 錢貨出土状況



(1)～(4) S T 207 出土錢貨・麻紐

(5)・(6) S P 10 出土錢貨

(7)・(8) G 43区第Ⅲ層出土錢貨

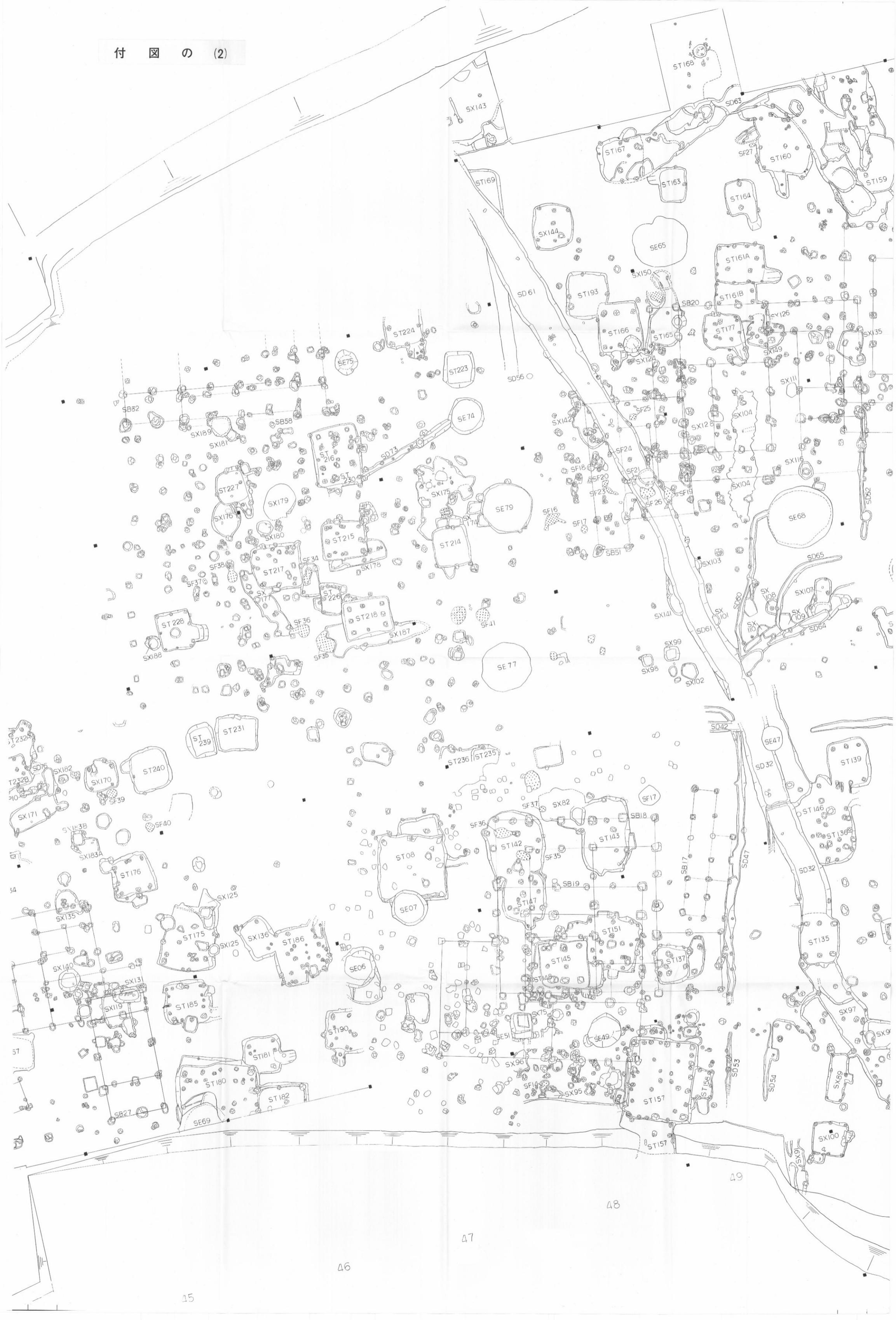
昭和58年度浪岡城跡発掘調査報告書
「浪岡城跡VII」

昭和60年3月25日印刷
昭和60年3月30日発行
発行 浪岡町教育委員会
印刷 鎌田綜合印刷

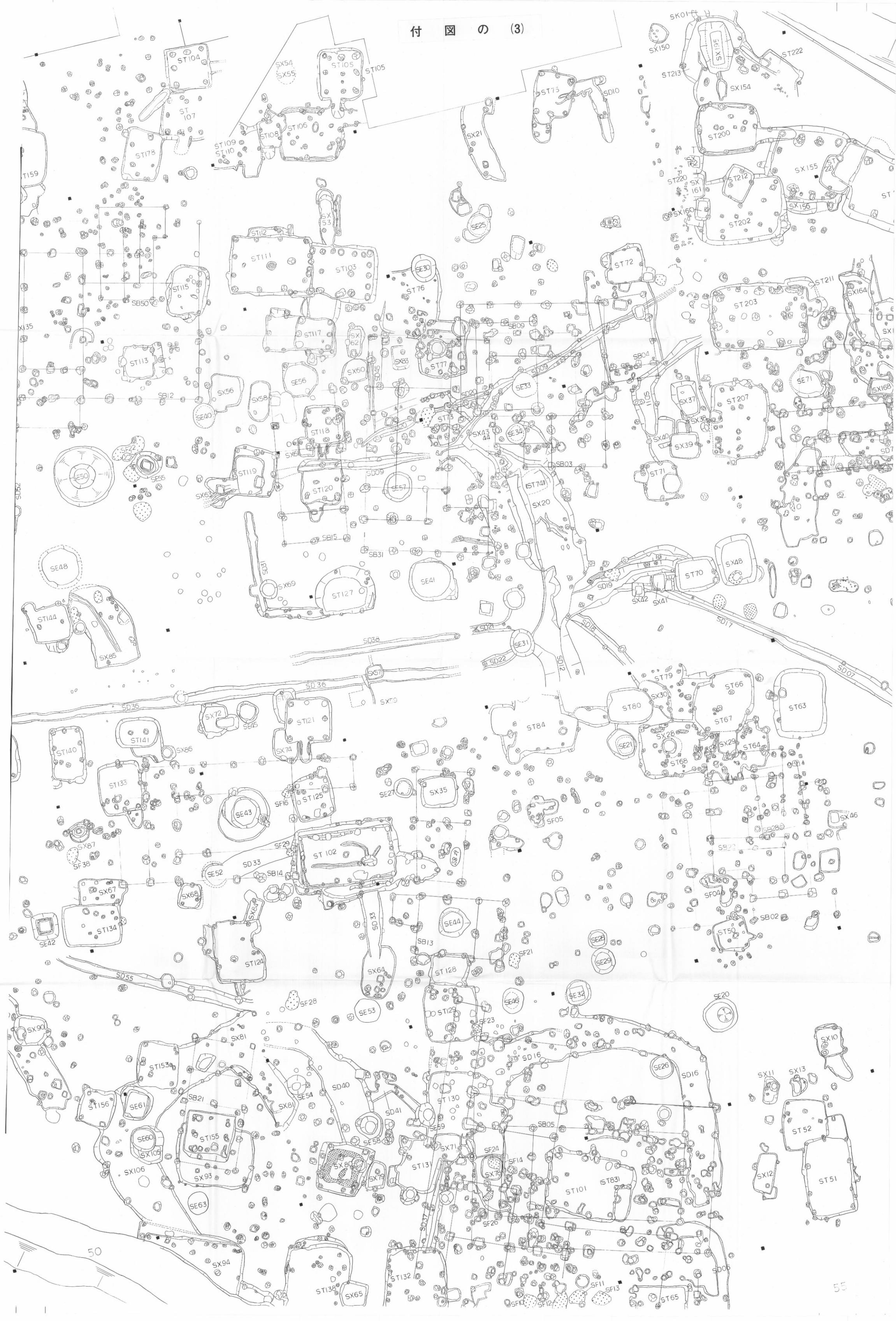
付 図 の (1)



付 図 の (2)



付 図 の (3)



付 図 の (4)



